秋田県文化財調査報告書第210集

国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書III

―― 餌　釣　遺　跡 ――

秋田県立博物館文化財センター

1991・3

秋田県教育委員会

国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

―― 餌釣(えづり)遺跡 ――

1991・3

秋田県教育委員会

序

豊かな自然に恵まれた秋田県には、我々の先人達が営々と築き上げてきた歴史があります。地中に刻まれた埋蔵文化財もその歴史遺産の一つであります。

このたび、国道103号道路改良事業に係り、大館市餌釣に所在する餌釣遺跡の一部が発掘調査の対象となりました。

その調査結果、縄文時代、平安時代、中世の遺構、遺物が発見され、餌釣遺跡は古くから人々の生活の舞台であったこと、又中世にあっては、館として利用されたことが明らかになりました。

本書は、これらの成果をまとめたものであり、地域史解明と文化財に対する理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後に、本調査及び報告書作成に際し、御協力いただきました秋田県土木部、北秋田土木事務所、大館市教育委員会、大館市上川沿公民館並びに関係各位に対し深く感謝の意を表します。

平成３年３月15日

秋田県教育委員会

教育長　橋　本　顕　信

例　言

1　本報告書は、国道103号道路改良事業に係る餌釣遺跡発掘調査報告書である。

2　本遺跡で検出された柱穴については、八戸工業大学高島成侑助教授から建築学的検討を加えていただいた。

3　本遺跡で出土した陶磁器の鑑定は、佐賀県立九州陶磁文化館　大橋康二氏にお願いした。

4　本調査及び報告書作成にあたり、下記の方々から御助言、御指導を賜った（敬称略）。

板橋範芳　　小川純夫　　菅原幹雄　　関口博光　　鷲谷　豊

5　本報告書の執筆と編集は、櫻田　隆、和泉昭一、小山内　透の協力を得て、小畑　巖が行った。

凡　例

1　検出遺構及び出土遺物に使用した略号は次のとおりである。

ＳＩ（竪穴住居跡・竪穴建物跡）　　ＳＫ（土坑）

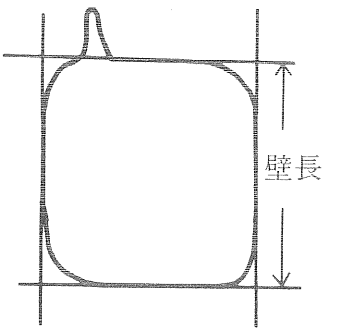
ＳＮ（焼土遺構）　　ＳＤ（空堀、溝状遺構）　　ＳＸ（積石塚）

ＳＫＰ（掘立柱建物跡柱穴）　　ＲＰまたはＰ（土器）　　Ｓ（礫）

2　掲載した図面の縮尺は、個々に明示したが、任意のものもある。

3　竪穴住居跡等の計測方法について

竪穴住居跡等の規模の計測は、平面形が楕円形の場合、長軸長と短軸長を計測した。平面形が方形の場合には、各壁長を各々の壁の外側で計測した。すなわち、計測する壁とそれと隣合う２つの壁の延長線上の交点間の距離を壁長とした。出入り口等の張出し部分は、竪穴本体と別に計測した。



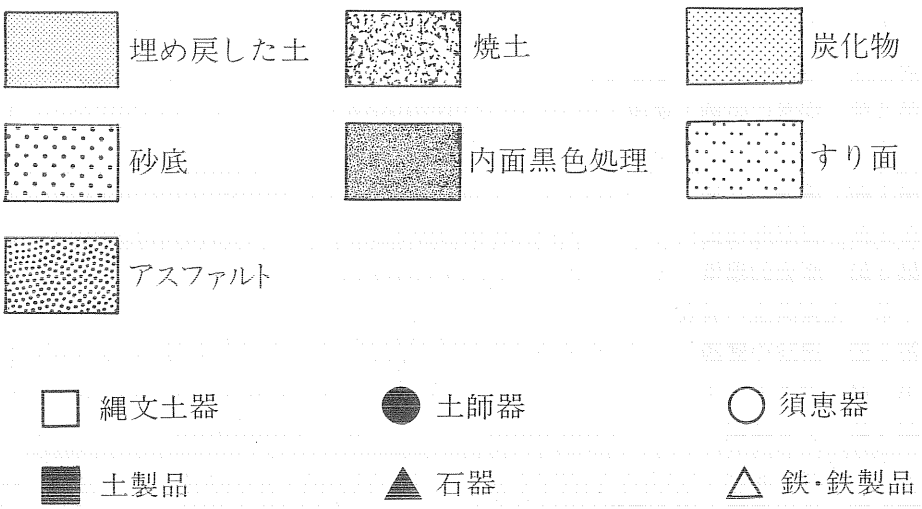
面積は、カマド煙出しを除いた竪穴上端ラインで囲まれた範囲を計測した。計測には、ウシカタエリアカーブメーター（Ｘ－ＰＬＡＮ360）を用いた。

壁高は、床面から確認面までの高さとし、数地点を計測した。柱穴及び壁溝の深さは、床面からの深さを計測した。

カマドまたは出入口を有する竪穴については、主軸方位を計測した。計測方法は、カマドまたは出入口が付設された壁の中軸線と磁北がなす角度を読み取った。その表記の仕方

は、磁北を基準とし、磁北から東側にずれる場合はN－　°－E、磁北から西側にずれる場合はN－　°－Wとした。

4　掲載図面の中で使用したスクリーントーン及びシンボルマークは、下記の通りである。



5　土器断面図の黒塗りは、須恵器を表す。

6　土層注記における色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修による『新版標準土色帖』によった。

目　　次

序
例言、凡例…… ii
目次…… iv
第１章　はじめに…… 1
　第１節　発掘調査に至るまで…… 1
　第２節　調査の組織と構成…… 1
第２章　遺跡の立地と環境…… 3
　第１節　遺跡の立地…… 3
　第２節　自然的環境…… 3
　第３節　歴史的環境…… 4
第３章　発掘調査の概要…… 7
　第１節　遺跡の概観…… 7
　第２節　調査の方法…… 9
　第３節　調査経過…… 9
第４章　調査の記録…… 12
　第１節　検出遺構と出土遺物…… 12
　　１．縄文時代…… 12
　　（１）竪穴住居跡…… 12
　　（２）焼土遺構…… 16
　　２．平安時代…… 17
　　（１）竪穴住居跡…… 17
　　（２）土坑…… 55
　　（３）焼土遺構…… 65
　　３．中世…… 65
　　（１）掘立柱建物跡柱穴…… 65
　　（２）竪穴建物跡…… 65
　　（３）土坑…… 71
　　（４）焼土遺構…… 73
　　（５）空堀…… 75
　　４．時期不明…… 76
　　（１）積石塚…… 76
　　（２）土坑…… 81
　　（３）焼土遺構…… 95
　　（４）溝状遺構…… 97
　第２節　遺構外出土遺物……101
第５章　まとめ……104
図版……111

挿図目次

第１図　遺跡周辺地形図……2
第２図　周辺の遺跡分布図……5
第３図　基本土層図……7
第４図　遺跡略図……8
第５図　ＳＸ03積石塚実測図……11
第６図　ＳＩ38竪穴住居跡実測図……13
第７図　ＳＩ38竪穴住居跡出土遺物……14
第８図　ＳＩ57竪穴住居跡実測図……15
第９図　ＳＩ57竪穴住居跡出土遺物……16
第10図　ＳＮ25焼土遺構実測図……16
第11図　ＳＮ25焼土遺構出土遺物拓影図…17
第12図　ＳＩ34竪穴住居跡実測図……18
第13図　ＳＩ34竪穴住居跡遺物出土状況図
……19
第14図　ＳＩ34竪穴住居跡カマド実測図…20
第15図　ＳＩ34竪穴住居跡
カマド遺物出土状況図……21
第16図　ＳＩ34竪穴住居跡出土遺物（１）…22
第17図　ＳＩ34竪穴住居跡出土遺物（２）…23
第18図　ＳＩ34竪穴住居跡出土遺物（３）…24
第19図　ＳＩ34竪穴住居跡出土遺物（４）…25
第20図　ＳＩ37竪穴住居跡実測図……27
第21図　ＳＩ37竪穴住居跡焼土・
炭化物検出状況図……28
第22図　ＳＩ37竪穴住居跡カマド実測図…29
第23図　ＳＩ37竪穴住居跡出土遺物……30
第24図　ＳＩ42竪穴住居跡実測図……31
第25図　ＳＩ42竪穴住居跡遺物出土状況図
……32
第26図　ＳＩ42竪穴住居跡カマド実測図…33
第27図　ＳＩ42竪穴住居跡出土遺物（１）…34
第28図　ＳＩ42竪穴住居跡出土遺物（２）…35
第29図　ＳＩ44・91・92竪穴住居跡実測図
……37・38
第30図　ＳＩ44・91・92竪穴住居跡遺物
出土状況図……39
第31図　ＳＩ44竪穴住居跡カマド実測図
……41・42
第32図　ＳＩ44・91竪穴住居跡出土遺物（１）
……43
第33図　ＳＩ44・91竪穴住居跡出土遺物（２）
……44
第34図　ＳＩ44・91竪穴住居跡出土遺物（３）
……45
第35図　ＳＩ44・91竪穴住居跡出土遺物（４）
……46
第36図　ＳＩ71竪穴住居跡実測図……47
第37図　ＳＩ73竪穴住居跡実測図……49・50
第38図　ＳＩ73竪穴住居跡遺物出土状況図
……51
第39図　ＳＩ71竪穴住居跡出土遺物・
ＳＩ73竪穴住居跡出土遺物（１）…52
第40図　ＳＩ73竪穴住居跡出土遺物（２）…53
第41図　ＳＩ73竪穴住居跡出土遺物（３）…54
第42図　ＳＫ16・23・47土坑実測図……56
第43図　ＳＫ14・30・35・43・70土坑実測図
……57
第44図　ＳＮ77焼土遺構、ＳＮ79・93・
82・86土坑実測図……59

第45図　ＳＫ83・85土坑実測図・
遺物出土状況図……61
第46図　ＳＫ87・88・89土坑実測図・
遺物出土状況図……63
第47図　ＳＫ23・79・83・85・87
土坑出土遺物……64
第48図　ＳＩ04竪穴建物跡実測図……66
第49図　ＳＩ67竪穴建物跡実測図……68
第50図　ＳＩ31竪穴建物跡実測図……69・70
第51図　ＳＩ68竪穴建物跡実測図……71
第52図　ＳＫ54・69・94土坑実測図……72
第53図　ＳＮ08・36焼土遺構実測図……74
第54図　ＳＤ60空堀跡実測図……75
第55図　ＳＫＰ320掘立柱建物跡柱穴・
ＳＤ60空堀跡出土遺物……76
第56図　ＳＸ01積石塚実測図……77・78
第57図　ＳＸ02積石塚実測図……79・80
第58図　ＳＫ09・12(ａ)(ｂ)・13・15・18・
27・28土坑実測図……82
第59図　ＳＫ33・40・41・45・46・48
土坑実測図……85
第60図　ＳＫ49・50・51・52・55・56
土坑実測図……87
第61図　ＳＫ58・59・61・64土坑実測図…89
第62図　ＳＫ63・65・66・74・75・90
土坑実測図……90
第63図　ＳＫ78・81・84土坑実測図……93
第64図　ＳＮ06・07・10・11・53
焼土遺構実測図……96
第65図　ＳＤ80溝状遺構実測図……98
第66図　ＳＤ62溝状遺構実測図…… 99・100
第67図　遺構外出土遺物（１）…… 102
第68図　遺構外出土遺物（２）…… 103
第69図　変遷図…… 109
付　図　遺構配置図

表目次

第１表　周辺の遺跡一覧表…… 6
第２表　遺構の帰属時期…… 105

第１章　はじめに

第１節　発掘調査に至るまで

国道103号道路改良事業（通称、大館南バイパス）は、大館市内の交通混雑の緩和を目指し、昭和55年より国の補助事業として、秋田県土木部によって進められている。大館市山館から片山（根下戸）を結ぶ延長7,677ｍの計画路線内には、教育庁文化課及び秋田県埋蔵文化財センターによる分布調査、範囲確認調査の結果、南から上ノ山Ⅱ遺跡、上ノ山Ⅰ遺跡、餌釣遺跡、山王岱遺跡、上野遺跡、池内遺跡、萩ノ台遺跡の７遺跡が存在することが明らかとなっている。教育庁文化課は、原因者である県土木部道路課との協議の結果、「範囲確認調査の結果、記録保存の必要なものについては発掘調査を実施すべき」ことを回答した。

これを受けて、秋田県埋蔵文化財センターは、昭和62年に上ノ山Ⅰ遺跡、上ノ山Ⅱ遺跡、山王岱遺跡の発掘調査を実施し、昭和63年に調査報告書、概報を刊行している。

昭和63年、道路改良事業の計画変更が、拡幅という形で示され、昭和62年に調査した３遺跡についても追加調査の必要が生じることとなった。これにより、平成元年に用地買収の終了している上ノ山Ⅱ遺跡と山王岱遺跡の第２次調査が実施された。

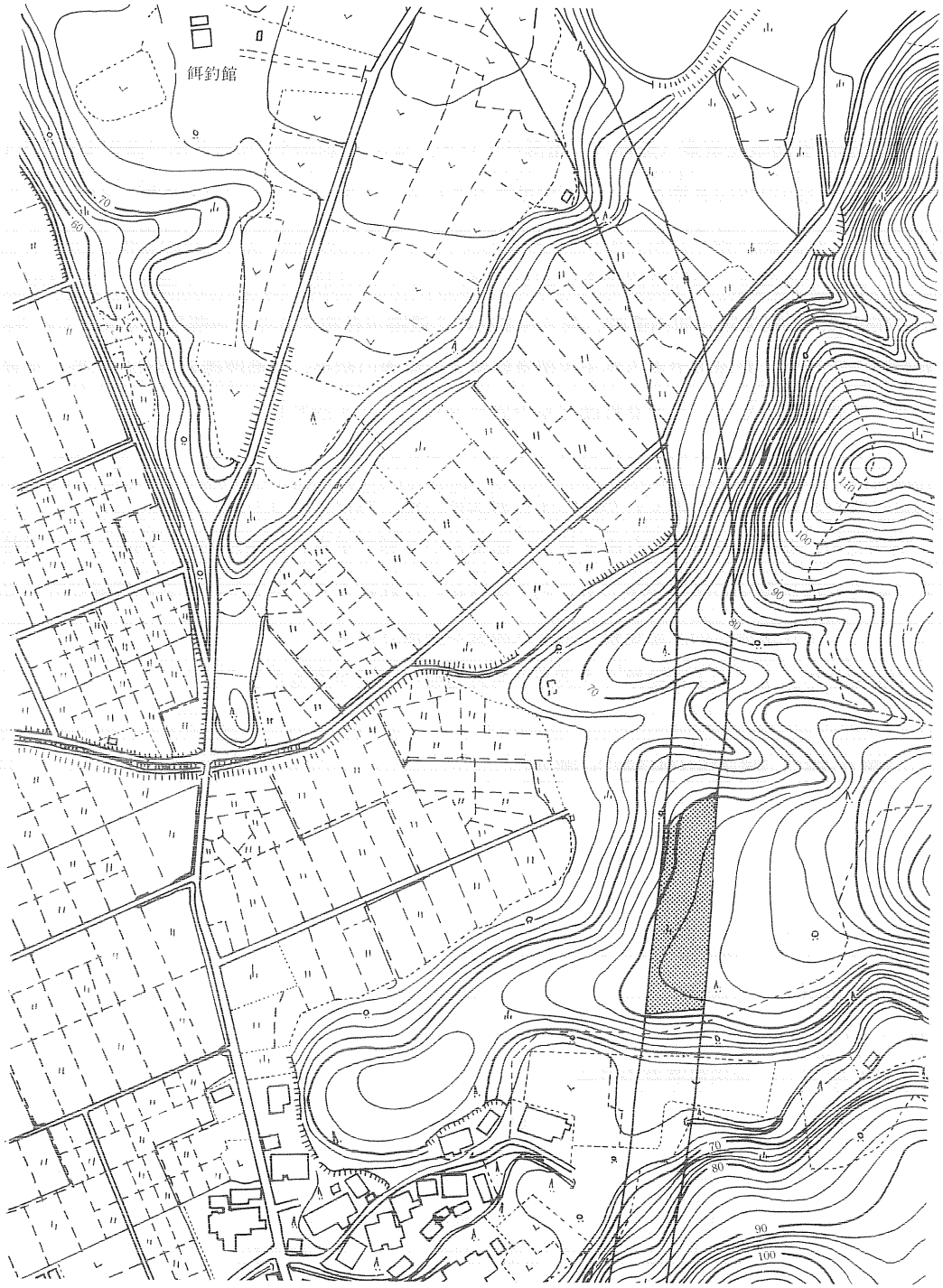
翌平成２年、上ノ山Ⅰ遺跡第２次調査と餌釣遺跡の調査が実施されることになった。

第２節　調査の組織と構成

所　在　地　　大館市餌釣字館27外
調 査 期 間　　平成２年６月４日～８月31日
調 査 目 的　　国道103号道路改良事業に係る事前調査
調査予定面積　　3,100㎡
調 査 面 積　　2,610㎡
調 査 主 体 者　　秋田県教育委員会
調 査 担 当 者　　櫻田　　隆（秋田県埋蔵文化財センター文化財主査）
　　小畑　　巌（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事）
　　和泉　昭一（秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員）
　　小山内　透（秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員）
総 務 担 当 者　　佐田　　茂（秋田県埋蔵文化財センター主査）

高橋忠太郎（秋田県埋蔵文化財センター主事）

調査協力機関　　県土木部北秋田土木事務所、大館市教育委員会、大館市上川沿公民館



第１図　遺跡周辺地形図　　（Ｓ＝１：3,000　上が北方向）　発掘調査区域

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の立地（第１図）

遺跡の所在する大館市は、秋田県の北東部に位置し、北は青森県と境を接する。大館市街から国道103号線を南下し、上川沿公民館のあたりから南東方向を望むと、広々とした水田と山地が接するあたりに餌釣の集落が見える。集落の中を南北に道路が通っているが、これは大館市中心部から餌釣、山館を経由して比内町に至る旧街道である。この旧街道に臨むように、東側山地から舌状の台地が張り出している。遺跡は、この台地上に立地する。

遺跡の標高は75～81m、餌釣集落との比高差は、11～17mである。

第２節　自然的環境

大館市史によると、餌釣遺跡の所在する大館市の地形は、大館盆地とそれをとりまく山地に分けられる。大館盆地は、奥羽山脈に平行してそれより低く走る出羽山地の北部に形成された断層による陥没盆地である。盆地をとりまく山地は、北西側に白神山地、東側に高森山地、南西側には摩当山地がある。

また、盆地内には大小の河川が流入している。米代川は、岩手県二戸郡安代町中岳を水源とし、鹿角市を経て市内に入り、市の南部を西流し、出羽山地を貫き能代市に至り日本海に入る。白神山地に源を発する下内川は、南流して盆地に入り、長木川に合流する。長木川は、高森山地に源を発し、盆地のほぼ中央部を西流し、市街地西部で米代川に合流する。

これらの河川により、５つの河岸段丘が形成されている。第１段丘から第３段丘は、洪積世、第４段丘以下は沖積世に形成されたものである。この段丘の分類は、段丘の構成物質によるものであり、地形的には第２、第３段丘、それに第４、第５段丘の高度はそれぞれ同じで、同一の平坦面を形成していることが多い。第１段丘は、最も古い段丘で、かなり起伏に富んでいる。標高は、100m前後である。第２段丘、第３段丘は、盆地内で最も広く分布し、標高は60～100mである。第４段丘、第５段丘は、標高50～90mで、現河床との比高は５～７mである。第２段丘、第３段丘は、少しくらいの洪水でも浸水の心配がないため、古くから生活の場となっており、中世の館状遺構の多くもこの段丘の突端に築かれている。餌釣遺跡もこの例にもれず、高森山地の南縁に形成された第３段丘上に立地している。

第３節　歴史的環境（第２図、第１表）

餌釣遺跡では、主に平安時代、中世の遺構と遺物が検出されているため、ここでは平安時代及び中世の調査された遺跡について、概観してみたい。

平安時代の主な遺跡としては、塚の下遺跡（21）、池内Ａ遺跡（33）、横沢遺跡（52）等がある。この時期の土器様相については解明されなければならない点が多く、遺跡の営まれた年代の決定においては、降下火山灰がひとつの鍵となっている。塚の下遺跡は、大湯浮石層より新しい時期の９軒の竪穴住居跡が検出されている。そして、大湯浮石の降下時期を、1,100年前後と推定し、竪穴住居跡の時期を12Ｃ以降としている。竪穴住居跡からは、底部に小砂利を付着させた甕形土師器、いわゆる「砂底」の土師器が出土している。池内Ａ遺跡では、竪穴住居跡の埋土中に大湯浮石が層をなして堆積している。これは、大湯浮石降下前に竪穴住居跡が廃棄され、埋没が始まってから大湯浮石が２次的に流入したものと考えられる。横沢遺跡では、７軒の竪穴住居跡が検出され、ＳＩ05竪穴住居跡より新しい土坑が重複して検出された。土坑内からは、朝鮮半島白頭山起源の降下火山灰いわゆる苫小牧火山灰が発見された。報告書では、大湯浮石の降下年代を10Ｃ前半と位置付け、苫小牧火山灰はそれよりもあまり年数を経ずして降下したものとして、ＳＩ05竪穴住居跡出土土器群の年代を10Ｃ前半以前としている。

中世の遺跡では、館跡を調査したものがほとんどである。真館（91）では、５軒の竪穴住居跡が検出され、そのうち２軒が突出出入口を有する。片山館ヨ遺跡（28）は、台地のほぼ中央を東西に走る空堀によって北と南に分けられた連郭式館で、南の郭では三重の土塁と空堀、５軒の竪穴、北の郭では、掘立柱建物跡２棟が検出された。餌釣遺跡から北西に約0.5ｋｍ離れた山王岱遺跡（４）では、空堀３条、火葬墓３基、井戸跡１基、掘立柱建物跡柱穴多数が検出された。この遺跡の西側には餌釣館が位置し、単郭の館とされているが、山王岱遺跡の調査によって、餌釣館の範囲がさらに広がることが明らかになった。

参考文献

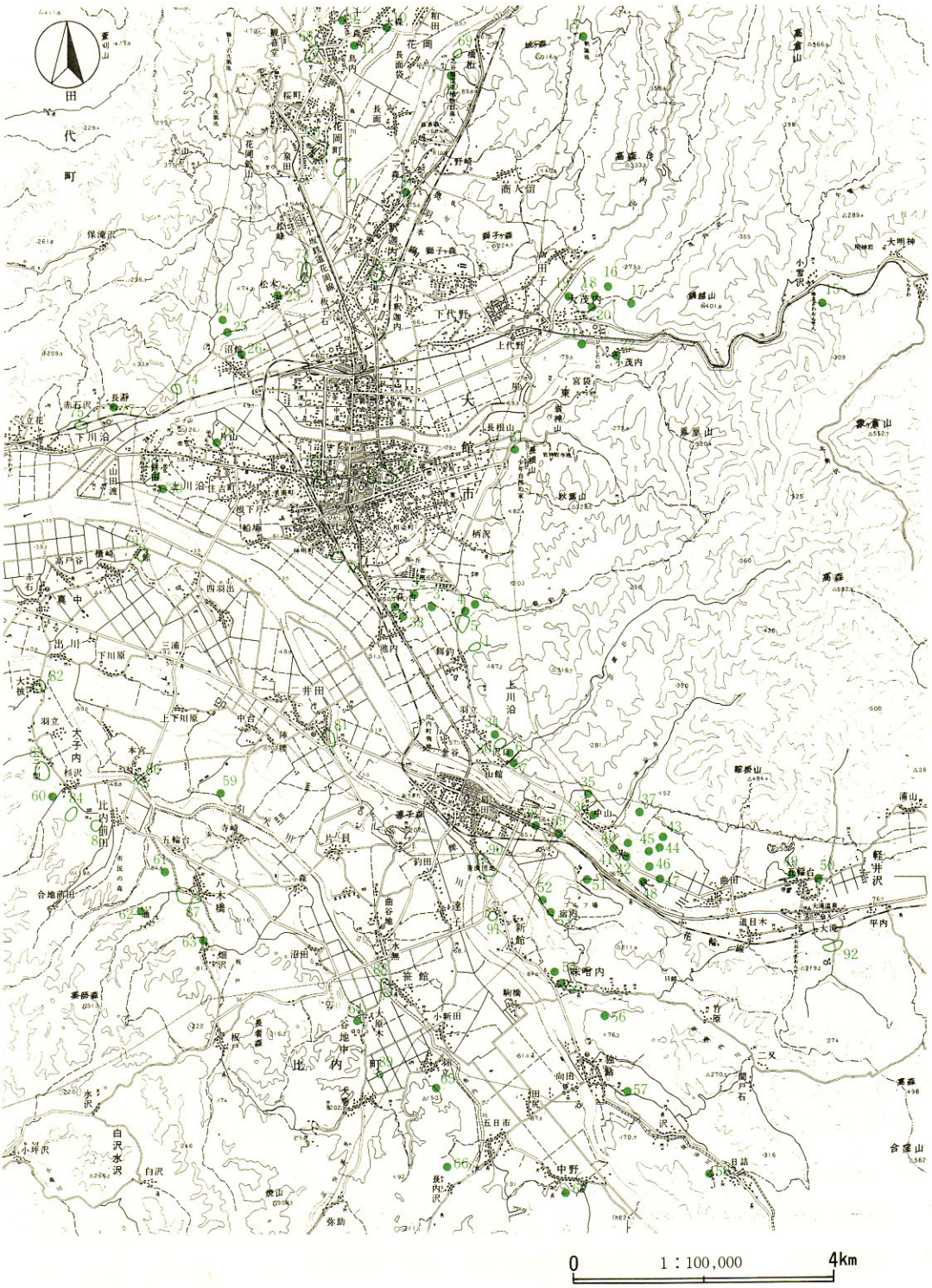
大館市史編さん委員会　『大館市史』　第１巻　1979年

秋田県教育委員会　『塚の下遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第61集　1979（昭和54年）

秋田県教育委員会　「横沢遺跡」　『味噌内地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第169集　1988（昭和63年）

比内町教育委員会　『真館緊急発掘調査報告書』　1972（昭和47年）

秋田県教育委員会　『片山館ヨ遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第203集　1990



第２図　周辺の遺跡分布図

第１表　周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	餌釣	縄文（中）、平安、中世	47	下聖Ⅰ	縄文（中～後）
2	池内Ｂ	縄文（前～後）	48	下聖Ⅱ	縄文（前）
3	上野	縄文	49	高ケ長根Ⅲ	縄文（早、晩）
4	山王岱	縄文、平安、５と重複	50	高ケ長根Ⅳ	縄文（早、後）
5	餌釣館	中世	51	横沢	縄文（前）
6	上ノ山Ⅰ	縄文（早～晩）、弥生	52	横沢	縄文（早、中、後）、平安
7	上ノ山Ⅱ	縄文（早～晩）	53	袖ノ沢	平安
8	山王台	平安	54	宿内中袋	縄文（前）
9	本郷下	縄文（晩）	55	味噌内	縄文（後）
10	大森	縄文（前）	56	珠数掛	縄文（晩）
11	十三森	縄文	57	大日堂前	縄文（中、後、晩）、平安～中世
12	福館・橋桁野	縄文（前・中）、弥生～平安	58	楽森	縄文（後）
13	釈迦湖底	縄文（前～晩）	59	本宮	縄文（晩）
14	芝谷地	縄文（後）	60	薬師袋	平安
15	小雪沢	縄文（晩）	61	五輪台	縄文（晩）
16	諏訪台Ａ	縄文（中）	62	一通	縄文（晩）
17	小茂内沢	縄文	63	畑沢	縄文（晩）
18	諏訪台Ｂ	平安	64	細越	平安～
19	大茂内	縄文（晩）	65	小堤	
20	諏訪台Ｃ	縄文（後～晩）、弥生、平安	66	長内沢	縄文（前）
21	塚の下	縄文（後）、平安	67	中野古墳	
22	茂内	縄文（前）	68	七ツ館	
23	松木	縄文（前）	69	福館	
24	鍛冶屋敷Ⅰ	平安	70	花岡城	
25	鍛冶屋敷Ⅱ	縄文（後）	71	女目館	
26	沼館	縄文（後）	72	釈迦内館	
27	赤石沢	縄文（中～晩）	73	松木高館	
28	片山館コ	弥生～平安、中世	74	沼館	
29	餅田屋布添	縄文（前）	75	押館	
30	芋掘沢	縄文（前、中）	76	大館城	
31	長根山公園	縄文（晩）	77	土飛山館	
32	萩の台	縄文（中）	78	小館花館	
33	池内Ａ	平安	79	擬崎館	
34	羽立	縄文（晩）	80	山館	
35	鬼沢	縄文	81	新田館	
36	毫毛袋	縄文（中、後）、平安	82	大披館	
37	桜殿	縄文（中）	83	太子内館	
38	市川	平安	84	杉沢館	
39	本道端	縄文（前、中）	85	前田館	
40	野沢袋Ｄ	縄文	86	本宮館	
41	中山	平安	87	八木橋城	
42	野沢袋Ｃ	縄文（早、前）	88	笹館城	
43	冷水山根Ⅱ	縄文（前）	89	谷地中館	
44	冷水山根Ⅰ	縄文（前、中）	90	長岡城	
45	野沢袋Ａ	縄文（中、後）	91	真館	
46	野沢袋Ｂ	縄文、平安	92	大滝古館	

（平成２年）

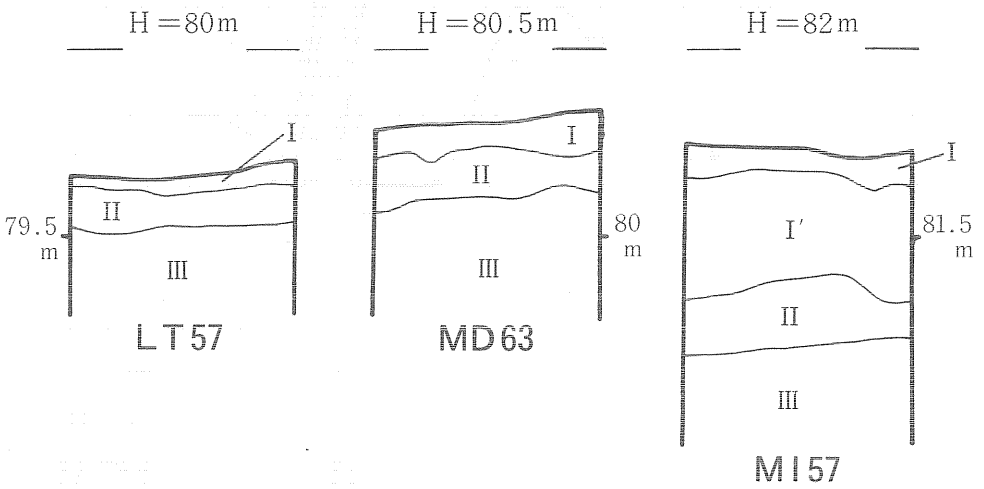
秋田県教育委員会　「山王岱遺跡」　『国道103号大館南バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査概報』　秋田県文化財調査報告書第170集　1988（昭和63年）

第３章　発掘調査の概要

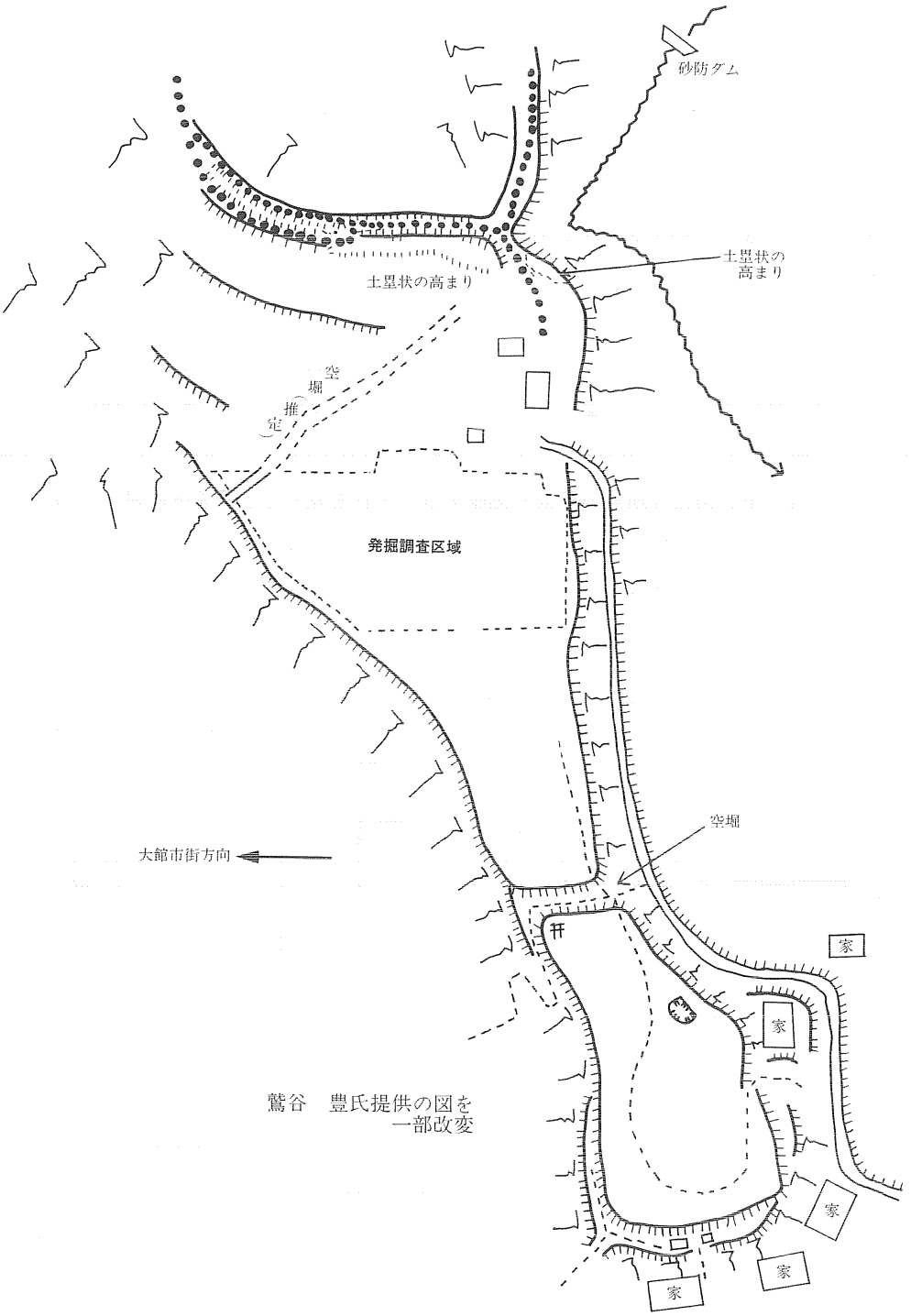
第１節　遺跡の概観（第１・３・４図）

遺跡のある台地は、東西約270m、南北約40～110mの舌状の台地である。東から西へ緩く傾斜しており、台地先端部を切り離すように南北に空堀が切られている。地形図で見ると、74mの等高線が分断されている部分に空堀が設けられている。調査対象区域は、空堀の東側、舌状台地の基部に近い部分であり、南北78m、東西40mの計画道路部分である。

遺跡の基本層位は、Ⅰ層　暗褐色(10YR3/3)表土または耕作土。Ⅰ′層　黒褐色(10YR3/2)耕作土。Ⅱ層　黒褐色（10YR2/2）耕作による攪乱を受けていない。Ⅲ層　礫を多く含む地山となっている。第３図に各地点の層位を掲載する。それを見ると、調査区西側（LT57）から東側（MI57）に向かって高度を増しており、Ⅰ′層の堆積が多く見られるようになる。Ⅰ′層は、調査区南東寄りに観察されるが、その他には分布していない。調査区中央以北（MD63）では、黒色土の堆積は次第に薄くなる傾向にある。



第３図　基本土層図



鷲谷　豊氏提供の図を一部改変

第４図　遺跡略図

第２節　調査の方法

１．調査区の設定

調査区内に所在する北秋田土木事務所が打設した杭No.95～98のうち、No.96杭とNo.97杭を結んだ線を南北の基準線とした。次に、No.96杭を原点として、基準線と直交するラインを設定した（東西基線）。この直交する基線から、調査区内に４ｍ×４ｍの方眼（グリッド）をつくるように杭を打設した。グリッド呼称は、２桁のアラビア数字と２文字のアルファベットを組み合わせて行うこととし、南北方向に２桁のアラビア数字（50～68）、東西方向に２文字のアルファベット（LT～MK）を付した。そして、グリッドの南東隅の杭でグリッド名を呼称することとした。なお、南北基線は、磁北から東に１°37′ずれている。

２．発掘調査方法

昭和61年６月に行われた範囲確認調査では、縄文中期及び平安時代の遺物が出土したこと。また、調査区の土層については、十和田火山起源の大湯浮石層が確認されなかったことがわかっていた。このため、縄文及び平安時代の集落を念頭に置き、地山面での遺構の検出に努めた。

調査が進展するにつれ、掘立柱建物跡柱穴が他の遺構と重複して検出されたので、他の遺構との新旧に留意しながら、掘立柱建物跡柱穴の調査を優先することとした。

検出遺構に付される番号は、遺構の種別を問わず一連としたが、掘立柱建物跡柱穴については、SKPの遺構略記号を冠して１番から番号を付した。

遺構の測量は、積石塚とカマドについて縮尺1/10とし、それ以外の遺構については縮尺1/20とした。遺物の取り上げは、出土位置及び層位、レベルを記録した。

第３節　調査経過

６月４日、８時半から現地にて作業員説明会を行った後、調査区内に散乱していた杉の枝葉のかたづけに着手。数ケ所で礫の集積が認められる。かもしか１頭出没する。６月５日、発掘用器材を搬入する。杉の枝葉のかたづけを終了する。６月６日、基本土層観察用のベルトを東西方向に２本（57と63ライン）、南北方向に１本（MDライン）設定し、表土の除去を開始する。大館市教育委員会板橋主査来跡。６月７日、方眼杭打設及び水準測量を開始する。６月８日、事務所及び休憩所とするプレハブを設置し、調査体勢がほぼ整う。

６月13日、数ケ所に認められた礫の集積は、周囲の地形と異なり盛り上がりが観察されたため、積石塚として調査に着手することとする。また、東側調査区外にも同じような塚があることが判明（第５図）。６月14日～25日まで、１号、２号積石塚の地形測量及び平面図の作成を

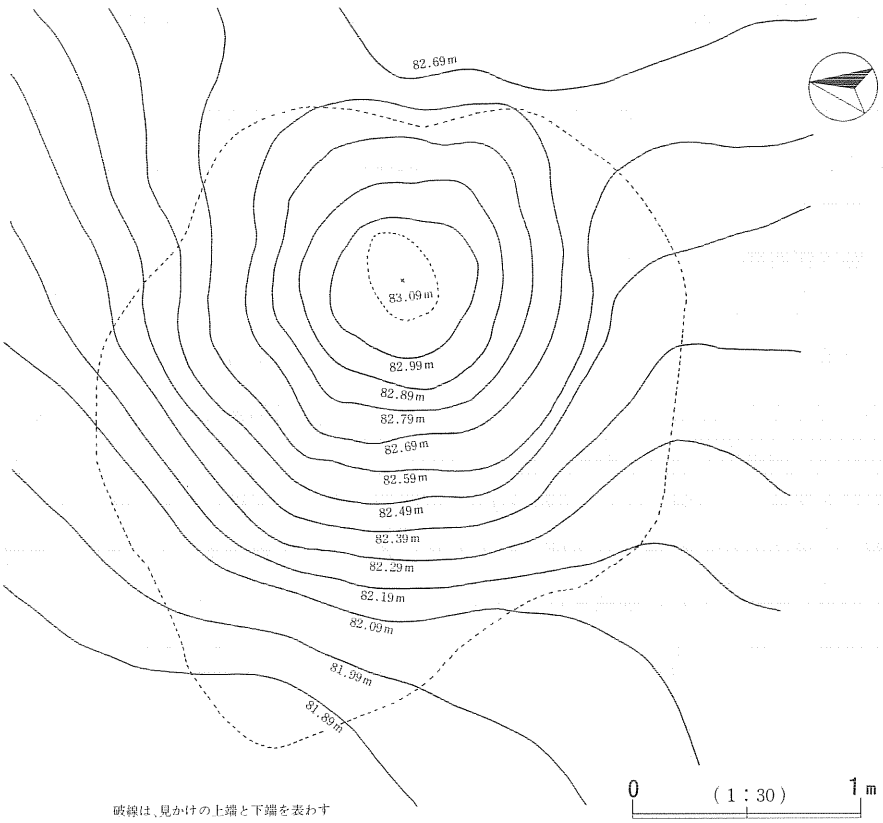
行う。その間、小川純夫氏（元大館市史編纂委員）、北鹿新聞菅原記者から積石塚について多くの御教示を受ける。６月25日から和泉調査に合流する。１号、２号積石塚の半截作業に着手。６月28日、調査区南西隅と１号積石塚北側に方形のプランを検出する。

７月２日、櫻田、他遺跡調査のため転出し、小畑が調査に合流する。上川沿公民館 関口氏来跡。７月３日、積石塚の断面写真撮影後、断面図の作成を行う。７月５日、50～57ラインまでの遺構検出作業を終了し、竪穴住居跡らしい方形プラン、土坑、焼土遺構、溝状遺構のほか多数の柱穴を検出する。７月９日、多数検出された柱穴が、他の遺構を切るかたちで重複していることから、この柱穴の調査を優先させることとする。その際、柱穴確認面での土の特徴を観察後に掘り上げ、平面図を作成することとした。７月10日、ＳＩ04竪穴建物跡、ＳＫ12土坑の調査に着手。柱穴は、１から425番まで番号を付して、212番まで土の観察を終了。７月11日、地山上面まで掘り下げが完了し、柱穴、土坑等の検出数増加する。MD51，MG55の各グリッドに検出した柱穴の壁に焼土粒や炭化物を含み、横方向に掘り進めることから、下部に古い遺構の存在が予想された。文化課熊谷学芸主事、地元の歴史研究家鷲谷豊氏来跡。７月13日、MD51グリッドで検出されたＳＮ05焼土遺構は、埋め戻されていた平安時代の竪穴住居跡のカマドであることが判明し、ＳＩ37とする。ＳＩ37からは、炭化物、焼土の散布が見られ、焼失家屋と認められた。

７月16日、和泉転出のため、小山内調査に合流。MG50・51グリッドにおいて、埋め戻された竪穴住居跡を検出し、ＳＩ38とする。７月19日、昨夕来からの豪雨が午前まで残ったため、作業を午後から開始する。土坑、竪穴住居跡等の断面図作成を行う。７月25日、ＳＮ08焼土遺構の断面図を作成する。この遺構は、２ｍほどの溝状の平面形を呈し、一端に煙出しを設ける。冨樫泰時所長来跡。７月26日、63ライン以北について、遺構確認作業を行い、柱穴、土坑、空堀を検出する。柱穴の総数は、811基にのぼった。７月30日、和泉が再び調査に合流する。ＳＩ37竪穴住居跡の焼土、炭化材出土状況図を作成。７月31日、大館市教育委員会板橋主査来跡。焼土遺構、竪穴住居跡への遺物の廃棄パターン等について御教示を受けた。ＳＩ44竪穴住居跡は、壁の検出に主眼を置いて調査を行っている。２ないし３軒が重複しているようである。

８月１日、ＳＮ11焼土遺構は、掘り込みがなく、被熱硬化した面がわずかに認められる程度であるため、断面図の作成は行わず、平面図のみとする。ＳＩ31竪穴建物跡の断面図を作成する。８月２日、MD57グリッド付近で検出したＳＩ34竪穴住居跡の土層観察を行う。本住居跡も埋め戻された遺構である。暑さ最高点に達する。８月３日、ＳＩ31竪穴建物跡の床面精査を行う。柱穴が、壁際に並んだうえに中央部に１基設けられている。出入口と思われる張り出しが、北東隅に付設されている。８月10日、基本土層観察用のベルトを除去し、掘立柱建物跡柱穴の検出を行う。12～19日までお盆休みのため、遺構に散水した後シートを被覆し、乾燥しな

いようにした。８月20日、午前は雨が激しかったので遺物の水洗いを行い、午後から現場作業を再開する。８月21日、掘立柱建物跡柱穴900番台の平面図作成を行う。８月22日、八戸工業大学高島助教授が来跡され、掘立柱建物跡について御教示を受ける。調査区北端で、埋められた平安時代の竪穴住居跡を検出する。８月27日、調査区の地形測量を開始。８月29日、ＳＩ44、73各竪穴住居跡カマドの精査を行う。８月30日、地形測量完了。８月31日、中谷雅昭文化課長、熊谷太郎文化課学芸主事来跡。すべての調査を終える。



第５図　ＳＸ 03 積石塚実測図

第４章　調査の記録

第１節　検出遺構と出土遺物

１．縄文時代

検出された遺構は、竪穴住居跡２軒、焼土遺構１基である。これらの遺構は、調査区東側と南東隅に分布している。時期の決め手になる遺物が出土した遺構は、焼土遺構のみである。焼土遺構出土遺物の時期は、中期中葉と後期後葉と考えられる。竪穴住居跡と焼土遺構が、同時に営まれたという前提に立てば、竪穴住居跡の時期は、中期中葉または後期後葉のどちらかということになる。

（１）竪穴住居跡

ＳＩ３８竪穴住居跡（第６・７図、図版３・26）

［検出位置］　MG50・51グリッド地山面で検出した掘立柱建物跡柱穴を調査したところ、柱穴の底及び立ち上がりが明らかでなかった。このため、土層観察用のベルトを設定し、掘り下げたところ、本遺構が検出された。

［平面形と規模］　長軸300cm、短軸284cmの楕円形である。面積は、6.49㎡である。

［床面］　地山を40～45cm掘り下げ、床としている。ほぼ平坦であるが、東から西側に少し傾斜している。堅致な面は、観察されなかった。

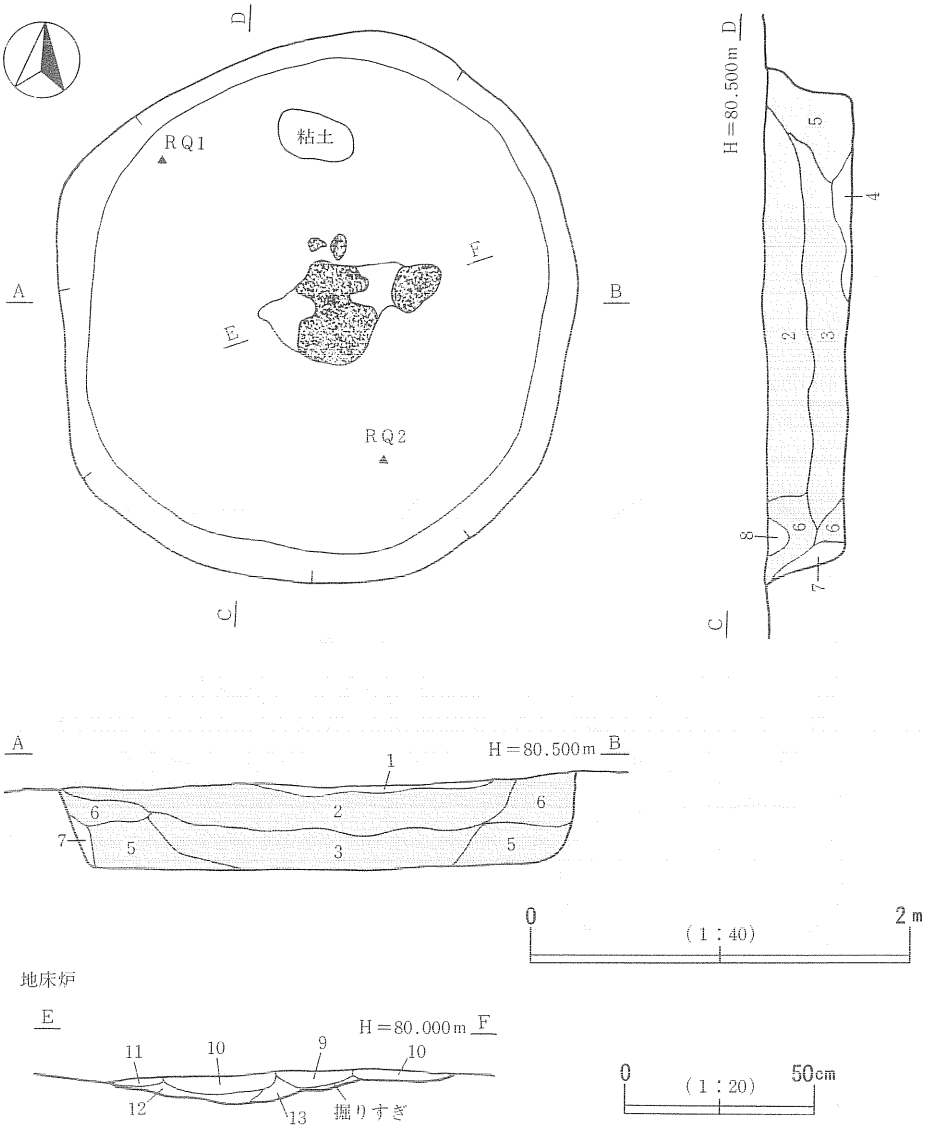
［壁・壁溝］　埋土と地山土との判別が困難であったが、地山に礫が含まれていたことから、礫が出てきたところで壁と判断した。壁高は、北～東側で47～52.5cm、西～南側で42～44.5cmである。壁溝は、認められなかった。

［柱穴］　地山上面で、本遺構よりも新しい時期の柱穴は認められたものの、本遺構に伴うものは検出されなかった。

［炉］　床面ほぼ中央に地床炉を検出した。熱を受け、赤変している箇所が部分的に認められる。

［埋土］　壁際に地山土に類似する黄褐色土、中央部に暗褐色土が堆積している。

［出土遺物］　磨石２点が出土した。１は、大人の掌にちょうど入るくらいの大きさで、使いやすかったためか、擦り面がほぼ全体に認められる。埋土下位からの出土である。２は、床面直上からの出土で、やや偏平な円礫の縁辺に擦り面がみられる。また、アスファルトの付着が１カ所認められる。



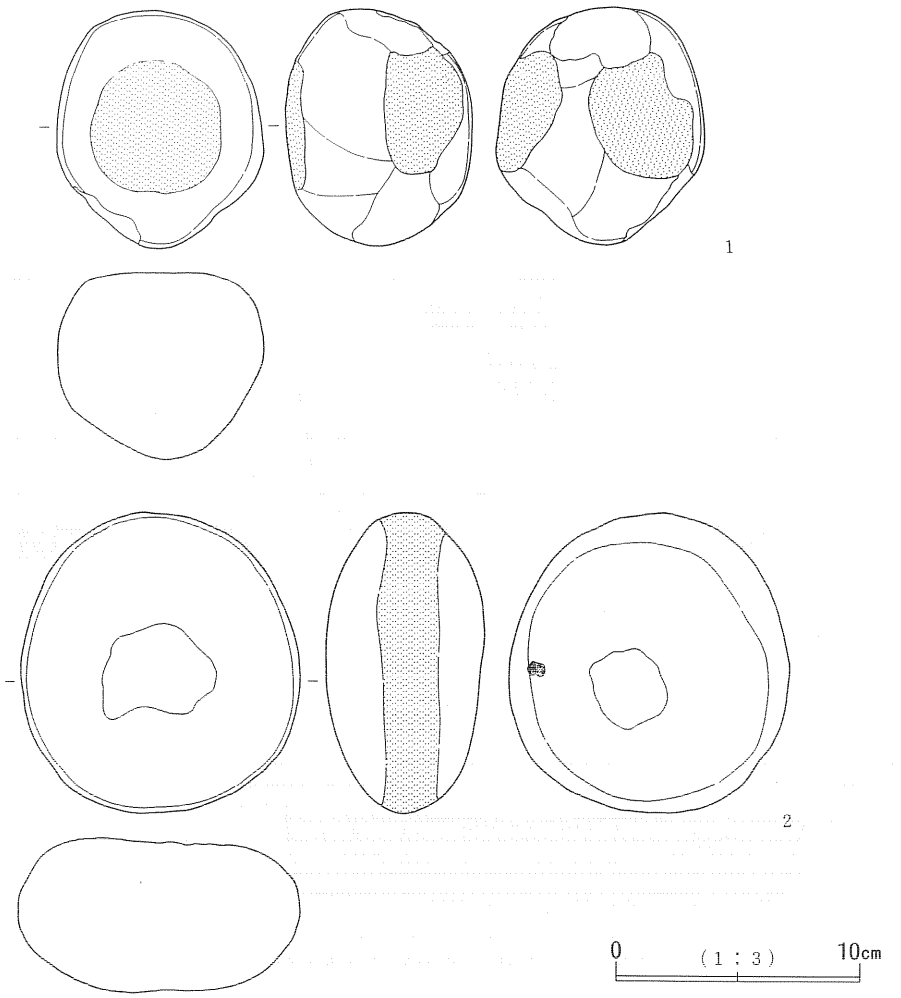
第６図　SI 38 竪穴住居跡実測図

住居跡土層注記

１．暗褐色（10YR3/3）　大湯浮石、炭化物。　２．黒褐色（10YR3/2）　地山粒、軽石粒、炭化物、礫。　３．暗褐色（10YR3/3）　地山粒、地山ブロック、炭化物、礫。　４．暗褐色（10YR3/4）　地山粒、焼土粒、炭化物。　５．にぶい黄褐色（10YR4/3）　地山粒、炭化物。　６．にぶい黄褐色（10YR4/3）　５層より炭化物の混入少ない。　７．褐色（10YR4/4）　地山粒、地山ブロック。ボソボソしている。　８．黒褐色（10YR3/2）　地山粒、地山ブロック、軽石粒。

炉跡土層注記

９．褐色（7.5YR4/4）　炭化物、地山ブロック、礫。若干赤変。　10．赤褐色（2.5YR4/6）　焼土、炭化物。　11．褐色（10YR4/6）　炭化物、焼土粒。若干赤変。　12．赤褐色（2.5YR4/8）　焼土層。　13．褐色（10YR4/6）　焼土粒、地山ブロック。



番号	出土位置	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	石　質
1	ＳＩ 38	9.8	8.5	7.7	860.3	凝　灰　岩
2	ＳＩ 38	12.5	11.5	6.6	1054.1	凝　灰　岩

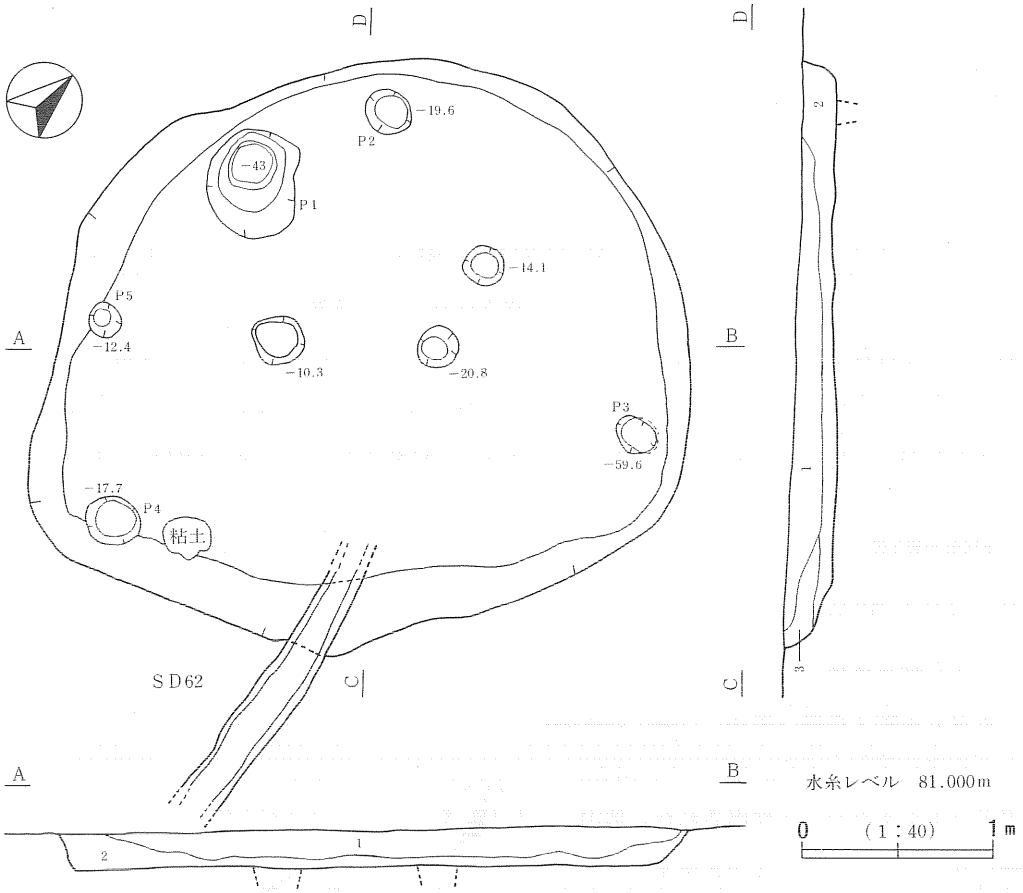
第７図　SI 38竪穴住居跡出土遺物

ＳＩ５７竪穴住居跡（第８・９図、図版４・26）

［検出位置］　MH61・62、MI61・62グリッドⅢ層上面で検出した。検出面の土の乾燥の度合いが、周囲に較べて低く、円形に近い平面形が確認された。南東側壁の一部は、ＳＤ62によって失われている。

［平面形と規模］　南北方向に長軸をもつ楕円形で、長軸360cm、短軸297cmである。面積は、8.46㎡である。

［床面］　角礫を多く含む地山を掘り込んで床としている。そのため、ゴツゴツした礫がむ



第８図　SI 57 竪穴住居跡実測図

き出したままになっている。

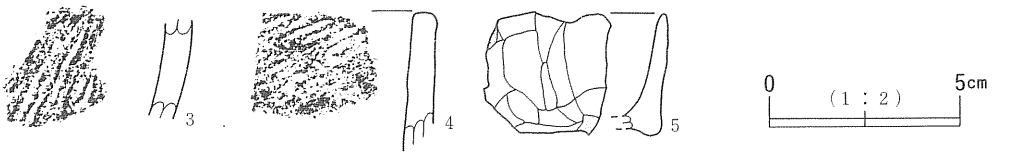
［壁・壁溝］　地山中に礫が含まれているため、壁面には礫が露出している。このような状況は、南西から北にかけての壁において特に顕著である。壁高は15～24.2cmである。壁の立ち上がりは、南東壁がやや緩やかである。壁溝は、検出されなかった。

［柱穴］　壁際に５箇所、中央部に３箇所検出された。口径は、18～30cm（P_2～P_8）、50～58cm（P_1）である。各柱穴に付された数字は、床面からの深さである。埋土は、すべて観察できなかったが、地山粒、地山ブロック、炭化物、小礫を含む（P_1～P_4）。

［炉］　検出されなかった。

［埋土］　角礫を多く含み、３層に分けられた。また、南側壁際に床面から約10cm浮いた状況で、粘土塊を検出している。

［出土遺物］　縄文土器片７点のほか土師器片40点が出土した。この内縄文土器片２点、土



番号	出土位置	文　様	胎　土　・　焼　成
3	ＳＩ 57	（外）ＬＲ横位回転旋文	砂粒、　焼成良好
4	ＳＩ 57	（外）ＬＲ横位回転旋文、摩滅著しい	砂粒、　焼成良好
5	ＳＩ 57	土師器・（手捏ね）（外）ヘラケズリ調整、黒痕有り	焼　成　良　好

第９図　SI 57 竪穴住居跡出土遺物

師器１点を掲載したが、その他は図化できなかった。３・４は、地文のみで、非常にもろく磨滅も著しい。５は、埋土下位から出土した、手捏ね土器である。外面は、ヘラ状工具で荒く粘土を削り取っている。墨痕が認められる。底部は、上げ底となっている。内面はナデられ、やや平滑である。

住居跡土層注記
１．褐色（10YR4/4）地山粒、礫。　２．暗褐色（10YR3/4）地山粒、礫、炭化物。粘性若干あり。　３．にぶい黄褐色（10YR4/3）地山粒、礫。

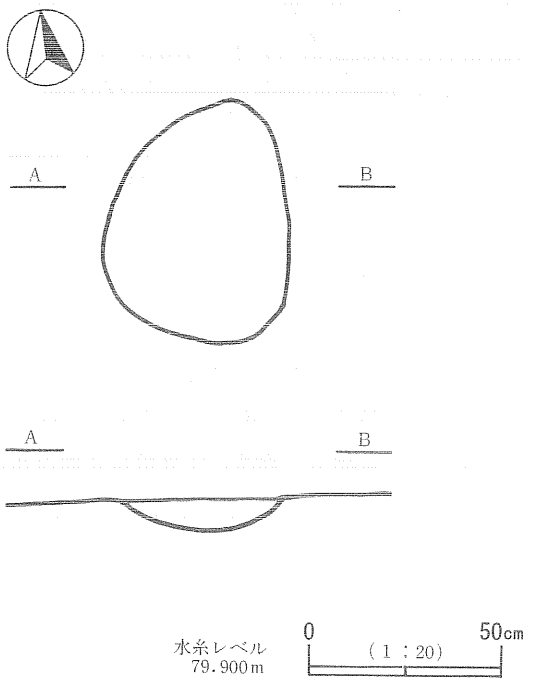
（２）焼土遺構

ＳＮ２５焼土遺構（第10・11図、図版26）

［検出位置］　MH52グリッドとMI52グリッドにまたがって検出された。地山面で確認したが、土器片がややまとまって出土していた程度で、焼土は見られなかった。遺物を取り上げながら、掘り下げていったところで焼土を検出したので、本来は土坑状の掘り込みがあったものと推測される。

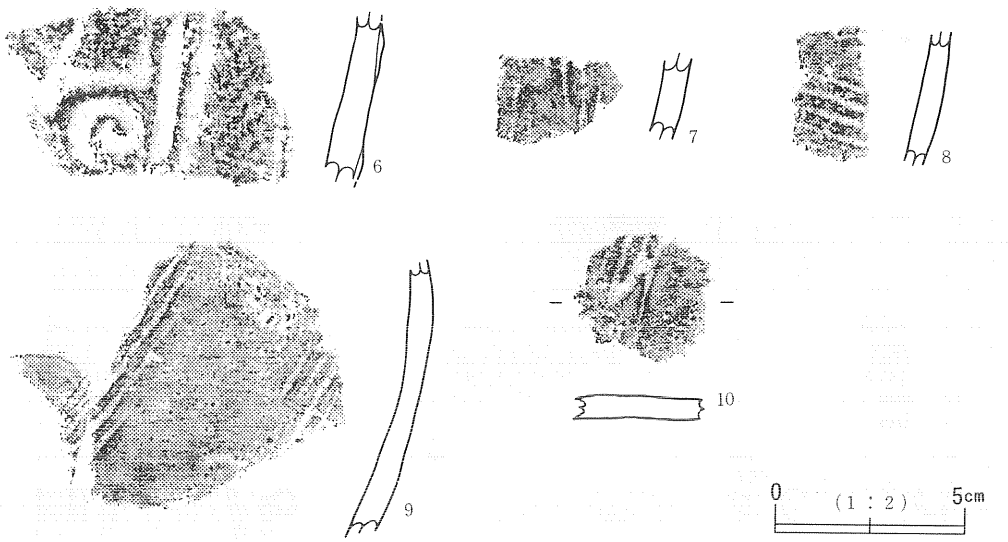
［平面形と規模］　検出された焼土範囲は、南北65cm、東西51cmの不整円形である。焼土は、地山粒を少量含み、暗赤褐色（5YR3/4）を呈する。

［出土遺物］　７～９は、同一個体と推測される。６は、著しく磨滅しているが、地文に隆線による渦巻文が描かれ、さらに隆線の脇に沈線が引かれている。



第10図　SN 25 焼土遺構実測図

10は、土器片を円盤状に加工したものである。



番号	出土位置	文　様	胎土・焼成
6	ＳＮ 25	(外) ＬＲ→粒土紐貼付による隆線→沈線	砂　粒
7	ＳＮ 25	(外) Ｒ撚糸条体	砂粒少量、焼成良好
8	ＳＮ 25	(外) Ｒ撚糸条体	焼成良好
9	ＳＮ 25	(外) Ｒ撚糸条体	砂　粒
10	ＳＮ 25	土製円盤 (外) Ｒ撚糸条体	砂粒、焼成良好

第11図　SN 25 焼土遺構出土遺物拓影図

２．平安時代

検出された遺構は、竪穴住居跡８軒、土坑16基、焼土遺構１基である。これらの遺構のうち、半数近くが中世の遺構をつくる際に埋められており、当初はその存在がわからなかったものである。特に、竪穴住居跡の検出及び調査は、プランがつかみにくく、難航した。

（１）竪穴住居跡

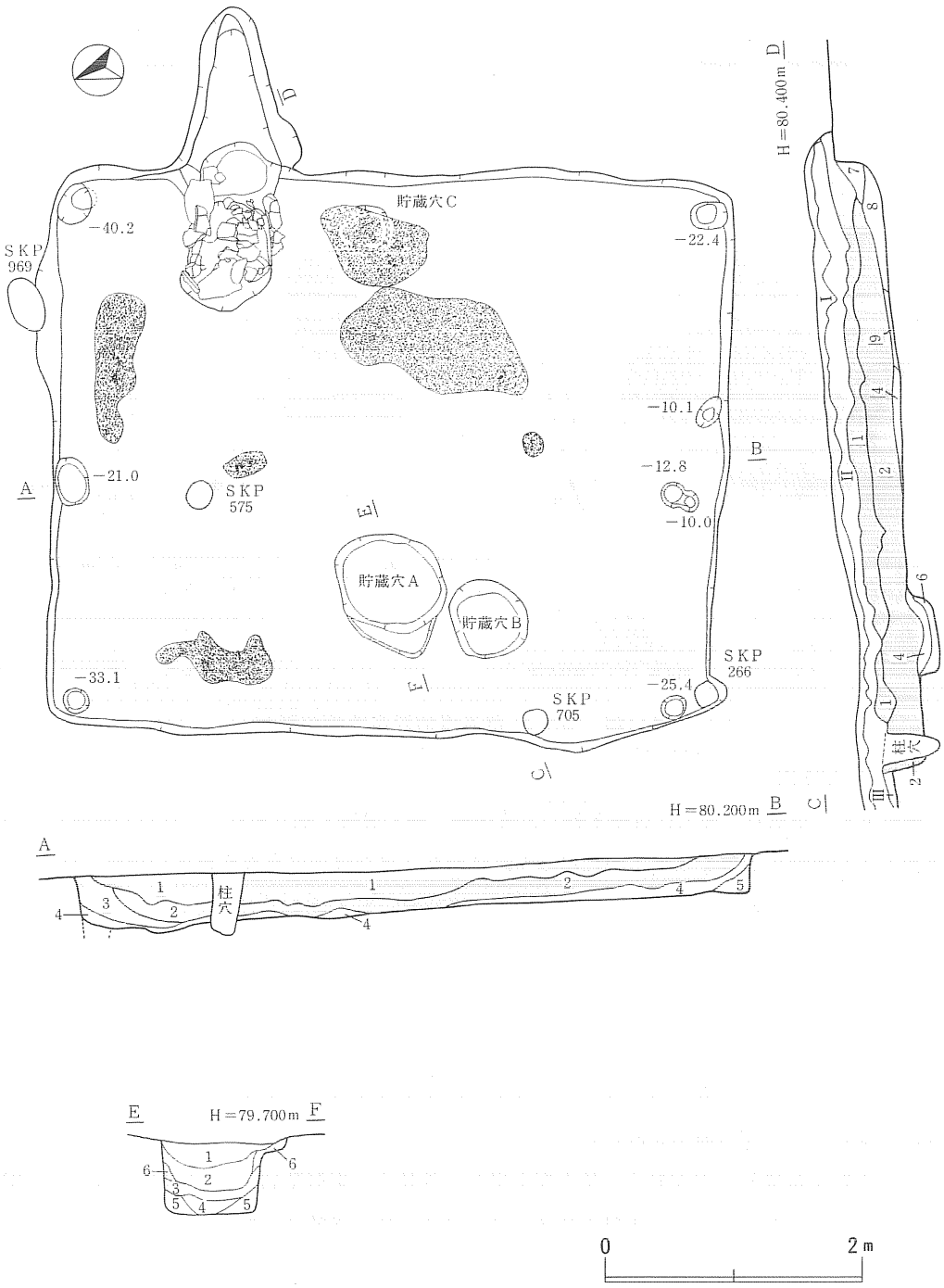
ＳＩ３４竪穴住居跡（第12～19図、図版５・６・28～30）

［検出位置］　MC56・57、MD56・57グリッド地山面で検出した。中世の掘立柱建物跡柱穴を調査中に、柱穴の掘り方がはっきり検出されなかったこと。また、土の乾燥の度合いが、周囲と異なることから検出された。

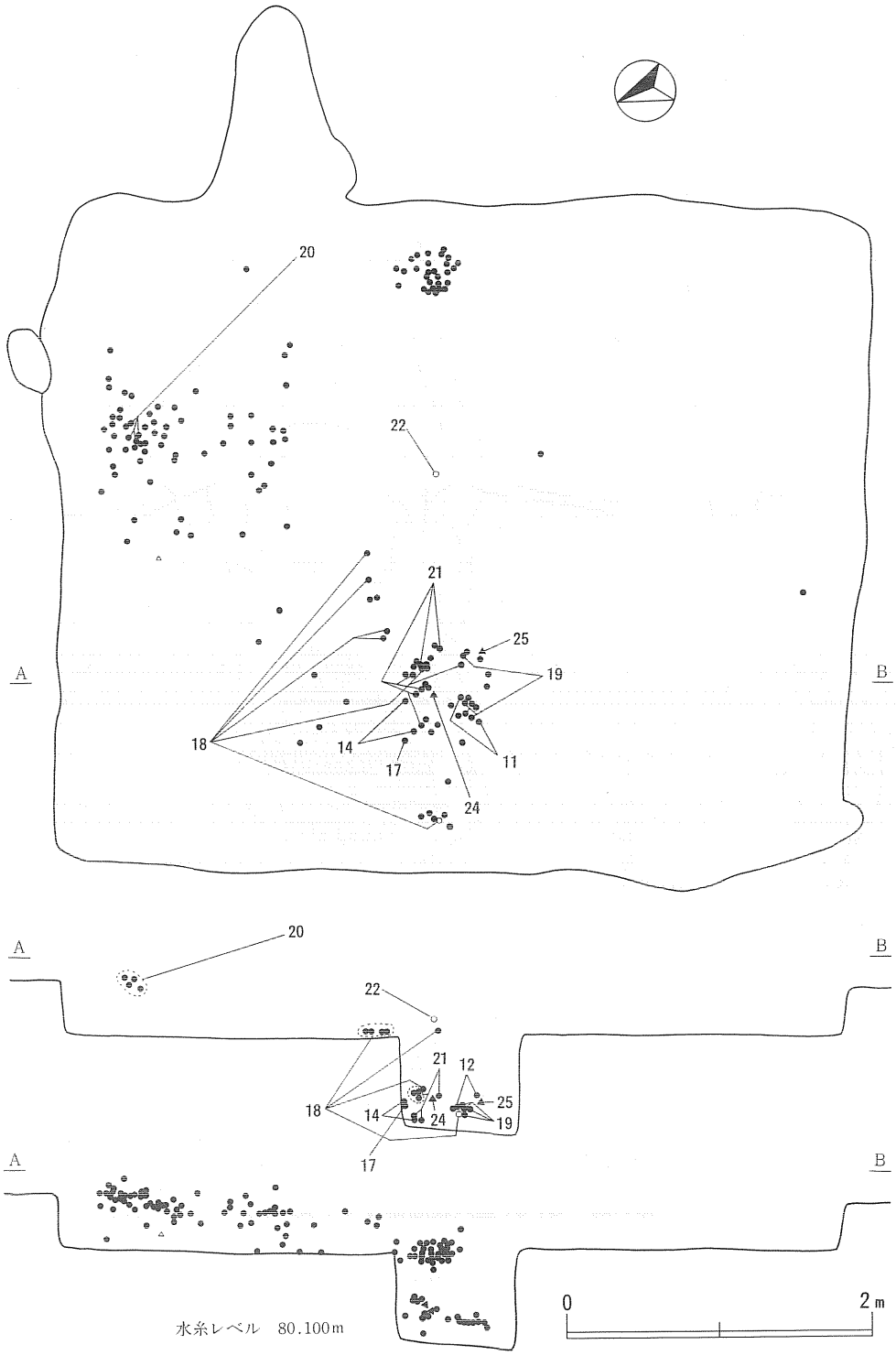
［平面形・規模］　平面形は、長方形を呈し、壁長は、東側壁530cm、南側壁446cm、西側壁524cm、北側壁440cmである。主軸方位は、Ｎ－124°－Ｅ。面積は、23.9㎡である。

［床面］　やや凹凸が見られる。床面に密着または少し浮いた状況で、焼土が部分的に見られる。炭化材は、認められなかった。

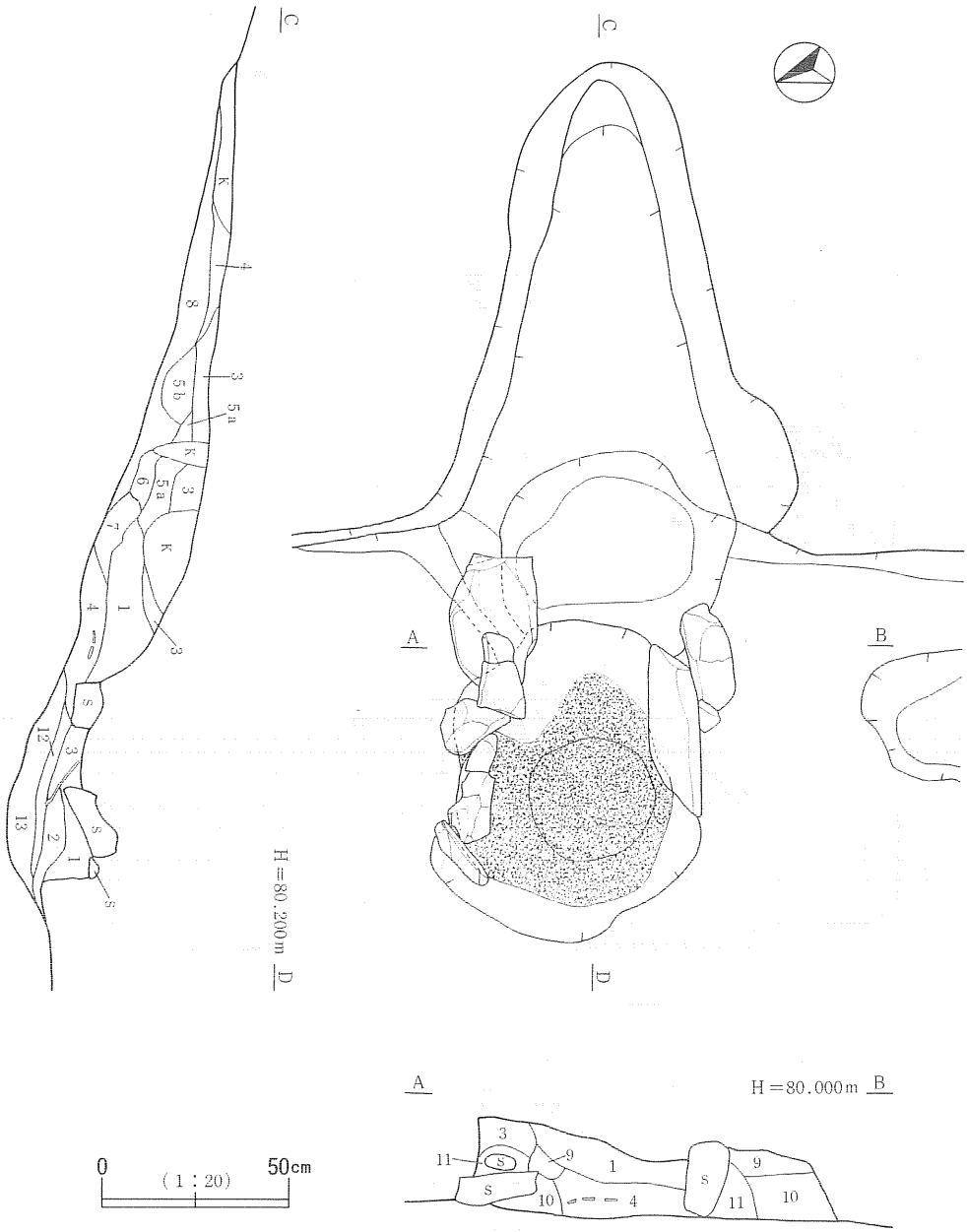
［壁・壁溝］　壁は、床からほぼ垂直に立ち上がり、北側の壁高が35～39cm、その他が27～33cmである。壁溝は、認められなかった。



第12図　SI 34 竪穴住居跡実測図



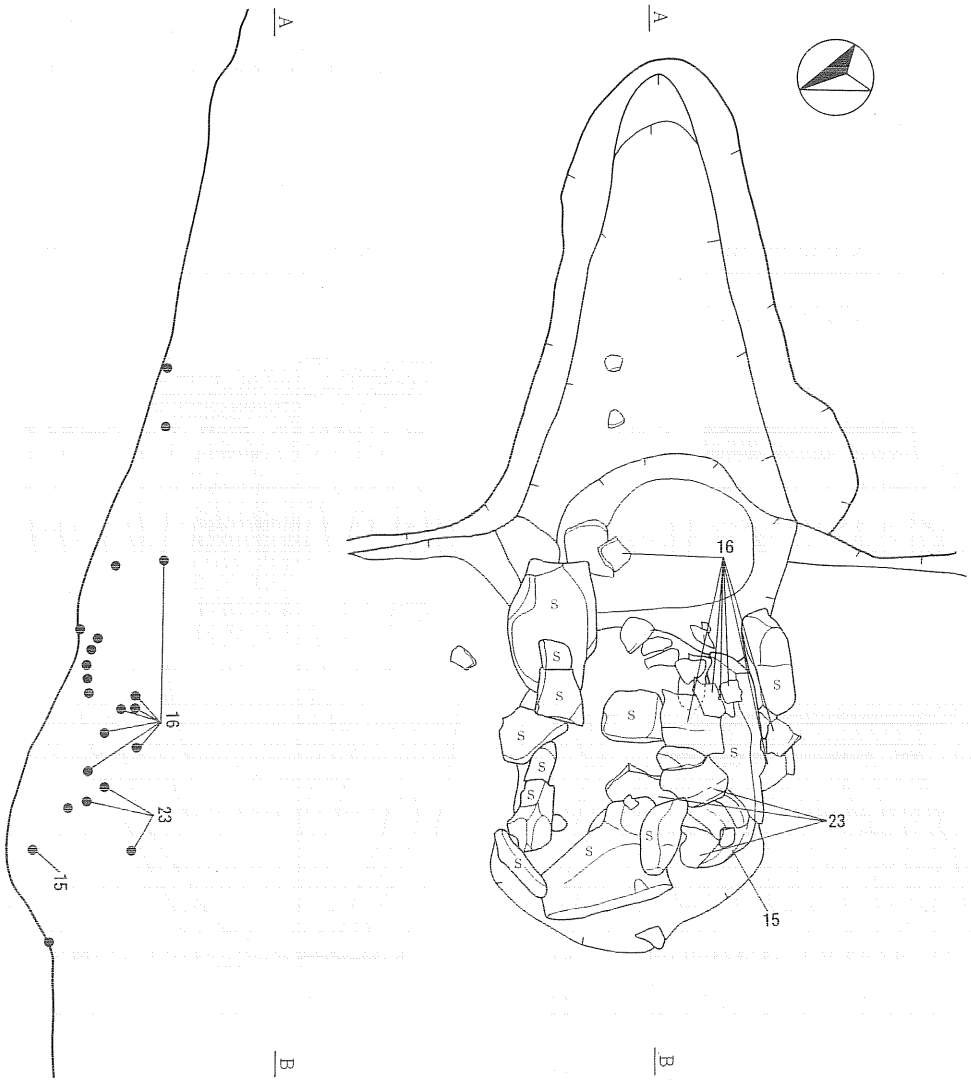
第13図　SI 34 竪穴住居跡遺物出土状況図



第14図　SI 34 竪穴住居跡カマド実測図

［柱穴］　住居跡４隅と主軸方向に平行する壁際中央部付近に合計８本検出した。それぞれに付した数字は、床面からの深さを表す。４隅にある柱穴の埋土は、礫を多量に含む褐色系の土で、よくしまっている。挿図中のＳＫＰは、中世の掘立柱建物跡柱穴である。

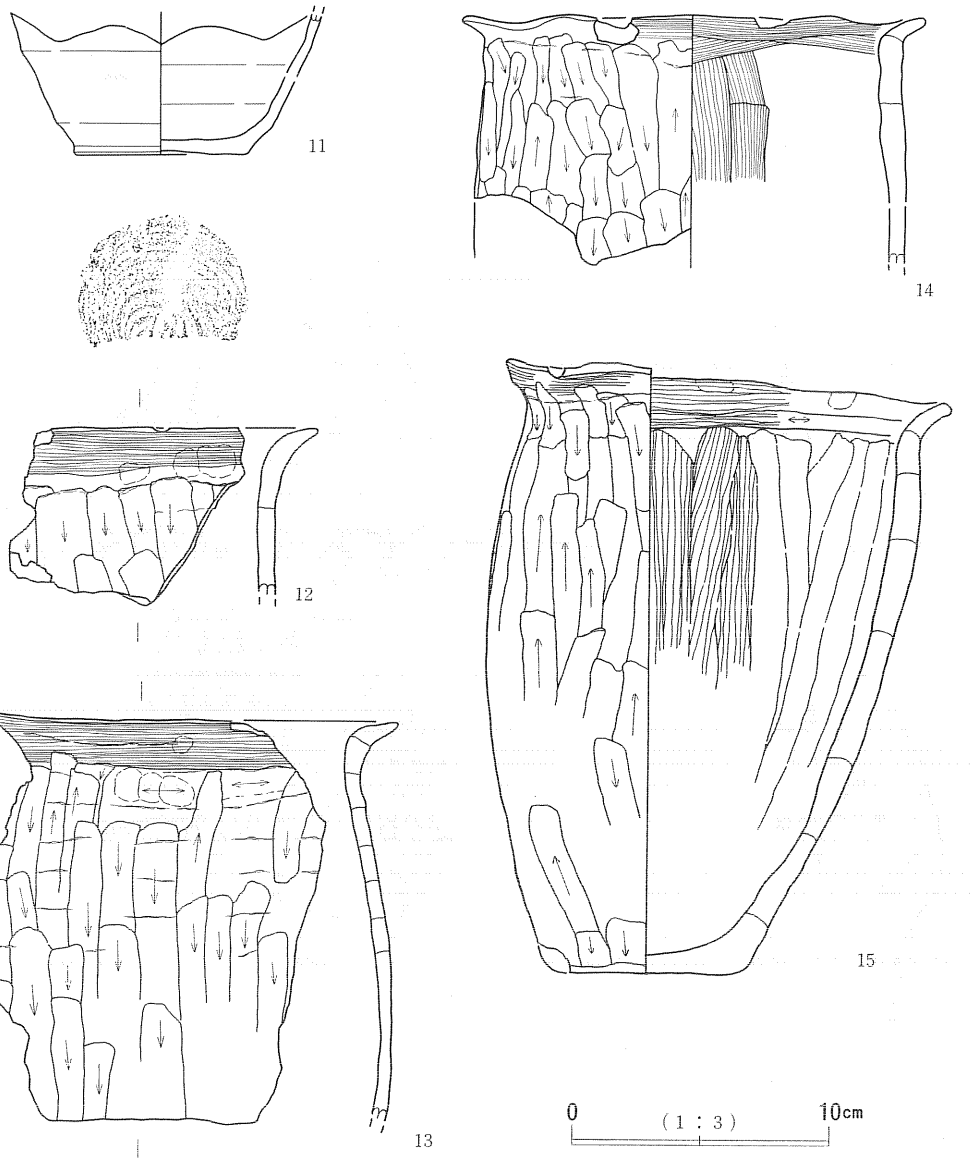
［貯蔵穴］　竪穴住居跡中央からやや西側に寄ったところに１基、その南隣に１基、さらに



第15図　SI 34 竪穴住居跡カマド遺物出土状況図

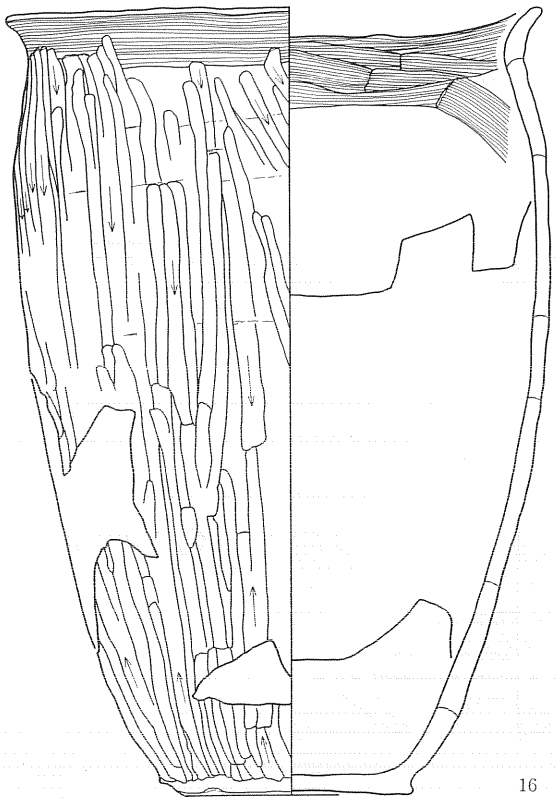
カマド右脇に１基、合計３基検出され、それぞれ貯蔵穴Ａ（以下単にＡとする）、貯蔵穴Ｂ（以下単にＢとする）、貯蔵穴Ｃ（以下単にＣとする）とした。Ａは、東西方向に長軸を有する楕円形で、長軸100cm、短軸80cm、深さ63cmである。西側に浅い掘り込みが伴い、深さ11.7cmである。Ｂは、60cm×67cmの円形、深さ約20.9cmである。Ｃは、39cm×50cm、深さ17.9cmである。

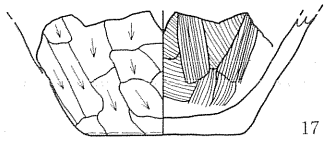
［カマド］　東壁の北寄りに付設されている。主軸方向は、竪穴住居跡主軸方向にほぼ一致

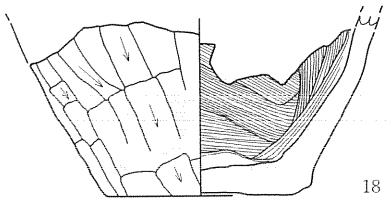


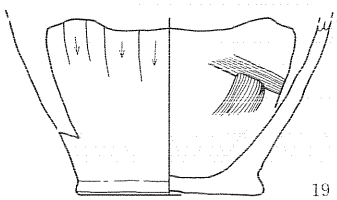
番号	出土地点	器種	成形	調整	外面	色調	外面	胎土	焼成	法量 cm		
					内面		内面			口径	器高	底径
11	SI34貯蔵穴A	土師器 坏	ロクロ	回転糸切り無調整		7.5YR 6／3 にぶい褐色		0.1㎜～3㎜大の	良	－	－	6.8
						7.5YR 7／6 橙色		砂粒多量				
12	SI34貯蔵穴A	土師器 甕	非ロクロ	指オサエ、ナデ→ケズリ→横ナデ		10YR 2／1 黒色		2㎜～3㎜大の	良	－	－	－
				ヘラナデ→横ナデ		10YR 2／1 黒色		砂粒少量				
13	SI34貯蔵穴A	土師器 甕	非ロクロ	指オサエ→横ナデ→指オサエ、ナデ→ケズリ		10YR 8／3 浅黄橙色		1㎜～2㎜大の	良	－	－	－
				ヘラナデ→横ナデ		10YR 8／4 浅黄橙色		砂粒少量				
14	SI34貯蔵穴A	土師器 甕	非ロクロ	指オサエ・ナデ→ケズリ→横ナデ(一部)		7.5YR 7／4 にぶい橙色		1㎜～3㎜大の	良	(18.1)	－	－
				ヘラナデ→横ナデ		7.5YR 8／4 浅黄橙色		砂粒少量				
15	SI34カマド	土師器 甕	非ロクロ	指オサエ→ナデ→ケズリ　底面ケズリ		10YR 7／3 にぶい黄橙色		2㎜～5㎜大の	良	27.4	24.2	6.6
				ヘラナデ→横ナデ		10YR 7／6 明黄褐色		砂粒少量				

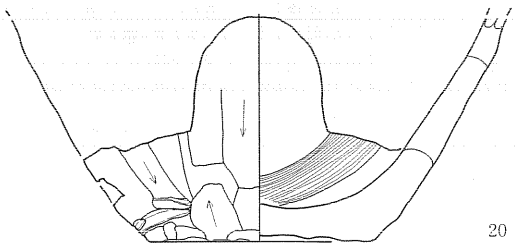
第16図　SI 34 竪穴住居跡出土遺物（1）


16


17


18

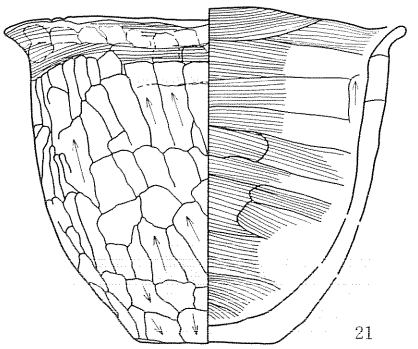

19


20

0　（１：３）　10cm

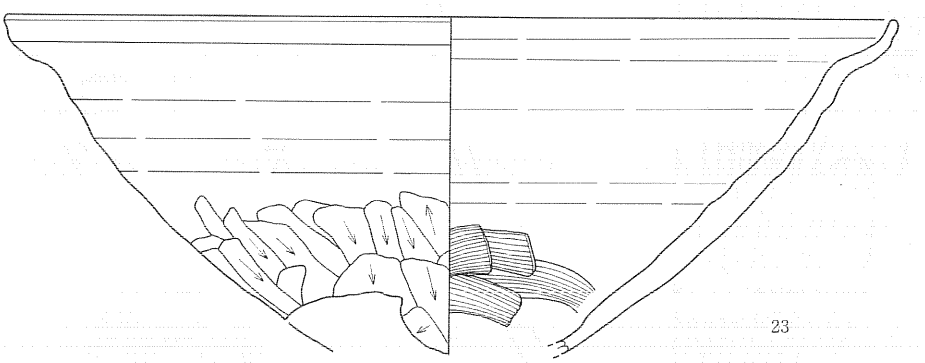
番号	出土地点	器種	成形	調整	外面/内面	色調	外面/内面	胎土	焼成	法量 cm 口径	器高	底径
16	ＳＩ34カマド	土師器 甕	非ロクロ	横ナデ→ケズリ(丁寧でミガキに近い)	外面	10ＹＲ 8／3 浅黄橙色	外面	1㎜～2㎜大の砂粒多量	良	22.0	31.2	9.6
				ヘラナデ(口縁→体部)	内面	10ＹＲ 7／3 にぶい黄橙色	内面					
17	ＳＩ34貯蔵穴A	土師器 甕	非ロクロ	ケズリ	外面	10ＹＲ 7／4 にぶい黄橙色	外面	2㎜～3㎜大の砂粒少量	良	－	－	6.2
				ヘラナデ	内面	10ＹＲ 7／4 にぶい黄橙色	内面					
18	ＳＩ34貯蔵穴A	土師器 甕	非ロクロ	ケズリ　底面ケズリ	外面	7.5ＹＲ7／4 にぶい橙色	外面	2㎜大の砂粒多量	良	－	－	7.4
				カキ目→ヘラナデ	内面	7.5ＹＲ7／4 にぶい橙色	内面					
19	ＳＩ34貯蔵穴A	土師器 甕	非ロクロ	ケズリ　磨滅著しい	外面	5ＹＲ 6／3 にぶい橙色	外面	1㎜～2㎜大の砂粒多量	良	－	－	7.4
				ヘラナデ	内面	N　4／6 灰色	内面					
20	ＳＩ 34	土師器 甕	非ロクロ	ケズリ→カキ目	外面	7.5Ｙ　4／1 灰色	外面	1㎜～3㎜大の砂粒多量	良	－	－	8.8
				ヘラナデ	内面	2.5Ｙ　7／4 浅黄色	内面					

第17図　SI 34 竪穴住居跡出土遺物（２）

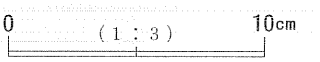


21

22



23



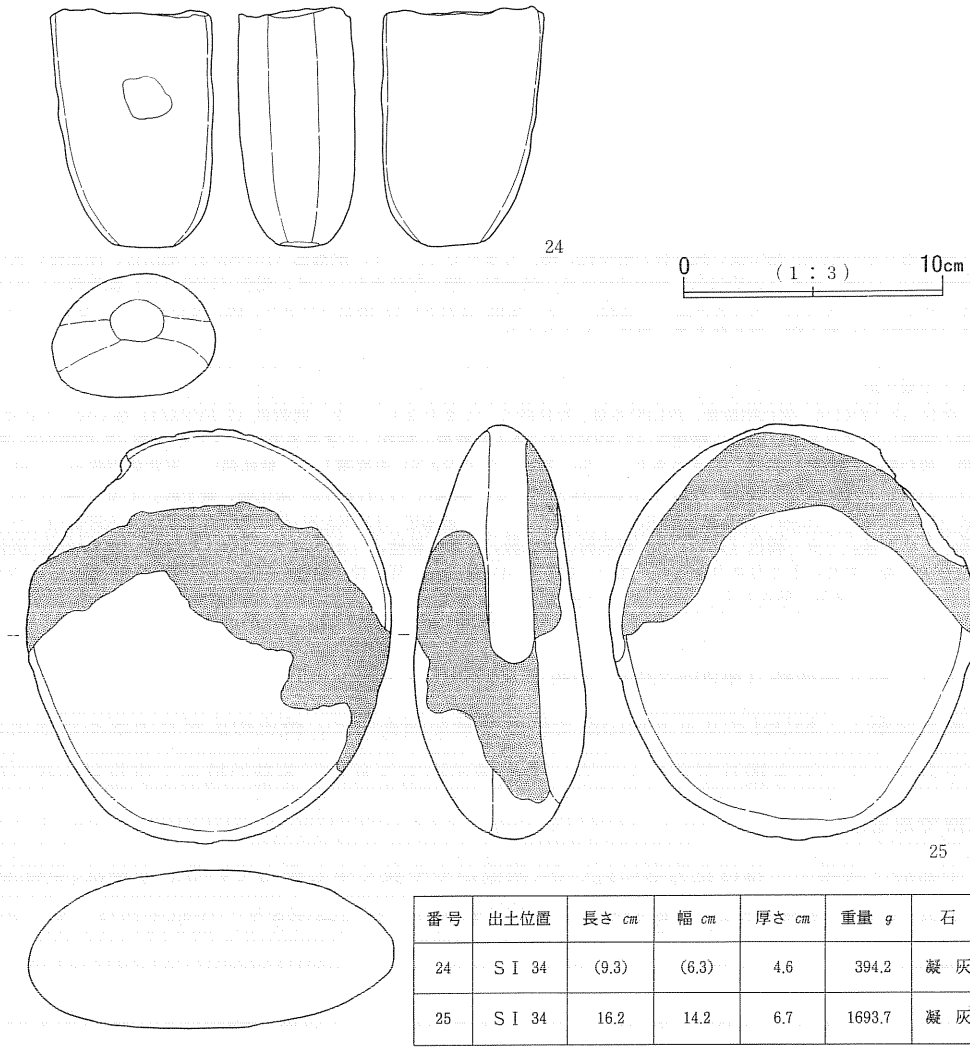
番号	出土地点	器種	成形	調整	外面	色調	外面	胎土	焼成	法量 cm		
					内面		内面			口径	器高	底径
21	ＳＩ 34	土師器甕（小型）	非ロクロ	指オサエ→ケズリ→横ナデ（指）（底面ナデ）		10ＹＲ 4／1褐灰色		1㎜～4㎜大の砂粒多量	良	15.8	13.2	5.3
				ヘラナデ→横ナデ		10ＹＲ 4／1褐灰色						
22	ＳＩ 34	須恵器甕	非ロクロ	タタキ目		7.5ＹＲ 8／4浅黄橙色		1㎜大の砂粒微量、緻密	良	－	－	－
				ヘラナデ		7.5ＹＲ 8／4浅黄橙色						
23	ＳＩ34カマド	土師器鍋	ロクロ	ロクロ→ケズリ　（下部）		10ＹＲ 7／4にぶい黄橙色		1㎜～2㎜大の砂粒多量	良	(35.0)	－	－
				ロクロ→ヘラナデ（下部）		10ＹＲ 8／3浅黄橙色						

第18図　ＳＩ 34 竪穴住居跡出土遺物（３）

している。遺存状況は悪く、袖の芯にした石が残っているぐらいである。構築方法としては、左右の袖の芯として大小の石を並べ、天井部にも偏平な石をアーチ状に架け、それに褐色土で肉付けをしている。

［埋土］　基本土層観察用のベルトにちょうどかかったため、表土から土層観察が可能であった。東西の断面（Ｃ－Ｄ）から、本住居跡の掘り込み面が第Ⅱ層中であることがわかる。また、第４層は黒褐色の自然堆積の土であるが、第１層～第３層の土は、地山粒を多く含み褐色土が主体をなす人為堆積である。

［出土遺物］　11は、Ａの埋土中位から下位にかけての出土である。底部の張りがやや強い。12は、Ａの埋土下位から出土した土師器甕口縁部破片である。体部から口縁部にかけては、垂



番号	出土位置	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	石　質
24	ＳＩ 34	(9.3)	(6.3)	4.6	394.2	凝 灰 岩
25	ＳＩ 34	16.2	14.2	6.7	1693.7	凝 灰 岩

第19図　SI 34 竪穴住居跡出土遺物（４）

直に近い角度で立ち上がる。13は、体部中央に最大径をもち、輪積み痕を残す。14は、Ａの埋土下位から出土した。輪積み痕がみられ、外面には細かいケズリ調整が加えられている。15は、カマド燃焼部で23の鍋形土師器の下位から出土した。歪みの非常に大きな土器である。16は、カマド燃焼部から煙道部にかけての埋土中位から出土した。底部の張りか強く、体部の張りも若干認められる。口縁部は、「く」の字状に外反している。また、底部に木葉痕が認められる。17～20は、甕の底部資料であるが、19は16と似たような底部のつくりをしており、木葉痕が認められる。18の接合状況をみると、２点がＡの埋土中位、５点が住居跡床面から出土している。このことは、本住居跡が廃棄され、Ａの埋没中に18の一部が流入したことが推測される。21は、Ａの埋土中位から下位にかけて出土した。小型の土師器甕で、口縁部に最大径をもつ。22は、

須恵器甕の底部に近い部分の破片である。23は、ロクロ成形の鍋で、内外面の一部に煤が付着している。24・25は、Ａの埋土中位からの出土である。24はたたき石、25は偏平に近い円礫でアスファルトの付着が認められる。

［住居跡の時期］　平安時代後半と考えられる。

住居跡土層注記
１．暗褐色（10YR3/3）地山粒、炭化物、軽石粒。粘性、しまりあり。　２．褐色（10YR4/6）礫。粘性、しまりあり。　３．暗褐色（10YR3/4）地山粒、焼土粒、軽石粒、礫。しまりあり。　４．黒褐色（10YR2/3）地山粒、焼土粒、炭化物。粘性あり。　５．褐色（10YR4/6）地山ブロック、焼土粒、礫。粘性あり。　６．褐色（10YR4/6）礫多量。　７．暗褐色（10YR3/4）焼土粒、炭化物少量。粘性強。　８．褐色（10YR4/4）焼土ブロック、礫、軽石粒。しまり弱。　９．暗褐色（10YR3/4）焼土粒、炭化物多量。粘性、しまりあり。

カマド土層注記
１．褐色（7.5YR4/4）炭化物微量、地山粒多量。粘性弱く、しまりなし。　２．暗褐色（7.5YR3/4）焼土粒、炭化物、地山粒。粘性、しまりあり。　３．暗褐色（7.5YR3/4）焼土粒微量。粘性、しまりあり。　４．暗褐色（7.5YR3/3）焼土少量、炭化物、地山粒。粘性、しまりあり。　5a．褐色（7.5YR4/3）赤変著しく、粘性弱い。天井部崩落土。　5b．褐色（7.5YR4/3）焼土、黒褐色土微量。天井部崩落土。　６．黒褐色（7.5YR2/2）炭化物、焼土粒。しまり強。　７．黒褐色（7.5YR3/2）炭化物、焼土粒。粘性、しまりあり。　８．暗褐色（10YR3/3）炭化物、赤変著しい天井部のブロック多量。しまり強。　９．褐色（10YR4/4）軽石粒、地山粒、小礫。粘性、しまりあり。　10．暗褐色（10YR3/3）炭化物、焼土粒少量。粘性、しまりあり。　11．褐色（10YR4/4）地山粒、軽石粒。粘性、しまりあり。　12．褐色（7.5YR4/4）焼土ブロック多量。粘性なし。　13．地山赤変部分。

ＳＩ３７竪穴住居跡（第20～23図、図版７・27・31・32）

［検出位置］　MD51グリッド地山面で焼土遺構を調査中に、焼土の広がり方が不自然であることから、まわりを掘り下げたところ、本遺構が検出された。多量の焼土と炭化材を伴う焼失家屋である。

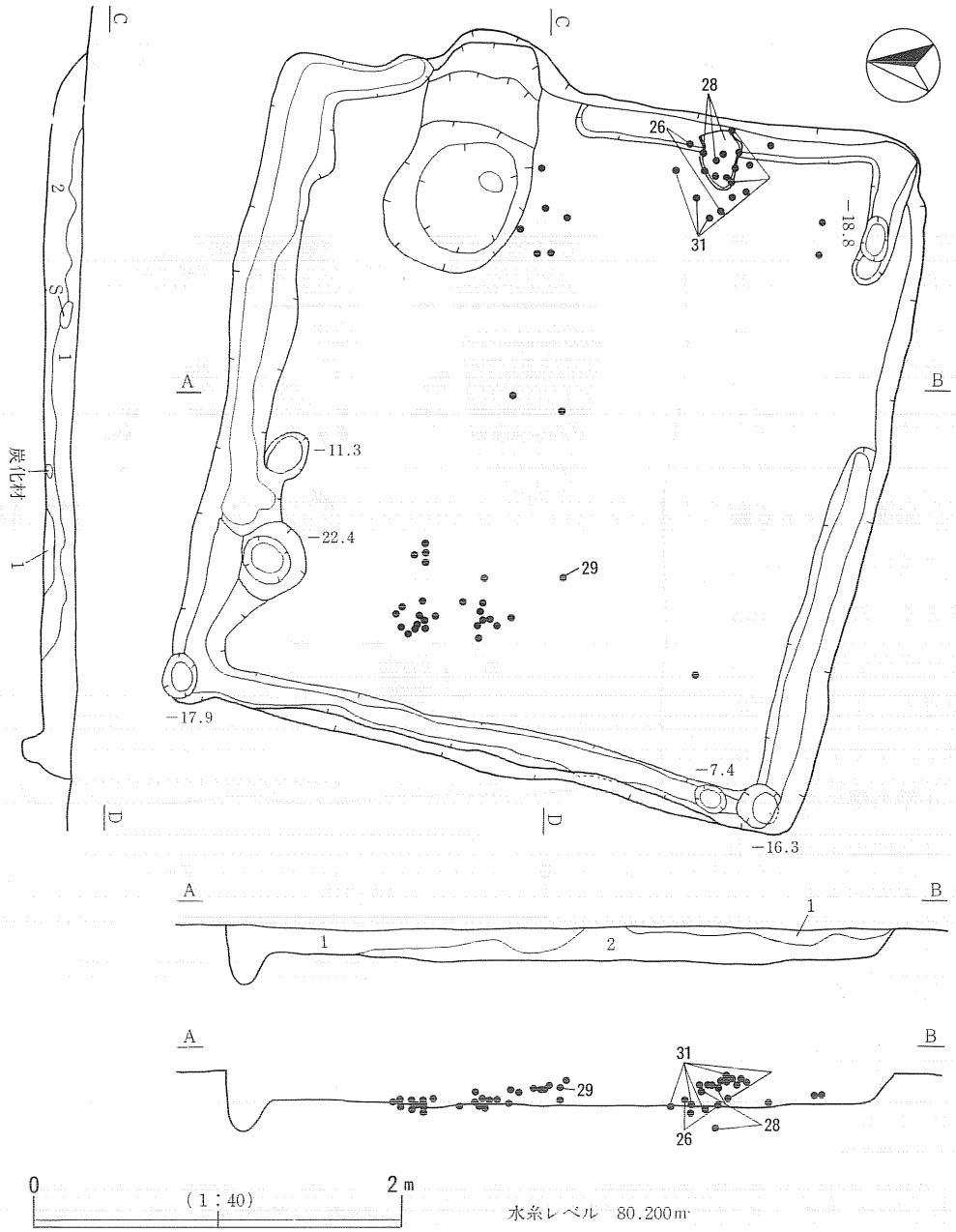
［平面形・規模］　ほぼ正方形に近いが、南壁がやや長く少し歪んでいる。壁長は、東壁368cm、南壁390cm、西壁355cm、北壁359cmである。面積は、13.5㎡である。主軸方位は、Ｎ－96°－Ｅである。

［床面］　標高は、79.83～79.93m。カマド焚き口周囲と住居南西隅が低く、住居南東隅が最も高い。熱を受けた痕跡が観察された。

［壁・壁溝］　壁は、やや内湾ぎみに立ち上がる。壁高は、東壁が20～22cm、南壁13.4～24.7cm、西壁13.7～17.7cm、北壁17.2～25cmである。カマド部分と南壁の一部を除いて、壁溝が巡っている。床面からの深さは、2.9～27.5cm、幅は18～42cmである。

［柱穴］　北東隅を除く各コーナーと北壁際に検出した。南東隅の柱穴は、隅というよりは、南壁に沿って内側に位置する。北東隅については、壁溝の深さが19.2cmとやや深いため、柱穴の掘り込みが壁溝とほぼ同じであった可能性がある。

［カマド］　東壁中央から北寄りに付設されており、遺存状態は悪い。付設するにあたって、掘り込みは行わず、袖芯材に石を用いている。煙道部の傾斜角は、燃焼部からは比較的緩く推移するが、煙り出し近くになってやや角度を増す。主軸方位は、Ｎ－103°－Ｅと住居主軸方位



第20図　SI 37 竪穴住居跡実測図

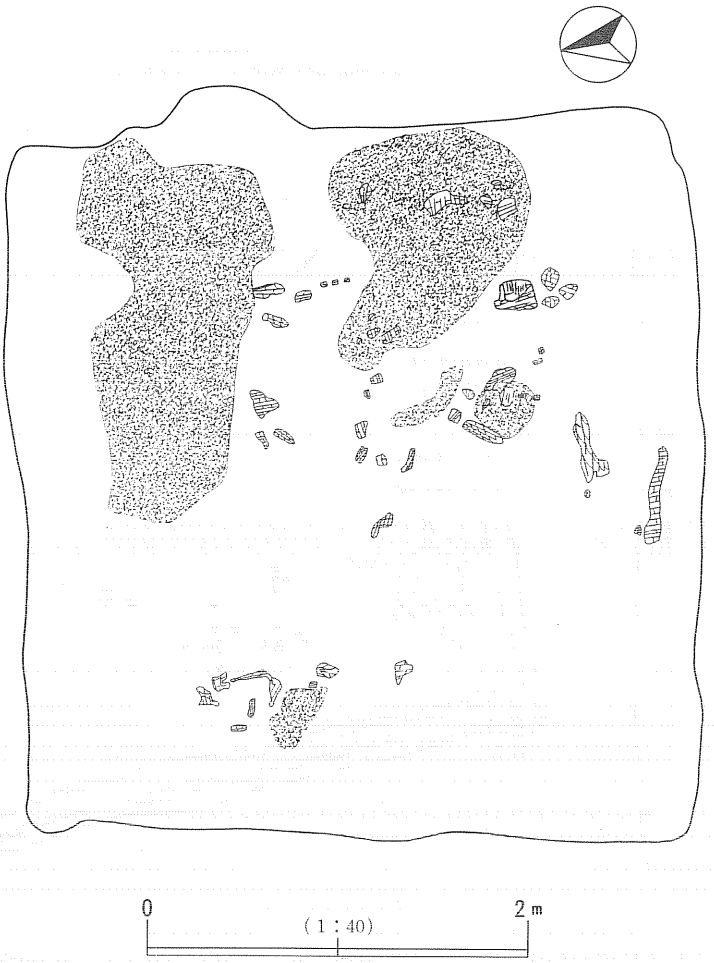
と若干のズレを生じる。

［埋土］　２層に分層された。火災消火のため、いずれも人為的に埋められたものである。

［出土遺物］　26は、カマド右側の床面近くから出土した。内面黒色処理がなされ、口縁部の外反の度合いは少ない。27は、カマド燃焼部奥の埋土中から出土した。輪積み痕を一部に残

す。口縁部は「く」の字状に強く屈曲し、口縁部から体部にかけては、ほぼ垂直に推移する。28は、東側の壁際に横位で出土した。薄手であるが、胎土に砂粒を多く含み、器表面に露出している。輪積み部分で破損している。29は、埋土上位から出土している。底部の張りが強い。30は、カマド支脚として用いられた甕の底部である。外面には剝落箇所が認められる。31は、口縁部が「く」の字状に屈曲し、やや大きく外反する小型の甕である。32は、住居跡埋土中より出土した砥石である。

［住居跡の時期］　平安時代後半と考えられる。



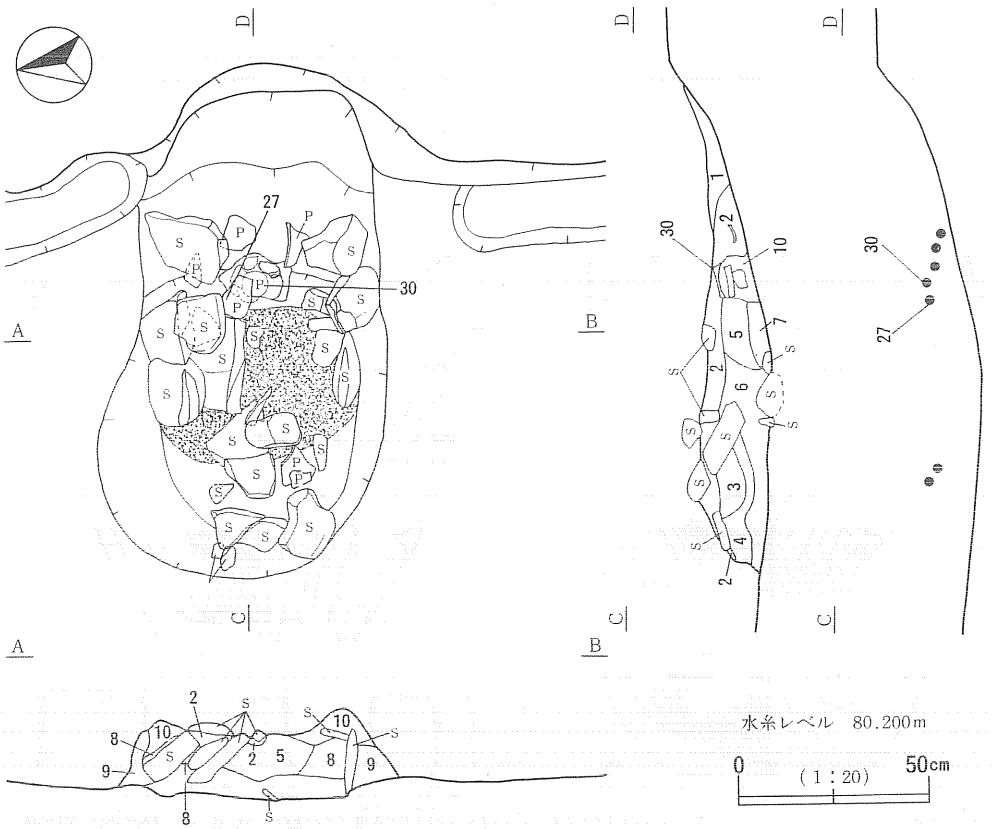
第21図　SI 37 竪穴住居跡焼土・炭化物検出状況図

住居跡土層注記

1．明黄褐色（10YR6/6）地山粒、地山ブロック、炭化物、軽石粒。2．黒褐色（10YR2/2）地山粒、地山ブロック、焼土粒、炭化物。

カマド土層注記

1．暗褐色（10YR3/4）焼土粒、炭化物微量、軽石粒多量。粘性なし、しまり強。　2．黒褐色（10YR3/2）軽石粒、焼土粒、炭化物。粘性、しまりあり。　3．黒褐色（10YR3/2）ブロック状の焼土、炭化物多量。粘性、しまりあり。天井部崩落土。　4．褐色（10YR4/6）粘性なし、しまり強。天井部崩落土。　5．黒褐色（10YR2/2）炭化物多量、焼土粒。粘性弱。　6．黒色（10YR2/1）炭化物多量、焼土粒。　7．暗褐色（7.5YR3/3）焼土粒、礫。粘性弱、しまり強。　8．暗褐色（7.5YR3/4）焼土ブロック少量。粘性なし、しまり強。　9．褐色（7.5YR4/3）軽石粒、焼土粒、炭化物少量。粘性弱。　10．暗褐色（7.5YR3/4）礫。しまり強。



第22図　SI 37 竪穴住居跡カマド実測図

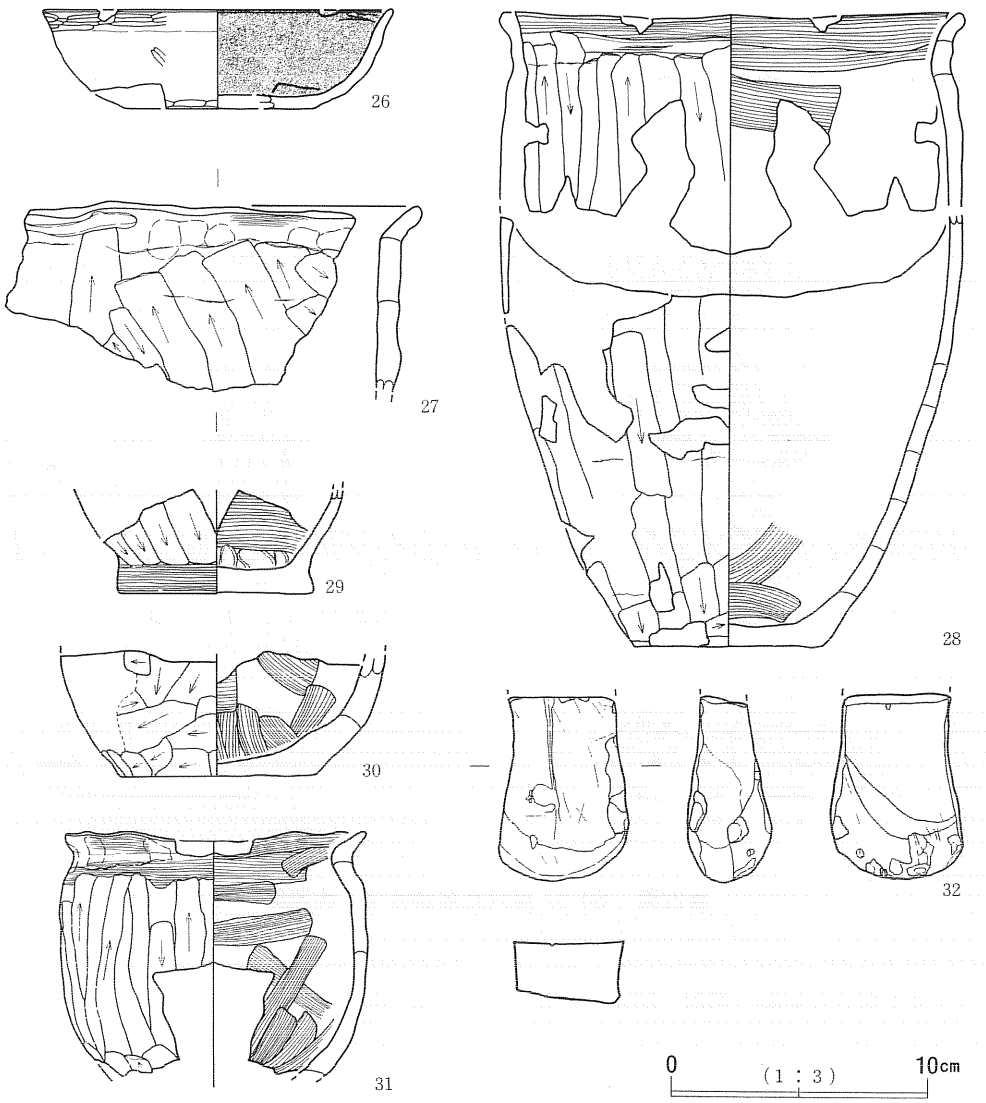
ＳＩ４２竪穴住居跡（第24～28図、図版８・28・32・33）

［検出位置］　MF55・56、MG55・56グリッド地山面で、中世の掘立柱建物跡柱穴を調査したところ、柱穴の掘り方が不明瞭であったことから、まわりを掘り下げたところ、本住居跡が検出された。ＳＫ０９，ＳＫ３５，ＳＮ１０と重複しており、それらより本住居跡が古い。

［平面形・規模］　北東壁348cm、南東壁397cm、南西壁417cm、北西壁396cmの規模をもつ。北東壁長が他の壁より短いため、歪んだ方形を呈している。面積は、15.0㎡。主軸方位は、Ｎ－121°－Ｅである。

［床面］　床面の標高は、79.98～80.18mで、カマド両脇が高く、西隅がやや低い。全体に凹凸が認められる。カマド燃焼部から北西壁際にかけて、貼床が施されている。

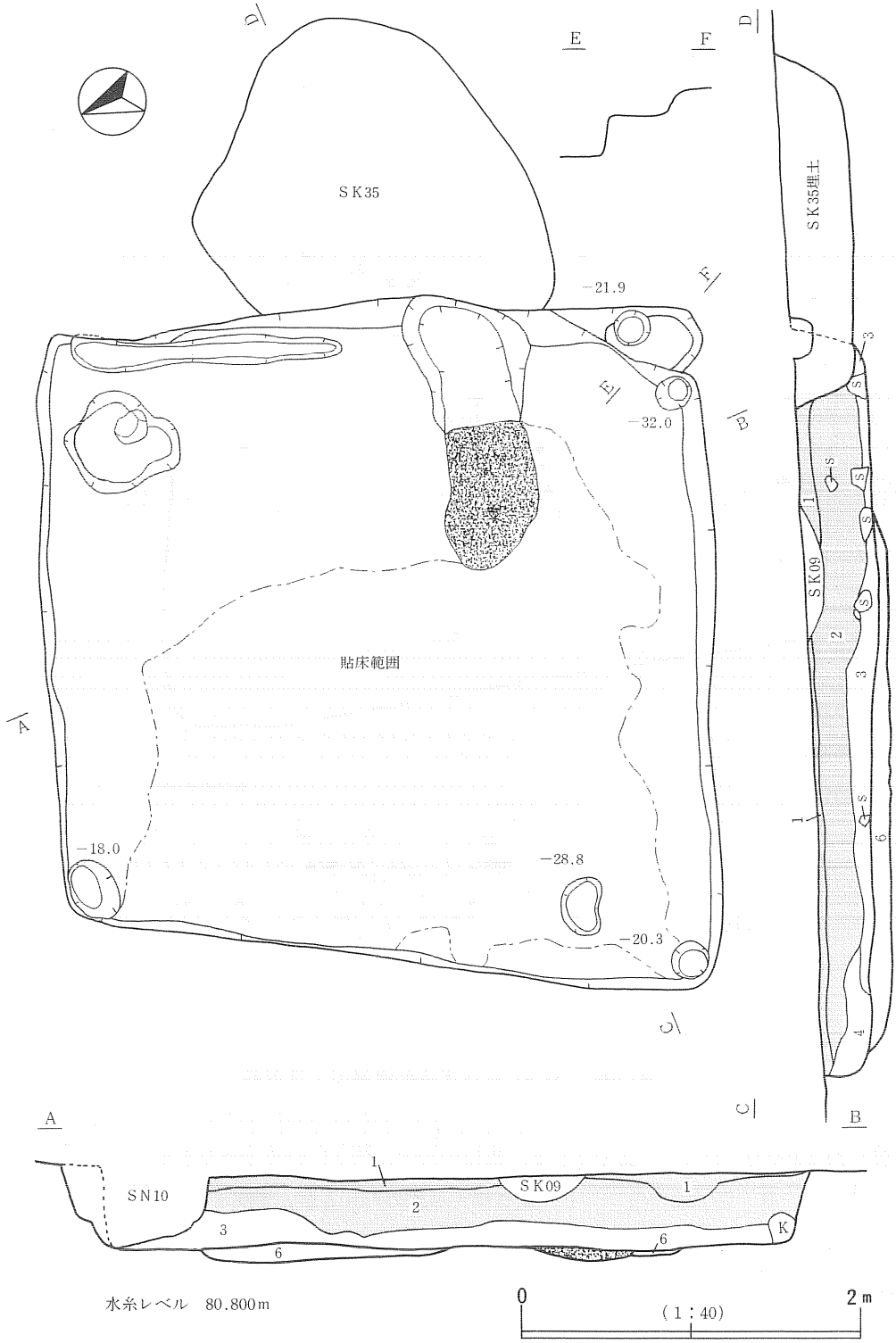
［壁・壁溝］　南隅の壁は、きれいなコーナーを描かない。これは、床面から約25cm上がって段をもつような掘り込みがあるためである。この段には、深さ21.9cmのピットが掘られている。壁高は、南西壁と北西壁側で32～36cm、南東壁と北東壁で39～55cmである。壁溝は、南東



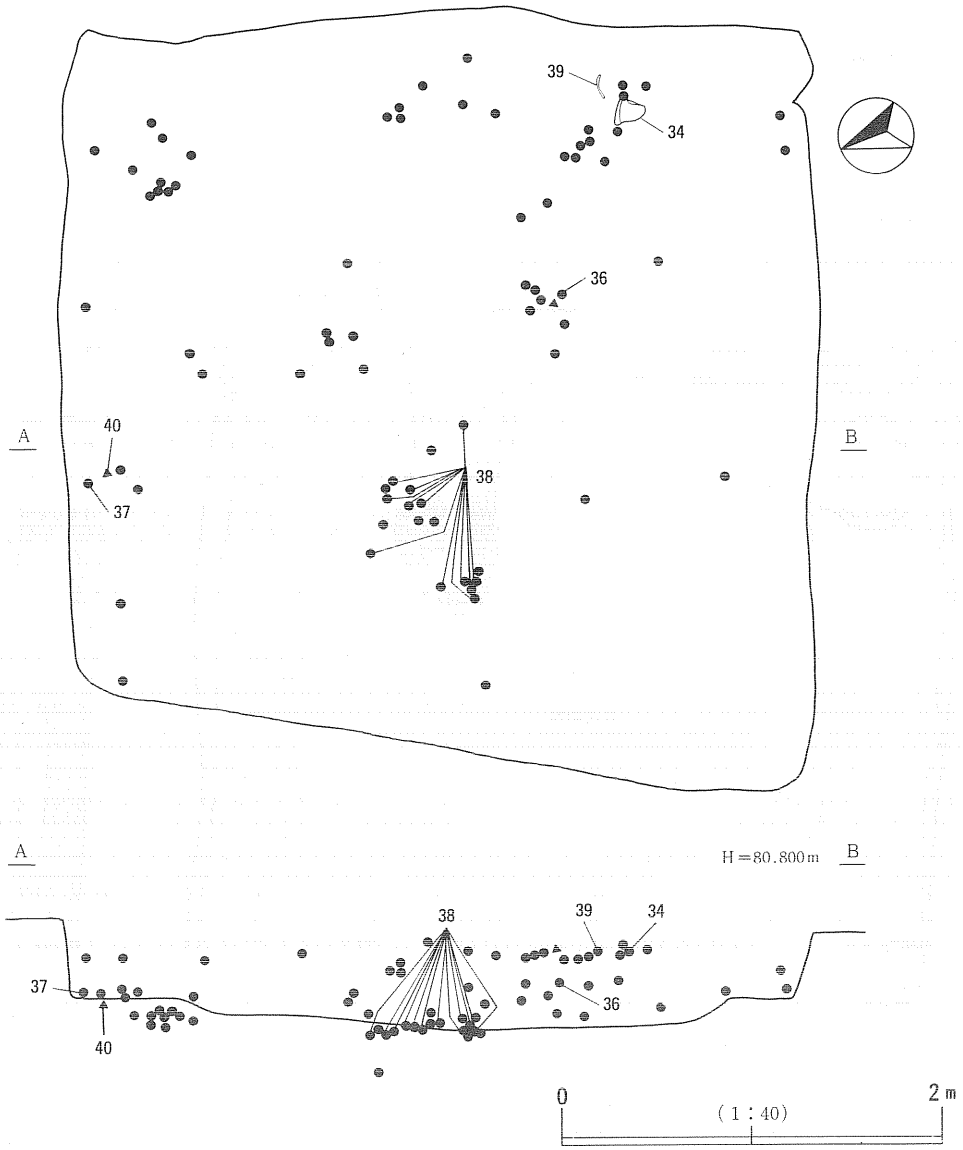
番号	出土地点	器種	成形	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土	焼成	法量cm 口径	法量cm 器高	法量cm 底径
26	SI 37	土師器 坏	非ロクロ	ケズリ→ミガキ　底面ケズリ	ミガキ　黒色処理	7.5YR 8/4 浅黄橙色	7.5YR 1.7/1 黒色	0.5mm～1mmの砂粒多量	良	13.6	3.9	(7.3)
27	SI37カマド	土師器 甕	非ロクロ	指オサエ・ナデ→ケズリ→ナデ・カキ目(一部)	ヘラナデ→横ナデ	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/6 橙色	2mm～3mmの砂粒少量	良	—	—	—
28	SI 37	土師器 甕	非ロクロ	ナデ→ケズリ→横ナデ(底面丁寧なナデ)	ヘラナデ→横ナデ	10YR 8/3 浅黄橙色	2.5Y 7/3 浅黄色	1mm～3mmの砂粒多量	良	(18.2)	(25.0)	7.3
29	SI 37	土師器 甕	非ロクロ	ケズリ→ナデ　底面ナデ	カキ目→ヘラナデ	10YR 5/1 褐灰色	2.5Y 8/2 灰白色	1mm～3mmの砂粒多量	良	—	—	7.7
30	SI37カマド	土師器 甕	非ロクロ	ケズリ　底面ケズリ	ヘラナデ	5YR 6/4 にぶい橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	2mm～5mmの砂粒多量	良	—	—	7.6
31	SI 37	土師器 甕（小型）	非ロクロ	指オサエ→ケズリ→ナデ(指)	ヘラナデ→横ナデ	5YR 7/4 にぶい橙色	7.5YR 7/3 にぶい橙色	1mm～3mmの砂粒少量	良	11.8	—	—

番号	出土位置	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	石質
32	SI 37	(7.3)	5.1	3.3	145.1	凝灰岩

第23図　SI 37 竪穴住居跡出土遺物



第24図　SI 42 竪穴住居跡実測図



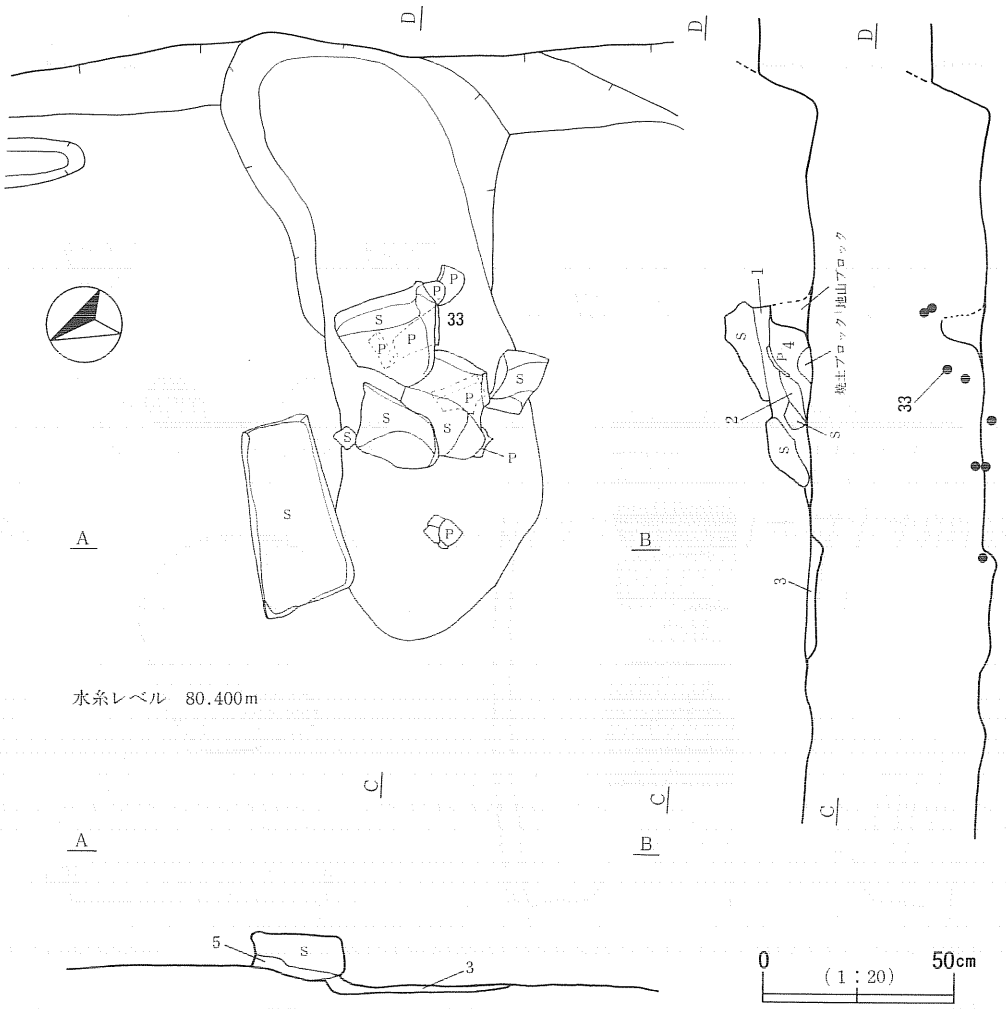
第25図　ＳＩ 42 竪穴住居跡遺物出土状況図

壁際に長さ160cmにわたって認められる。幅12～20cm、深さ1.4～9.5cmである。

［柱穴］　南、西、北の各コーナーに主柱穴が認められるが、東隅には検出されなかった。

［貯蔵穴］　貯蔵穴かどうか不明であるが、住居東隅に不整円形のプランを検出した。大きさが61×68cm、深さ18～30cmである。

［カマド］　南東壁中央からやや南に寄った位置に検出した。上部は、ＳＫ３５によって失われており、遺存状態は悪かった。燃焼部にあたる部分を一度掘り、褐色土を貼ってから芯材

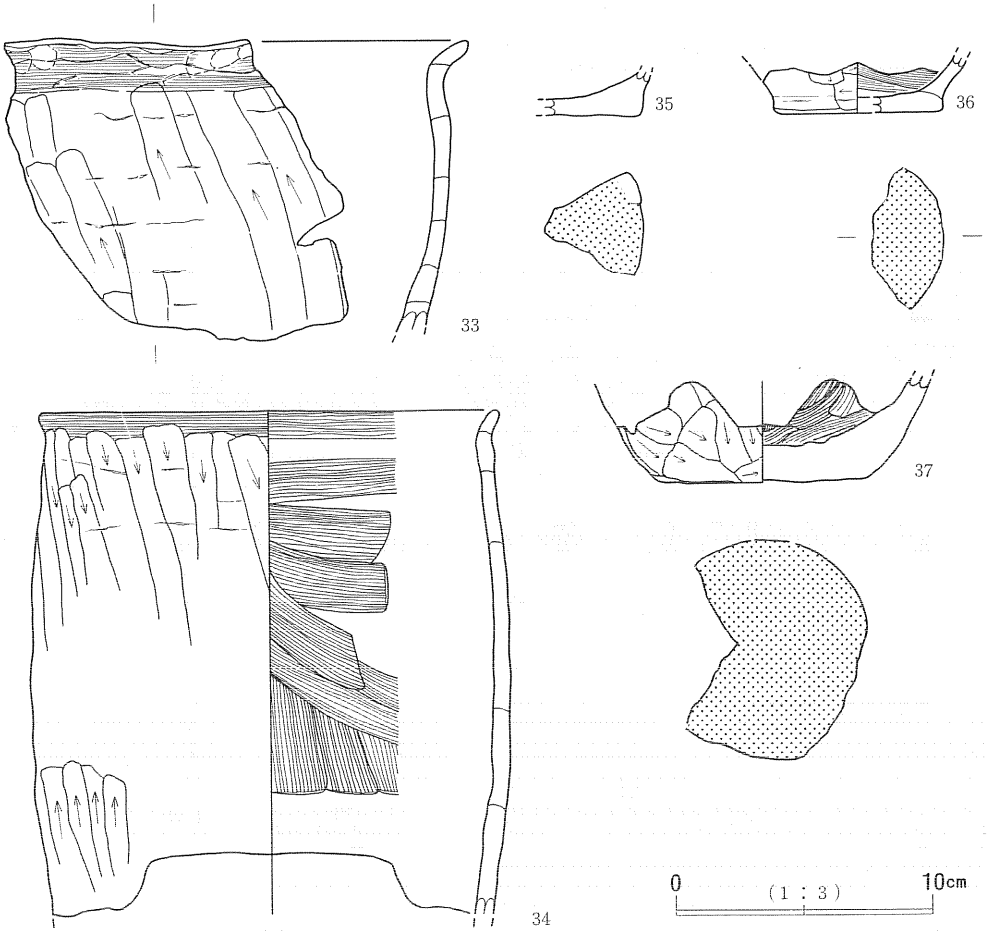


第26図　SI 42 竪穴住居跡カマド実測図

に石を使って構築している。縦断面の４層の右隣に突起状の盛り上がりがあるが、これは地山ブロックからなり、支脚として使われた可能性がある。主軸方位は、住居主軸方位とほぼ同じである。

［埋土］　５層に分層された。１・２層は、人為堆積である。

［出土遺物］　33は、カマド埋土中から出土した甕の口縁から体部にかけての資料である。口縁部に最大径を有し、輪積み痕を明瞭に残す。34は、住居跡埋土上位から出土したもので、口縁部の外反は弱く、体部に最大径を有する。外面に煤が付着している。35～37は、底部に砂粒を付着させたいわゆる「砂底」の土師器である。底部全面に砂粒が付着している。38は、本住居跡の貼床から出土した破片と本住居跡から西に約９ｍ離れたSKP222とした柱穴埋土中か

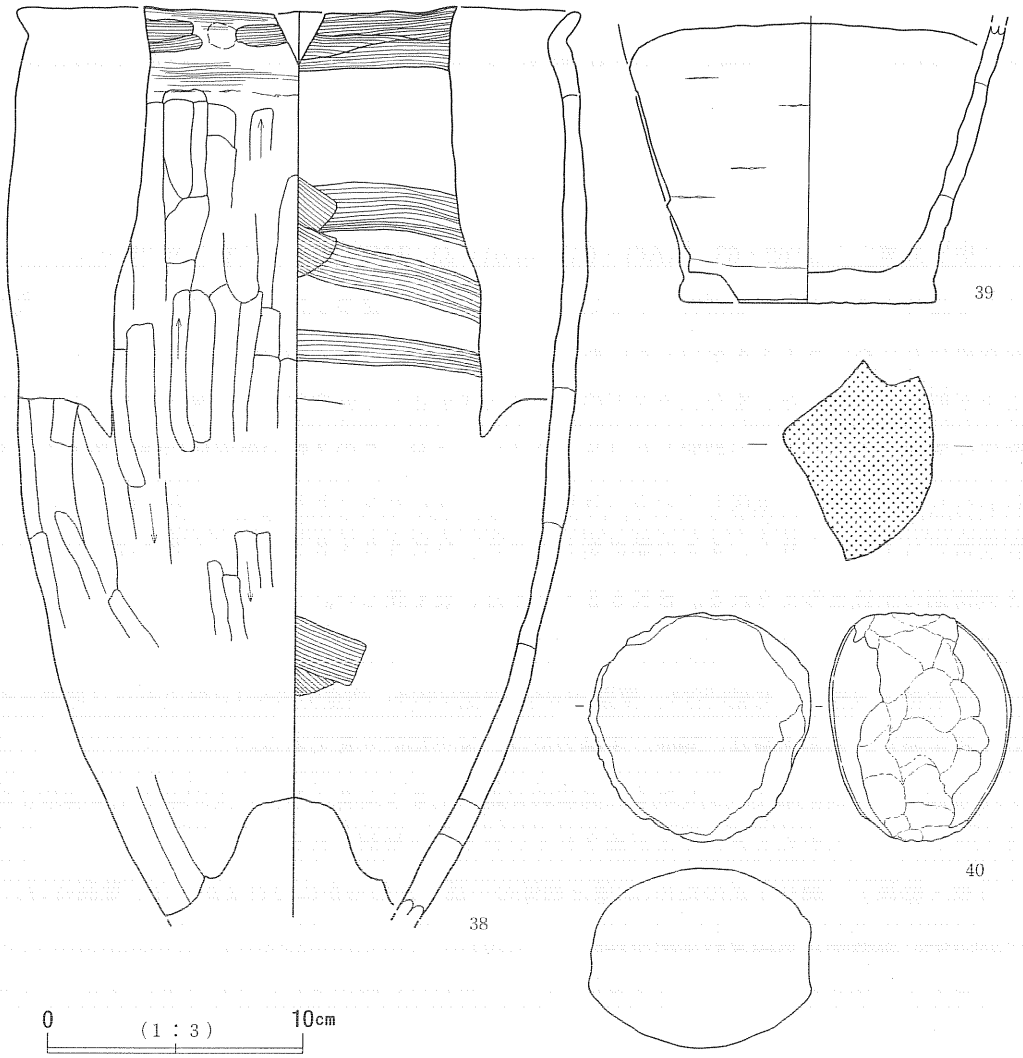


番号	出土地点	器種	成形	調整	外面/内面	色調	外面/内面	胎土	焼成	法量 cm 口径	器高	底径
33	SI42カマド	土師器 甕	非ロクロ	指オサエ→ケズリ→横ナデ		7.5YR 7/4 にぶい橙色		2㎜～3㎜大の	良	－	－	－
				ヘラナデ→横ナデ		7.5YR 7/4 にぶい橙色		砂粒多量				
34	SI 42	土師器 甕	非ロクロ	横ナデ→ケズリ		5YR 7/4 にぶい橙色		2㎜～3㎜大の	良	－	－	－
				ヘラナデ→横ナデ		7.5YR 5/3 にぶい褐色		砂粒少量				
35	SI 42	土師器 甕	非ロクロ	ケズリ		2.5Y 8/3 淡黄色		2㎜大の	良	－	－	－
				ヘラナデ		10YR 8/3 浅黄橙色		砂粒少量				
36	SI 42	土師器 甕	非ロクロ	ケズリ		5YR 6/4 にぶい橙色		1㎜～2㎜大の	良	－	－	(6.6)
				ヘラナデ(丁寧)		10YR 7/3 にぶい橙色		砂粒多量				
37	SI 42	土師器 甕	非ロクロ	ケズリ (丁寧)		5Y 5/1 灰色		2㎜～3㎜大の	良	－	－	8.1
				ヘラナデ→カキ目→ヘラナデ		N 5/0 灰色		砂粒少量				

第27図　SI 42 竪穴住居跡出土遺物(1)

ら出土した破片が接合したものである。比較的大型のわりに器厚は薄く、口縁部の屈曲は強い。39は、住居跡埋土上位で出土した「砂底」の土師器である。底部全面に砂粒が付着している。40は、拳大の円礫の側面を打ち欠いたものである。

［住居跡の時期］　平安時代後半と考えられる。



番号	出土地点	器種	成形	調整	外面	色調	外面	胎土	焼成	法量cm		
					内面		内面			口径	器高	底径
38	ＳＩ42（ＳＫＰ222）	土師器 甕	非ロクロ	指オサエ→ナデ→ケズリ		7.5Y　5／1 灰色		1㎜～2㎜大の砂粒多量	良	(21.0)	－	－
				ヘラナデ→横ナデ		2.5Y　6／2 灰黄色						
39	ＳＩ42	土師器 甕	非ロクロ	ケズリ	（磨滅が著しく図化不能）	5YR　6／4 にぶい橙色		2㎜～3㎜大の砂粒多量	良	－	－	(10.0)
				ヘラナデ		7.5YR　8／6 浅黄橙色						

番号	出土位置	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	石質
40	ＳＩ42	9	8.7	7.0	601.4	凝灰岩

第28図　SI 42 竪穴住居跡出土遺物（２）

住居跡土層注記

１．暗褐色（10YR3/3）軽石粒多量。粘性あり、しまり強。　２．褐色（10YR4/4）軽石粒、焼土粒微量、炭化物、礫微量。しまり強。　３．暗褐色（10YR3/4）軽石粒多量、炭化物少量、礫少量。粘性、しまりあり。　４．褐色（10YR4/6）軽石粒、焼土粒、炭化物少量。粘性あり、しまり強。　５．褐色(10YR4/6）炭化物、礫、焼土粒微量。しまり強。貼床土。

カマド土層注記

１．褐色（7.5YR4/3）軽石粒、焼土粒。粘性なし、しまりあり。　２．褐色（7.5YR4/3）地山ブロック多量、炭化物、焼土粒。粘性若干あり。　３．暗褐色（7.5YR3/4）炭化物、焼土粒、軽石粒。粘性あり。　４．暗褐色（7.5YR3/4）焼土粒少量。しまり強。　５．褐色（7.5YR4/3）炭化物、軽石粒少量。しまり強。

ＳＩ４４・９１・９２竪穴住居跡

［検出位置］　LT62・63、MA61～64、MB61～63、MC63グリッド地山面で検出した。プラン確認時には、埋土が黒褐色であるＳＩ４４が１軒しか認められなかった。ＳＩ４４の調査を進めたところ、ＳＩ４４をつくるにあたって、それよりも古い時期のＳＩ９１を埋めていることが明らかになった。また、カマドの火床面と推定される赤変部が更に検出され、もう１軒竪穴住居跡があったことが判明した（ＳＩ９２）。なお、この３軒の竪穴住居跡に加えて、更に合計６基の土坑が、重複している（ＳＫ８２、８３、８５～８８）。その前後関係は、竪穴住居跡がＳＩ９２、９１、４４の順に新しくなる。ＳＫ８３・８５・８７・８８は、ＳＩ９１と同時期の土坑と考えられる。ＳＫ８２・８６は、最も新しい。

ＳＩ４４（第29～35図、図版９・10・27～29・34～36）

［平面形・規模］　北壁650cm、東壁594cm、南壁608cm、西壁619cmの方形である（北壁を除いて推定値）。推定面積は、39㎡。主軸方位は、Ｎ－109°－Ｅである。

［床面］　凹凸が全体にみられる。北西側を掘りすぎてしまったが、その土からも遺物が出土しているところをみると、貼床が施されていたものと推測される。

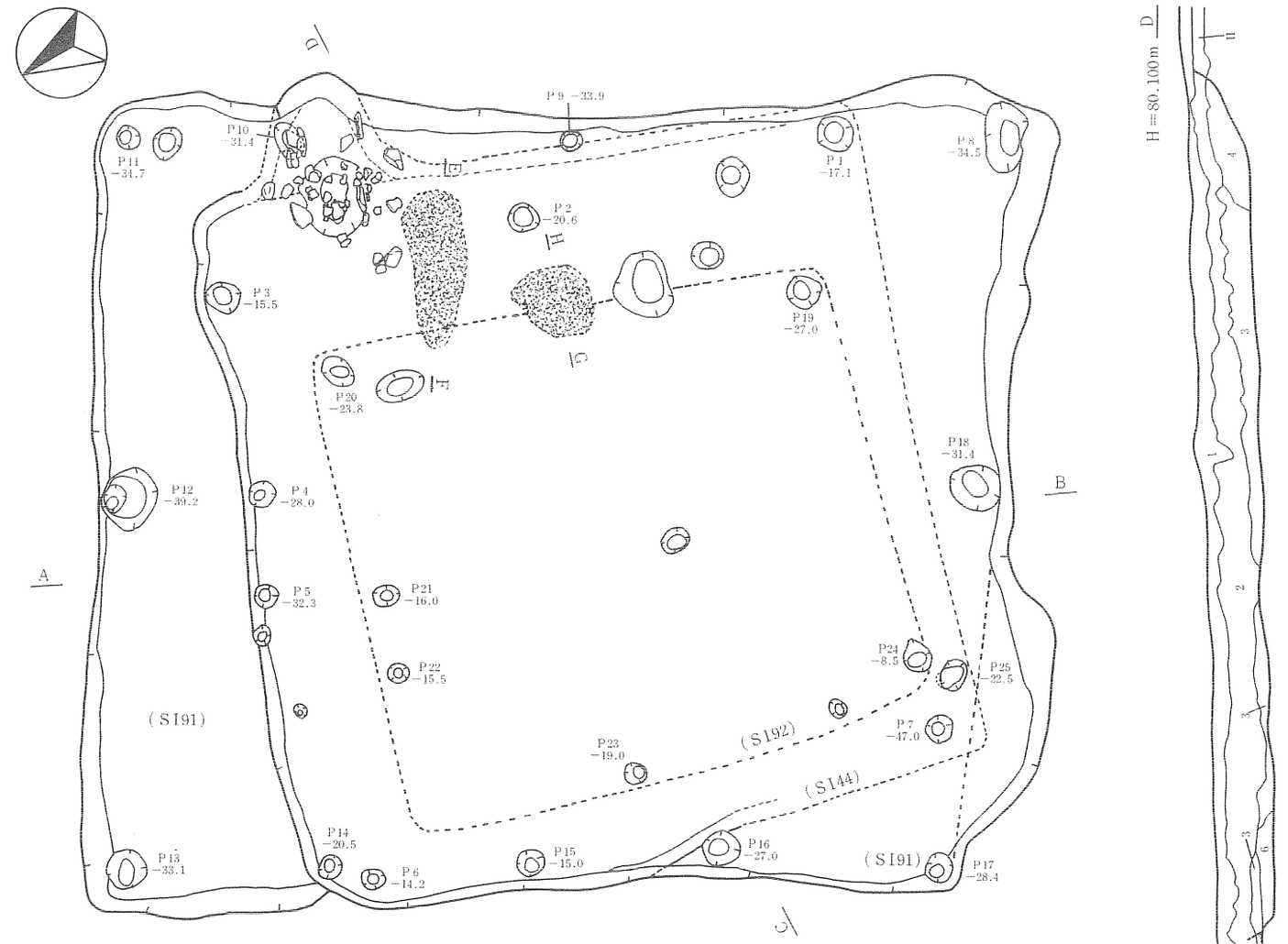
［壁・壁溝］　掘りすぎのため、北壁と西壁の一部しか明らかにできなかった。壁高は、11.4～18.7cm。壁溝は、検出されなかった。

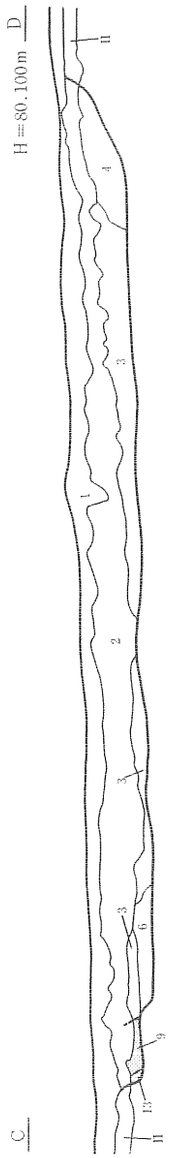
［柱穴］　住居各コーナー、北と東の壁際の中央付近に検出された（P_1～P_7、P_{25}）。北東隅の柱穴は、カマドとの位置関係から北壁に沿ってやや内側に位置している。

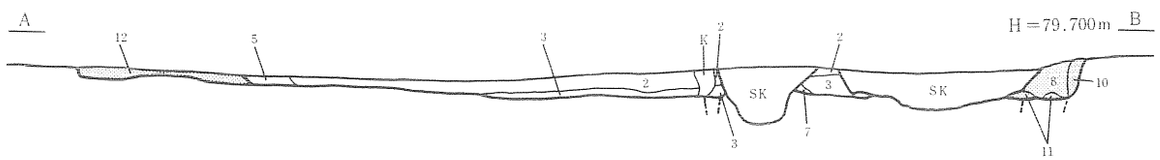
［カマド］　住居北東隅に近い東壁に付設されている。石を芯材にして、地山土を主体にした構築土を用いている。カマド中軸線から左に寄った火床上に支脚を検出した。地山土を柱状にした上に土師器甕底部を２つ重ねて、支脚としている。煙道部の傾斜は、緩やかである。主軸方位は、住居主軸方位とほぼ同じである。

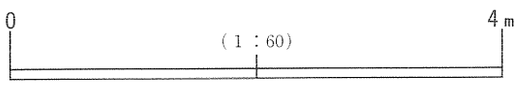
［埋土］　東西方向の土層断面（Ｃ－Ｄ）から、第Ⅱ層中から本住居跡が掘られていることがわかる。８～13の土層は、ＳＩ４４をつくるにあたり、ＳＩ９１を埋め戻した土である。

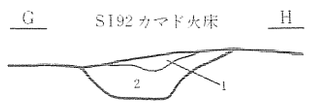
［出土遺物］　41は、埋土下位から出土した土師器坏で、底部からやや内湾しながら立ち上がり、口縁部は緩く外反する。底部の切り離しは、不明である。42は、本遺構貼床出土破片とＳＫ８７出土破片、MA64グリッド出土破片が接合したものである。43は、須恵器壺の体部破片である。本遺構貼床出土破片とＳＩ９１埋土出土破片が接合したものである。44は、本遺構



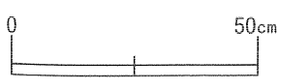




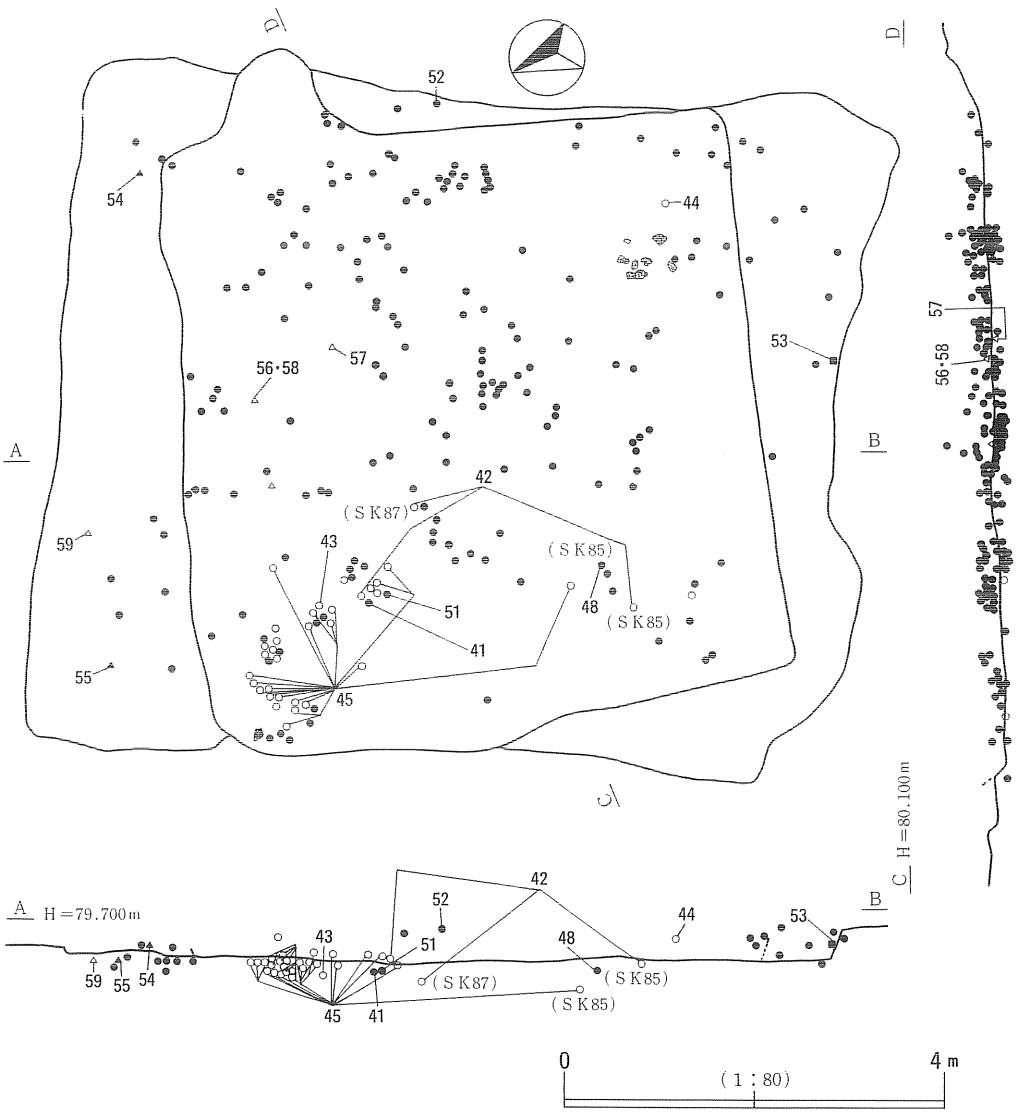




水糸レベル　79.300m



第29図　SI 44・91・92 竪穴住居跡実測図



第30図　SI 44・91・92 竪穴住居跡遺物出土状況図

埋土上位出土破片とMG61、MG65グリッド出土破片が接合したものである。MG61グリッドとは20数メートル、MG65グリッドとは25mぐらい離れている。45は、本遺構貼床出土破片25点とＳＫ８５出土破片さらにMA63，MF58グリッド出土破片が接合したものである。MF58グリッドとは、約28m離れている。46は、カマド内出土資料である。口縁部はやや外反し、体部は緩くふくらむものと推測される。47は、カマド燃焼部から出土したもので、体部上半から口縁部にかけて、器表面の剥落が認められる。歪みの大きい土器である。48～50は、甕底部資料である。48は、ＳＩ９１埋土出土とＳＫ８５出土の接合資料。49は、カマド右袖の芯材として

使用されたものと推測される。50は、カマド支脚として転用されたもので、底部中央に砂粒が付着している。51は、50のカマド支脚の下に補強として置かれたものである。56～58は、住居跡埋土中出土の釘である。

［住居跡の時期］　平安時代後半と考えられる。

住居跡土層注記

１．黒褐色（10YR3/2）表土。　２．黒褐色（10YR2/2）地山粒、地山ブロック、礫。　３．褐色（10YR4/4）炭化物、焼土粒、軽石粒。　４．褐色（10YR4/4）焼土粒、炭化物、軽石粒。　５．暗褐色（10YR3/4）焼土粒、炭化物、礫。　６．黄褐色（10YR5/6）礫。　７．黒褐色（10YR3/2）炭化物、焼土ブロック。

カマド土層注記

１．暗褐色（10YR3/4）地山粒、礫少量。粘性あり。　２．黒褐色（10YR2/3）地山粒、炭化物、焼土ブロック。粘性あり。　３．にぶい褐色（7.5YR5/4）地山粒、焼土ブロック、炭化物。粘性強。　４．明赤褐色（2.5YR5/8）焼土粒多量、焼土ブロック、礫。粘性あり。　５．褐色（10YR4/6）地山粒多量、地山ブロック、礫、炭化物少量。粘性なし。　６．暗褐色（10YR3/3）焼土ブロック、地山粒、炭化物。　７．褐色（10YR4/4）焼土粒、焼土ブロック、炭化物少量。粘性あり。　８．黒褐色（10YR3/2）地山粒、焼土粒、礫。粘性あり。　９．明赤褐色（2.5YR5/8）被熱赤変部。

ＳＩ９１竪穴住居跡（第29・30・32～35図、図版９・34～36）

［平面形・規模］　やや歪んだ長方形で、壁長は、北壁728cm、東壁854cm、南壁715cm、西壁785cmである。面積は、57.4㎡。主軸方位は、Ｎ－119°－Ｅである。

［床面］　ＳＩ４４の床面とほぼ同じ高さで、凹凸が認められる。北側は、黄褐色土により貼床が施されていたものと推測される。

［壁・壁溝］　床面からやや外反ぎみに立ち上がる。壁高は、北と西側が8.7～19.7cm、東と南側で21.2～34.8cmである。壁溝は、検出されなかった。

［柱穴］　住居の各隅に検出されたほか、東壁際に３本、それに対応するように西壁際に３本、北壁際に１本とそれに対応するように南壁際に１本、合計12本検出された（P_1、P_8～P_{18}）。P_1は、ＳＩ４４と共有であろう。

［カマド］　東壁中軸線から少し北に寄った壁際に、火床面のみを検出した。赤変している範囲は、東西方向140cm、南北方向54cmである。

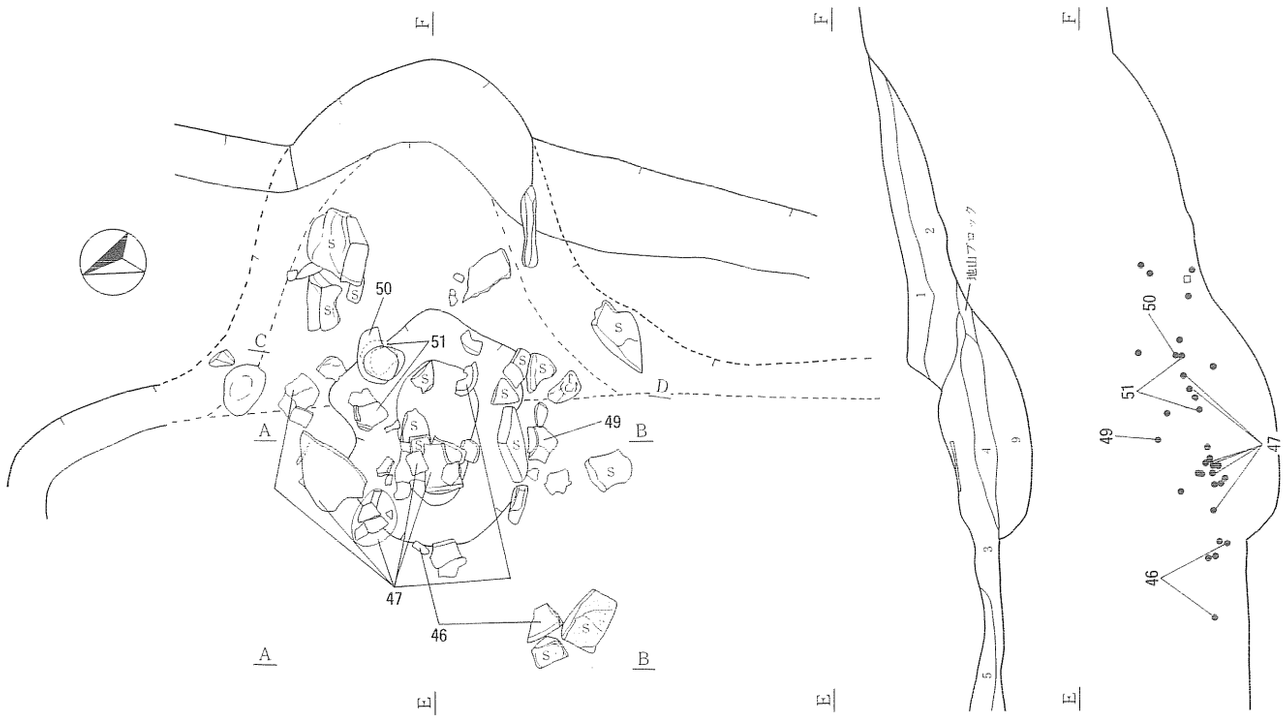
［埋土］　埋土のほとんどが褐色系の土で、プラン確認時には、地山の土と区別がつきにくかったが、乾燥の度合いが異なっていた。

［出土遺物］　52は、カマド付近から出土し、底部に全面にわたって砂粒が付着している。53は、住居跡埋土中位から出土したフイゴ羽口破片である。鉄滓等の付着は認められなかった。54、55は、埋土中出土の磨石である。59は、貼床中から出土した鍬または鋤の一部である。

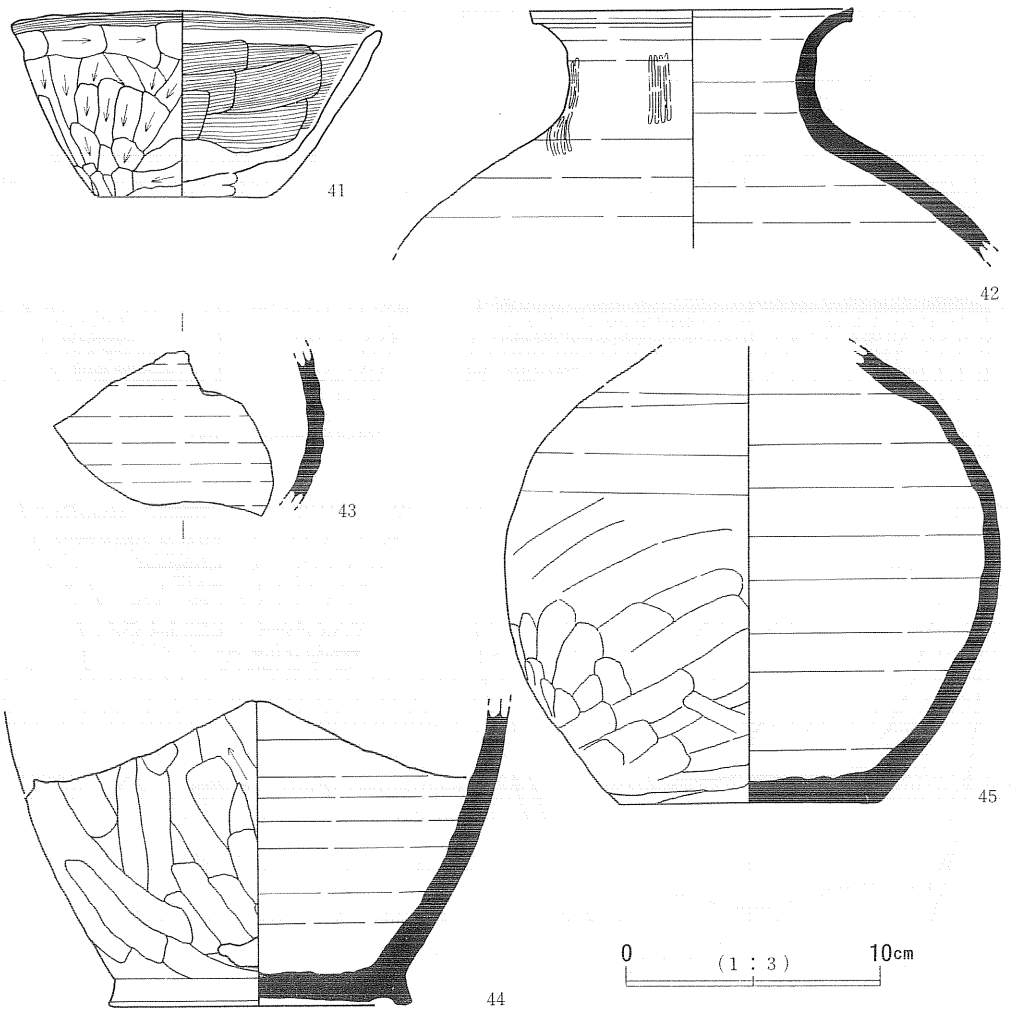
［住居跡の時期］　平安時代後半と考えられる。

住居跡土層注記

８．黒褐色（10YR2/2）地山粒、地山ブロック、礫。　９．暗褐色（10YR3/4）焼土粒、炭化物、礫。　10．にぶい黄褐色（10YR5/4）炭化物、礫。　11．黄褐色（10YR5/6）礫。　12．暗褐色（10YR3/4）地山粒多量、炭化物。粘性なし。　13．暗褐色（10YR4/4）小礫、炭化物。



第31図　SI 44 竪穴住居跡カマド実測図

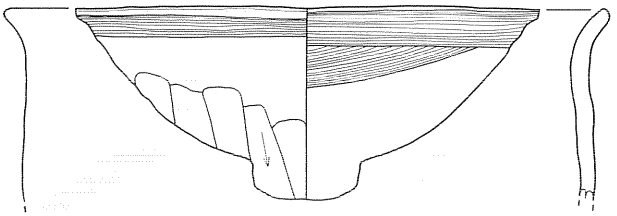


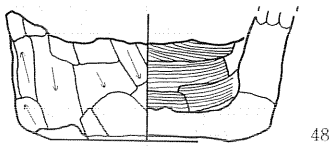
番号	出土地点	器種	成形	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土	焼成	法量 cm 口径	器高	底径
41	ＳＩ44	土師器 坏	非ロクロ	横位ナデ→ケズリ→口縁下ケズリ	横位ナデ、ヘラナデ	10ＹＲ 8／3 浅黄橙色	10ＹＲ 8／3 浅黄橙色	1㎜～2㎜大の砂粒少量	良	14.5	7.3	6.6
42	ＳＩ44.ＳＫ87	須恵器 壺	ロクロ	スリップ痕→ロクロ→ナデ	ロクロ→ナデ	7.5Ｙ 5／1 灰色	7.5Ｙ 5／1 灰色	緻密1㎜大の砂粒微量	良	(12.7)	－	－
43	ＳＩ44.ＳＩ91	須恵器 壺	ロクロ	ロクロ	ロクロ	2.5ＹＲ 4／1 赤灰色	2.5ＹＲ 2／1 赤黒色	緻密0.5㎜の砂粒少量	良	－	－	－
44	ＳＩ44.MG61.MG65	須恵器 壺（高台付）	ロクロ	ケズリ	ロクロ	7.5Ｙ 6／2 灰オリーブ色	10Ｙ 6／1 灰色	緻密0.5大㎜の砂粒微量	良	－	－	11.8
45	ＳＩ44.ＳＫ85	須恵器 壺	ロクロ	ロクロ→体部下半ケズリ、底面ナデ切り離し不明	ロクロ	10ＹＲ 3／2 黒褐色	10ＹＲ 3／1 黒褐色	緻密0.5㎜～1㎜の砂粒微量	良	－	－	10.2

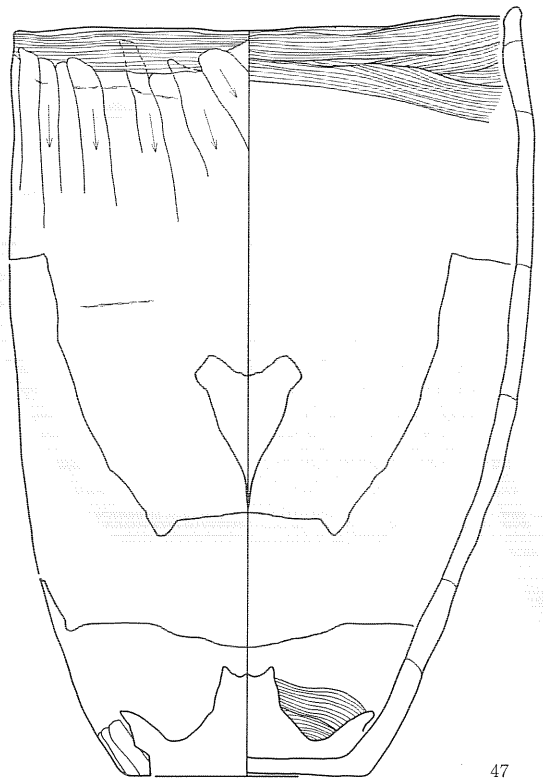
第32図　ＳＩ 44・91 竪穴住居跡出土遺物（１）

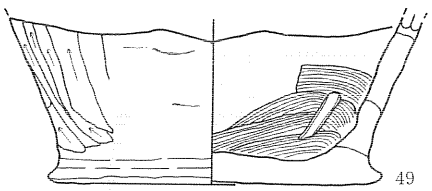
カマド土層注記

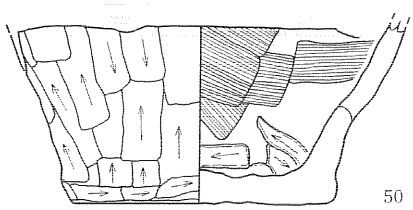
１．暗褐色（10YR3/4）地山粒、炭化物、焼土粒。粘性あり。　２．黒色（10YR2/1）炭化物層。　３．褐色（10YR4/4）地山粒、炭化物、焼土粒。　４．褐色（10YR4/6）焼土粒多量。粘性あり。　５．黄褐色（5YR5/8）焼土層。粘性なし。

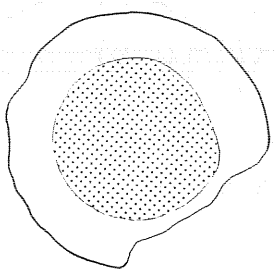


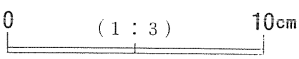






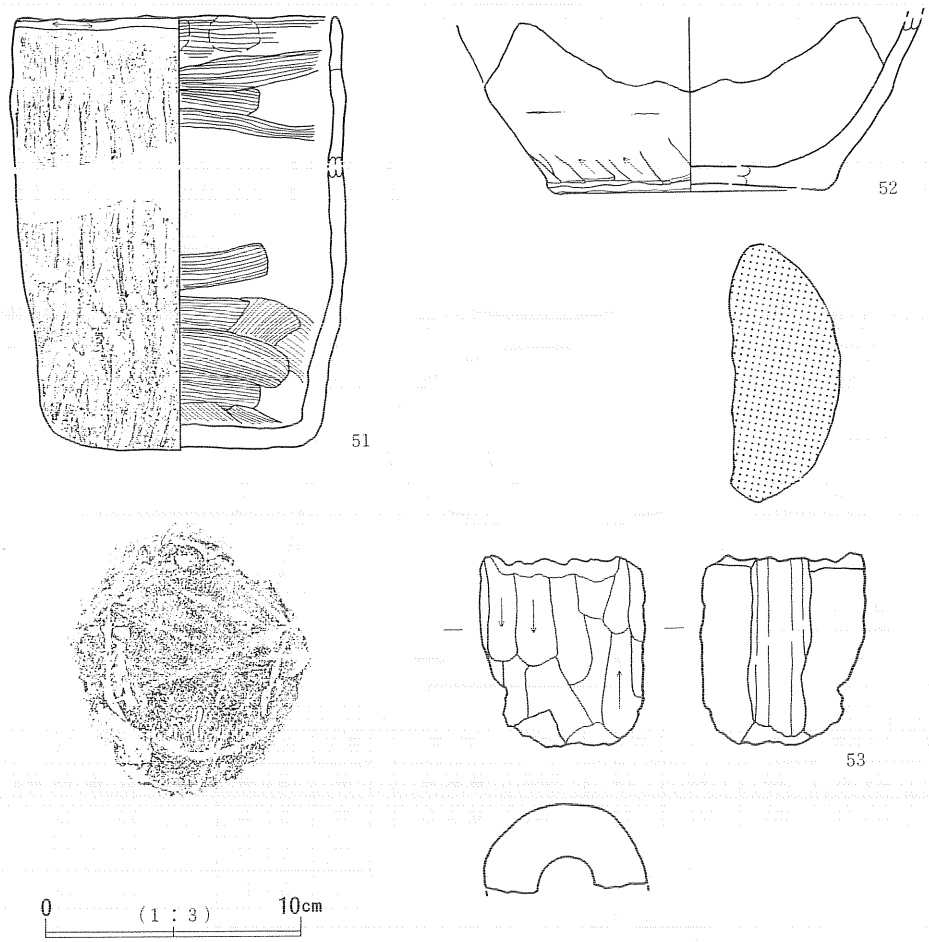






番号	出土地点	器種	成形	調整	外面/内面	色調	外面/内面	胎土	焼成	法量 cm 口径	器高	底径
46	ＳＩ44カマド	土師器甕	非ロクロ	ケズリ→横ナデ		7.5ＹＲ 8／4 浅黄橙色		1㎜～4㎜大の砂粒多量	良	(23.6)	－	－
				ヘラナデ→横ナデ		7.5ＹＲ 8／3 浅黄橙色						
47	ＳＩ44カマド MB633	土師器甕	非ロクロ	ケズリ→横ナデ→ケズリ		7.5ＹＲ 7／4 にぶい橙色		2㎜～3㎜大の砂粒多量	良	30.3	19.8	9.5
				ヘラナデ→横ナデ(ヘラナデ丁寧)		10ＹＲ 8／4 浅黄橙色						
48	ＳＩ91・SK85	土師器甕	非ロクロ	ケズリ		10ＹＲ 8／3 浅黄橙色		1㎜～5㎜大の砂粒多量	良	－	－	9.8
				粗いヘラナデ(カキ目に近似)		10ＹＲ 7／3 にぶい黄橙色						
49	ＳＩ44カマド	土師器甕	非ロクロ	ケズリ		7.5ＹＲ 7／3 にぶい橙色		1㎜～3㎜大の砂粒多量	良	－	－	(13.0)
				粗いヘラナデ(カキ目に近似)		10ＹＲ 7／3 にぶい橙色						
50	ＳＩ44カマド	土師器甕	非ロクロ	ケズリ　縦位→横位		7.5ＹＲ 7／4 にぶい橙色		2㎜～5㎜大の砂粒多量	良	－	－	10.2
				カキ目→ヘラナデ		7.5ＹＲ 7／4 にぶい橙色						

第33図　ＳＩ 44・91 竪穴住居跡出土遺物(２)



番号	出土地点	器種	成形	調整	外面/内面	色調	外面/内面	胎土	焼成	法量 cm 口径	器高	底径
51	ＳＩ44カマド	土師器 甕	非ロクロ	指オサエ→粗いケズリ→ヘラナデ（口縁・底部上端）		7.5ＹＲ 8／6 浅黄橙色		1㎜～3㎜大の砂粒少量	良	(12.4)	(17.0)	9.3
				カキ目→ヘラナデ		5ＹＲ 7／4 にぶい橙色						
52	ＳＩ91カマド	土師器 坏	非ロクロ	ケズリ		2.5ＹＲ 7／4 淡赤橙色		2㎜～4㎜大の砂粒多量	良	－	－	10.3
				ヘラナデ（磨滅著しい）		2.5ＹＲ 7／4 淡赤橙色						
53	ＳＩ 91	フイゴ羽口		ケズリ（丁寧）				1㎜ 大の砂粒少量	良	(6.4)	－	－
				ナデ								

第34図　SI 44・91 竪穴住居跡出土遺物（３）

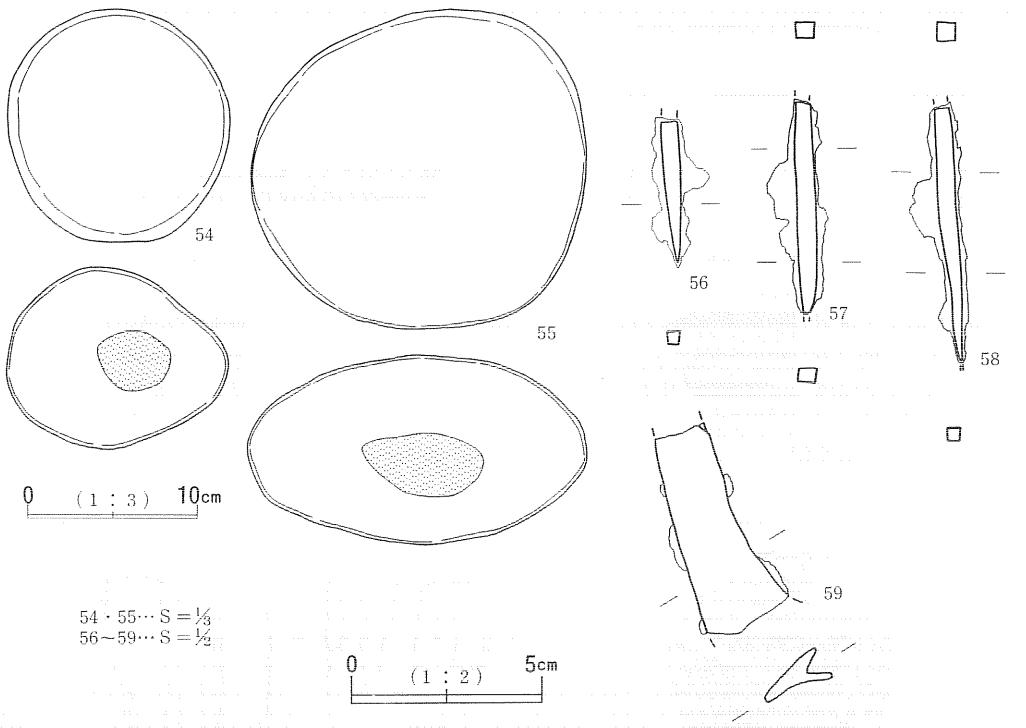
ＳＩ９２竪穴住居跡（第29・30図、図版９）

［平面形・規模］　カマド火床部と柱穴の位置から推定された規模は、東壁長461cm、南壁長408cm、西壁長482cm、北壁長448cmであり、平面形は方形を呈する。面積は20.1㎡、主軸方位はＮ－109°－Ｅとなり、ＳＩ４４と同じである。

［床面］　標高は、ＳＩ４４、９１と同一である。

［壁溝］　検出されなかった。

［柱穴］　北西隅を除く各コーナーと、北と西の壁際に検出された（P_{19}～P_{24}）。径は、



番号	出土位置	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	石　質
54	ＳＩ 91	8.8	9.3	7.4	700.0	凝 灰 岩
55	ＳＩ 91	13.4	12.8	7.7	1705.6	凝 灰 岩

番 号	出土位置	大きさ（cm）
56	ＳＩ 44	現存長 3.7　幅 0.4　厚さ 0.4
57	ＳＩ 44	〃 5.6　〃 0.5　〃 0.4
58	ＳＩ 44	〃 6.7　〃 0.4　〃 0.4
59	ＳＩ 91	〃 5.7　〃 2.4　〃 0.9

第35図　SI 44・91 竪穴住居跡出土遺物（４）

P_{19}：30cm、P_{20}：24×32cm、P_{24}：26～28cmである。

［カマド］　東壁際ほぼ中央に火床部を検出した。赤変範囲は、東西方向64cm、南北方向70cmである。

［埋土］　埋土は、観察できなかった。

［出土遺物］　出土しなかった。

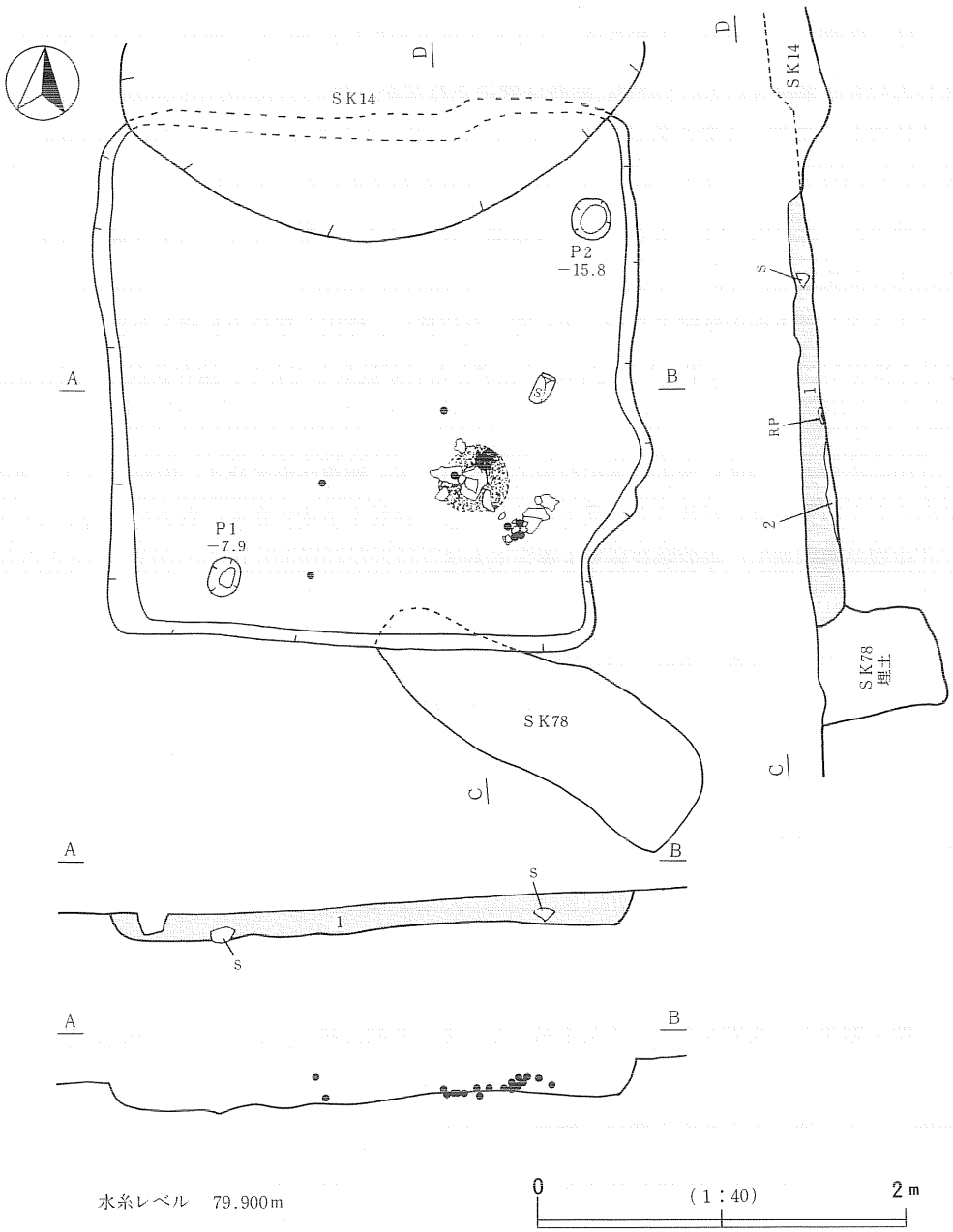
［住居跡の時期］　平安時代後半と考えられる。

カマド土層注記

1．明赤褐色（5YR5/8）焼土粒、焼土ブロック。粘性なし。　2．暗赤褐色（5YR3/6）焼土ブロック。粘性あり。

ＳＩ７１竪穴住居跡（第36図、図版11・29・37）

［検出位置］　MA56グリッド杭を中心とする位置で検出した。本遺構の存在は、当初わからなかったが、重複して検出されたＳＫ１４を調査中に存在が明らかになった。なお、本遺構よりも古いＳＫ７８とも重複関係にある。



第36図　SI 71 竪穴住居跡実測図

［平面形・規模］　ほぼ正方形のプランを有し、壁長は、東壁と北壁が296cmないし297cm、南壁274cm、西壁285cmである。主軸方位は、Ｎ－92°－Ｅで、ほぼ東である。面積は、8.3㎡である。

［床面］　礫を含む地山面を床としており、凹凸が著しい。東から西に向かって、緩く傾斜している。

［壁・壁溝］　北側壁の大部分は、ＳＫ１４により失われていた。壁は、やや内湾しながら立ち上がる。壁高は、8.3～15cm、壁溝は検出されなかった。

［柱穴］　南西と北東の各コーナー近くに１本ずつ検出された。P_1の径は17×22cm、P_2の径は22～23cmである。埋土には、礫と地山ブロックが多量に混じっていた。

［埋土］　人為的に埋め戻された暗褐色土（10YR3/4）１層である。礫が多量に含まれた土で、よくしまっている。

［カマド］　東壁中軸線より少し南に寄った位置に、煙出し部分のわずかな掘り込みと赤変部分を検出した。芯材に用いたと思われるわずかな石が散乱しており、遺存状況は非常に悪かった。

［出土遺物］　60は、埋土下位から出土したもので、輪積み痕を残す。61は、カマド火床面で出土した11点の破片が接合した甕である。胎土に砂粒を多量に含み、器表に露出している。

［住居跡の時期］　平安時代後半と考えられる。

ＳＩ７３竪穴住居跡（第37～41、図版12・27・37～39）

［検出位置］　東西ME～MG、南北66～67の範囲に位置する。中世の掘立柱建物跡柱穴の調査で、掘り方がはっきりしなかったため、周囲を掘り下げてみたところ、本遺構が検出された。なお、住居跡西側に本遺構より古いＳＫ８１が重複している。

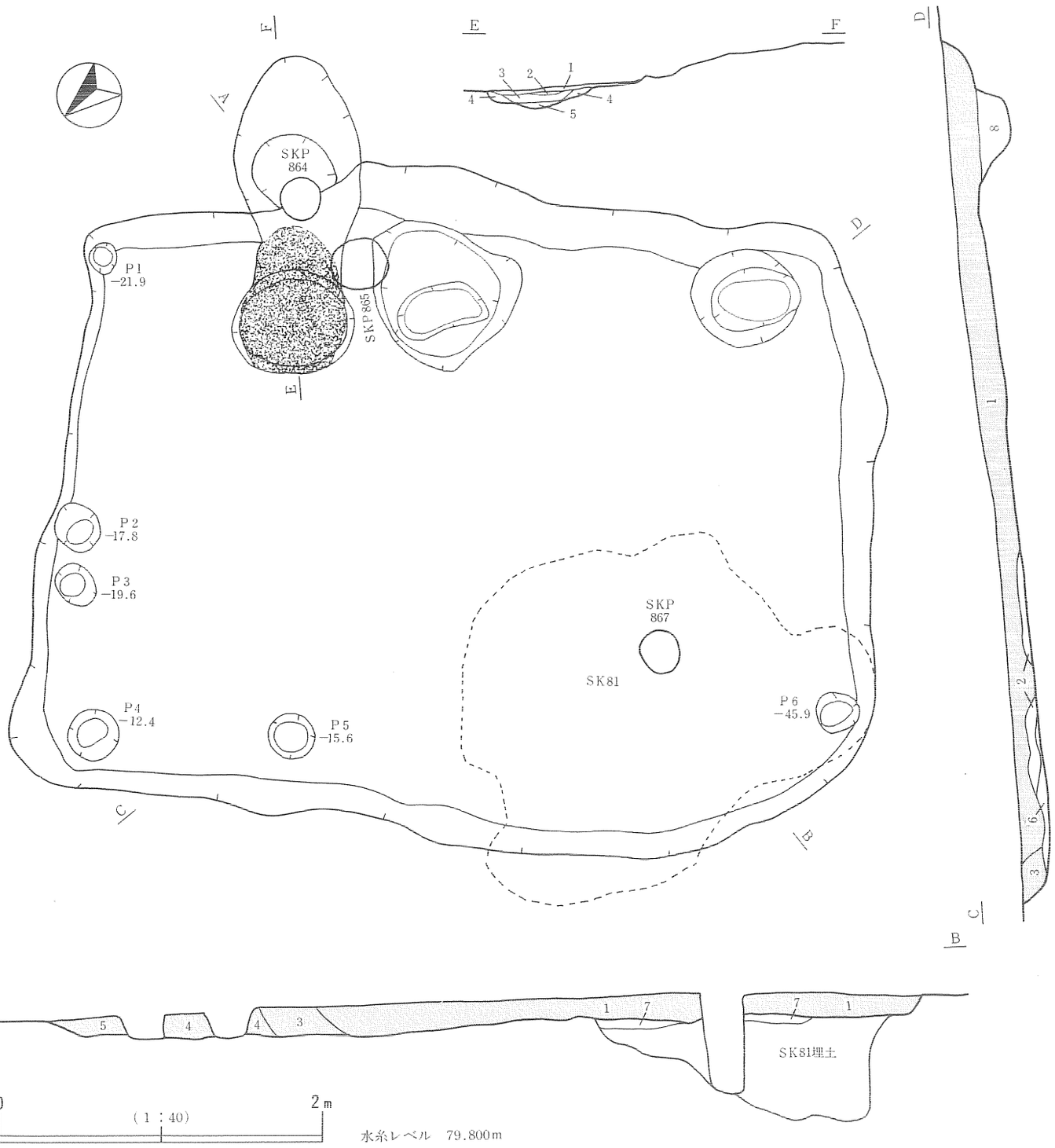
［平面形・規模］　ややいびつな長方形プランである。壁長は、南東壁488cm、南西壁408cm、北西壁528cm、北東壁353cmである。面積は、19.9㎡、主軸方位は、Ｎ－133°－Ｅである。

［床面］　標高は、南東側約79.5m、北西側約79.4m。地山を掘り込んで床としているが、堅い面は認められない。北西側は、ＳＫ８１があるため、その部分に貼床を施している。

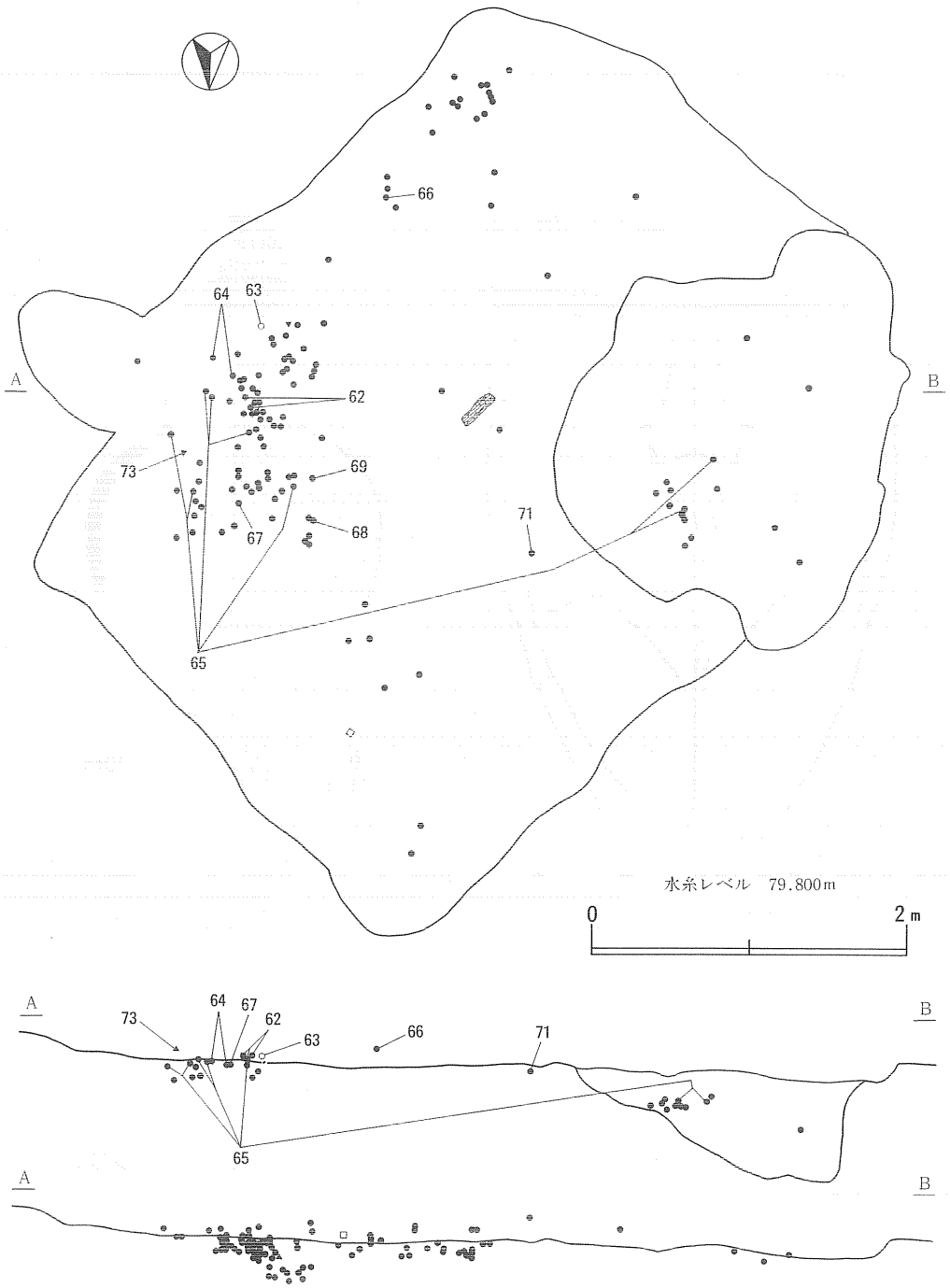
［壁・壁溝］　床面から緩く立ち上がっている。北側は沢に面しており、標高が徐々に低くなっていることから、壁高は北側がやや低い。北側11.9～16.3cm、南側13.8～20.6cmである。西側コーナー部とその左右の壁は、壁溝は、検出されなかった。

［柱穴］　北東と北西壁際に検出された。柱穴に付した数字は、床面からの深さである。径は、P_1：17×19cm、P_4：31cm、P_6：25×27cm、その他は30cm前後である。

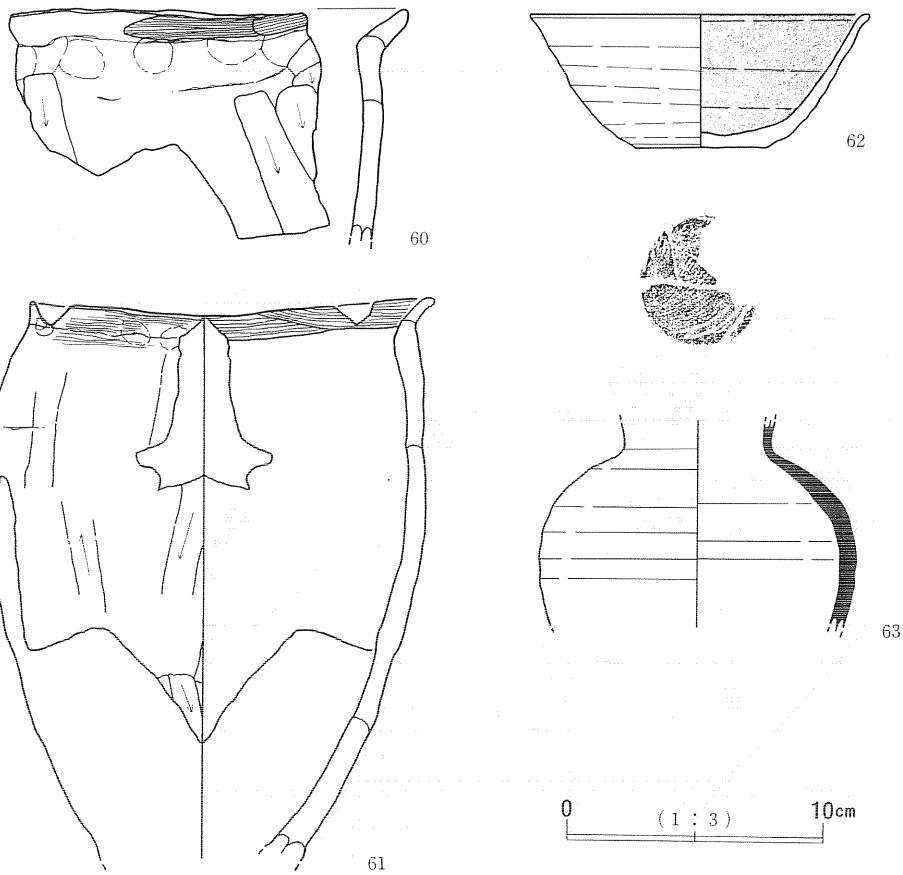
［貯蔵穴］　カマド右袖脇と南隅に検出した。前者は、東西96cm、南北80cm、深さ37cmであ



第37図　SI 73 竪穴住居跡実測図



第38図　SI 73 竪穴住居跡遺物出土状況図



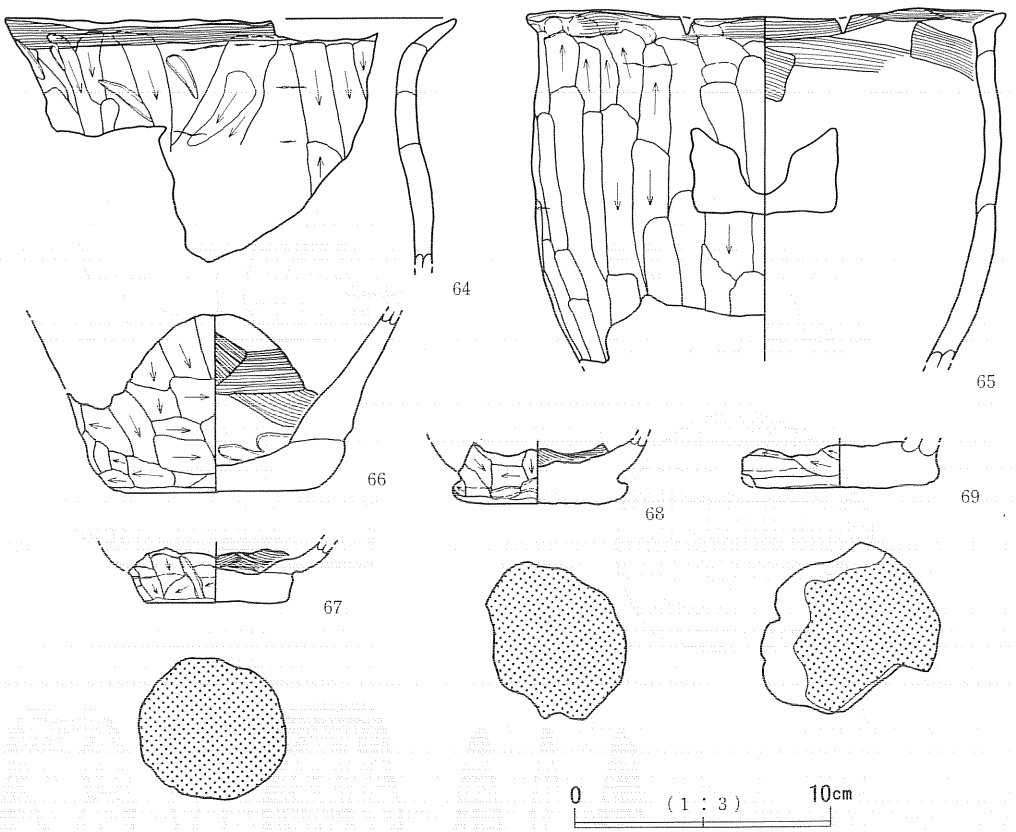
番号	出土地点	器種	成形	調整	外面/内面	色調	外面/内面	胎土	焼成	法量cm 口径	器高	底径
60	SI 71	土師器 甕	非ロクロ	指オサエ→ケズリ、横ナデ		2.5YR 6/3 にぶい黄色		1㎜～3㎜大の	良	－	－	－
				ヘラナデ→横ナデ		2.5YR 6/2 灰黄色		砂粒多量				
61	SI 71	土師器 甕	非ロクロ	指オサエ→ケズリ→ナデ(指)	磨滅著しい	5YR 7/4 にぶい橙色		2㎜～5㎜大の	良			
				横ナデ		5YR 7/4 にぶい橙色		砂粒多量				
62	SI 73	土師器 坏	ロクロ	ロクロ、底面切り離し、糸切り 磨滅著しく回転静止不明		2.5YR 5/6 明赤褐色		緻密0.5㎜大の	良	13.3	5.2	5.1
				黒色処理、調整痕不明瞭		5YR 1.7/1 黒色		砂粒微量				
63	SI 73	須恵器 壺	ロクロ	ロクロ		5Y 2/1 黒色		緻密0.5㎜大の	良	頸部径		最大幅
				ロクロ		5Y 6/1 灰色		砂粒微量		(5.4)		12.4

第39図　SI 71 竪穴住居跡出土遺物・SI 73 竪穴住居跡出土遺物（1）

る。底は、二段の掘り込みとなっている。後者は、楕円形プランで、長軸68cm、短軸60cm、深さ18cmである。

［埋土］　8層に分層された。1層と3～5層は、人為的に埋められたもの。7層は、貼床されたものである。8層は、貯蔵穴の埋土である。

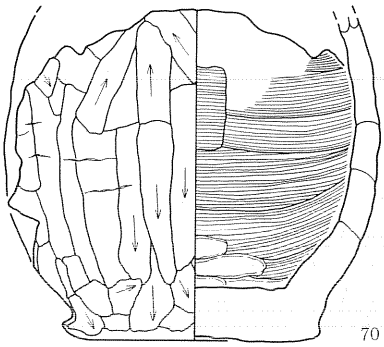
［カマド］　北東壁中軸線から東にやや寄った位置に付設されている。遺存状況は悪く、燃焼部の赤変部と煙道部分の掘り込みが検出されたのみであった。赤変部分は、カマドをつくるにあたって、一旦掘り込んだ後土を貼っている。



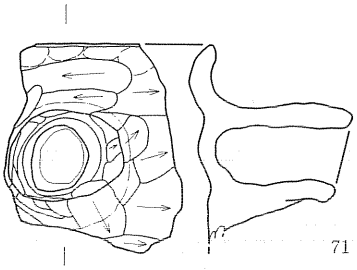
番号	出土地点	器種	成形	調整	外面	色調	外面	胎土	焼成	法量 cm		
					内面		内面			口径	器高	底径
64	ＳＩ 73	土師器甕	非ロクロ	ケズリ→横ナデ→カキ目(一部)		2.5YR 7/2 灰黄色		1㎜～3㎜大の	良	－	－	－
				ヘラナデ→横ナデ		2.5YR 7/2 灰黄色		砂粒多量				
65	SI73.SK81	土師器甕	非ロクロ	指オサエ→ケズリ→ナデ(指)		5YR 7/4 にぶい橙色		2㎜～5㎜大の	良	(18.6)	－	－
				ヘラナデ→ナデ		5YR 7/6 橙色		砂粒多量				
66	ＳＩ 73	土師器甕	非ロクロ	ケズリ、底面ナデ		2.5YR 7/3 浅黄色		1㎜～5㎜大の	良	－	－	8.0
				カキ目→ヘラナデ		2.5YR 7/2 灰黄色		砂粒多量				
67	ＳＩ 73	土師器甕	非ロクロ	ケズリ→カキ目		5YR 7/4 にぶい橙色		1㎜～5㎜大の	良	－	－	5.6
				ヘラナデ		5YR 7/6 橙色		砂粒少量				
68	ＳＩ 73	土師器甕	非ロクロ	ケズリ→カキ目		2.5Y 7/4 浅黄色		1㎜～2㎜大の	良	－	－	(6.9)
				ヘラナデ		10Y 5/1 灰色		砂粒少量				
69	ＳＩ 73	土師器甕	非ロクロ	ケズリ		5Y 7/3 浅黄色		2㎜～3㎜大の	良	－	－	(7.0)
				ヘラナデ		5Y 7/3 浅黄色		砂粒少量				

第40図　SI 73 竪穴住居跡出土遺物（２）

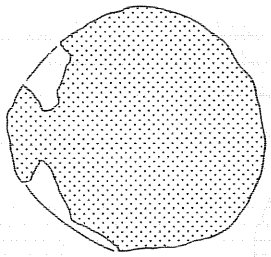
［出土遺物］　62は、カマド燃焼部付近の床面から出土した土師器坏である。底部の切り離しは、糸切りであるが、回転か静止か不明である。内面は、黒色処理がなされている。63は、床面から少し浮いた状況で出土した須恵器壺の破片である。64は、カマド火床面から出土した。輪積み痕を残す。65は、カマド火床中出土破片とＳＫ８１埋土中出土破片が接合した土師器甕である。このことは、カマド火床部に貼った土とＳＫ８１を埋めた土との関係を推測させるものである。66は、埋土上位から出土した土師器甕である。67～70は、いずれも底部全面に砂粒



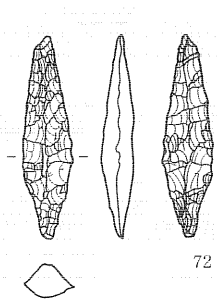
70



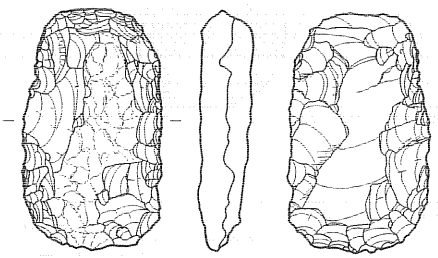
71



0　（1：3）　10cm



72



73

72・73のみ　S＝½

0　（1：2）　5cm

番号	出土地点	器種	成形	調整	外面 内面	色調	外面 内面	胎土	焼成	法量 cm 口径	器高	底径
70	SI 73	土師器甕	非ロクロ	ケズリ		2.5YR 8/3 淡黄色		1㎜～5㎜大の砂粒多量	良	−	−	10.0
				ヘラナデ→ナデに近いカキ目		2.5YR 7/3 淡黄色						
71	SI 73	土師器 把手付土器	非ロクロ	指オサエ　ケズリ		10YR 7/3 にぶい黄橙色		2㎜～4㎜大の砂粒多量	良			
				指オサエ　ケズリ		10YR 6/3 にぶい黄橙色						

番号	出土位置	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	石質
72	SI 73	(5.4)	1.3	0.9	2.8	頁岩
73	SI 73	6.5	3.7	1.4	40.1	頁岩

第41図　SI 73 竪穴住居跡出土遺物（3）

が付着している。70は、床面とカマド右脇の貯蔵穴出土破片が接合した甕である。71は、床面から少し浮いた状況で出土した把手付土器の把手部分である。把手は中空で、断面は円形である。72は、柳葉形の石鏃で、埋土中の出土である。73は、篦状石器で、床面近くから出土した。両面に加工を施し、両側縁と端部に細かい調整を加えている。

［住居跡の時期］　平安時代後半と考えられる。

住居跡土層注記
１．暗褐色（10YR3/3）炭化物少量、礫多量。しまり強。　２．黒褐色（10YR2/3）炭化物多量。粘性あり。　３．暗褐色（10YR3/4）礫多量。　４．暗褐色（7.5YR3/4）炭化物、焼土粒、地山粒多量。しまりあり。　５．褐色（10YR4/4）炭化物、焼土粒多量、礫少量。しまり強。　６．暗褐色（10YR3/4）礫少量。粘性、しまりあり。　７．褐色（10YR4/4）地山粒、礫多量。しまり強。　８．暗褐色（10YR3/3）炭化物、地山粒、礫。粘性、しまりあり。
カマド土層注記
１．褐色（7.5YR4/6）焼土粒、焼土ブロック、炭化物。粘性なし、しまりあり。２．明褐色（7.5YR5/8）赤変著しい。しまり強。３．赤褐色（5YR4/6）礫。しまり強。４．褐色（7.5YR4/4）焼土粒、炭化物。しまり強。５．赤変部分。

（２）土坑

ＳＫ１４土坑（第43図）

［検出位置］　MA56、MB56グリッドで検出した。当初、中世の掘立柱建物跡柱穴を調査していて、掘り方がはっきり出なかったため、柱穴を調査後、周囲を掘り下げたところ確認された。本遺構より古いＳＩ７１と重複している。

［平面形・断面形］　東西方向に長軸をもつ楕円形プラン。断面形は、逆台形である。

［規模］　長軸287cm、短軸206cm、深さ9.9～17.7cmである。

［埋土］　人為的に埋め戻された暗褐色土で、礫と焼土が混入していた。土層断面図は、掘りすぎのため作成できなかった。

［出土遺物］　出土しなかった。

ＳＫ１６土坑（第42図）

［検出位置］　MB55グリッド地山面で検出した。

［平面形・断面形］　円形プランを有し、断面形は逆台形である。

［規模］　東西方向110cm、南北方向94cm、深さ15.4cmである。

［埋土］　黒色土（10YR2/1）１層である。地山粒、地山ブロック、軽石粒を混入し、粘性がなく、しまり強である。

［出土遺物］　土師器甕胴部破片１点が出土した。

ＳＫ２３土坑（第42・47図、図版39）

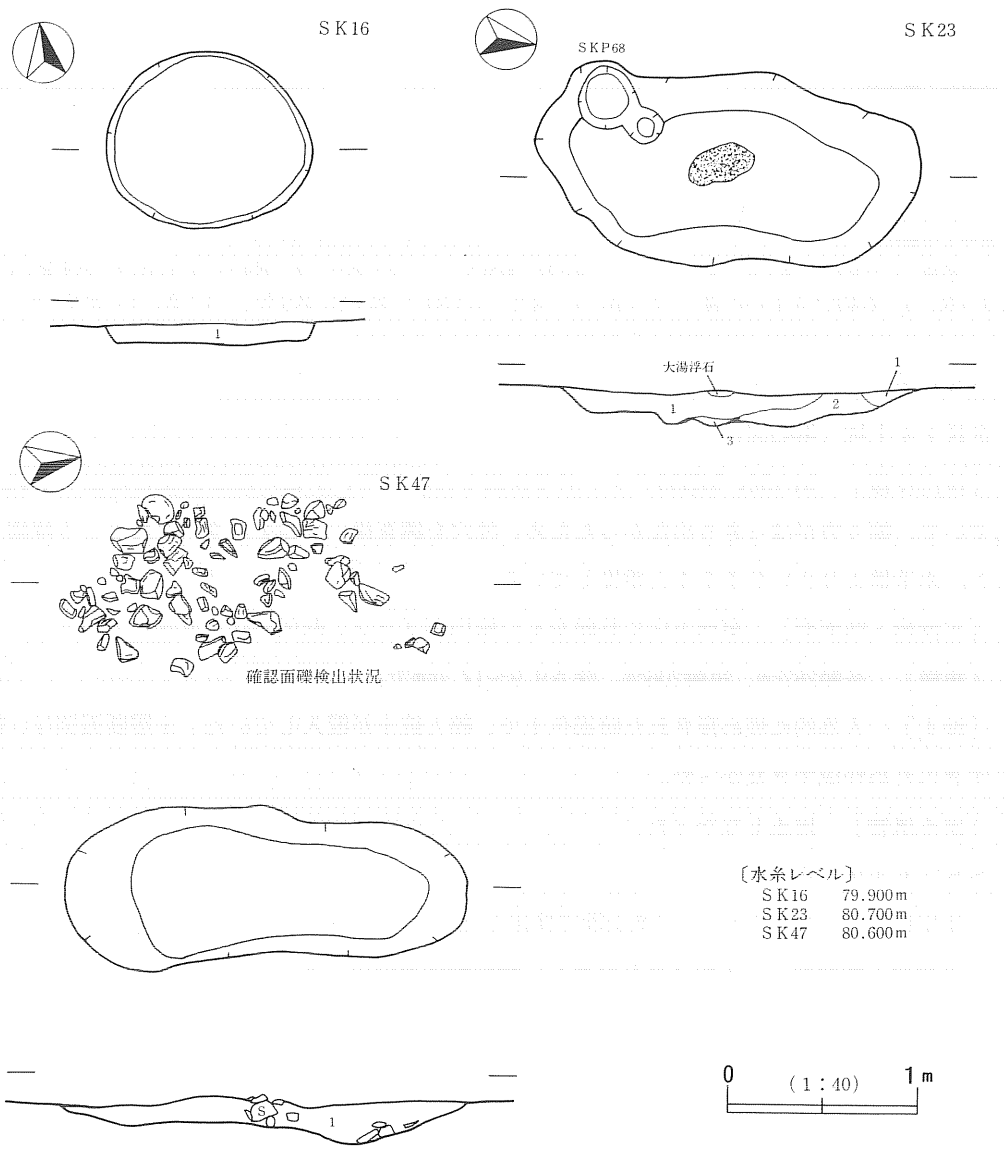
［検出位置］　MG52・53グリッド地山面で検出した。掘立柱建物跡柱穴と重複している

［平面形・断面形］　長楕円形に近いプランで、逆台形の断面形である。

［規模］　南北方向の長軸205cm、短軸102cm、深さ22.1cmである。

［埋土］　確認面で大湯浮石が認められた。

［出土遺物］　74は、埋土下位から出土した甕の口縁部である。図化できなかったが、この他に土師器甕口縁部破片１点、胴部破片15点が出土している。



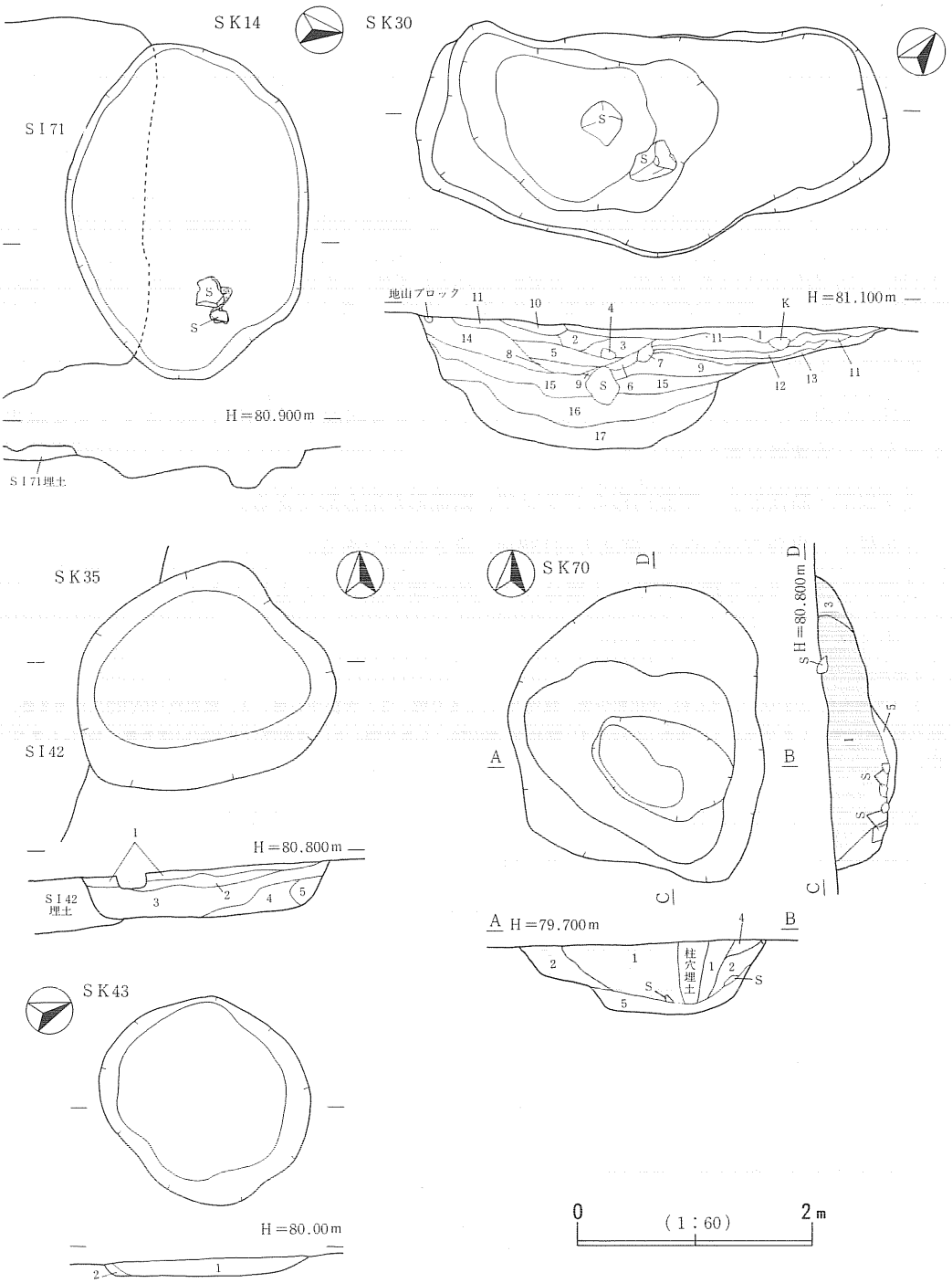
第42図　SK 16・23・47 土坑実測図

土層注記

1．暗褐色（10YR3/3）焼土粒、炭化物。しまりなし。　2．褐色（10YR4/6）しまりあり。　3．褐色（7.5YR4/6）焼土。

ＳＫ３０土坑（第43図、図版13）

［検出位置］　MH55・56、MI55・56グリッド地山面で検出した。



第43図　SK 14・30・35・43・70 土坑実測図

［平面形・断面形］　歪んだ方形を呈し、逆台形を２つ重ねた断面形である。

［規模］　北東－南西方向が398cm、北西－南西方向が188cmの規模で掘り込んだ後、さらに

段をもって深く掘り込んでいる。深く掘られている部分の規模は、254×168cm、深さ112cmである。

［埋土］　大湯浮石が層をなして堆積していた。また、埋土中位で大きな石が認められた。

［出土遺物］　図化できなかったが、土師器甕口縁部破片２点と胴部破片４点が出土した。

土層注記

１．黒褐色（10YR2/2）地山粒、軽石微量。　２．黒褐色（10YR2/3）地山粒。　３．黒色（10YR2/1）地山粒、炭化物微量。　４．暗褐色（10YR3/3）軽石粒。しまりあり。　５．暗褐色（10YR3/3）しまりなし。　６．暗褐色（10YR3/4）しまりあり。　７．暗褐色（10YR3/3）軽石粒。しまりあり。　８．暗褐色（10YR3/4）軽石多量。しまりなし。　９．黒褐色（10YR2/3）　10．黒褐色（10YR3/2）軽石粒。　11．褐色（10YR4/4）浮石層。　12．にぶい黄褐色（10YR5/4）浮石層。　13．褐色（10YR4/6）浮石層。　14．暗褐色（10YR3/4）粘性、しまりあり。　15．暗褐色（10YR3/3）地山粒多量、炭化物。　16．褐色（10YR4/4）礫多量。　17．褐色（10YR4/6）礫。

ＳＫ３５土坑（第43図）

［検出位置］　MG55、MH55グリッドで、ＳＩ４２を調査中に検出した。ＳＩ４２と重複しており、本遺構が新しい。

［平面形・断面形］　不整円形のプランで、断面形が逆台形である。

［規模］　東西方向220cm、南北方向188cm、深さ40cmである。

［埋土］　５層に分層された。１層は、人為的に埋め戻されたものである。

［出土遺物］　出土しなかった。

土層注記

１．灰黄褐色(10YR4/2) 軽石粒、炭化物少量。粘性なし、しまり強。２．大湯浮石層。３．暗褐色(10YR3/4) 礫多量、軽石粒、炭化物。しまり強。４．褐色(10YR4/4) 軽石粒、地山粒。しまり強。５．黄褐色(10YR5/6)礫多量。粘性、しまり強。

ＳＫ４３土坑（第43図）

［検出位置］　MH58グリッド地山面で検出した。

［平面形・断面形］　楕円形プランを有し、断面形は逆台形である。

［規模］　長軸181cm、短軸161cm、深さ19.4cmである。

［埋土］　１．黒色（10YR1.7/1）地山粒、地山ブロック、軽石粒。２．黒褐色（10YR2/3）地山粒、軽石粒。若干粘性あり。

［出土遺物］　図化できなかったが、縄文土器片３点、土師器甕口縁部破片２点、胴部破片７点が出土した。

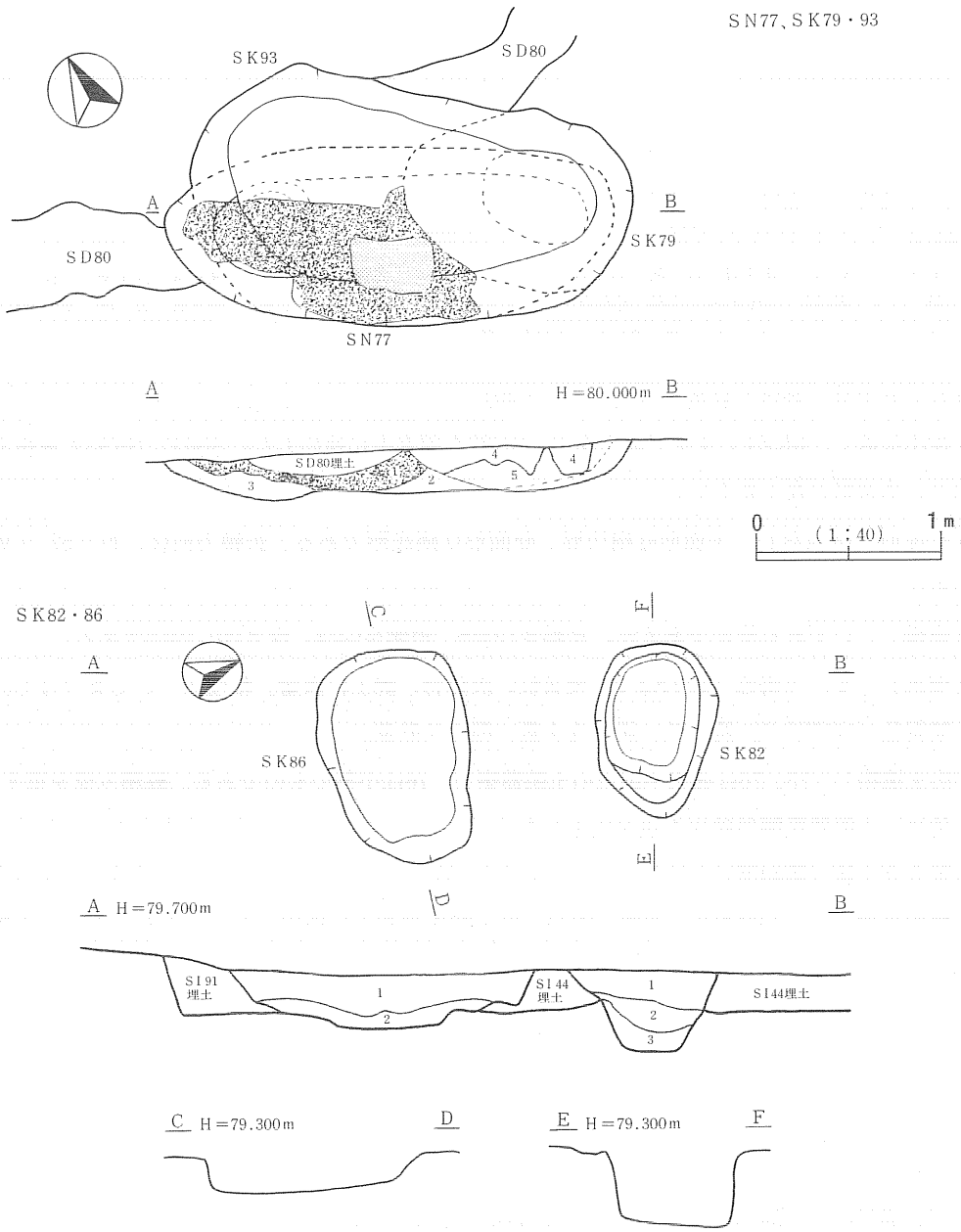
ＳＫ４７土坑（第42図、図版13）

［検出位置］　MG58・59グリッド地山面で礫の集中を確認し、その下から掘り込みを検出した。

［平面形・断面形］　南北に細長いプランで、断面形は逆台形に近い。

［規模］　南北方向214cm、東西方向70～86cm、深さ11～20cmである。

［埋土］　黒褐色土（10YR3/2）１層のみである。地山粒、地山ブロック、軽石粒を含む。



第44図　SN 77 焼土遺構、SK 79・93・82・86 土坑実測図

［出土遺物］　土師器甕口縁部破片４点、胴部破片16点が出土したが、図化できなかった。

ＳＫ７０土坑（第43図、図版23）

［検出位置］　MA60グリッド杭を中心とする地山面で、中世の掘立柱建物跡柱穴を調査中に検出した。

［平面形・断面形］　平面形は不整円形、断面形は掘り込みが2段になっており、逆台形を2つ重ねたような形である。

［規模］　南北方向252cm、東西方向215cm、深さ25～63cmである。

［埋土］　5層に分けられたが、ほとんどの土が人為的に埋められたものである。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

土層注記

1．褐色（10YR4/4）小礫多量、炭化物。粘性あり、しまり強。　2．褐色（10YR4/6）小礫多量、炭化物。粘性なし、しまり強。　3．黄褐色（10YR5/6）小礫。粘性なし、しまり強。　4．褐色（10YR4/6）小礫多量、炭化物。粘性なし、しまり強。　5．暗褐色（10YR3/3）礫、地山粒、炭化物少量。粘性、しまりあり。

ＳＫ７９土坑（第44・47図、図版13・39・40）

［検出位置］　MC61グリッド地山面で、SN77を調査中に検出した。SN77、SK93と重複しており、本遺構が最も新しい。

［平面形・断面形］　平面形は楕円形、断面形は鍋底形である。長軸方向は、Ｎ－57°－Ｗである。

［規模］　いずれも推定であるが、長軸長124cm、短軸長94cm。深さ20～24cmである。

［埋土］　4．黒褐色（10YR2/3）軽石粒、炭化物、焼土粒微量。粘性あり、しまりなし。5．暗褐色（10YR3/3）焼土粒、炭化物少量、軽石粒微量。

［出土遺物］　75、76は埋土中出土の土師器甕で、76は小型のものである。輪積み痕を遺す。この他に、土師器甕胴部破片1点が出土した。

ＳＫ８２土坑（第44図）

［検出位置］　MA62グリッドで，SI44・91・92を調査中に検出した。土層断面から、本遺構が竪穴住居跡より新しい。

［平面形・断面形］　平面形は不整方形、断面形は逆台形である。

［規模］　東西方向94cm、南北方向52～67cm。地山面からの深さ、53cmである。

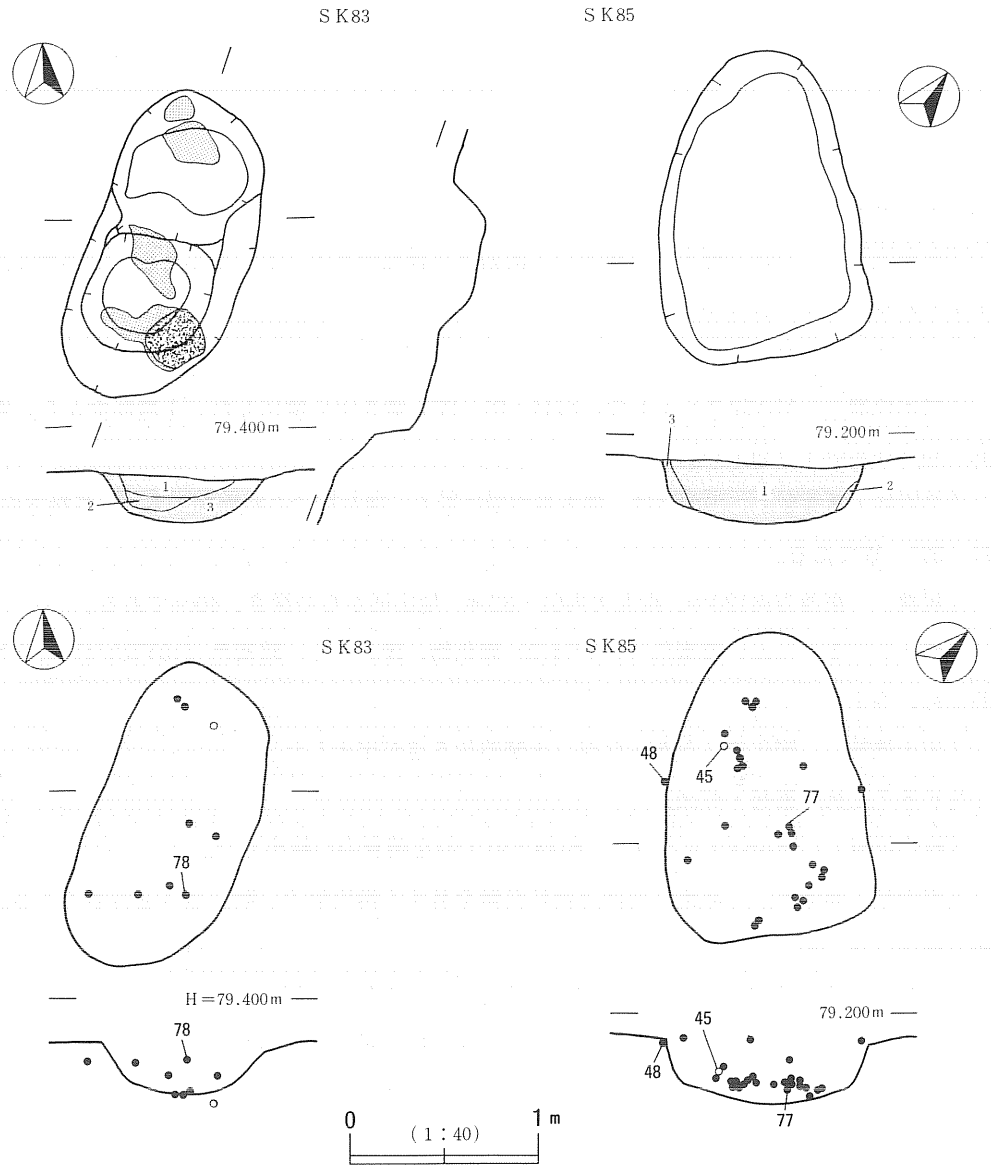
［埋土］　1．黒褐色（10YR3/1）軽石粒多量、炭化物。　2．暗褐色（10YR3/3）炭化物、焼土粒。　3．黒色（10YR3/3）炭化物層。

［出土遺物］　図化できなかったが、土師器片5点が出土した。

ＳＫ８３土坑（第45・47図、図版13・40）

［検出位置］　MA63・MB63グリッドで、SI44・91・92を調査中に検出した。竪穴住居跡に伴うものか不明である。

［平面形・断面形］　平面形は楕円形で、中に掘り込みが2箇所みられ、めがねのような印象を受ける。したがって、南北の断面形は、逆台形の底辺中央部が隆起している。長軸方向は、Ｎ－23°－Ｅである。



第45図　SK 83・85 土坑実測図・遺物出土状況図

［規模］　長軸長168cm、短軸長85cm。深さ24～33cmである。

［埋土］　１．暗褐色（10YR3/4）焼土粒。粘性あり。　２．黒褐色（10YR2/2）地山ブロック、炭化物。　３．黒色（10YR1.7/1）炭化物、炭化材。

［出土遺物］　78は、埋土中位出土の土師器甕口縁部である。内面に煤状の炭化物が付着している。この他に、須恵器片１点、土師器片７点が出土したが、図化できなかった。

ＳＫ８５土坑（第45・47図、図版40）

［検出位置］　MA62・63グリッドで、SI44・91・92を調査中に検出した。

［平面形・断面形］　北西側が円形、南東側が方形の不整形で、断面形は逆台形である。

［規模］　北西－南東方向が164cm、南西－北東方向が76～107cm。深さ24～36cmである。

［埋土］　1．暗褐色（10YR3/4）地山粒、炭化物、礫。粘性強。　2．褐色（10YR4/4）地山粒、焼土粒。　3．地山ブロック。

［出土遺物］　77は、埋土中位出土の土師器甕口縁部である。このほかに、土師器片25点が出土したが、図化できなかった。

ＳＫ８６土坑（第44図）

［検出位置］　MA62グリッドで、SI44・91・92を調査中に検出した。土層断面から、本遺構が竪穴住居跡より新しい。

［平面形・断面形］　平面形は、隅丸長方形に近く、逆台形状の断面形である。長軸方向は、Ｎ－80°－Ｗである。

［規模］　東西方向120cm、南北方向61～82cm。地山面からの深さ、40cmである。

［埋土］　1．にぶい黄褐色（10YR4/3）炭化物、礫。　2．暗褐色（10YR3/4）炭化物、焼土粒、焼土ブロック。

［出土遺物］　図化できなかったが、土師器片５点が出土した。

ＳＫ８７土坑（第46・47図）

［検出位置］　MA63グリッドで、SI44・91・92を調査中に検出した。

［平面形・断面形］　北東－南西方向に長軸を有する楕円形で、断面形は逆台形である。長軸方向は、Ｎ－30°－Ｅである。

［規模］　長軸長125cm、短軸長102cm。確認面からの深さ、28cmである。

［埋土］　1．褐色(10YR4/4)地山粒多量、炭化物少量。粘性あり。2．黒褐色(10YR3/2)地山粒、炭化物少量。3．暗褐色（10YR3/4）地山粒多量、炭化物。4．褐色（10YR4/4）地山粒多量、炭化物。

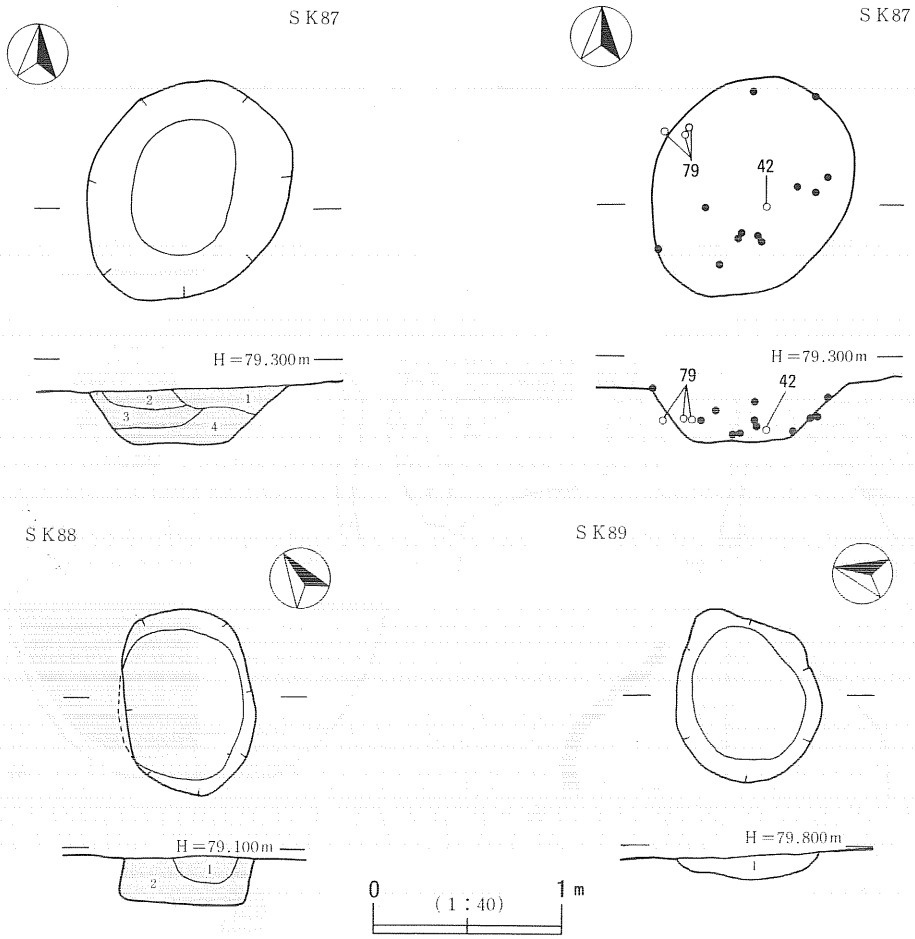
［出土遺物］　79、80は、いずれも埋土中位の出土である。80は内面黒色処理が施されており、底部から内湾ぎみに立ち上がり、口縁端が心持ち外反する。このほか、土師器片10点が出土したが、図化できなかった。

ＳＫ８８土坑（第46図、図版13）

［検出位置］　MA62、LT62グリッドで、SI44・91・92を調査中に検出した。

［平面形・断面形］　やや方形に近い楕円形で、断面形は逆台形である。

［規模］　長軸長100cm、短軸長68cm。確認面からの深さ、26cmである。北西側の壁は、ややハングしている。



第46図　SK 87・88・89 土坑実測図・遺物出土状況図

［埋土］　１．にぶい黄褐色（10YR4/3）地山粒、炭化物。　２．暗褐色（10YR3/4）地山粒、炭化物。粘性あり。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ８９土坑（第46図）

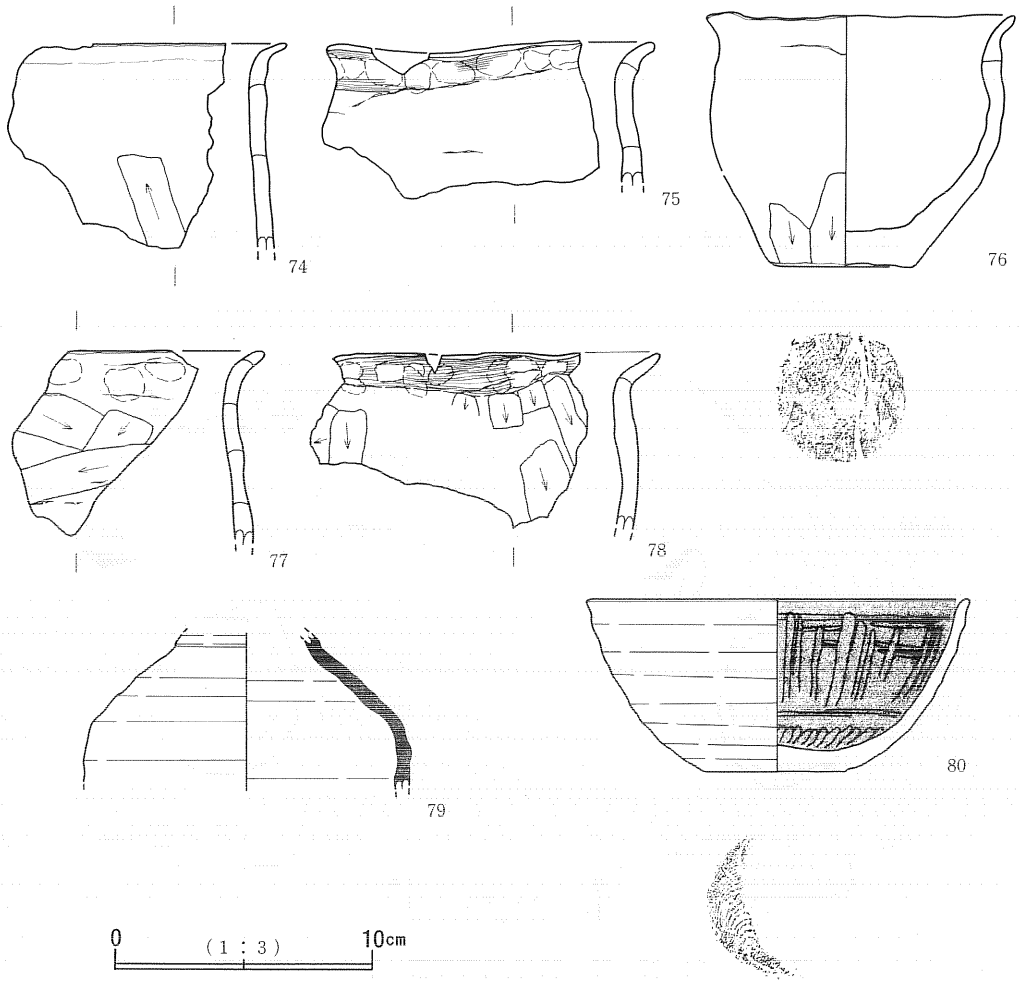
［検出位置］　MH67グリッド地山面で検出した。調査区内で、最も北に位置する土坑である。

［平面形・断面形］　平面形は不整円形で、断面形は逆台形である。

［規模］　北東－南西方向97cm、北西－南東方向79cm。確認面からの深さ、13cmである。

［埋土］　１．黒褐色（10YR2/2）礫、地山粒少量。粘性、しまりあり。

［出土遺物］　図化できなかったが、須恵器壺胴部破片１点が出土した。



番号	出土地点	器種	成形	調整	外面/内面	色調	外面/内面	胎土	焼成	法量 cm 口径	器高	底径
74	SK 23	土師器 甕	非ロクロ	ケズリ、横ナデ(磨滅著しい)		5YR 7/6 橙色		1㎜大の砂粒多量	良	−	−	−
				ヘラナデ→横ナデ		10YR 8/4 浅黄橙色						
75	SK 79	土師器 甕	非ロクロ	指オサエ→横ナデ(磨滅著しく不明瞭)		10YR 7/4 にぶい黄橙色		3㎜〜5㎜大の砂粒多量	良	−	−	−
				ヘラナデ→横ナデ		10YR 8/3 浅黄橙色						
76	SK 79	土師器 甕（小型）	非ロクロ	ケズリ→ナデ	（磨滅が著しい）	10YR 6/3 にぶい黄橙色		2㎜〜5㎜大の砂粒多量	良	−	−	5.2
				ヘラナデ→横ナデ		10YR 7/3 にぶい黄橙色						
77	SK 85	土師器 甕	非ロクロ	ケズリ、指オサエ→横ナデ(ナデは磨滅著しく不明瞭)		10YR 8/3 浅黄橙色		1㎜〜2㎜大の砂粒多量	良	−	−	−
				ヘラナデ→横ナデ		10YR 8/2 灰白色						
78	SK 83	土師器 甕	非ロクロ	指オサエ→ケズリ→横ナデ		7.5YR 8/3 浅黄橙色		1㎜〜2㎜大の砂粒	良	−	−	−
				指オサエ→ヘラナデ→横ナデ		10YR 8/3 浅黄橙色						
79	SK 87	須恵器 壺	ロクロ	ロクロ→頸部下ヘラナデ		2.5YR 4/1 赤灰色		緻密0.5㎜大の砂粒少量	良	頸部径 (5.6)		最大幅 (12.8)
				ロクロ		2.5YR 2/1 赤黒色						
80	SK 87	土師器 坏	ロクロ	ロクロ、底面回転糸切り無調整		10YR 7/4 にぶい黄橙色		0.5㎜〜1㎜大の砂粒多量	良	15.0	6.8	5.2
				横位ミガキ→縦位、放射状ミガキ、黒色処理		10YR 1.7/1 黒色						

第47図　SK 23・79・83・85・87 土坑出土遺物

（３）焼土遺構

ＳＮ７７焼土遺構（第44図、図版13）

［検出位置］　MB61、MC61グリッド地山面で検出した。土坑や溝状遺構と重複しており、SK93、SN77、SK79、SD80の順に新しくなる。

［平面形・断面形］　平面形は長楕円形で、鍋底状の断面形である。長軸方向は、Ｎ－64°－Ｗである。

［規模］　推定の長軸長240cm、短軸長97cm。確認面からの深さ、23～25cmである。

［埋土］　１．褐色（7.5YR4/6）焼土層。　２．褐色（7.5YR4/4）焼土ブロック多量。しまり強。　３．暗褐色（7.5YR3/2）地山ブロック霜降り状に混入。粘性なし。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

３．中世

（１）掘立柱建物跡柱穴（第55図・付図）

掘立柱建物跡柱穴は、検出順に１番から番号を付し、998番まで使用した。しかし、柱穴ではないと判断されたものが43にのぼり、差し引き955の柱穴数となった。規模は、径20～30cmのものが多く、掘り方を持っていたものと思われる。深さは、地山面から２～100cm近いものまで様々であるが、20～40cmのものが多い。埋土は、黒色または黒褐色が多く、地山粒、地山ブロック、大湯浮石由来と思われる軽石粒、炭化粒を含む。稀に、焼土粒を含む場合もある。

これらの柱穴について、八戸工業大学助教授高島成侑氏に検討していただいたところ、いわゆる寝殿造または書院造とされる大規模な建物跡は、認められないことが明らかになった。

［出土遺物］　81は、SKP320埋土中出土の破片３点が接合したものである。

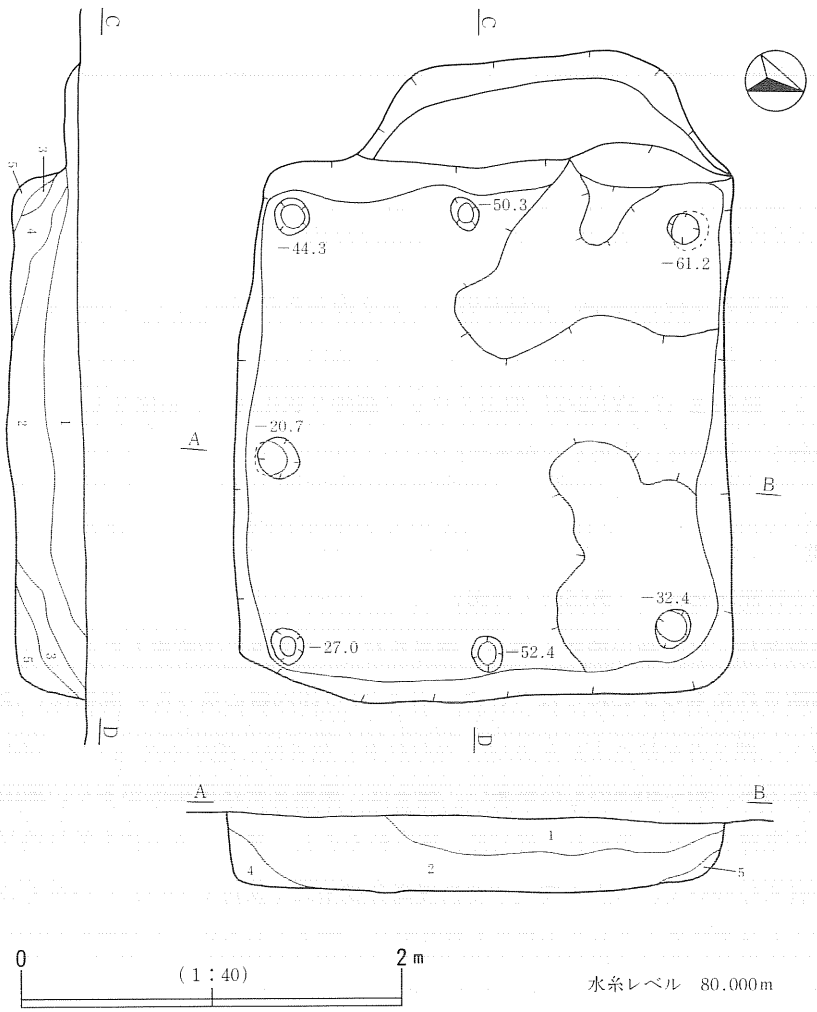
（２）竪穴建物跡

竪穴状の掘り込みを有し、炉またはカマド、柱穴等の施設を持たないものを竪穴遺構と呼び、しっかりした柱穴を有するものは、上部構造を備えたものと推定し、竪穴建物跡と呼ぶこととする。ただし、調査区からは、竪穴建物跡のみが検出された。

ＳＩ０４竪穴建物跡（第48図、図版14）

［検出位置］　MB51、MC51グリッド地山面で、黒色プランを検出した。

［平面形・規模］　方形プランの西側に小さな張り出しを有する。壁長は、西側254cm、北側278cm、東側268cm、南側282cm。張り出し部の規模は、幅127～204cm、奥行52～62cmである。掘り込みは浅く、5.3～6.4cmである。主軸方位は、Ｎ－110°－Ｗである。面積は、8.09㎡である。



第48図　SI 04 竪穴建物跡実測図

［床面］　礫混じりの地山を掘り込んで床としており、凹凸が著しい。北西隅に近い部分の床は、やや急に高まり、西側の張り出し部に移行している。また、北東隅あたりの床面も若干の高まりがみられる。

［壁・壁溝］　床からやや内湾しながら立ち上がり、地山に含まれる礫が露出している。壁高は、31～41cmである。壁溝は検出されなかった。

［柱穴］　4隅と北側を除く壁際ほぼ中央に、合計7カ所検出された。各柱穴に付した数字は、床面からの深さである。4隅の柱穴間距離は、205、210、228cmで、平均2.13mである。

［埋土］　自然堆積である。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

竪穴建物跡土層注記
１．暗褐色（10YR3/3）炭化物、地山粒、軽石粒。　２．暗褐色（10YR3/3）地山粒、地山ブロック、軽石粒、礫。しまり強。　３．にぶい黄橙色（10YR6/4）地山粒、地山ブロック、礫。しまりあり。　４．黒褐色（10YR2/3）地山粒、礫。粘性あり。　５．黒色（10YR2/2）地山粒。粘性あり。

ＳＩ３１竪穴建物跡（第49図、図版15）

［検出位置］　MG56・57、MH56～58、MI56・57グリッド地山面で検出したが、全体に不明確で、壁を検出して初めてプランをつかめた。中世の掘立柱建物跡柱穴と重複しており、本遺構が古い。

［平面形・規模］　南北方向662～674cm、東西方向504～508cmの長方形プランの北東隅に張り出しを有する。張り出し部分は、幅100～200cm、奥行230cmである。面積は、36.28㎡。主軸方位は、Ｎ－51°－Ｅである。

［床面］　地山を掘り込んで床としているが、堅致な面は認められない。北東隅近くの床面に、炭化物が観察された。しかし、火を使用した痕跡はどこにも認められず、本遺構が廃絶された後に廃棄されたものと思われる。張り出し部の床は、内側にスロープ様に傾斜している。

［壁・壁溝］　東と南側が外反しながら、その他の壁はやや内湾しながら立ち上がる。壁高は、南東側が50～51cm、北西側が25～28cmである。壁溝は、検出されなかった。

［柱穴］　各壁に沿って５本づつ、合計16本、さらに中央部に１本を検出した。この他に、張り出し部に４本検出した。

「埋土」　１層および２層は、基本層位の第Ⅰ層および第Ⅰ′層に対応する。３層以下は、地山ブロックを含み、人為的に埋められた可能性がある。

［出土遺物］　図化できなかったが、土師器坏及び甕の破片資料が出土した。その内訳は、坏口縁部１点、甕口縁部３点、胴部17点、底部１点が出土した。

竪穴建物跡土層注記
１．黒褐色（10YR3/1）地山粒、軽石粒。第Ⅰ層。　２．黒褐色（10YR2/2）地山粒、炭化物、軽石粒。第Ⅰ′層。
３．暗褐色（10YR3/4）地山粒、地山ブロック、軽石粒。
４．褐色（10YR4/4）地山ブロック。　５．黒色（10YR1.7/1）地山ブロック。　６．黒褐色（10YR2/3）地山粒、地山ブロック。若干粘性あり。　７．褐色（10YR4/6）地山ブロック、炭化物。

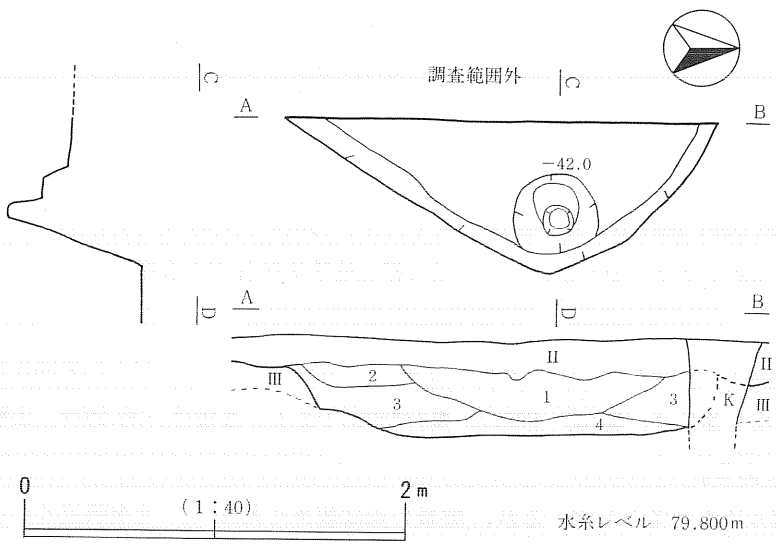
ＳＩ６７竪穴建物跡（第50図、図版16）

［検出位置］　調査区西端のLT59グリッド地山面で検出した。

［平面形・規模］　一部分を調査したにすぎないので、全体のプランは不明であるが、方形のプランとなるものと思われる。調査できた部分の北東壁長123cm、南東壁長188cmである。

［床面］　多少の凹凸が認められた。

［壁・壁溝］　床からやや外反ぎみに立ち上がる。壁高は、表土から52.3cmである。壁溝は、



検出されなかった。

［柱穴］　東隅に1本検出された。床面からの深さは、42cmである。

［埋土］　黒色系の土を主体とする。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

第49図　SI 67 竪穴建物跡実測図

竪穴建物跡土層注記

1．黒褐色（10YR2/2）軽石粒少量、礫多量。しまり、粘性なし。　2．黒褐色（10YR2/3）軽石粒、礫。　3．暗褐色（10YR3/3）地山ブロック多量、礫。しまりあり、粘性なし。　4．黒褐色（10YR3/2）地山粒、礫少量。しまりあり、粘性なし。

ＳＩ６８竪穴建物跡（第51図、図版16・17）

［検出位置］　MC62・63、MD63グリッド地山面で検出した。ほぼ同時期と思われるSK69と切り合い関係にあるが、新旧関係は不明である。

［平面形・規模］　1辺241～271cmの方形プランの北東側に、張り出し部を有する。張り出し部の規模は、幅98～129cm、奥行119cmである。面積は、8.08㎡。主軸方位は、Ｎ－48°－Ｅである。

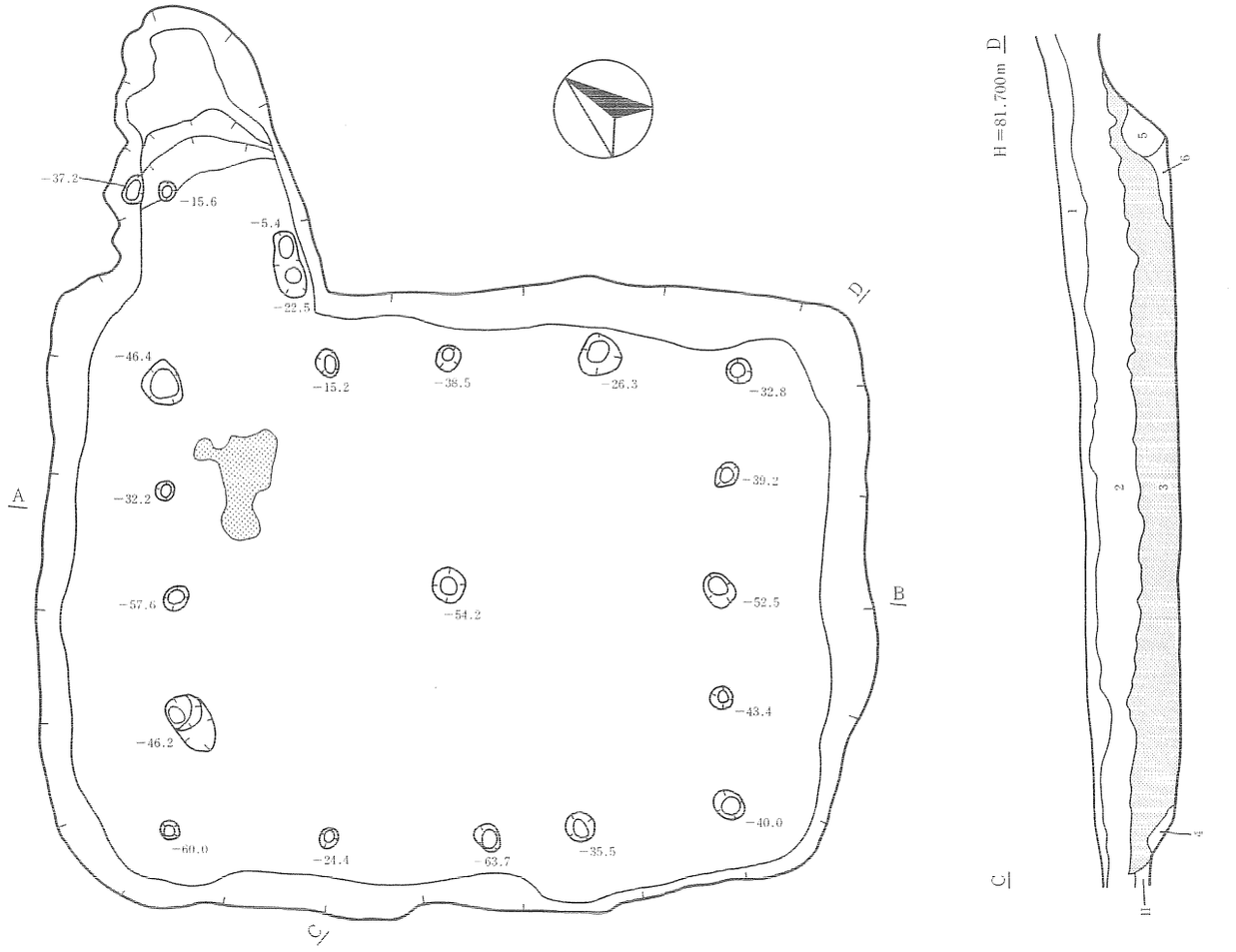
［床面］　全体によくしまっているが、特に堅致ではない。張り出し部は、内側に向かってスロープ様になっておらず、逆に内側が高く、外側が若干低くなっている。

［壁・壁溝］　床から内湾ぎみに緩く立ち上がる。壁高は、南東側が24.5～32cmで、西側に行くにしたがって低くなり、7～17.3cmである。壁溝は、検出されなかった。

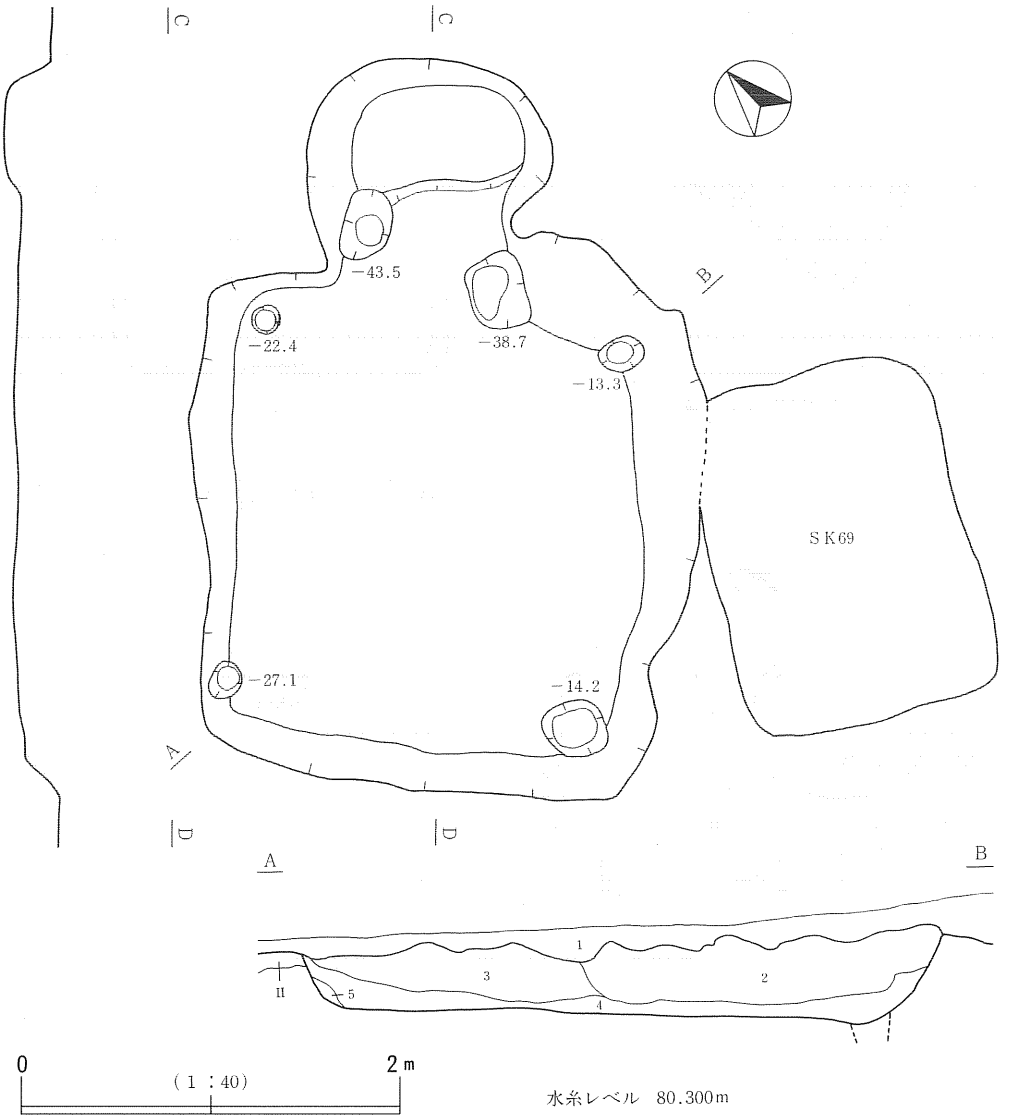
［柱穴］　4隅に各1本と、張り出し部分に2本検出された。柱穴に付した数字は、床面からの深さであるが、張り出し部分のほうが深めである。4隅にある柱穴間の距離は、190～200cmである。

［埋土］　下部は黒色土の自然堆積であるが、上部は人為堆積の可能性がある。

［出土遺物］　図化できなかったが、土師器甕の胴部と底部破片各1点が出土した。



第50図　SI 31 竪穴建物跡実測図



第51図　SI 68 竪穴建物跡実測図

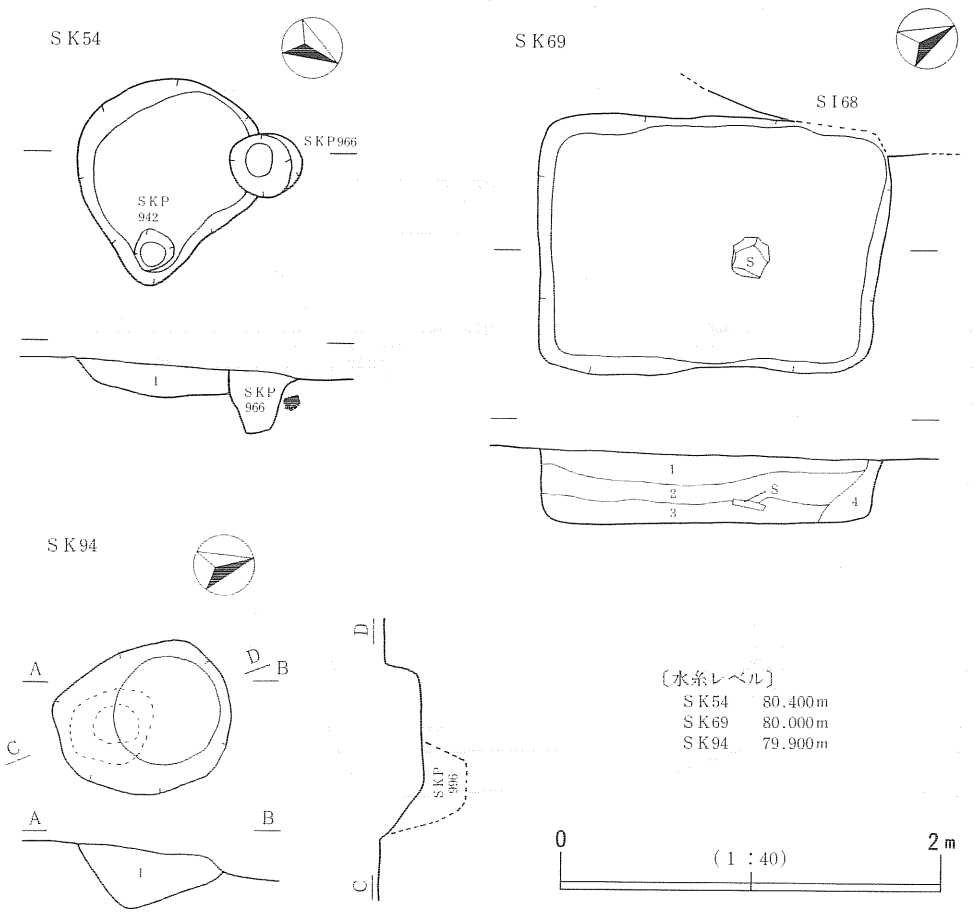
竪穴建物跡土層注記

１．黒褐色(10YR3/2)第Ⅰ層。２．黒褐色(10YR2/2)地山粒やや多量、焼土粒、炭化物。３．にぶい黄褐色(10YR4/3)地山粒やや多量、焼土粒、炭化物、軽石粒。サラサラしている。　４．黒色（10YR2/1）炭化物、軽石粒。　５．褐色（10YR4/4）軽石粒、礫。

（３）土坑

ＳＫ５４土坑（第52図）

［検出位置］　ME63、MF63グリッド地山面で検出した。中世の掘立柱建物跡柱穴と重複している。本遺構調査前と調査中に柱穴が検出されているので、新旧の掘立柱建物跡の営まれ



第52図　SK 54・69・94 土坑実測図

た中間の時期に使われたものと推定された。

［平面形・断面形］　柱穴により歪みが大きいが、平面形はほぼ円形、断面形は逆台形である。

［規模］　直径98ないし99cm。確認面からの深さ、12.7～23.2cmである。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

土層注記
1．黒褐色（10YR3/2）地山粒やや多量、地山ブロック、軽石粒、炭化物。

ＳＫ６９土坑（第52図、図版17）

［検出位置］　MC62・63、MD62・63グリッド地山面で検出した。

［平面形・断面形］　平面形は長方形、断面形は逆台形である。

［規模］　短辺135ないし139cm、長辺は東側174cm、西側191cm。確認面からの深さ、32.2～40.5cmである。

［長軸方向］　Ｎ－27°－Ｅ。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

土層注記　1．黒褐色（10YR2/3）地山粒多量、軽石粒、礫。しまり強。　2．黒褐色（10YR2/2）軽石粒、礫。粘性、しまりあり。　3．黒褐色（10YR3/2）地山粒、地山ブロック、礫。粘性あり、しまり強。　4．黒褐色（10YR2/2）地山ブロック、礫。粘性、しまりあり。

ＳＫ９４土坑（第52図）

［検出位置］　MC61グリッド地山面で検出した。中世の掘立柱建物跡柱穴と重複している。すなわち、本遺構により切られている柱穴と、本遺構を切っている柱穴が認められた。

［平面形・断面形］　平面形は楕円形、断面形は逆台形である。

［規模］　長軸90cm、短軸77cm、深さ19～22cm。

［長軸方向］　磁北にほぼ等しい。

「出土遺物」　遺物は、出土しなかった。

土層注記　1．黒褐色（10YR3/2）地山粒、炭化物微量、礫。しまり強。

（４）焼土遺構

ＳＮ０８焼土遺構（第53図、図版18）

［検出位置］　MA54・55、MB54・55グリッド地山面で検出した。

［平面形・断面形］　隅丸長方形の一方の短辺に長円形の突起をつけたような平面形である。横断面形は、かまぼこ形であるが、立ち上がりは上に推移するにしたがい、内側に迫り出してきている。

［規模］　長さ263cm、幅38～64cm、確認面からの深さ４～37cmである。

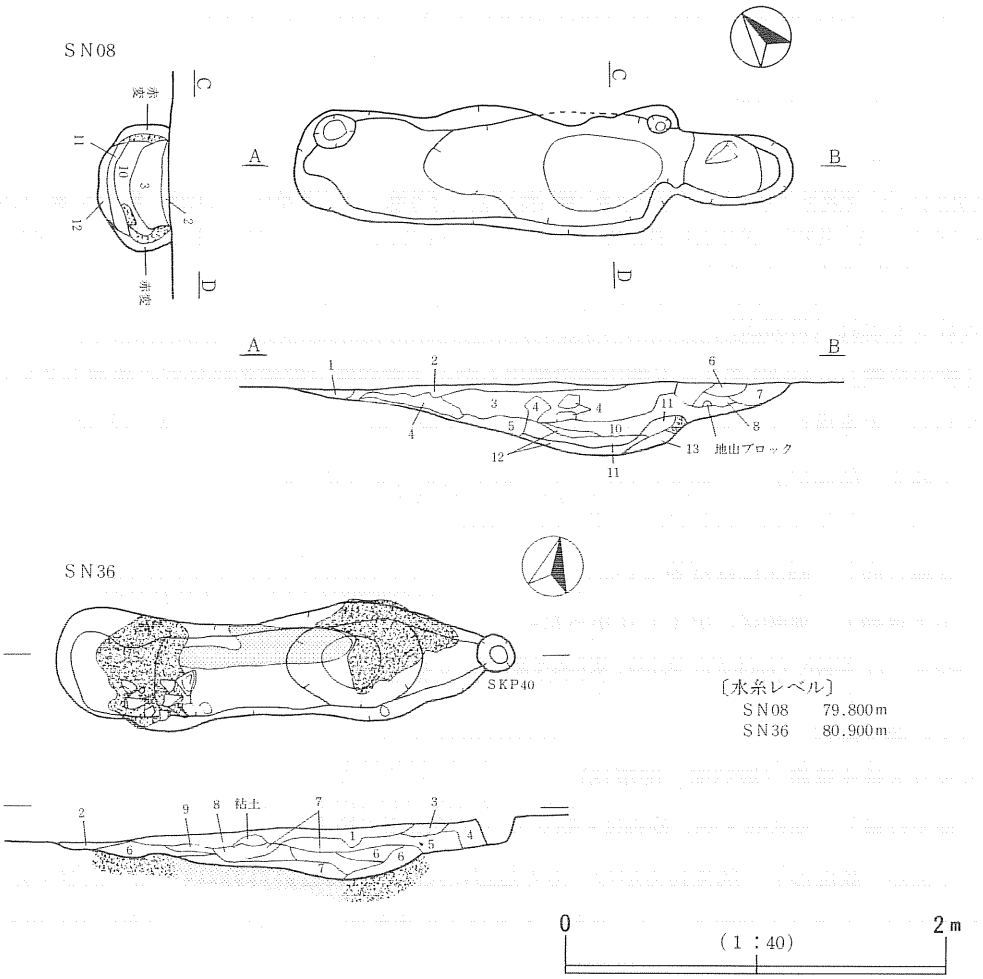
［長軸方向］　Ｎ－133°－Ｅ

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

土層注記　1．黒褐色（10YR2/3）地山粒、焼土粒、炭化物。しまりあり。　2．黒褐色（10YR3/2）地山粒、地山ブロック、炭化物、焼土粒。しまり強。　3．黒褐色（10YR2/2）地山粒、焼土粒、炭化物。しまりあり。　4．にぶい黄褐色（10YR4/3）粘土。　5．黒褐色（10YR2/2）焼土粒、焼土ブロック、炭化物。しまりなし。　6．暗褐色（7.5YR3/3）地山粒、焼土粒、焼土ブロック。　7．黒褐色（7.5YR3/2）地山粒、地山ブロック。しまりなし。　8．黒褐色（7.5YR2/2）焼土粒、焼土ブロック。しまりなし。　9．褐色（10YR4/6）地山ブロック。しまりあり。　10．暗赤褐色（5YR3/2）焼土ブロック、炭化物。しまりあり。　11．暗赤褐色（5YR3/3）地山粒、焼土ブロック、炭化物。しまり強。　12．黒色（10YR1.7/1）炭化物層。　13．暗赤褐色（5YR3/3）。

ＳＮ３６焼土遺構（第53図、図版24）

［検出位置］　MH53、54両グリッドの境界近くで検出した。中世の掘立柱建物跡柱穴と重複し、本遺構が古い。



第53図　SN 08・36 焼土遺構実測図

［平面形・断面形］　細長い不整形プランで、断面形も凹凸の多い不整形である。

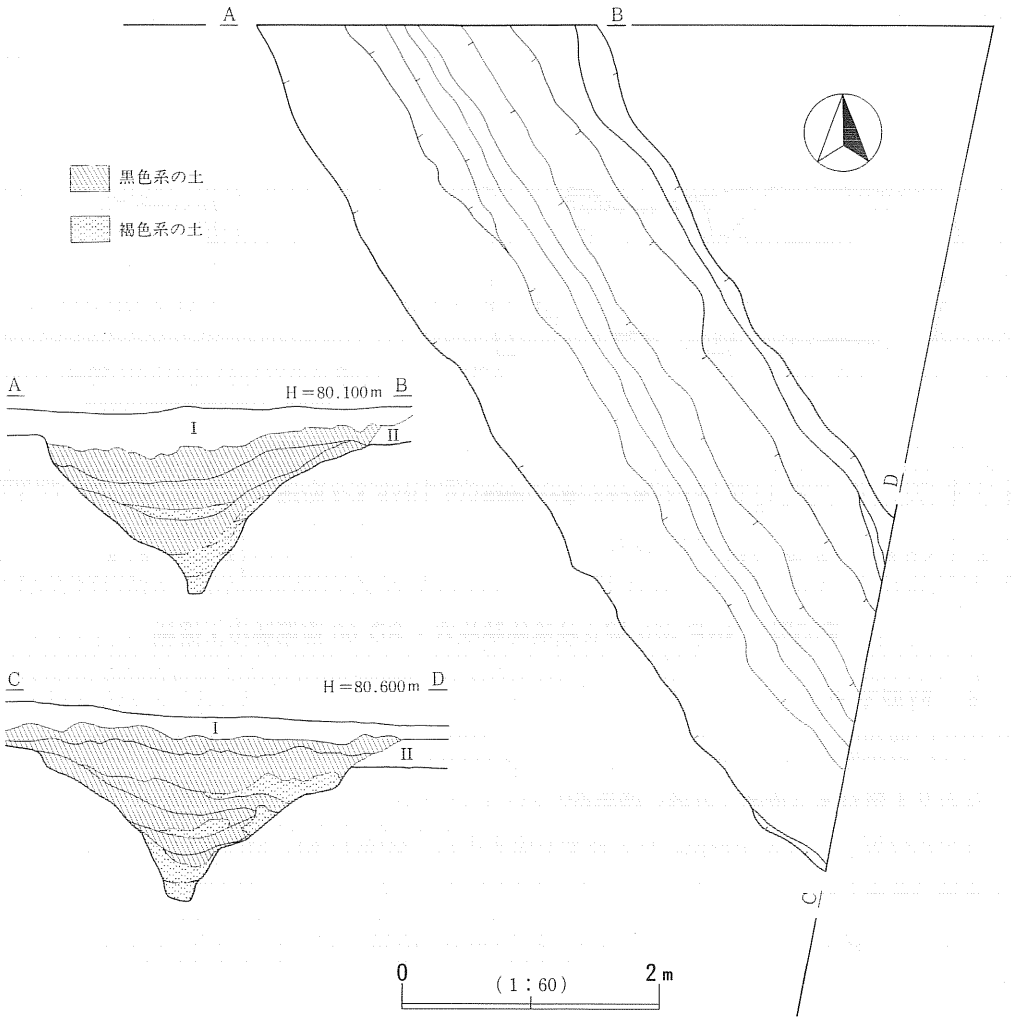
［規模］　推定全長236cm、最大幅62cm、深さ３～26cmである。

［長軸方向］　Ｎ－75°－Ｅ

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

土層注記

１．黒褐色（10YR2/3）焼土粒、地山粒、炭化物少量。しまり強。　２．黒褐色（10YR3/2）焼土粒微量、炭化物少量。しまりなし。　３．暗褐色（7.5YR3/3）焼土粒少量、炭化物微量。しまりなし。　４．暗褐色（10YR3/3）礫。しまりなし。　５．黒褐色（7.5YR3/2）焼土粒少量。しまりあり。　６．黒褐色（10YR3/3）焼土粒、炭化物、地山粒多量。しまりあり。　７．黒色（10YR2/1）炭化物多量、焼土粒。　８．黒褐色（7.5YR3/2）焼土粒やや多い。　９．暗褐色（7.5YR3/4）炭化物、焼土粒多量。しまりあり。



第54図　SD 60 空堀跡実測図

（５）空堀

ＳＤ６０空堀跡（第54・55図、図版19・40）

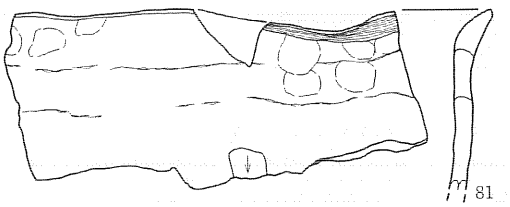
［検出位置］　調査区北東端のMI66・67、MJ66・67グリッド地山面で、溝状のプランを検出した。北西一南東方向へ伸びており、北西側は沢に落ち込み、南東側は調査区外へと続いていっている。

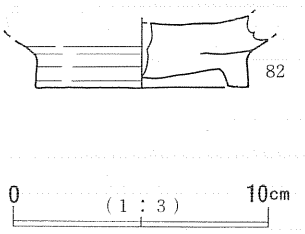
［規模・断面形］　調査できた範囲での規模は、長さ674cm、幅南東側200cm、北西側300cm、深さ120～136cmである。断面形は、薬研堀である。

［埋土］　黒色系と褐色系の土に大別される。黒色系の土は、埋土の上位と中位に見られ、地山粒、焼土粒、炭化物、軽石粒を含む。褐色系の土は、埋土の中位と下位に見られ、地山粒、

地山ブロックを含む。

［出土遺物］　埋土中から1点出土した。82は、中国産白磁碗の底部片である。高台部周辺には釉がかかっていない。年代は、12～13世紀である。





番号	出土地点	器種	成形	調整	外面	色調	外面	胎土	焼成	法量cm		
					内面		内面			口径	器高	底径
81	SKP320	土師器甕	非ロクロ	ケズリ→指オサエ→横ナデ(摩滅著しい)		10YR 8/2 灰白色		1㎜～4㎜大の砂粒多量	良	－	－	－
				横ナデ(摩滅著しい)		10YR 8/2 灰白色						
82	SD 60	白磁碗	ロクロ	高台付近無釉				緻密	良	－	－	(5.6)

第55図　SKP 320 掘立柱建物跡柱穴・SD 60 空堀跡出土遺物

4．時期不明

（1）積石塚

ＳＸ０１積石塚（第56・57図、図版20）

［検出位置］　調査開始後、杉の枝葉を除去中に、MB60・61、MC60・61グリッドで、礫の集積を検出した。

［規模］　礫の広がりは、東西440cm、南北360cmの範囲にみられた。礫の大きさは、2～10cmのものがほとんどであるが、20cmをこえるものもある。円礫はなく、角礫のみである。5cmごとの地形測量図によると、塚の標高が80.4m余りで、地表面との比高差は40cm余りあることがわかる。

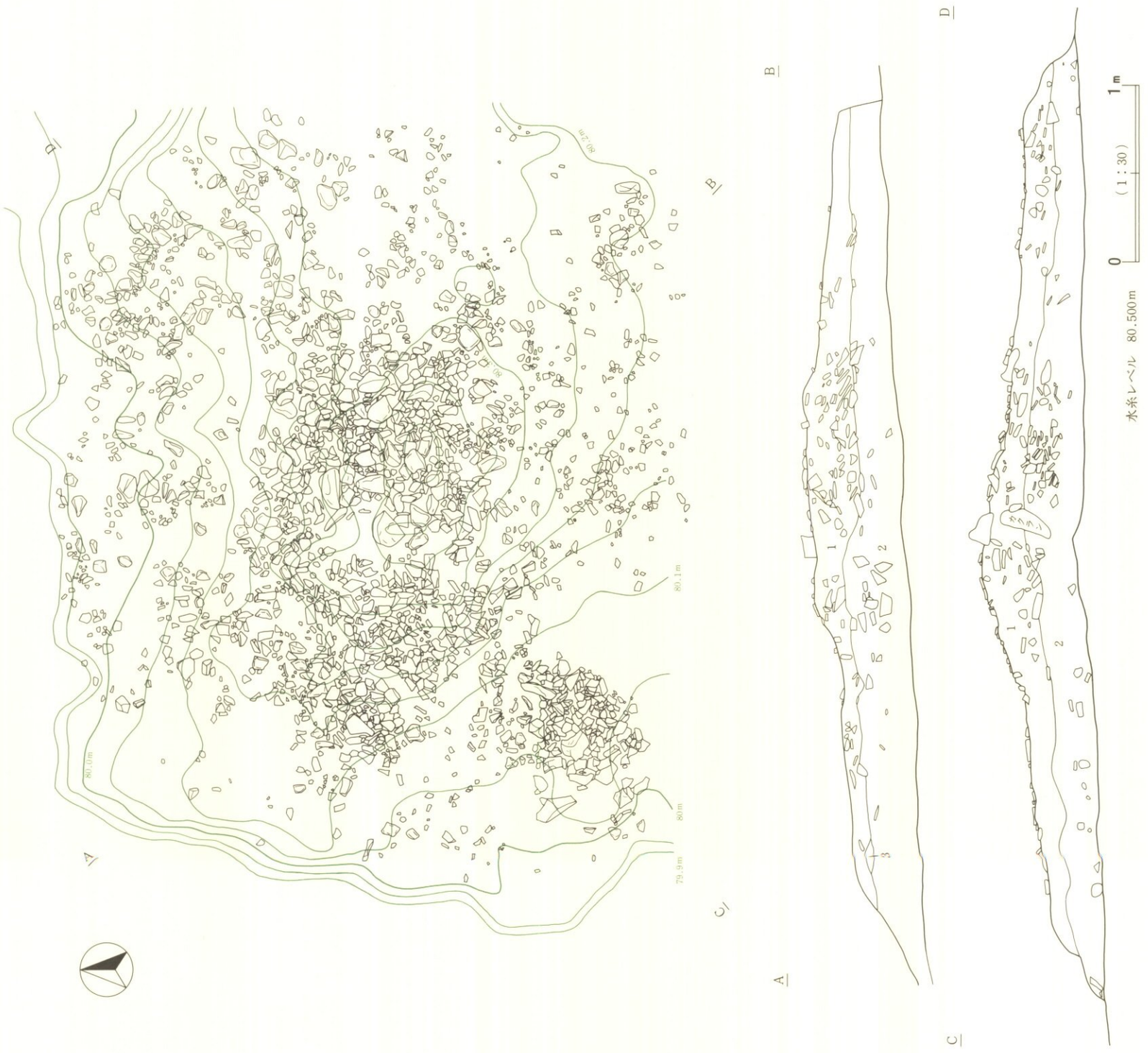
［土層断面］　1．黒褐色（7.5YR2/2）　2．黒色（7.5YR2/1）の2層に分けられた。また、1層と2層との間に暗褐色（7.5YR3/3）の土が、部分的に観察された。2層は、基本土層の第Ⅱ層に対応する。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

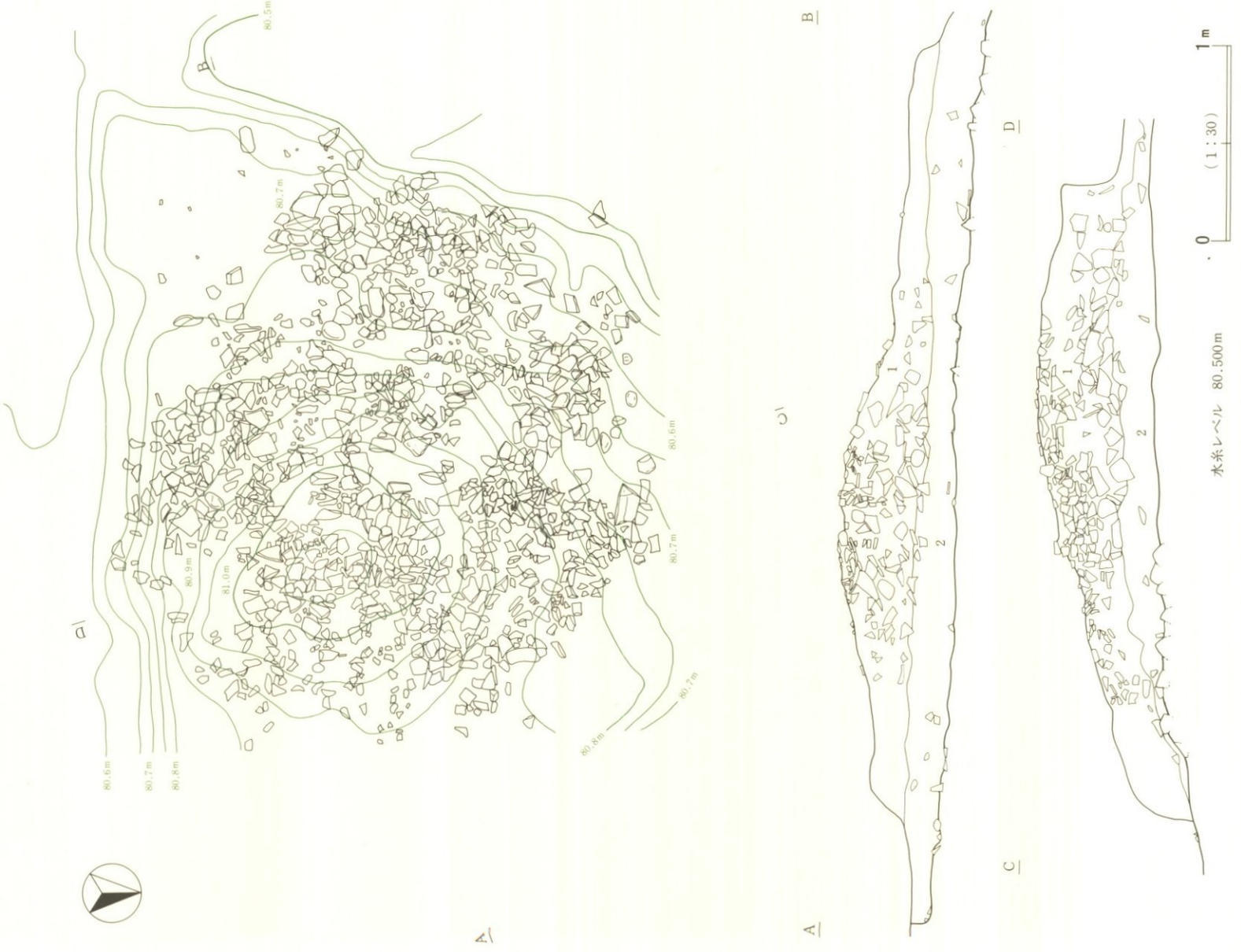
ＳＸ０２積石塚（第58・59図、図版21・41）

［検出位置］　MF63、MG63グリッドで、礫の集積を検出した。

［規模］　礫の広がりは、東西320cm、南北280cmの範囲にみられた。礫の大きさは、10cm前後のものが多い。1号積石塚同様、円礫はなく、角礫のみである。5cmごとの地形測量図によると、塚の標高は、81.05m余りで、地表面との比高差は55cmである。



第56図　SX 01 積石塚実測図



第57図　SX 02 積石塚実測図

［土層断面］　１．黒褐色（7.5YR2/2）２.黒色（7.5YR2/1）の２層に分けられた。２層は、基本土層の第Ⅱ層に対応する。

［出土遺物］　図化できなかったが、珠洲系陶器片数点が、礫に混じって出土した。

（２）土坑

ＳＫ０９土坑（第60図）

［検出位置］　SI42竪穴住居跡を調査中に、MG55グリッドで検出した。SI42の土層断面に本遺構の断面が観察され、初めて本遺構の存在が明らかになった。このため、西側３分の２以上は、すでに掘られて失われていた。したがって、掲載した図は、SI42の土層断面から復元したものである。

［平面形・断面形］　細長い不整形で、南北の断面形は、逆台形に近い。東側の下端が入り込んでおり、坑底からの立ち上がりは、ハングしている。

［規模］　長さ200cm、幅43～51cm、深さ23～30cmである。

［長軸方向］　Ｎ－64°－Ｅ

［埋土］　黒褐色（10YR2/3）軽石粒多量、炭化物少量。粘性なし、しまり強。炭化物は、埋土中に若干混入しているほか、坑底東側に付着していた。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ１２（ａ）・（ｂ）土坑（第60図）

ＳＫ１２（ａ）土坑

［検出位置］　MC50グリッド地山面で検出した。

［平面形・断面形］　南側が中世の掘立柱建物跡柱穴により壊されているが、本来は円形の平面形を有する土坑と推定される。断面形は、逆台形である。

［規模］　直径62ないし63cm、深さ10～12cmである。

［埋土］　黒褐色（10YR2/3）地山ブロック混入。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ１２（ｂ）土坑

［検出位置］　MC50・MD50グリッド地山面で検出した。

［平面形・断面形］　平面形は、不整方形。断面形は、逆台形である。

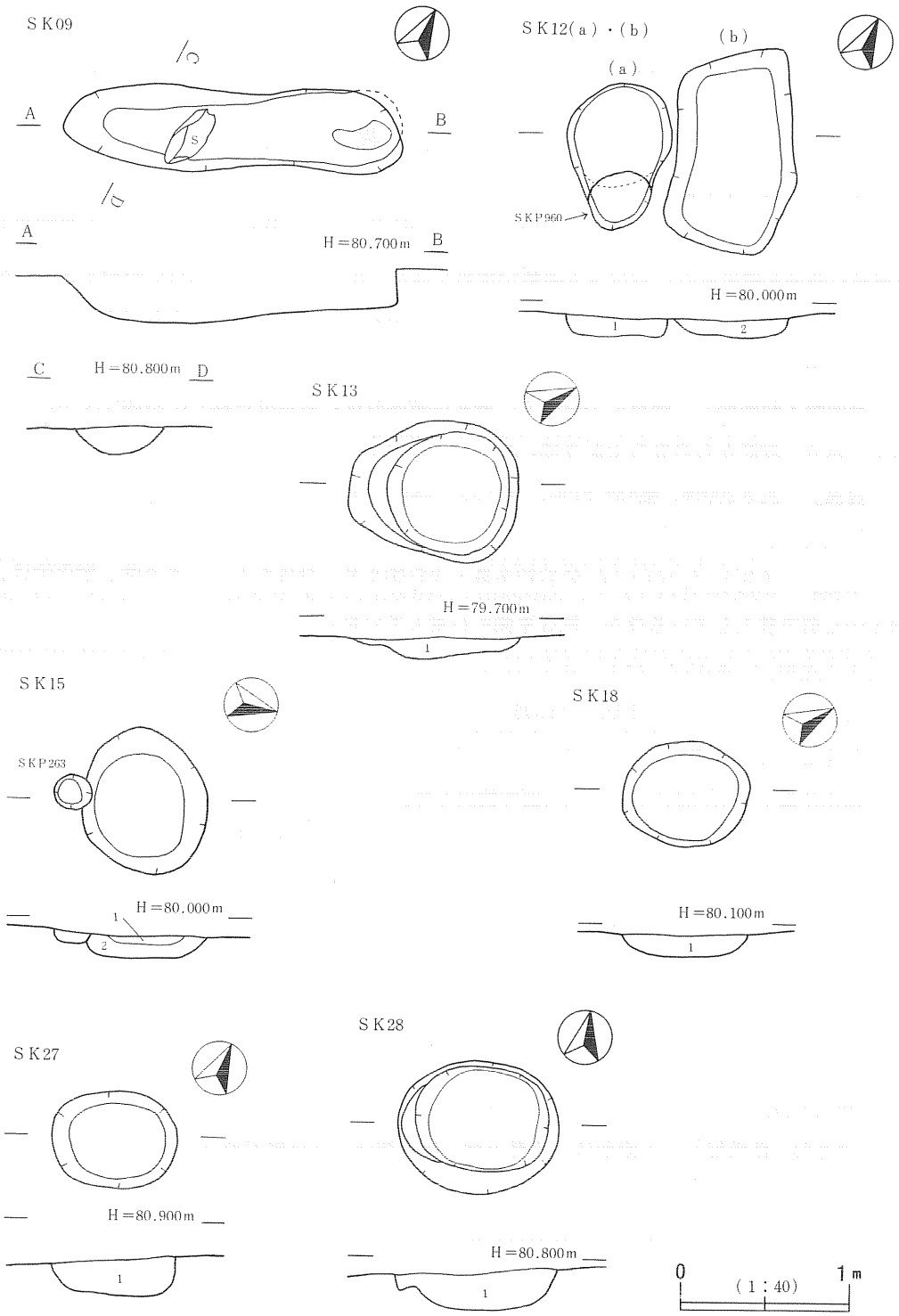
［規模］　東西方向67～76cm、南北方向95～124cm、深さ８～10cmである。

［埋土］　黒褐色（10YR2/2）軽石粒、地山粒多量混入。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ１３土坑（第60図）

［検出位置］　MA54グリッド地山面で検出した。



第58図　SK 09・12(a)(b)・13・15・18・27・28 土坑実測図

［平面形・断面形］　平面形は、不整円形。断面形は、南側に浅い掘り込みをもつ逆台形に近い形状である。

［規模］　82cm×100cm、深さ、４～13cmである。

［埋土］　黒色（10YR1.7/1）地山粒、地山ブロック、炭化物を含み、粘性なく、しまりあり。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ１５土坑（第60図、図版23）

［検出位置］　MC54・55グリッド地山面で検出した。中世の掘立柱建物跡柱穴と重複している。本遺構のほうが古い。

［平面形・断面形］　ほぼ円形で、断面形は逆台形である。

［規模］　74cm×88cm、深さ、11～13cmである。

［埋土］　１．黒褐色（10YR3/2）地山粒、軽石粒。しまり強。　２．暗褐色（10YR3/3）地山粒、軽石粒、炭化物。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ１８土坑（第60図）

［検出位置］　MD55グリッド地山面で検出した。

［平面形・断面形］　平面形は楕円形で、断面形は鍋底形である。

［規模］　長軸76cm、短軸66cm、深さ11ないし12cmである。

［長軸方向］　Ｎ－16°－Ｅ

［埋土］　黒褐色（10YR2/2）地山粒、地山ブロック、炭化物を含み、しまりあり。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ２７土坑（第60図）

［検出位置］　MG55・56グリッド地山面で検出した。

［平面形・断面形］　平面形は楕円形、断面形は鍋底形である。

［規模］　長軸74cm、短軸58cm、深さ17～22cmである。

［長軸方向］　Ｎ－65°－Ｅ

［埋土］　黒色（10YR2/1）炭化物、地山粒、地山ブロックを含み、粘性、しまりあり。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ２８土坑（第60図）

［検出位置］　MH56グリッド地山面で検出した。

［平面形・断面形］　平面形は楕円形、断面形は鍋底形である。

［規模］　長軸96cm、短軸79cm、深さ20～22cmである。

［長軸方向］　N－82°－E

［埋土］　黒褐色（10YR2/2）地山粒、地山ブロック、炭化物を含み、粘性あり。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ３３土坑（第61図、図版22）

［検出位置］　MH55・56グリッド地山面で検出した。

［平面形・断面形］　平面形は細長い不整形で、断面形は逆台形に近い。

［規模］　長さ235cm、幅64～80cm、深さ17～24cmである。

［長軸方向］　N－48°－E

［埋土］　1．黒褐色(10YR2/2)炭化物微量、軽石粒。しまりあり。2．黒褐色(10YR3/2)炭化物少量。しまりあり。　3．暗褐色（10YR3/4）地山粒微量。しまりあり。　4．黒褐色（10YR3/2）炭化物少量。しまりなし。　5．暗褐色（10YR3/3）炭化物、地山粒。しまりあり。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ４０土坑（第61図、図版23）

［検出位置］　MI55グリッド地山面で検出した。中世の掘立柱建物跡柱穴に切られている。

［平面形・断面形］　平面形は円形、断面形は逆台形である。

［規模］　63cm×67cm、深さ10～13cmである。

［埋土］　1．黒褐色（10YR2/3）しまりあり。　2．暗褐色（10YR3/3）炭化物、焼土粒。しまりあり。　3．褐色（10YR4/4）しまりあり。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ４１土坑（第61図、図版23）

［検出位置］　MG55・56グリッド地山面で検出した。

［平面形・断面形］　平面形はほぼ円形、断面形は不整形であるが、鍋底形に近い。

［規模］　52cm×61cm、深さ10～21cmである。

［埋土］　黒色（10YR1.7/1）地山ブロック、軽石粒混入。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ４５土坑（第61図）

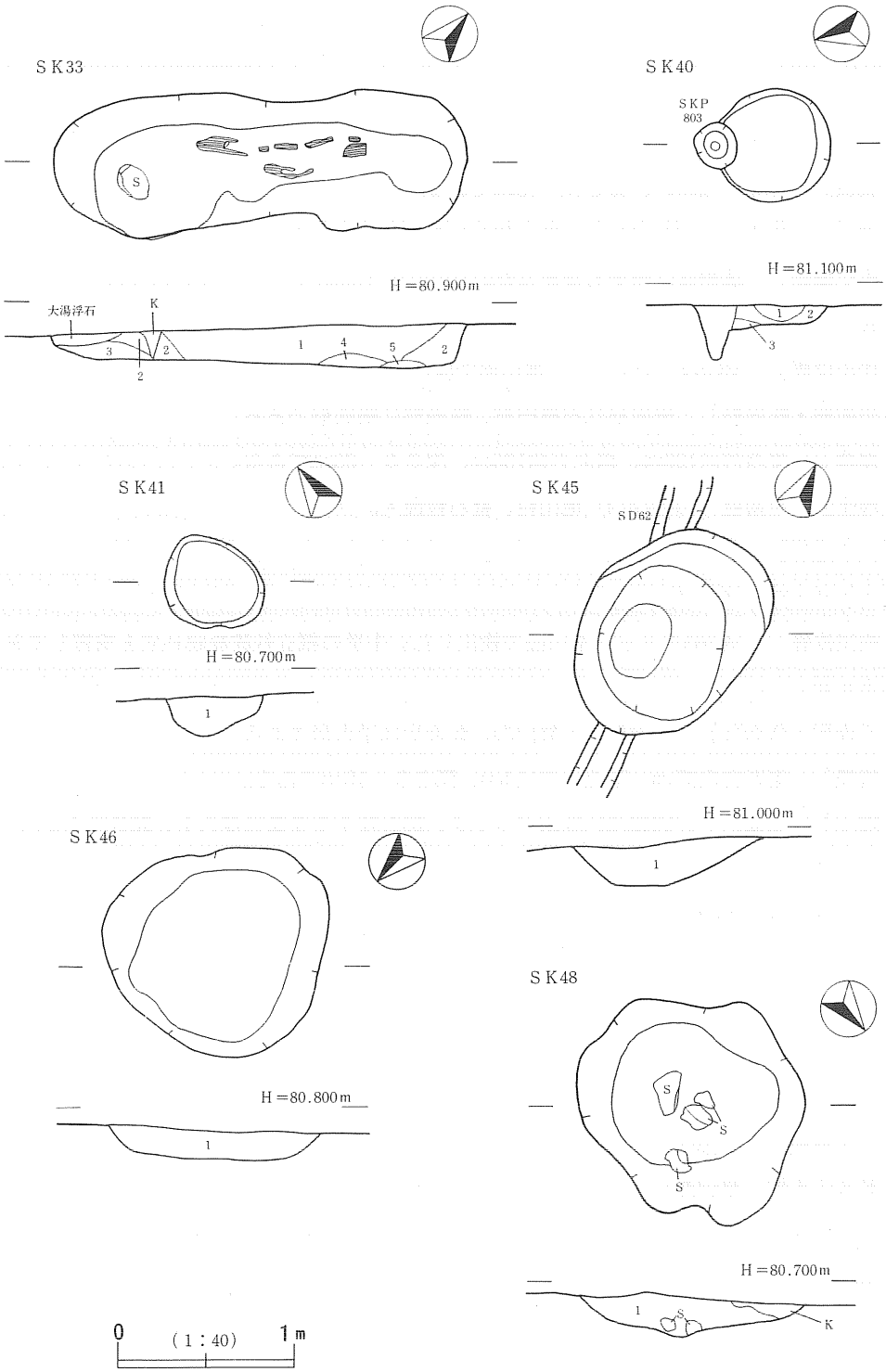
［検出位置］　MI59グリッド地山面で検出した。SD62と重複しており、本遺構が新しい。

［平面形・断面形］　平面形は楕円形、断面形は逆台形である。

［規模］　長軸128cm、短軸96cm、深さ21～25cmである。

［長軸方向］　N－10°－E

［埋土］　黒褐色（10YR2/2）地山粒、地山ブロック、軽石粒、礫を含み、粘性なし。



第59図　SK 33・40・41・45・46・48 土坑実測図

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ４６土坑（第61図）

［検出位置］　MH59グリッド地山面で検出した。

［平面形・断面形］　平面形は不整円形、断面形は逆台形である。

［規模］　120cm×125cm、深さ13～15cmである。

［埋土］　黒色（10YR2/1）地山粒、軽石粒やや多量に混入し、粘性なし。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ４８土坑（第61図）

［検出位置］　MG59・60グリッド地山面で検出した。

［平面形・断面形］　平面形は不整円形、断面形は鍋底形である。

［規模］　東西方向120cm、南北方向136cm、深さ８～23cmである。

［埋土］　黒褐色（10YR2/2）地山粒、軽石粒混入。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ４９土坑（第62図）

［検出位置］　MG60グリッド地山面で検出した。中世の掘立柱建物跡柱穴と重複しており、本遺構が新しい。

［平面形・断面形］　平面形は不整円形、断面形は逆台形である。

［規模］　東西方向97cm、南北方向114cm、深さ８～10cmである。

［埋土］　黒褐色（10YR2/3）地山ブロック、軽石粒やや多量に混入し、粘性なし。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ５０土坑（第62図）

［検出位置］　MH60・61グリッド地山面で検出した。

［平面形・断面形］　平面形は不整形。坑底には凹凸があり、断面形は不整形である。

［規模］　東西方向102cm、南北方向90cm、深さ10～16cmである。

［埋土］　黒褐色（10YR2/2）地山粒やや多量、炭化物が混入し、サラサラしている。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

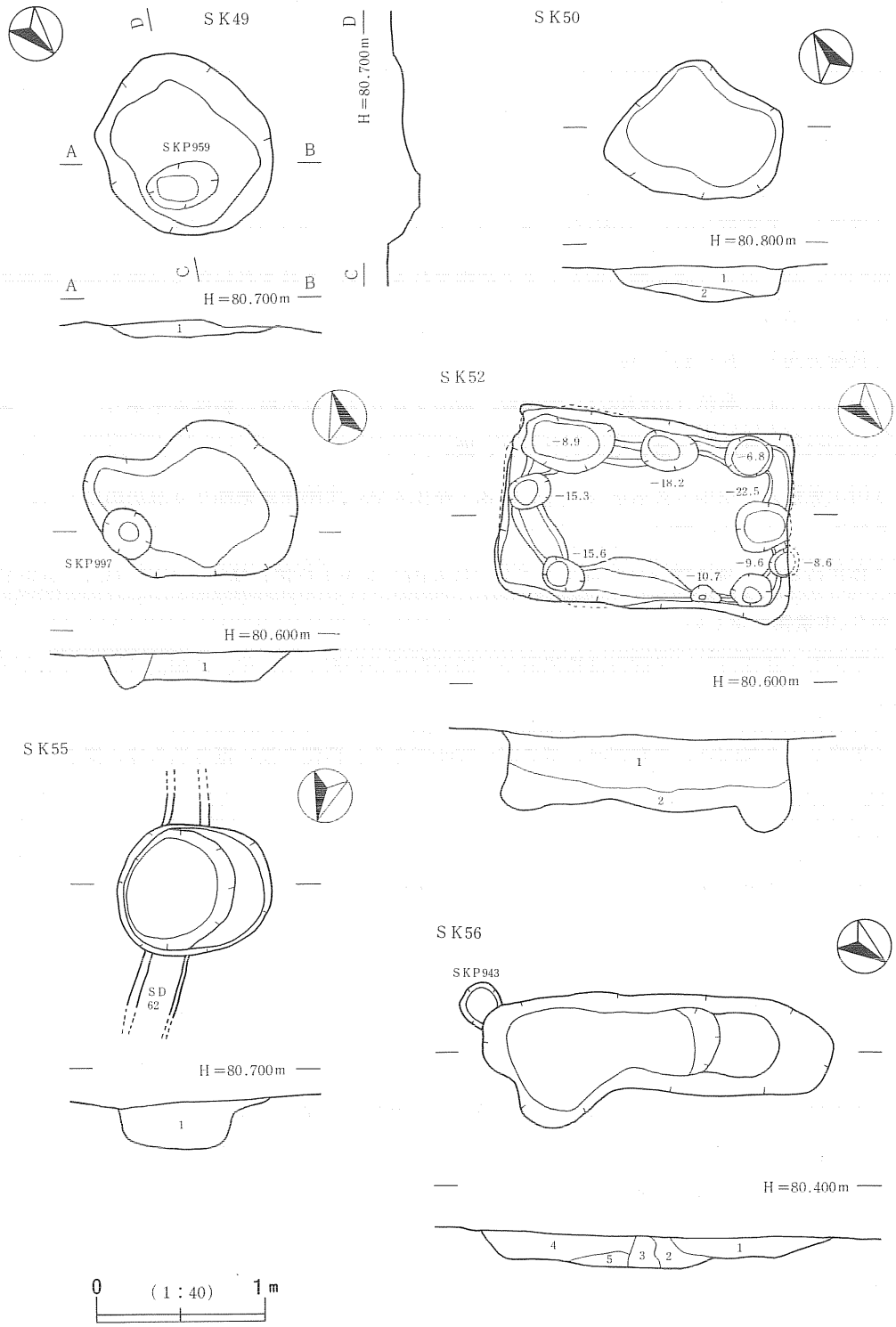
ＳＫ５１土坑（第62図）

［検出位置］　MG61グリッド地山面で検出した。中世の掘立柱建物跡柱穴と重複しており、本遺構が古い。

［平面形・断面形］　平面形は不整円形、断面形は逆台形である。

［規模］　東西方向122cm、南北方向96cm、深さ15～18cmである。

［埋土］　黒褐色（10YR2/2）地山粒、地山ブロック、軽石粒混入。



第60図　SK 49・50・51・52・55・56 土坑実測図

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ５２土坑（第62図、図版23）

［検出位置］　ME58グリッド地山面で検出した。

［平面形・断面形］　平面形は長方形。断面形は、柱穴様の掘り込みを除外すると台形に近い。

［規模］　北東側180cm、南西側164cm、南東側118cm、北西側114cm。深さ39～43cmである。坑底には、壁に沿って溝と柱穴様のピットが掘られている。それぞれに付した数字は、坑底からの深さである。

［長軸方向］　Ｎ－45°－Ｗ

［埋土］　１．黒色（10YR2/1）地山粒、地山ブロック、軽石粒。粘性若干あり。　２．褐色（10YR4/4）地山粒多量、地山ブロック、礫。

［出土遺物］　図化できなかったが、縄文土器片２点、土師器甕胴部片３点が出土した。

ＳＫ５５土坑（第62図）

［検出位置］　地山面で、MH65グリッド杭を中心とする位置に検出した。SD62と重複しており、本遺構が新しい。

［平面形・断面形］　平面形は楕円形で、断面形は逆台形であるが、西側に浅い掘り込みが伴う。

［規模］　長軸92cm、短軸79cm、深さ20～29cmである。西側の浅い掘り込みは、深さ４cmである。

［長軸方向］　Ｎ－74°－Ｅ

［埋土］　黒色（10YR1.7/1）軽石粒混入し、粘性若干あり。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ５６土坑（第62図）

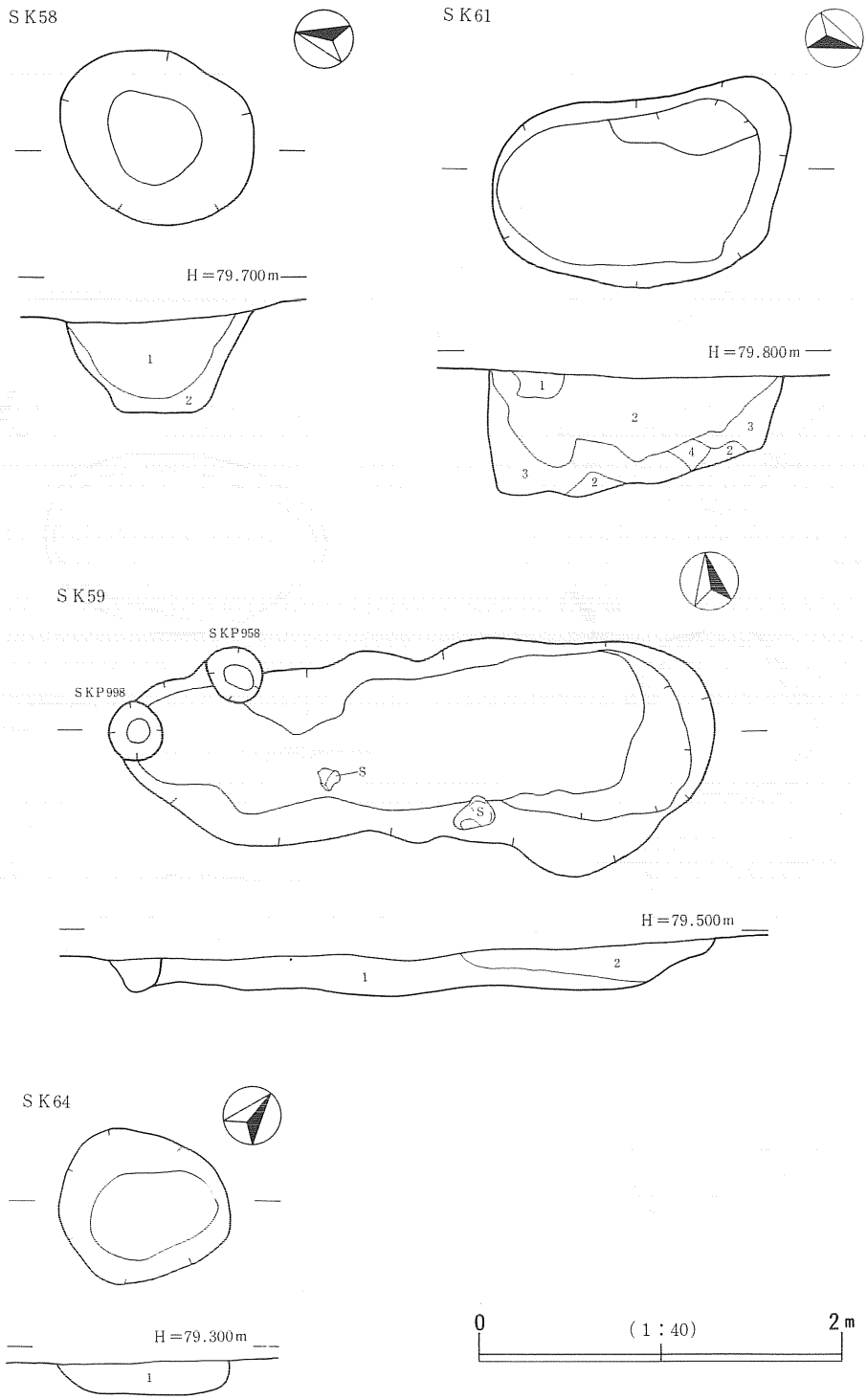
［検出位置］　ME63・64グリッド地山面で検出した。中世の掘立柱建物跡柱穴と重複しており、本遺構が新しい。

［平面形・断面形］　平面形は細長い不正形で、断面形は逆台形を２つ重ねたような形である。

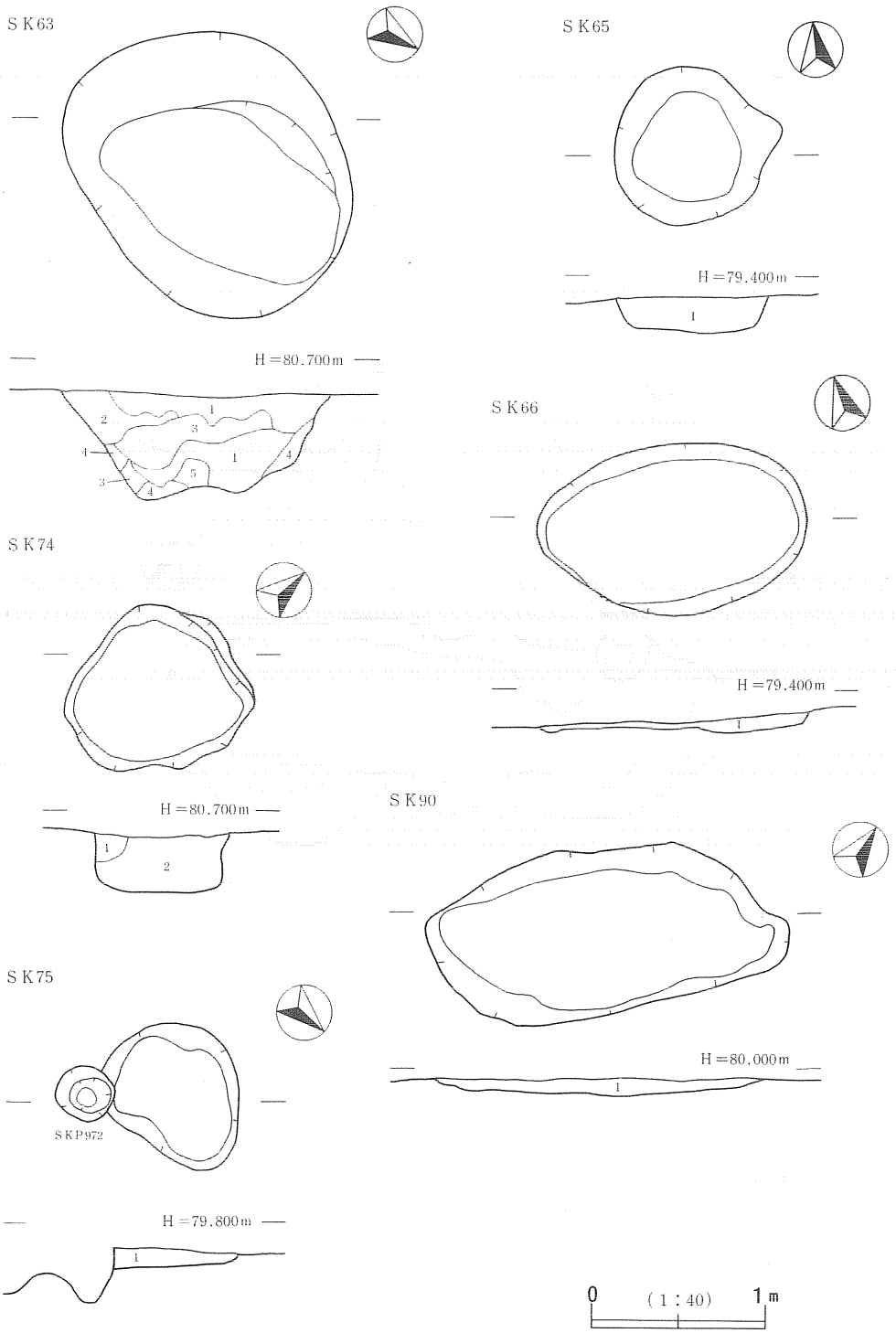
［規模］　長さ208cm、幅60～84cm、深さ12～19cmである。

［長軸方向］　Ｎ－35°－Ｗ

［埋土］　１．黒色（10YR2/1）軽石粒。　２．黒褐色（10YR3/2）地山粒、軽石粒。　３．褐色（10YR4/4）地山粒多量、地山ブロック。　４．黒褐色（10YR2/3）地山粒多量、地山ブロック、炭化物。　５．黒褐色（10YR2/2）地山粒。



第61図　SK 58・59・61・64 土坑実測図



第62図　SK 63・65・66・74・75・90 土坑実測図

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ５８土坑（第63図、図版23）

［検出位置］　MC65グリッド地山面で検出した。

［平面形・断面形］　平面形はほぼ南北に長軸を有する楕円形で、断面形は逆台形である。

［規模］　長軸112cm、短軸92cm、深さ51～55cmである。

［長軸方向］　Ｎ－10°－Ｅ

［埋土］　１．黒褐色（10YR2/3）地山粒多量、軽石粒。ボソボソしている。　２．褐色（10YR4/6）地山粒多量、地山ブロック、礫。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ５９土坑（第63図、図版23）

［検出位置］　MB65、MC65グリッド地山面で検出した。中世の掘立柱建物跡柱穴と重複し、本遺構が古い。

［平面形・断面形］　細長い不整形で、断面形は逆台形である。

［規模］　長さ327cm、幅102～133cm、深さ15～26cmである。

［長軸方向］　Ｎ－82°－Ｗ

［埋土］　１．褐色（10YR4/4）地山粒多量、地山ブロック。　２．黒色（10YR2/1）軽石粒、礫。サラサラしている。１～２層にかけて角礫を含む。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ６１土坑（第63図）

［検出位置］　MG62グリッドを中心とする地山面で検出した。

［平面形・断面形］　平面形は不整円形。坑底が水平でなく、北から南に傾斜している。このため、断面形は歪んだ方形である。

［規模］　東西方向117cm、南北方向165cm、深さ42～68cm。

［埋土］　１．黒褐色（10YR3/1）地山粒やや多量、軽石粒、炭化物。２．褐色（10YR4/4）地山粒多量、地山ブロック、軽石粒、炭化物。　３．黒褐色（10YR3/2）地山粒やや多量、地山ブロック。粘性ややあり。　４．暗褐色（10YR3/3）地山粒やや多量。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ６３土坑（第64図）

［検出位置］　MG62グリッド地山面で検出した。

［平面形・断面形］　平面形は不整円形。断面形は、坑底に凹凸が認められるが、逆台形に近い。

［規模］　東西方向151cm、南北方向181cm、深さ42～63cm。

［埋土］　１．黒褐色（10YR3/2）地山粒、炭化物。　２．暗褐色（10YR3/3）地山粒、軽石粒。　３．黒褐色（10YR2/2）地山粒、軽石粒。　４．褐色（10YR4/4）炭化物。　５．褐色（10YR4/6）地山ブロック。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ６４土坑（第63図）

［検出位置］　MA64グリッド地山面で検出した。

［平面形・断面形］　平面形は不整円形、断面形は鍋底形。

［規模］　86cm×95cm。深さ16～19cm。

［埋土］　黒褐色（10YR2/2）地山粒、軽石粒、炭化物を含む。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ６５土坑（第64図）

［検出位置］　MA65グリッド杭付近の地山面で検出した。

［平面形・断面形］　平面形は不整円形、断面形は逆台形である。

［規模］　91cm×97cm。深さ17～21cm。

［埋土］　黒褐色（10YR2/2）地山粒、軽石粒。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ６６土坑（第64図）

［検出位置］　MA65、MB65グリッド地山面で検出した。

［平面形・断面形］　平面形は楕円形、断面形は、坑底が平坦でなく、不整形である。

［規模］　長軸155cm、短軸99cm、深さ２～10cm。

［長軸方向］　Ｎ－83°－Ｅ

［埋土］　黒褐色（10YR2/3）地山粒やや多量に含む。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ７４土坑（第64図、図版24）

［検出位置］　MH62グリッド地山面で検出した。

［平面形・断面形］　平面形は不整円形、断面形は鍋底形。

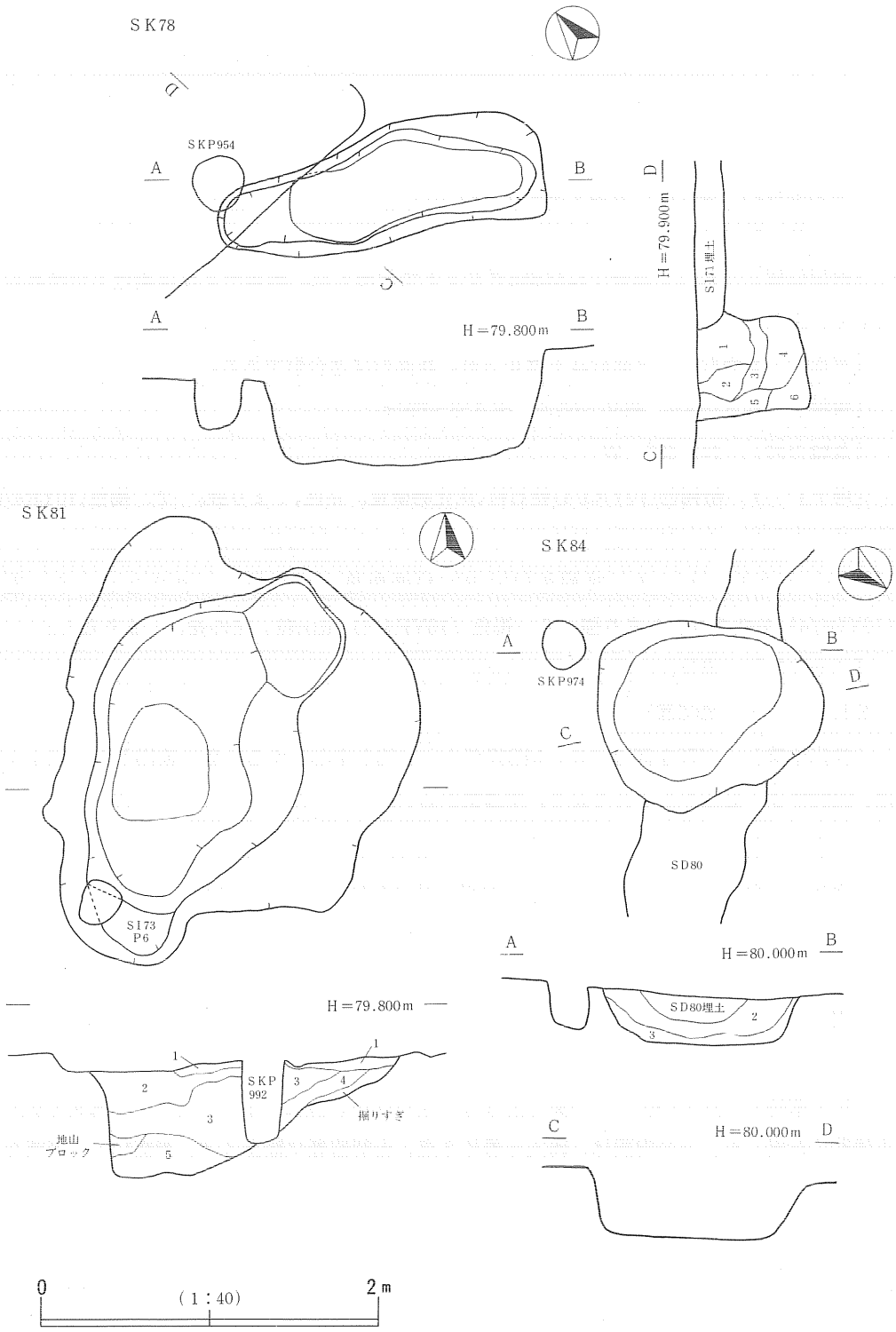
［規模］　95cm×109cm。深さ31～36cm。

［埋土］　１．褐色（7.5YR4/4）礫。粘性あり、しまり強。　２．暗褐色（10YR3/3）礫多量。粘性、しまりあり。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ７５土坑（第64図、図版24）

［検出位置］　MC63グリッド地山面で検出した。中世の掘立柱建物跡柱穴と重複しており、



第63図　SK 78・81・84 土坑実測図

本遺構が古い。

［平面形・断面形］　平面形は不整円形、断面形は逆台形と推定される。

［規模］　77cm×91cm。深さ６～12cm。

［埋土］　黒褐色（10YR2/3）礫少量。粘性、しまりあり。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ７８土坑（第65図）

［検出位置］　SI71を調査中にMB55グリッドで検出した。暗褐色または褐色土で埋められており、SI71より古い。

［平面形・断面形］　平面形は不整長方形、断面形は逆台形である。

［規模］　長さ194cm、幅40～64cm、深さ58～69cm。

［長軸方向］　Ｎ－58°－Ｗ

［埋土］　１．暗褐色(10YR3/4)軽石粒、炭化物微量。粘性、しまり強。　２．褐色(10YR4/6)軽石粒、炭化物、焼土粒微量。粘性あり、しまり強。３．暗褐色（10YR3/3）地山ブロック。粘性強、しまりなし。４．暗褐色(10YR3/4)礫微量。粘性強、しまりなし。５．褐色（10YR4/4）粘性あり、しまり強。６．褐色（10YR4/6）地山粒。粘性強、しまりなし。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ８１土坑（第65図）

［検出位置］　SI73を調査中に、ME67グリッド杭を中心とする位置に検出した。埋土上面は、SI73により貼床がなされており、本遺構が古い。

［平面形・断面形］　平面形は不整円形、断面形は逆台形である。

［規模］　東西方向228cm、南北方向268cm、SI73床面からの深さ65cm。

［埋土］　１．褐色（10YR4/4）地山粒、礫多量。しまり強。SI73貼床。　２．黒褐色（10YR2/3）炭化物少量、礫多量。粘性強、しまりなし。　３．黒褐色（10YR2/3）炭化物多量、礫少量。粘性強。　４．褐色（10YR4/4）粘性、しまりあり。　５．黒褐色（10YR2/2）地山粒、地山ブロック。

［出土遺物］　ＳＩ73出土土師器と接合した65のほか、図化できなかったが、縄文土器片と土師器片が出した。その内訳は、縄文土器片２点、土師器甕口縁部３点、胴部13点、底部３点である。

ＳＫ８４土坑（第65図）

［検出位置］　MC61・62グリッド地山面で検出した。SD80と重複しており、本遺構が古い。

［平面形・断面形］　平面形は不整円形、断面形は逆台形である。

［規模］　114cm×134cm。深さ40～42cm。

［埋土］　１．黒褐色（10YR2/3）炭化物少量、礫多量、地山粒、地山ブロック。粘性、しまりあり。　２．黒褐色（10YR3/2）礫多量。粘性、しまりあり。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ９０土坑（第64図）

［検出位置］　MG65・66グリッド地山面で検出した。

［平面形・断面形］　平面形は不整形、断面形は鍋底形。

［規模］　長さ210cm、幅90～100cm、深さ４～11cm。

［埋土］　黒褐色（10YR2/3）礫多量、炭化物少量。粘性あり。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ９３土坑（第44図、図版13）

［検出位置］　MB61、MC61グリッド地山面で検出した。SN77、SK79、SD80と重複しており、本遺構が最も古い。

［平面形・断面形］　平面形はやや歪んだ楕円形、断面形は鍋底形と推定される。

［規模］　長軸237cm、短軸105～136cm、推定の深さ23cmである。

［長軸方向］　Ｎ－56°－Ｗ

［埋土］　暗褐色（10YR3/3）

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

（３）焼土遺構

ＳＮ０６焼土遺構（第66図）

［検出位置］　MD52グリッド地山面で検出した。

［平面形・規模］　70cm×120cmの規模の不整円形の掘り込みの中に、焼土がドーナツ状に認められた。焼土範囲は、64cm×77cmである。

［埋土］　最下層に炭の層があり、その上に焼土層が認められる。

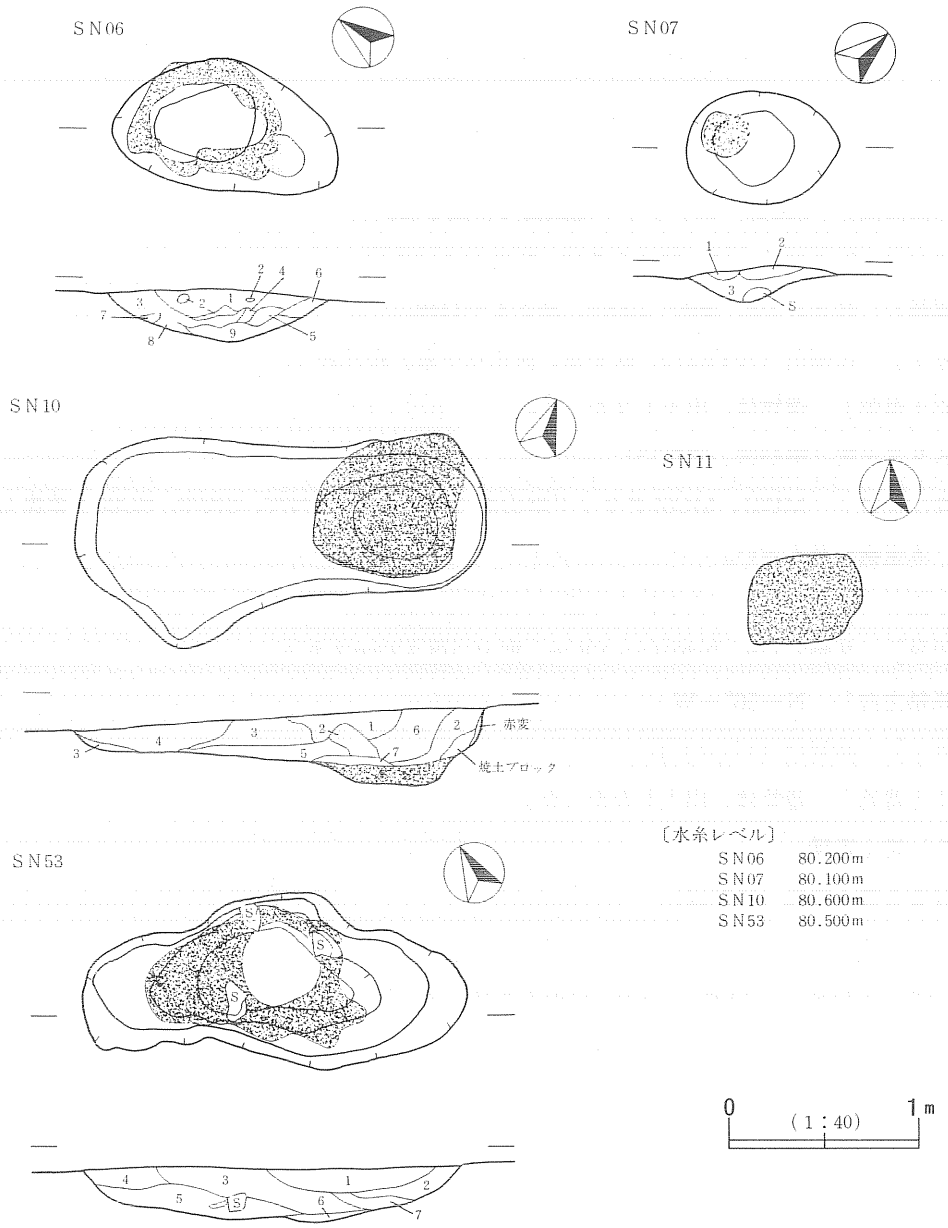
［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

土層注記　１．黒褐色（10YR3/2）炭、焼土。しまり強。　２．明黄褐色（10YR7/6）粘土。　３．暗褐色（7.5YR3/4）焼土、焼土ブロック。しまりなし。　４．赤褐色（5YR4/6）焼土層。　５．明褐色（7.5YR5/6）焼土層。　６．黒褐色(10YR2/3)地山粒、焼土、炭。　７．撹乱。８．極暗褐色(7.5YR2/3)炭、焼土。しまりなし。　９．黒色(7.5YR1.7/1)炭化物層。

ＳＮ０７焼土遺構（第66図）

［検出位置］　MC53グリッド地山面で検出した。

［平面形・規模］　23cm×25cmの不整円形の範囲に、焼土を検出した。焼土の下にはくぼみが認められた。くぼみの規模は、60cm×80cmの楕円形で、深さ17cmである。底面は、焼けていなかった。



第64図　SN 06・07・10・11・53 焼土遺構実測図

［埋土］　埋土上面に焼土層が浮いた状況がみられる。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

土層注記　1．赤褐色（5YR4/6）焼土層。　2．黒褐色（10YR2/3）地山粒。しまりなし。　3．褐色（7.5YR4/4）炭、焼土。しまりなし。

ＳＮ１０焼土遺構（第66図）

［検出位置］　MF56、MG56グリッド地山面で検出した。SI42と重複しており、本遺構が新しい。

［平面形・規模］　長楕円形の短軸部を少し絞ったような平面形で、長さ217cm、幅79～111cmである。焼土および赤変部分は、長い掘り込みの一方（東側）に片寄って検出された。掘り込みの深さは、西側で10cm、東に行くにしたがい深くなり30cmとなる。

［埋土］　不規則な堆積で、人為堆積の可能性がある。

［出土遺物］　図化できなかったが、土師器甕胴部片９点、同底部片５点が出土した。

土層注記　１．黒色（10YR2/1）軽石微量、焼土。粘性、しまりあり。　２．暗褐色（7.5YR3/4）焼土、地山粒多量。粘性、しまりあり。　３．黒褐色（10YR3/2）地山粒多量、軽石、礫。しまり強。　４．暗褐色（10YR3/3）軽石多量。しまり強。　５．黒褐色（10YR2/3）軽石少量、炭多量。粘性、しまりあり。　６．黒褐色（10YR3/2）軽石、焼土多量、炭少量。粘性、しまりあり。　７．明褐色（7.5YR5/6）炭、焼土。粘性なし、しまりあり。

ＳＮ１１焼土遺構（第66図）

［検出位置］　ME51グリッド地山面で検出した。

［規模］　48cm×60cmの範囲に焼土が認められた。掘り込み等はなかった。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

ＳＮ５３焼土遺構（第66図）

［検出位置］　ME59、MF59グリッド地山面で検出した。

［平面形・規模］　細長い不整形プランの掘り込みが認められ、長さ203cm、幅60～92cmの規模である。焼土は、この掘り込みの埋土中に検出された。70cm×116cmの範囲にみられるが、ドーナツ状になっており、中央部分には焼土が認められない。

［埋土］　６層部分が赤変しており、火を使用した痕跡が認められる。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

土層注記　１．黒褐色（10YR3/2）軽石少量。しまり強。　２．黒褐色（10YR2/3）礫、軽石。粘性、しまりあり。　３．赤褐色（5YR4/6）焼土層。　４．黒褐色（7.5YR2/2）焼土、礫。しまりなし。　５．暗褐色（7.5YR3/4）礫、炭微量。粘性、しまりなし。　６．暗褐色（7.5YR3/3）粘性あり。　７．暗褐色（7.5YR3/3）炭多量、礫、焼土微量。粘性あり。

（４）溝状遺構

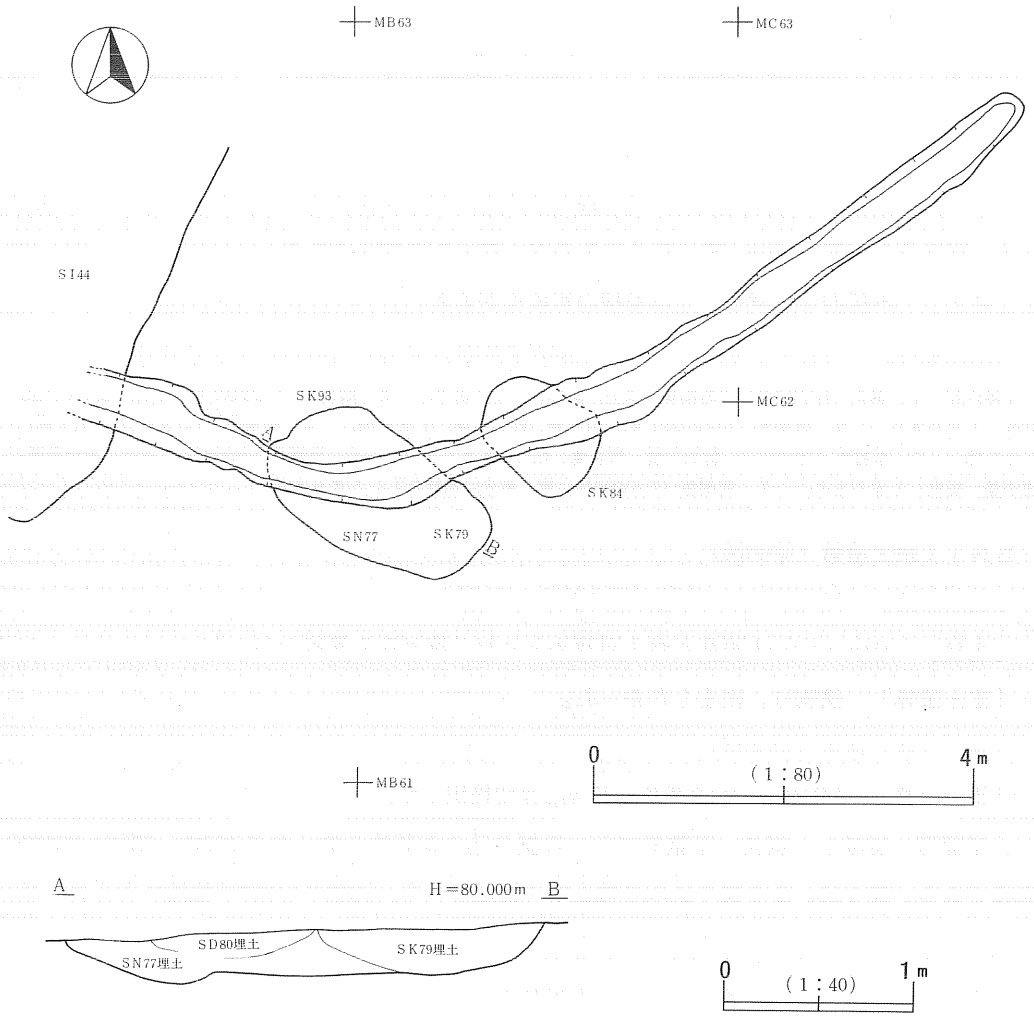
ＳＤ６２溝状遺構（第67図）

［検出位置］　調査区東端に沿って南北に長く位置する。地山面でプランを検出した。

［規模］　長さ41.95m、幅14～45cm、深さ5.9～13cmである。表土から地山までの深さを考えると、本来の全長は、これを上回るものと推測される。

［埋土］　黒色（10YR2/1）地山粒、軽石を含む。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。



第65図　SD 80 溝状遺構実測図

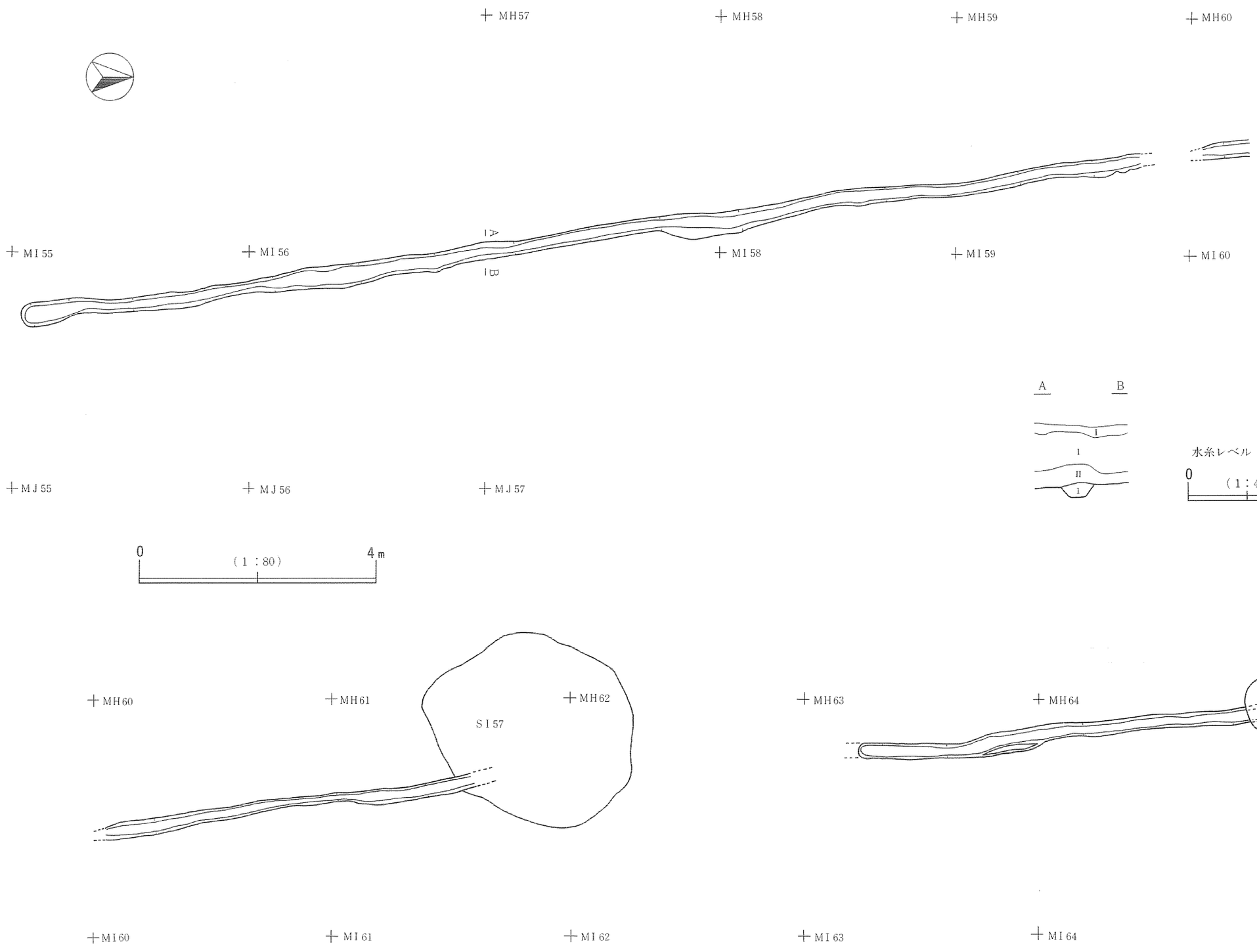
ＳＤ８０溝状遺構（第68図、図版25）

［検出位置］　調査区北西側、MA～MDライン、61～63ラインの間の地山面で溝状プランを検出した。東西に弓なりに位置する。SK84、SN77、SI44等と重複し、本遺構が最も新しい。

［規模］　長さ11.26m、幅32～68cm、深さ8.5～15.1cmである。

［埋土］　黒褐色（10YR2/2）礫微量、地山粒少量含む。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。



第66図　SD 62 溝状遺構実測図

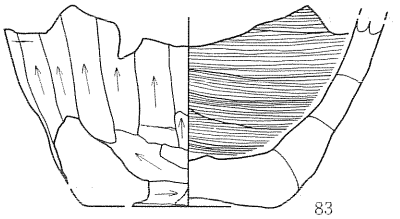
第２節　遺構外出土遺物(第69・70図、図版41)

遺構外から出土した遺物の内訳と点数は、縄文土器31点、石器剥片69点、土師器658点、須恵器５点である。土器は、小破片が大半を占め、磨滅が著しかった。これは、特に縄文土器について顕著であった。

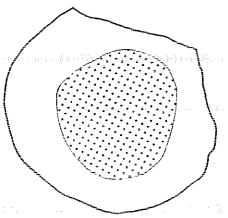
出土地点は、縄文土器の大半が、調査区北半で出土しており、MI64、ME67グリッドに若干多く認められる。石器剥片は、53ライン以北で出土しており、MI64・65グリッドに多く認められる。土師器は、調査区のほぼ全域に出土し、特にMI65グリッドに集中している。須恵器は、調査区南側に１点、その他は北半に出土している。

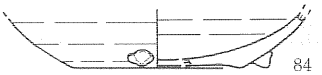
以上のように、MI64・65グリッドに集中する傾向が認められるが、これは北側から小さな沢がこの部分に入ってきているため、そこに流入したものと考えられる。

83は、MI65グリッド第II層中出土の土師器甕である。底部中央部に砂粒が付着している。84は、MG59グリッド第II層中出土の関西系錆釉土瓶の底部片である。年代は、18～19世紀。85は、MA62グリッド第II層出土で、縦長の剥片の右側縁に調整を加えている。86は、MC62グリッド第II層下部出土の石箆で、両面に大きな剥離を行ったのち、縁辺に細かい調整を加えている。87は、MI58グリッド第Ｉ層出土で、主要剥離面の背面縁辺に細かい調整を加えている。88は、調査区南東側で表面採集されたもので、両側縁に細かい調整が施されたものである。89は、MH58グリッド第II層出土の礫石器で、棒状の先端部と側面部に擦った面が認められる。90は、MA64グリッド第II層下部出土の砥石である。６つの面すべてを使用している。



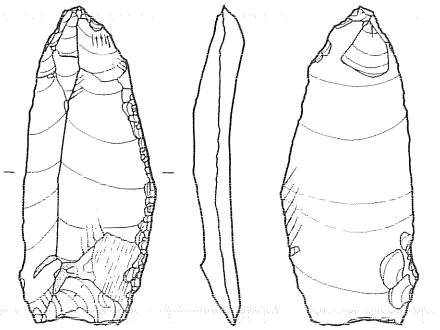
83



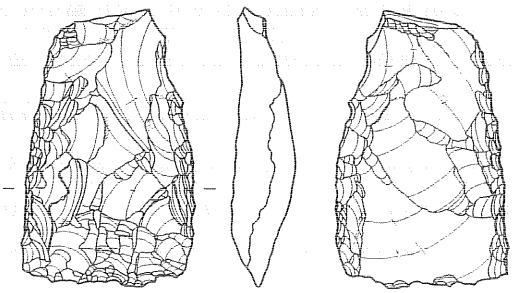


84

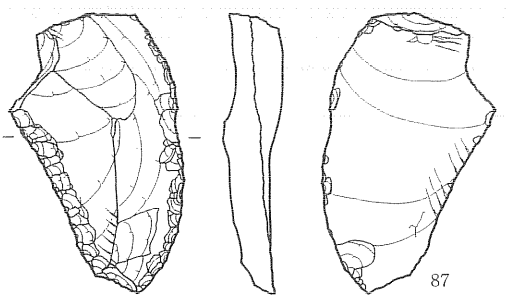
0　（1：3）　10cm



85



86



87

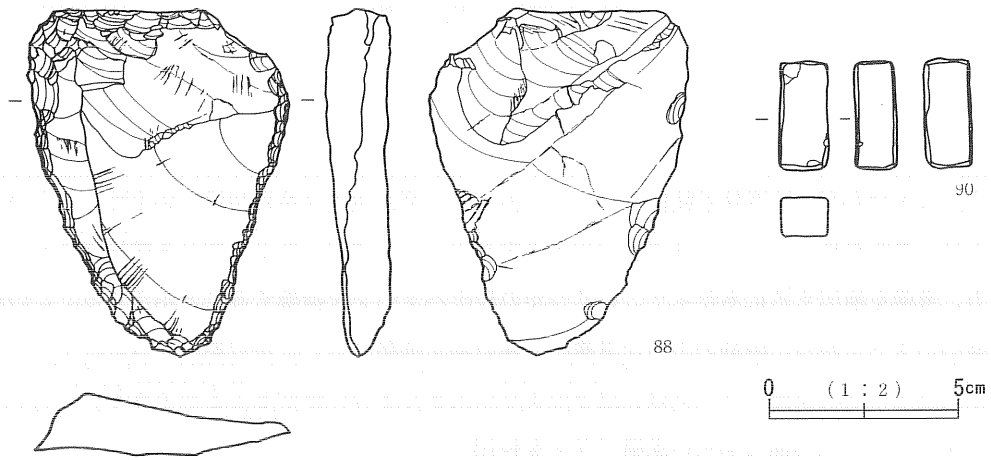
85～87のみS＝½

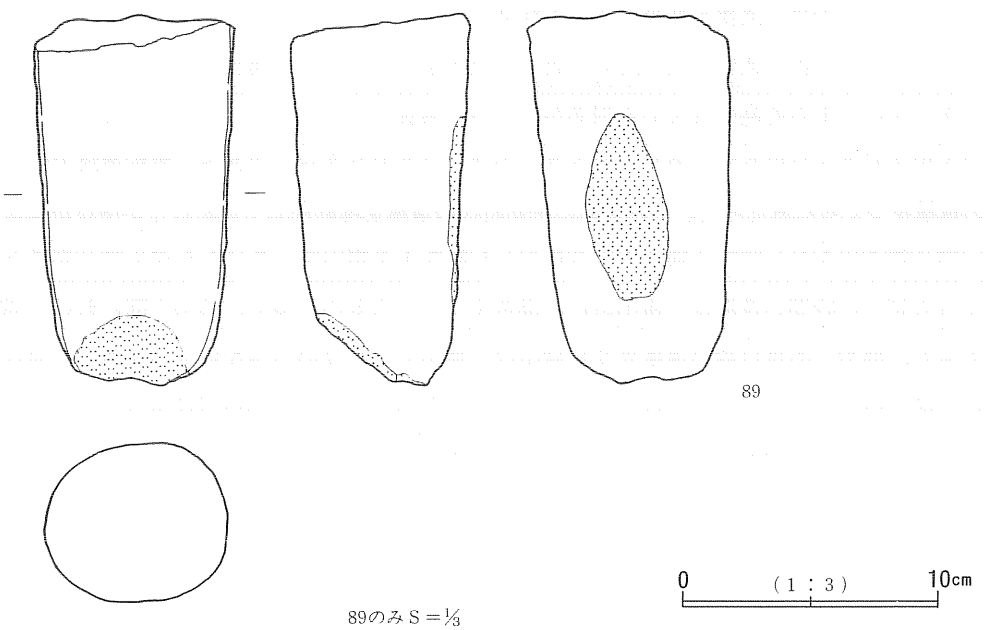
0　（1：2）　5m

番号	出土地点	器種	成形	調整	外面	色調	外面	胎土	焼成	法量 cm		
					内面		内面			口径	器高	底径
83	MI65Ⅱ層	土師器 甕	非ロクロ	ケズリ		7.5YR 7／4 にぶい橙色		1㎜～2㎜大の	良	−	−	7.5
				ヘラナデ		2.5Y 7／4 浅黄色		砂粒多量				
84	MG59Ⅱ層	銹釉土 瓶	ロクロ	底面ケズリ		5YR 5／2 灰褐色		緻密	良	−	−	(6.7)
				銹釉	装飾化した三足の貼付(ツマミ出し)	2.5YR 3／1 暗赤灰色						

番号	出土位置	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	石質
85	MA62Ⅱ層	8.4	3.6	1.3	28.3	頁岩
86	MC62Ⅱ層	7.4	4.6	1.7	58.2	珪質頁岩
87	MI58Ⅱ層	7.4	4.7	1.6	41.0	頁岩

第67図　遺構外出土遺物(1)





89のみＳ＝⅓

番号	出土位置	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	石質
88	表採	9.2	6.9	1.7	90.5	頁岩
89	MH58Ⅱ層	(14.6)	(7.8)	(7.1)	994.9	凝灰岩
90	MA64Ⅱ層	2.9	1.3	1.1	5.9	凝灰岩

第68図　遺構外出土遺物（２）

第5章　まとめ

1．餌釣遺跡での遺構検出パターンと遺構の帰属時期

本遺跡では80余りの遺構が検出されたのであるが、竪穴住居跡等の時期を特定できるもののほかに、遺物がほとんど出土せず、時期の特定ができない遺構、特に土坑が多数検出された。一方、遺構を検出するにあたって、いくつかの検出パターンを指摘することができる。この遺構検出パターンから、時期の不明な遺構の帰属時期を推測することが可能となった。

本遺跡での遺構検出パターンは、以下のように大きく3つに分けることができる。

パターンA：地山面で黒色の遺構プランを検出

パターンB：他の遺構を調査中に検出

①単に遺構が重複している場合

②古い遺構を埋め戻して新しい遺構をつくっている場合

パターンC：土の乾燥の度合いの相異からわかる場合

以上の3パターンのうち、最も注意されるのは、B②のパターンである。餌釣遺跡では、中世の遺構をつくるにあたって、それ以前の平安時代の遺構を埋め戻していたことが明らかになった。埋め戻すにあたっては、地山土を主体とした褐色土を用いている。したがって、中世とそれよりも新しい時期の遺構は、検出時には黒色土プランのものが多く、地山上面において明確であった。他方、中世以前の遺構プラン検出は、地山と見分けのつかないものが多く、中世以降の遺構を調査していて、その掘り方がはっきり出なかった場合に存在が推定された。このパターンで検出された遺構は、以下のものである。

ＳＩ　31・34・37・38・42・71・73・91・92

ＳＫ　14・35・70・89・90

したがって、これらの遺構の帰属時期は、中世の比較的古い時期かそれ以前ということになる。

B②のパターンで、平安時代の遺構により埋め戻されているものとしては、

ＳＫ　78・81・83・85・87・88・93　　がある。

B①のパターンで、中世の掘立柱建物跡柱穴により、切られているものは、

ＳＩ　31

ＳＫ　15・40・51・59・75

ＳＮ　36　　である。

B①のパターンで、中世の掘立柱建物跡柱穴を切っているものは、

第２表　遺構の帰属時期

時期の特定される遺構		ある程度帰属時期が推定される遺構		
縄文時代	ＳＩ 38・57 ＳＮ 25			
平安時代	ＳＩ 34・37・42・44 71・73・91・92 ＳＫ 14・16・23・30 35・43・47・70 79・82・83・85 86・87・88・89 ＳＮ 77	ＳＫ 78・81 90・93	ＳＫ 15・40 51・59 75	ＳＫ 09・12・13・18 27・28・41・45 46・48・49・50 55・58 ＳＮ 06・07・10・11 ＳＤ 62・80
中世	ＳＩ 04・31・67・68 ＳＫ 54・69・94 ＳＮ 08・36 ＳＤ 60			
近現代				

ＳＮ08

Ｂ①のパターンで、平安時代の遺構により、切られているものは、

ＳＮ　77

Ｂ①のパターンで、中世の掘立柱建物跡柱穴を切ってつくられた後、再び柱穴により切られているもの

ＳＫ　54・94

パターンＡのものは、

ＳＩ　04・44・67・68

ＳＫ　09・12・13・18・27・28・33・41・46・48・49・50・55・56・58・69・74

ＳＮ　06・07・08・10・11・36

ＳＤ　60・62・80　　である。

パターンＣのものは、ＳＩ57である。

以上を一覧表にしたものが、第2表である。

最後に、ＳＩ44・91・92相互の関係およびこれらと重複しているＳＫ83・85・87・88との関係について、触れておきたい。まず、竪穴住居跡相互の関係では、ＳＩ44を最初に検出しており、貼床を施しさらにＳＩ91を埋めていることから、これが最も新しい時期のものである。また、ＳＩ44の貼床出土遺物とＳＩ91埋土出土遺物が接合していることから、ＳＩ44に先行する竪穴住居跡は、ＳＩ91ということになる。したがって、ＳＩ91、ＳＩ92の順に古くなる。次に、竪穴住居跡と土坑との関係であるが、ＳＩ91埋土中出土遺物とＳＫ85出土遺物が接合している。ＳＩ91埋土は、ＳＩ44をつくる時の埋め戻した土であり、ＳＩ91埋土は自然堆積と推測される黒色土が認められないことから、ＳＩ44はＳＩ91廃棄後ほとんど時間を経ずしてつくられたものと思われる。以上から、ＳＫ85は、ＳＩ44構築時には開口しており、さらにＳＩ91と同時期のものと推測される。ＳＫ87についても、本土坑出土遺物とＳＩ44貼床出土遺物が接合していることから、ＳＫ85と同様に考えてよいものと思われる。なお、ＳＫ83・88については、ＳＩ44より古いことは明らかであるが、少なくともＳＩ91と同時期か、それより古いかのどちらかであろう。

2．平安時代の遺構と出土土器について

（1）遺構について

平安時代の遺構には、竪穴住居跡、土坑、焼土遺構がある。ここでは、竪穴住居跡について述べてみたい。竪穴住居跡は、全部で8軒検出された。8軒のうち、ＳＩ44を除いては、人為的に埋め戻された竪穴住居跡であった。このため、地山面でプラン確認が可能であったのは、ＳＩ44のみであった。残りのほとんどの竪穴住居跡は、中世の掘立柱建物跡柱穴を調査中に、柱穴の掘り方が明確でなかったことから、初めて存在が明らかになったのである。ここでは、いくつかの点について、竪穴住居跡の特徴を浮き彫りにしてみたい。

［分布と立地］　調査区は、東西に長い舌状の台地の基部に近い部分にあり、北側及び南側には沢が形成されている。竪穴住居跡は、調査区のほぼ全域に分布しているが、台地基部により近い東側で希薄になる傾向が認められる。ＳＩ37，44・91・92，73については、台地の縁辺部に立地しており、その他は、台地中央に寄る傾向がある。

［主軸方向］　92°～133°の間にすべて納まる。90°が真東となるので、東から南東にかけての方角を向いていることになる。

［柱穴配置］　ＳＩ71を除いて、方形のプランの隅に主柱穴を配置している。

［壁溝］　壁溝を有するのは、ＳＩ37と42である。37は、カマド部分と南側の一部を除いた壁際に認められ、42は、カマドを付設する東側壁際にのみ認められた。

［貯蔵穴］　ＳＩ34・42・73の３軒に認められた。このうち、２軒についてはカマド右脇に貯蔵穴を設けている。また、ＳＫ85・87として調査した土坑が、ＳＩ91の貯蔵穴であった可能性がある。

［貼床］　ＳＩ42・44・91の３軒について認められた。

［カマド］　付設される位置は、東または南東壁に限られ、壁の中央部に設けられるものはほとんどない。ＳＩ92を除き、かならず中央から右ないしは左に寄った位置に設けられる。ＳＩ42と71は、中央から右寄りに、他の５軒は中央から左寄りに位置する。カマド付設位置とより近いコーナーからの距離の関係をみると、付設された壁の長さの1/3ないし1/4の距離をコーナーからとって、設けていることがわかる。但し、ＳＩ44については、1/4から1/5の距離となっている。

カマドのつくり方は、遺存が極端に悪いＳＩ73・91・92を除いて、芯材に自然石を組み、地山土を主体とした土をそれに肉付けしたものと推測される。ＳＩ73は、火床部分を一度掘り、その後褐色土を埋め戻している。

［営まれた時期］　埋土の堆積が、人為的なものが多いこと。さらに、この人為堆積が、中世の遺構（例えば掘立柱建物跡等）をつくるにあたり行われたとみるほうが自然であることから、中世に近接した時期を想定することが可能である。

（２）平安時代の土器について

出土土器は、土師器坏・甕・鍋・把手付土器、須恵器壺・甕である。

土師器坏は、ロクロ成形とそうでないものに分けられる。ロクロ成形のものは、底部の切り離しが回転糸切り無調整、非ロクロのものは、体部にケズリ調整を施す。内面を黒色処理したものは、両方に認められる。土師器甕は、ロクロ成形のものは認められない。内面は、ナデ調整。外面は、体部にケズリを行った後、口縁部に横ナデを施すものが多い。土師器鍋は、ＳＩ34カマド出土１点で、ロクロ成形後、下部にケズリ調整を行っている。底部に砂粒を付着させるいわゆる「砂底」の土師器は、11点出土している。出土地点の内訳は、遺構内10点、遺構外（MI65グリッド）１点である。遺構内は、ＳＩ42（４点）、ＳＩ44（１点）、ＳＩ73（４点）、ＳＩ91（１点）である。器種ごとの内訳は、坏１点、甕10点である。付着のしかたでは、全面９点、平底の中央部２点となっている。遺構内出土の「砂底」の土師器のほとんどは、その遺構に伴うものでなく、人為堆積土中からの出土である。１点のみ、ＳＩ44カマド支脚として転用されていた。把手付土器は、ＳＩ73埋土中から１点のみの出土である。

須恵器は、甕を除いてはロクロ成形である。

このうち、平安時代の遺構、特に竪穴住居跡に伴うと思われる土器となると、非常に少数である。主に、カマド出土の土器が、これにあたると考えられる。そして、貼床内から出土した土器は、それに先行するものとなるが、両者の間に、製作技法上または形態上の変化は認められない。

以上のことから、8軒の竪穴住居跡の営まれた時期は、それほど差がないであろうが、8軒が同時に営まれたものでなく、ＳＩ92→91→44という建て替えが行われていたこと。壁溝の有無、カマドの付設位置等に違いが認められることから、竪穴住居の構築時期に前後があったものと推測される。

3．中世の遺構について

竪穴建物跡は、4棟検出された。このうち、ＳＩ67は、張り出しの有無は不明であるが、検出パターンと柱穴配置から竪穴建物跡と推定されたものである。全貌が明らかなＳＩ04・31・68をみると、出入り口と推測される張り出し部を有し、炉またはカマドをもたない。さらに、上部構造を推測させる柱穴が配置されている、という共通点を指摘できる。出土遺物は、ＳＩ04は皆無、ＳＩ31・68は土師器片である。検出パターンでみると、ＳＩ04・68はパターンＡ、ＳＩ31はＢパターンである。規模をみると、ＳＩ04・68はほぼ同規模であり、ＳＩ31はその4倍以上である。ＳＩ04・68の柱穴配置は、方形プランの4隅と壁際であるが、ＳＩ31は壁際からやや内側に比較的整然と並んでおり、中央部にも認められる。以上のように、共通点のほかに、相異点も指摘されるとともに、ＳＩ31の特異性も認められる。また、検出パターンから、ＳＩ31が相対的に古い時期に営まれたものと推測される。

焼土遺構としたＳＮ08・36は、東北地方北部の中世城館跡で検出される、いわゆる「かまど状遺構」である。時期不明遺構に含めたＳＮ10は、煙道部が認められなかったが、「かまど状遺構」の可能性がある。県内で同種の遺構が検出されている遺跡に、妻の神Ⅲ、乳牛平、四十二館、小沢、塚の下、竜毛沢館がある。

空堀は、調査区北東隅にその一部を検出できた。その延長は、舌状台地を山地から切り離すように、南北に走るものと推測される。

4．餌釣遺跡の変遷と性格について（第71図）

餌釣遺跡は、調査を行うまでは、縄文時代と平安時代に営まれた遺跡であると考えられていた。そのことはまちがいではなかったが、本遺跡が中世にも営まれたことが初めて明らかになった意義は大きい。

第69図　変遷図

縄文時代における餌釣遺跡は、その様相に不明な点が多いが、竪穴住居跡からなる集落と推測される。調査区に占める遺構の配置に片よりがみられることから、集落は調査区外の東寄りに広がっている可能性がある（第Ⅰ期）。

その後、しばらくの間利用されない時期があり、平安時代になり再び集落として利用されるわけである（第Ⅱ期）。検出パターンから、ＳＩ44が竪穴住居跡の中で最も新しい時期のものと推測される。この後、平安時代の竪穴住居跡が埋め戻されて、掘立柱建物跡柱穴、竪穴建物跡等が構築される。ＳＩ31は、竪穴建物跡の中でも最も古い時期の遺構と考えられるから、ＳＩ44とＳＩ31とは、時期的に非常に近接していたと推測される。とすれば、ＳＩ31のような竪穴建物跡の構築時期が、平安時代末までさかのぼることも考えられる。このＳＩ31を埋めて、掘立柱建物跡がその後に建てられ、空堀を設ける時期へと移るわけである（第Ⅲ期）。空堀出土の陶磁器の年代が、12～13世紀と若干時間幅があるので、掘立柱建物跡と空堀が当初から同時に存在していたのかは、考慮が必要であろう。

中世における餌釣遺跡を一言でいうと、館跡ということになる。しかしながら、その館主、性格、北西約0.5kmに位置する餌釣館との関係等不明な点が多く、今後の課題であろう。

参考文献

浪岡町教育委員会　「浪岡城跡Ⅶ」『昭和58年度浪岡城跡発掘調査報告書』　1985(昭和60年)

青森県教育委員会　『境関館遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第102集　1986（昭和61年）

大曲市教育委員会　『四十二館跡発掘調査報告書』　1984（昭和59年）

秋田県教育委員会　『塚の下遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第61集　1979（昭和54年）

秋田県教育委員会　『秋田県の中世城館』　秋田県文化財調査報告書第86集　1981（昭和56年）

秋田県教育委員会　「乳牛平遺跡」　『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅷ』　秋田県文化財調査報告書第107集　1984（昭和59年）

秋田県教育委員会　「妻の神Ⅲ遺跡」　『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅺ』　秋田県文化財調査報告書第108集　1984（昭和59年）

秋田県教育委員会　「太田谷地館跡第２次調査」　『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ』　秋田県文化財調査報告書第183集　1989（平成元年）

秋田県教育委員会　『竜毛沢館跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第188集　1990（平成２年）

秋田県教育委員会　『はりま館遺跡発掘調査報告書（下巻）』　秋田県文化財調査報告書第192集　1990（平成２年）

1．遺跡遠景（西から）

2．遺跡遠景（南西から）

図版2

1．遺跡近景（北から）

2．調査区近景（北から）

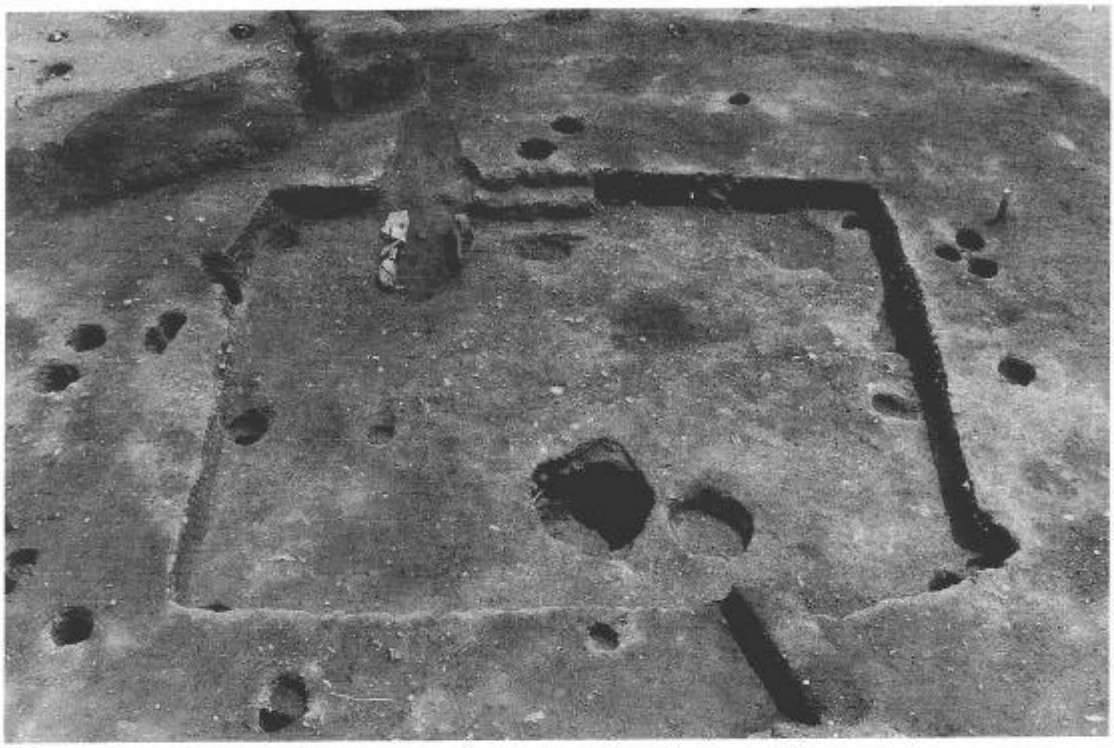
1．SI 38 竪穴住居跡土層断面（北から）

2．SI 38 竪穴住居跡完掘状況（北西から）

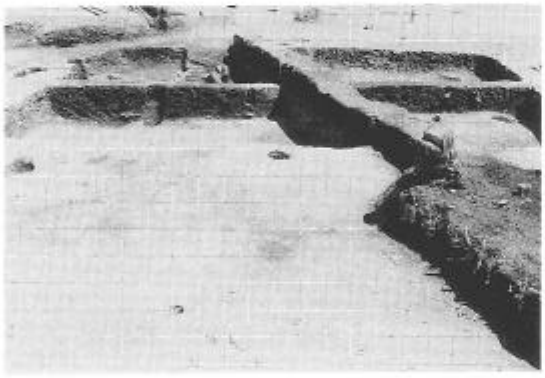
図版4

1．SI 57 竪穴住居跡土層断面（南西から）

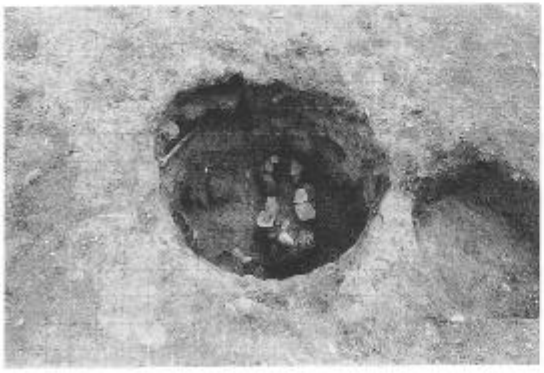
2．SI 57 竪穴住居跡完掘状況（北西から）



1．SI 34 竪穴住居跡完掘状況（西から）

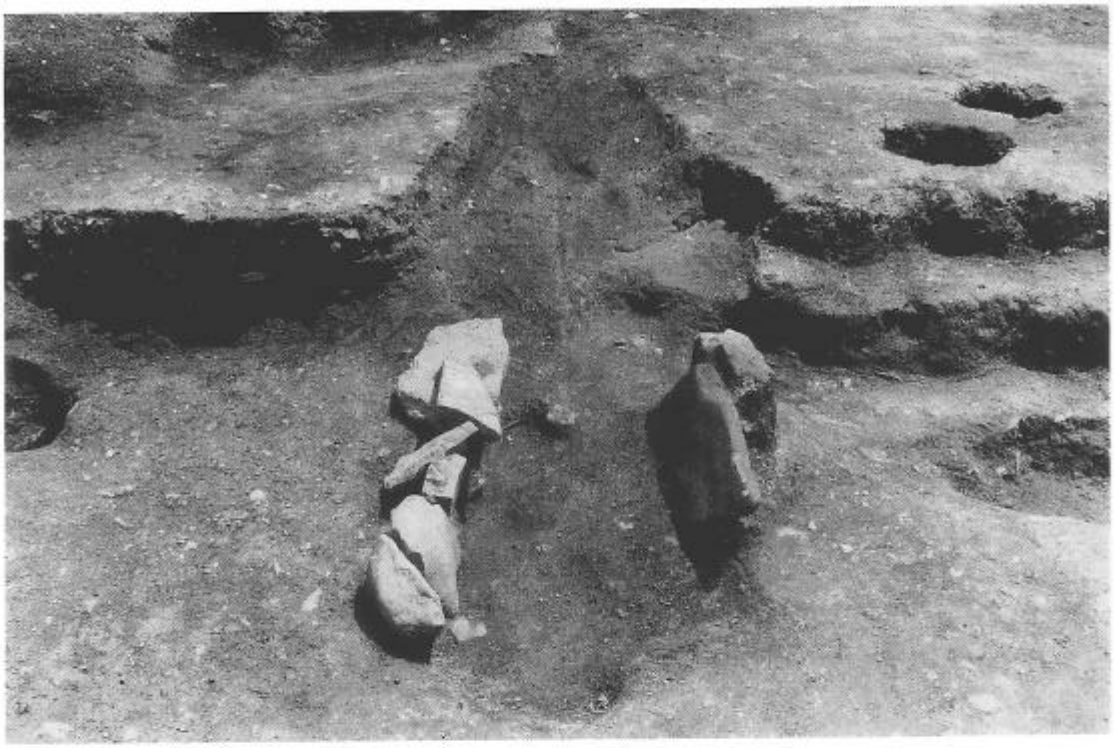


2．SI 34 土層断面（西から）



3．SI 34 貯蔵穴A遺物出土状況（西から）

図版6



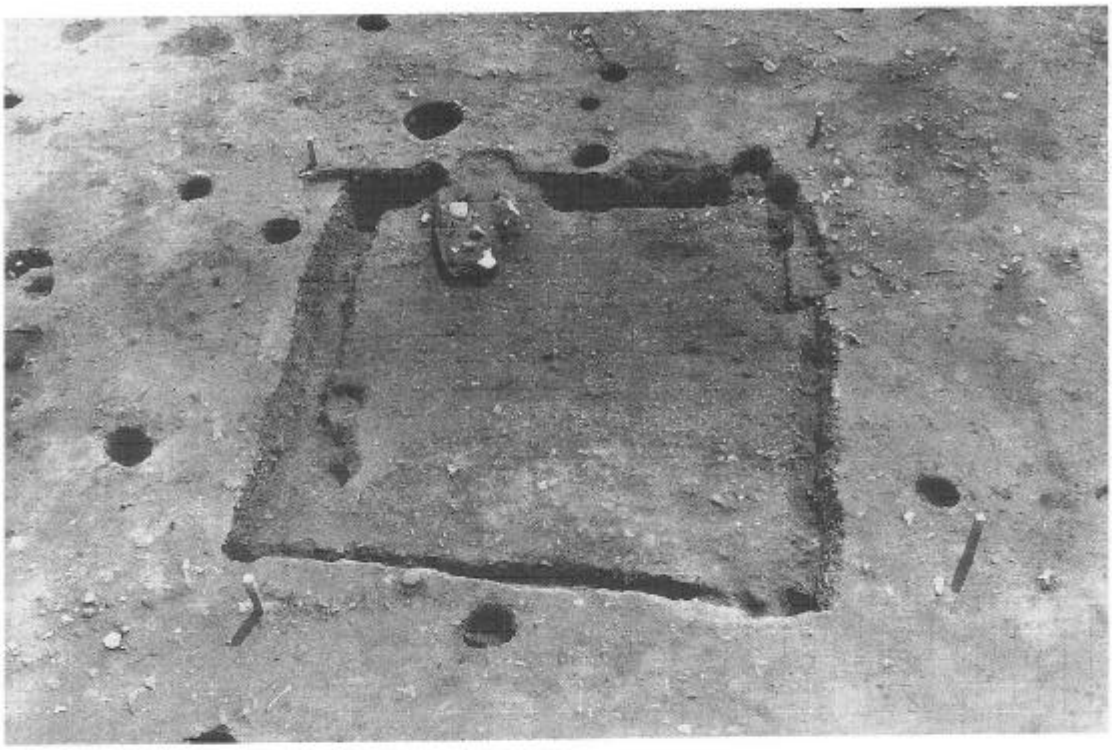
1．SI 34 竪穴住居跡カマド完掘状況（西から）

2．（北西から）

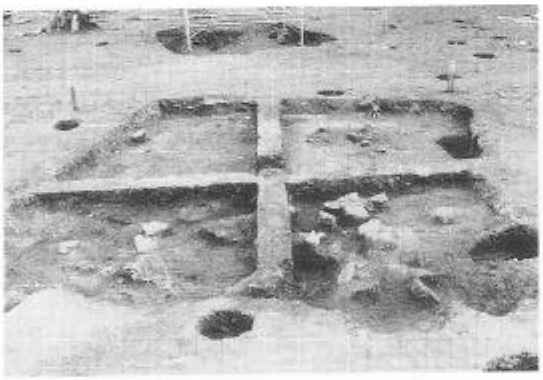
3．（南西から）

4．（北から）

SI 34 カマド遺物出土状況（2～4）



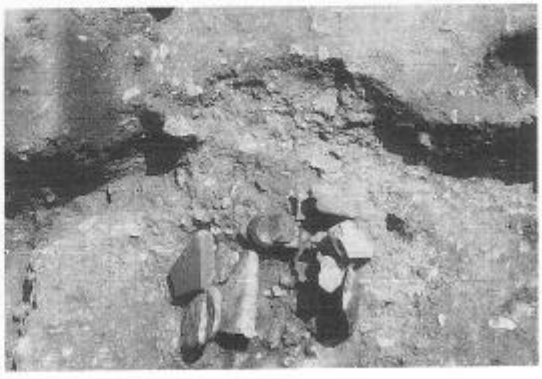
1．SI 37 竪穴住居跡完掘状況（西から）



2．SI 37 土層断面（東から）

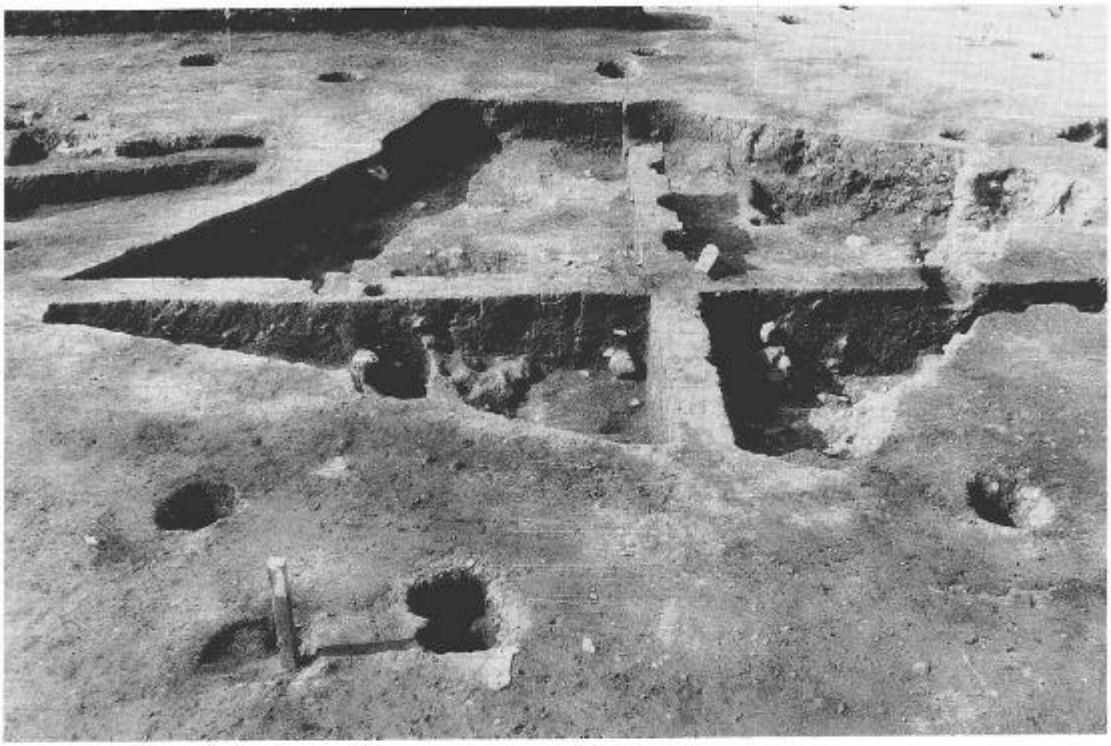
3．SI 37 作業風景（西から）

4．SI 37 遺物出土状況（西から）

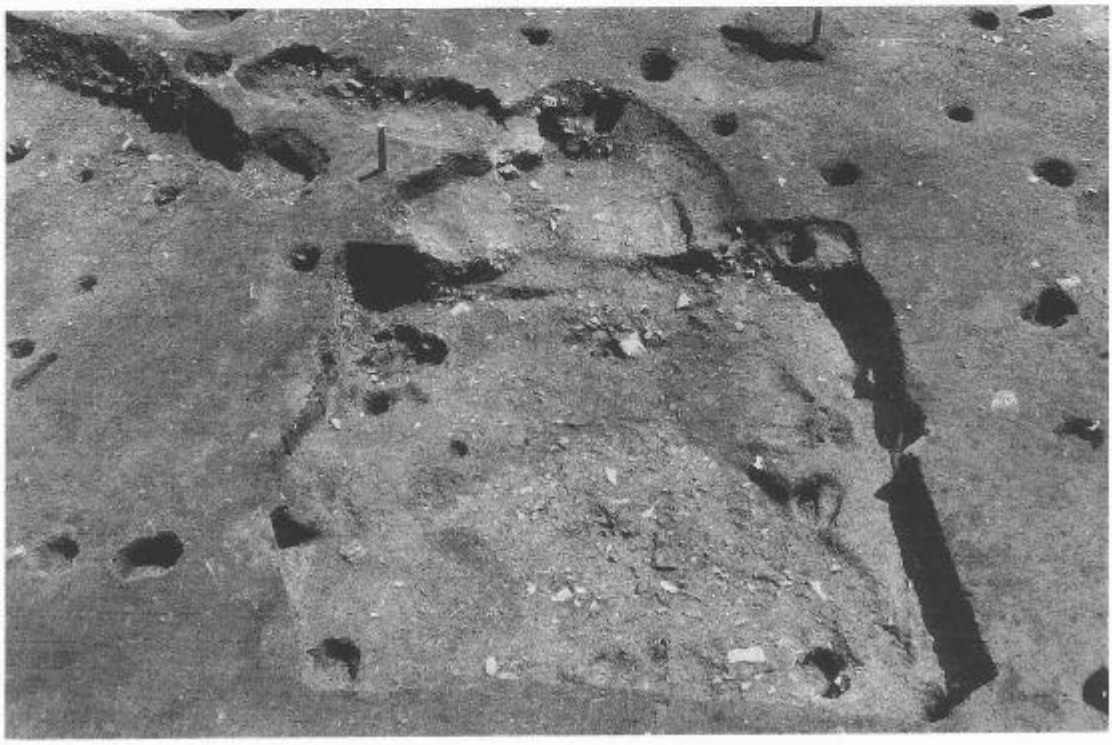


5．SI 37 カマド完掘状況（西から）

図版8



1．SI 42 竪穴住居跡土層断面（南から）



2．SI 42 竪穴住居跡、SK 35 土坑完掘状況（西から）

1．SI 44・91 竪穴住居跡土層断面（南から）

2．SI 44・91・92、SK 82・83・85・86・87・88 完掘状況（北から）

図版10

1．SI 44 竪穴住居跡カマド土層断面（西から）

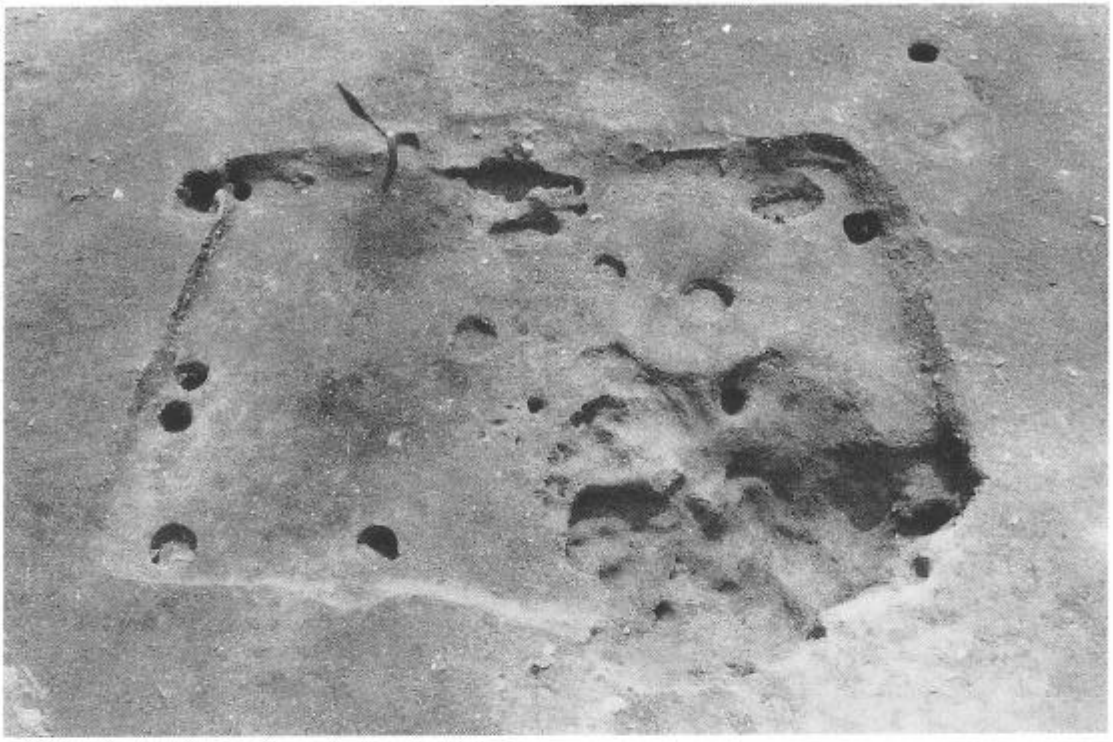
2．SI 44 竪穴住居跡カマド遺物出土状況（西から）

1．SI 71 竪穴住居跡・SK 14・78 土坑完掘状況（東から）

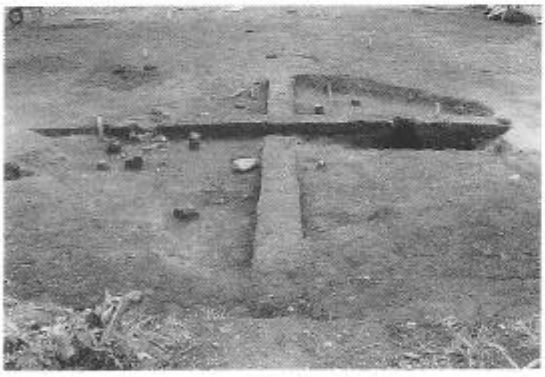
2．SI 71 土層断面（南から）

3．SI 71 カマド遺物出土状況（西から）

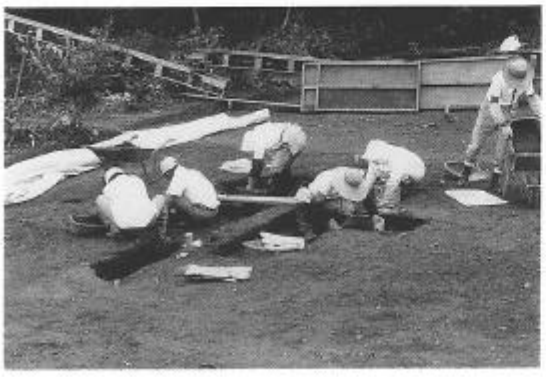
図版12



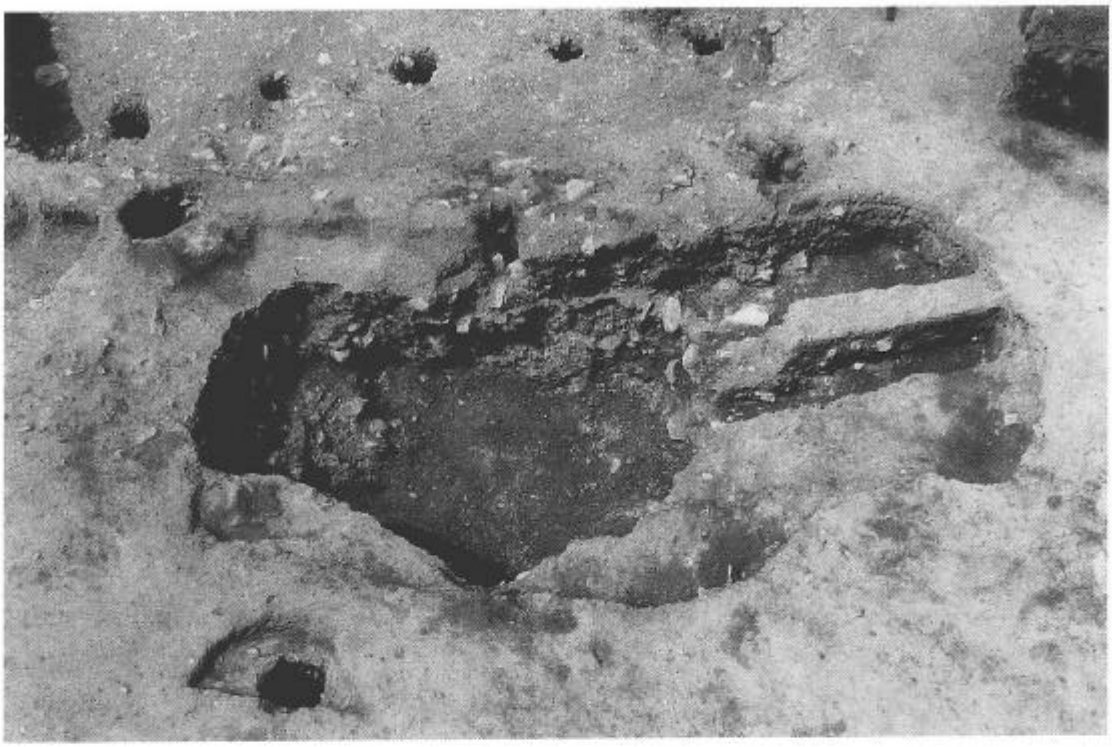
1．SI 73 竪穴住居跡・SK 81 土坑完掘状況（北西から）



2．SI 73・SK 81 土層断面（北から）



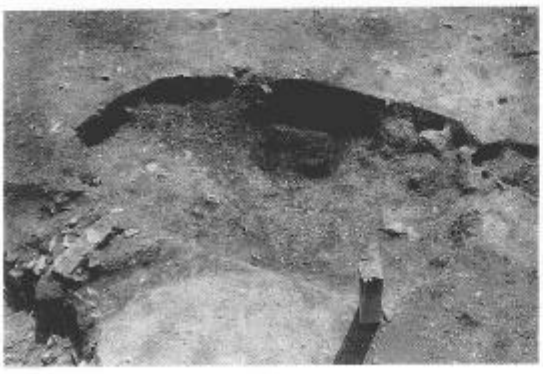
3．SI 73 調査風景



1．SK 30 土坑完掘状況（南から）

2．SK 88 土坑土層断面（北から）

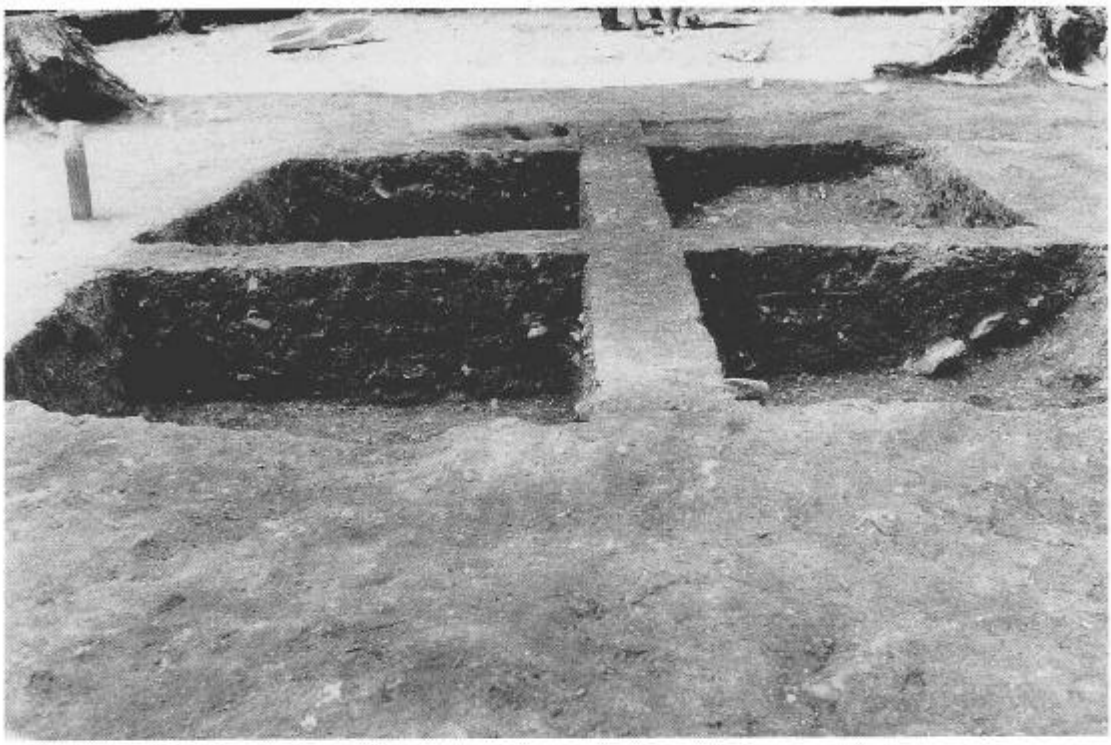
3．SK 47 土坑完掘状況（東から）



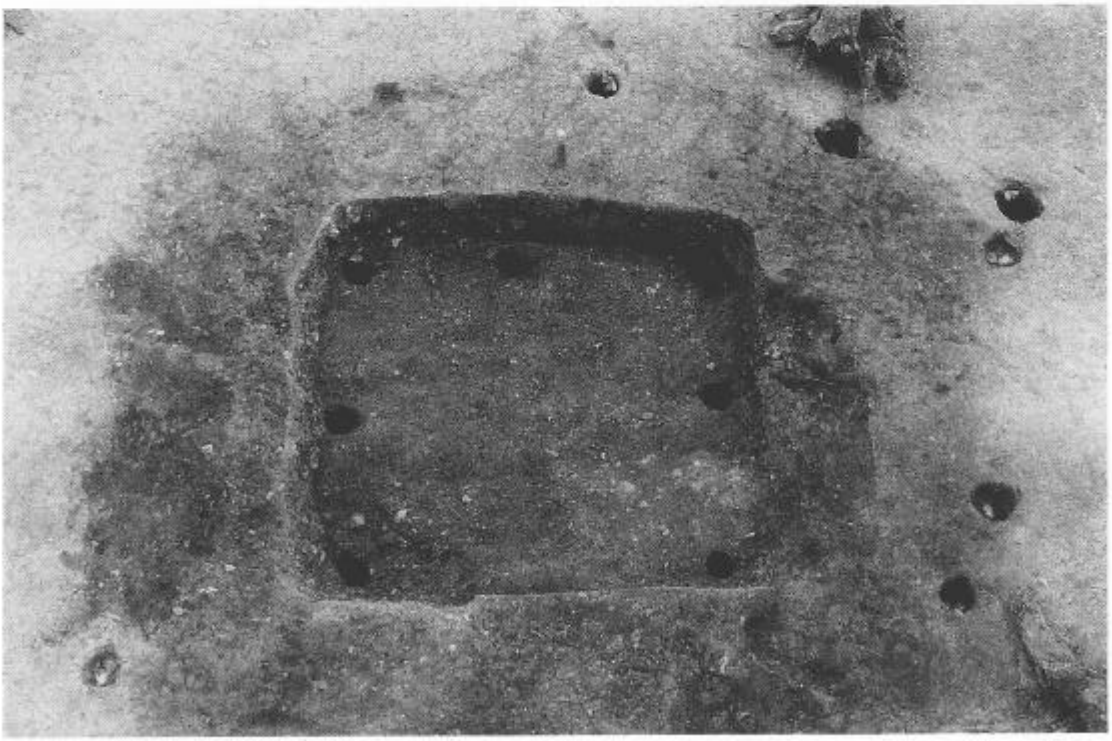
4．SN 77・SK 79・93 完掘状況（北から）

5．SK 83 土坑完掘状況（北西から）

図版14



1．SI 04 竪穴建物跡土層断面（東から）



2．SI 04 竪穴建物跡完掘状況（北から）

1．SI 31 竪穴建物跡完掘状況（北東から）

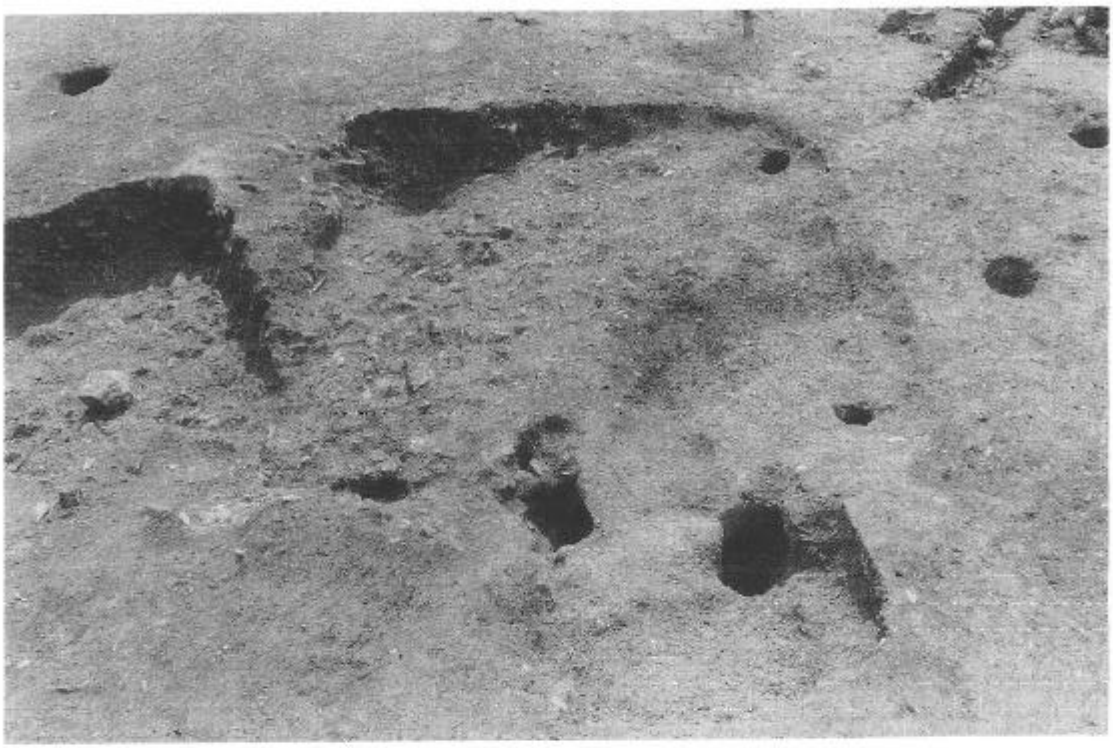
2．SI 31 土層断面（南から）

3．SI 31 調査風景

図版16

1．SI 67 竪穴建物跡完掘状況（東から）

2．SI 68 竪穴建物跡土層断面（南から）

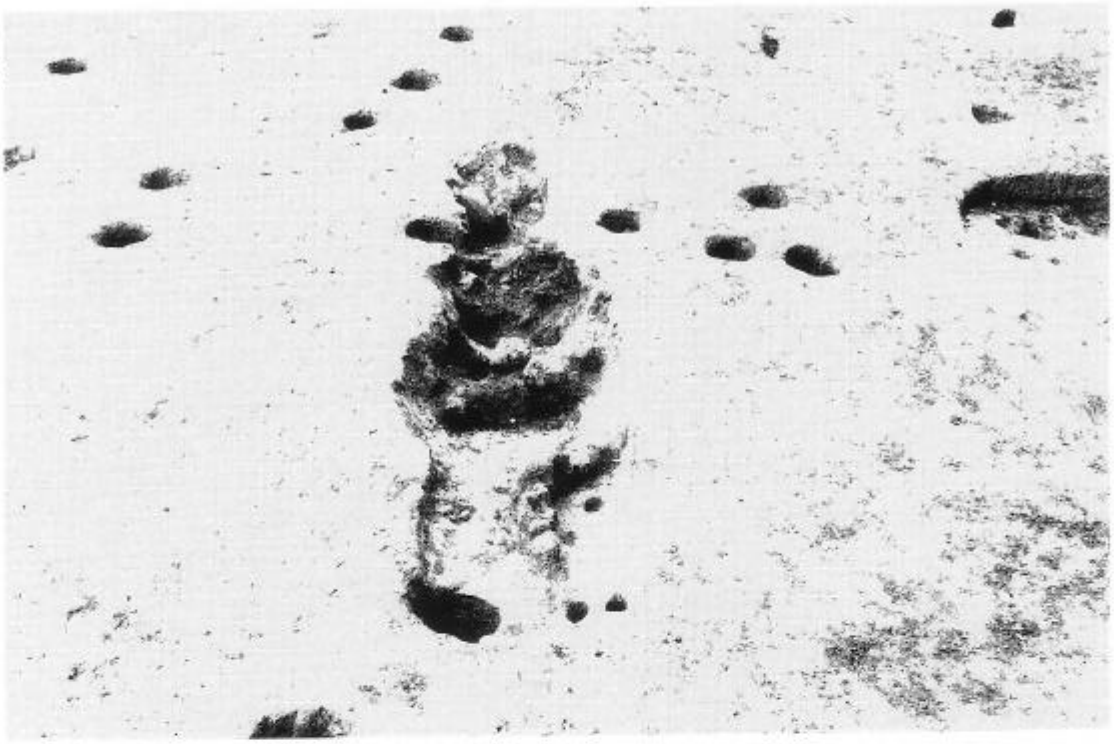


1．SI 68 竪穴建物跡完掘状況（北東から）

2．SK 69 土坑土層断面（北東から）

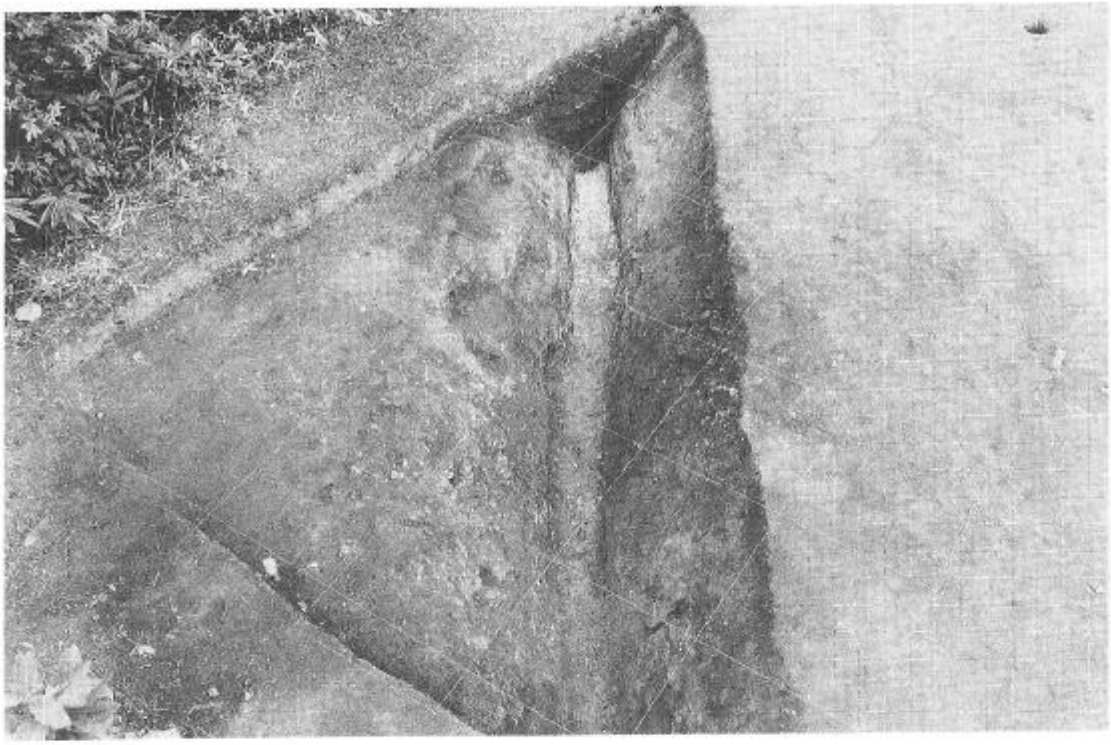
3．SK 69 土坑完掘状況（南東から）

図版18

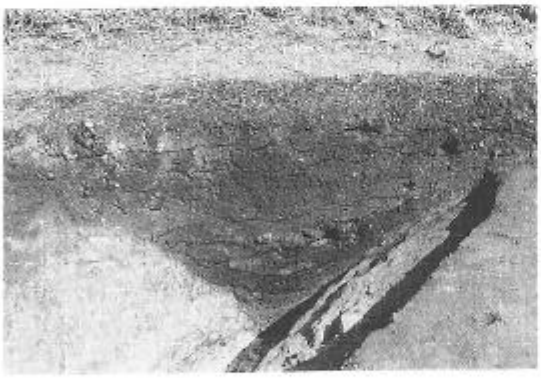


1．SN 08 焼土遺構焼土・炭化物出土状況（北西から）

2．SN 08 焼土遺構完掘状況（北西から）



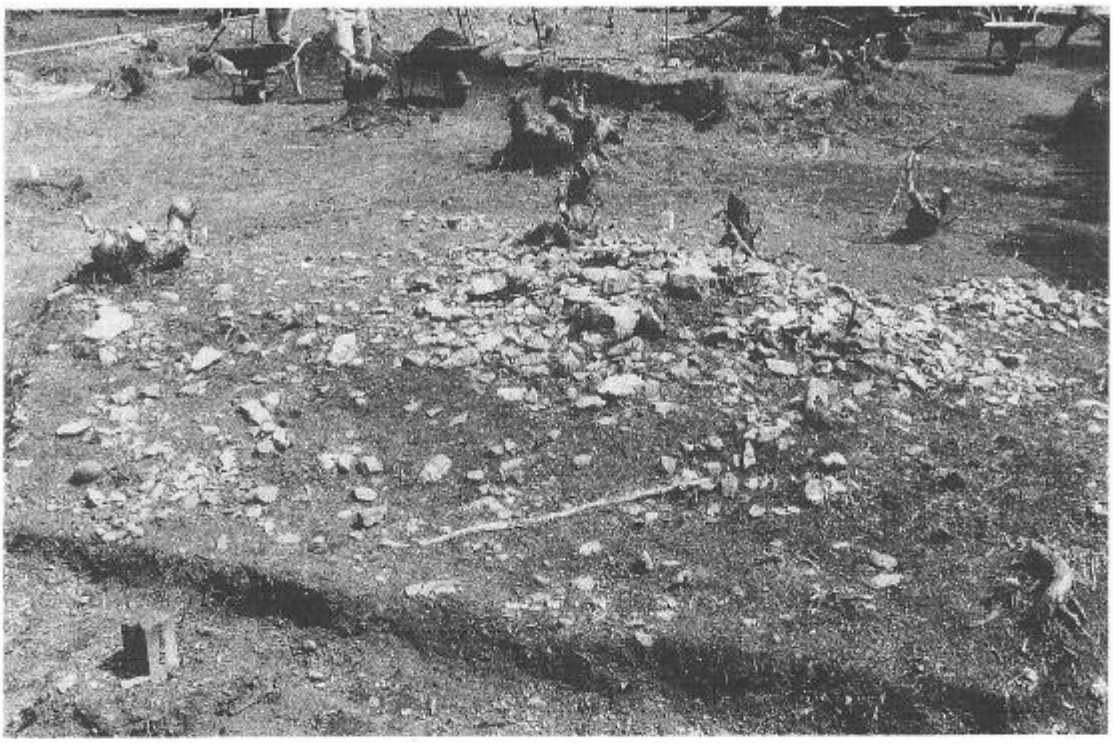
1．SD 60 空堀完掘状況（北西から）



2．SD 60 東側土層断面（西から）

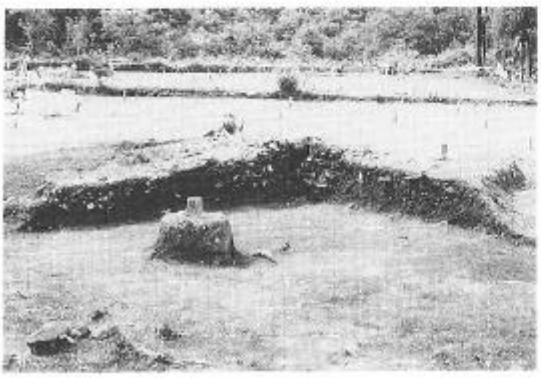
3．SD 60 北側土層断面（南から）

図版20



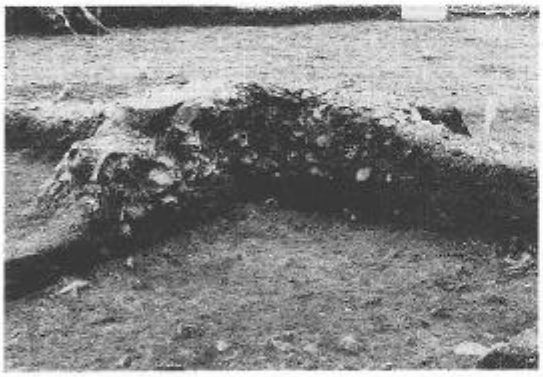
1．SX 01 積石塚検出状況（北西から）

2．SX 01 土層断面（南から）

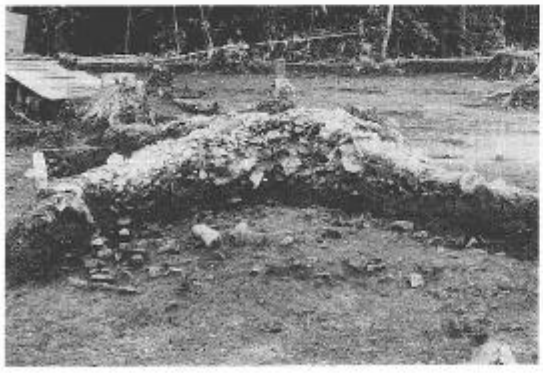


3．SX 01 土層断面（北から）

1．SX 02 積石塚検出状況（北から）



2．SX 02 土層断面（東から）

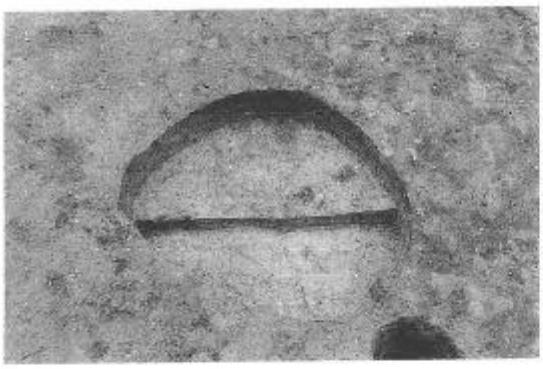


3．SX 02 土層断面（西から）

図版22

1．SX 03 積石塚現況（西から）

2．SK 33 土坑炭化材出土状況（北西から）



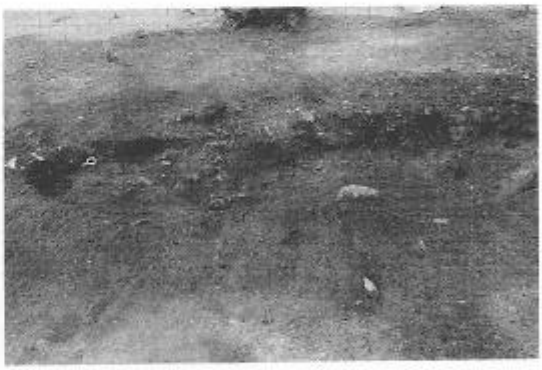
1．SK 15 土坑完掘状況（東から）

2．SK 40 土坑完掘状況（南東から）

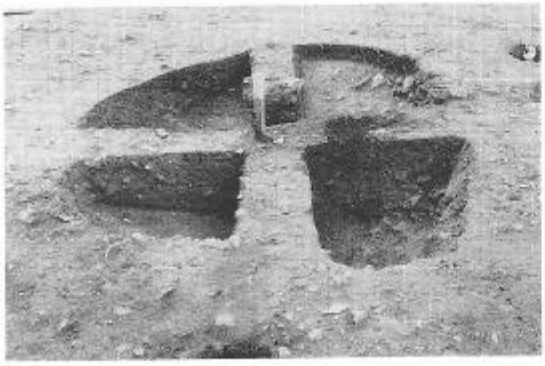
3．SK 41 土坑完掘状況（南西から）

4．SK 52 土坑完掘状況（南西から）

5．SK 58 土坑完掘状況（南西から）



6．SK 59 土坑完掘状況（南から）



7．SK 70 土坑土層断面（南から）

8．SK 70 土坑完掘状況（南西から）

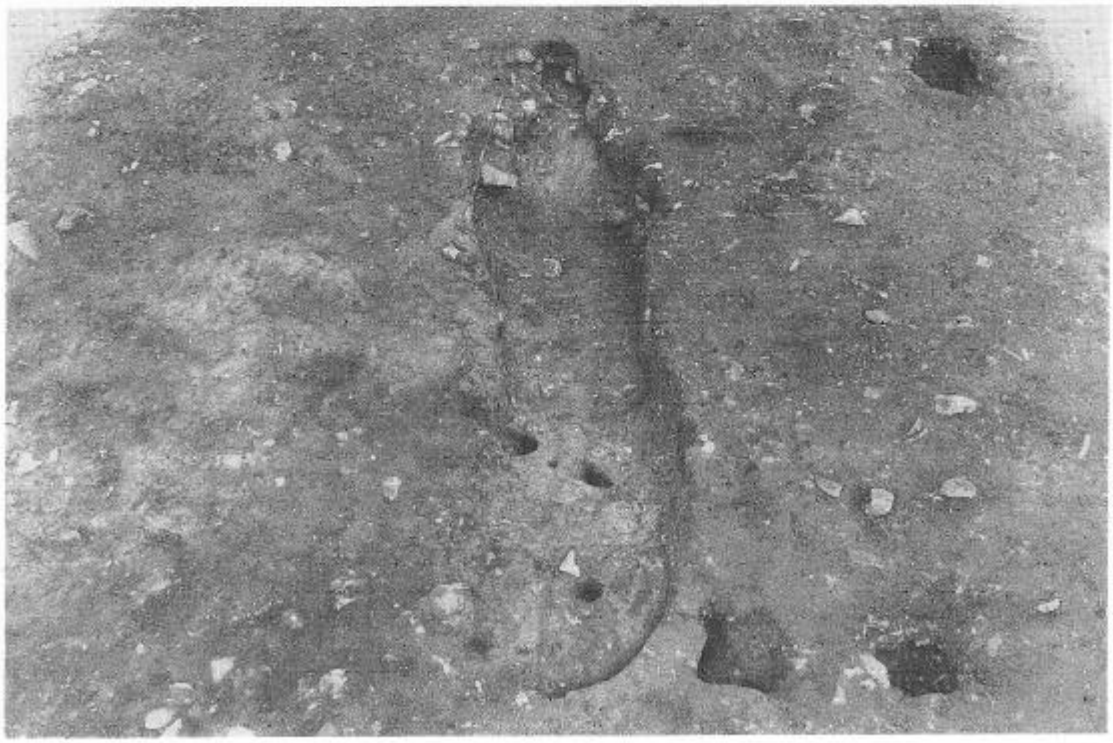
図版24

1．SK 74 土坑完掘状況（東から）

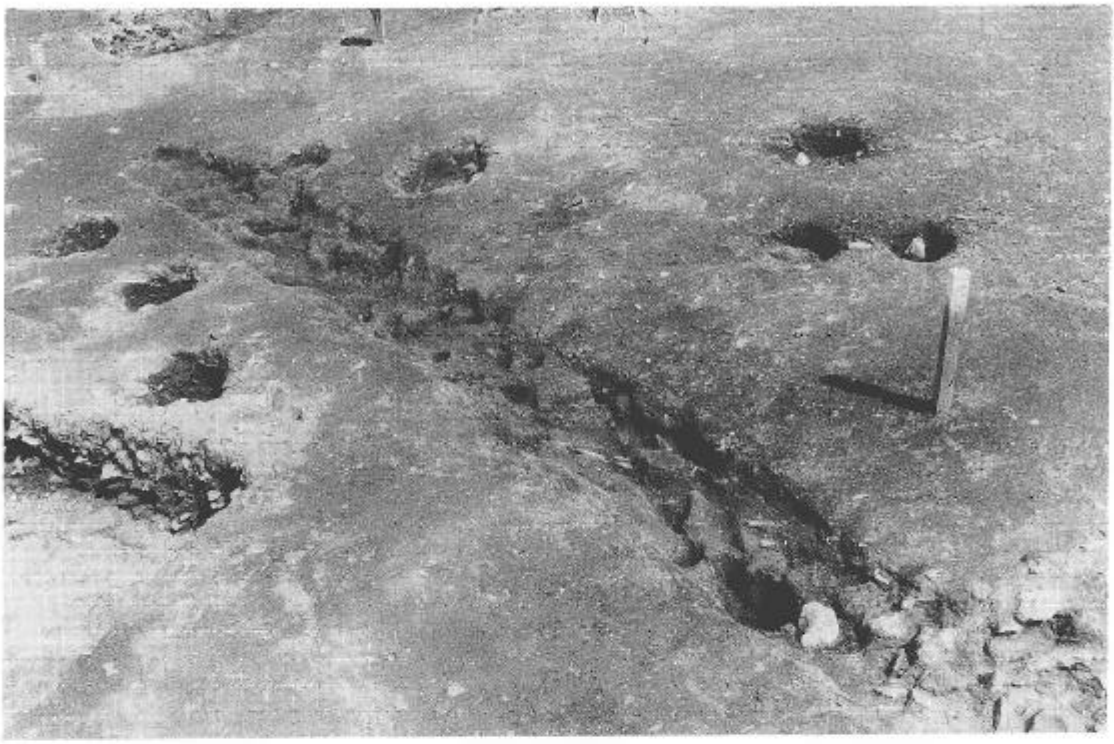
2．SK 75 土坑完掘状況（北から）

3．SK 81 土坑土層断面（北西から）

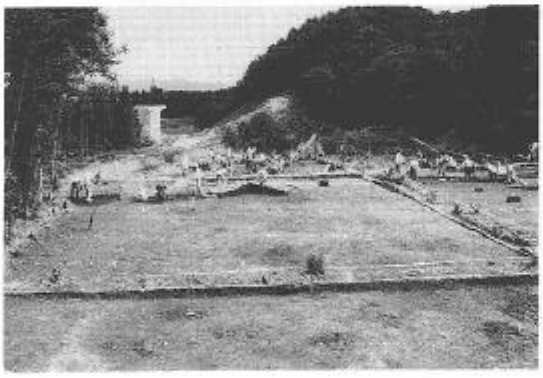
4．SK 84 土坑完掘状況（北東から）



5．SN 36 焼土遺構完掘状況（西から）

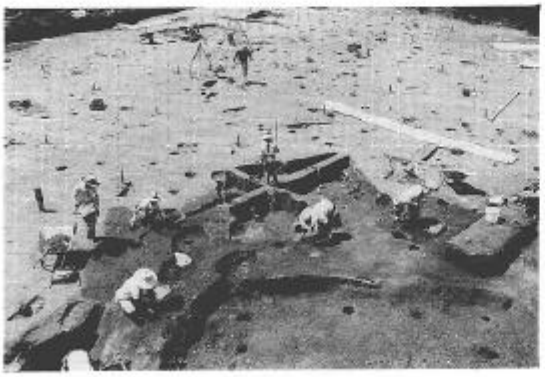


1．SD 80 溝状遺構完掘状況（西から）



2．調査風景

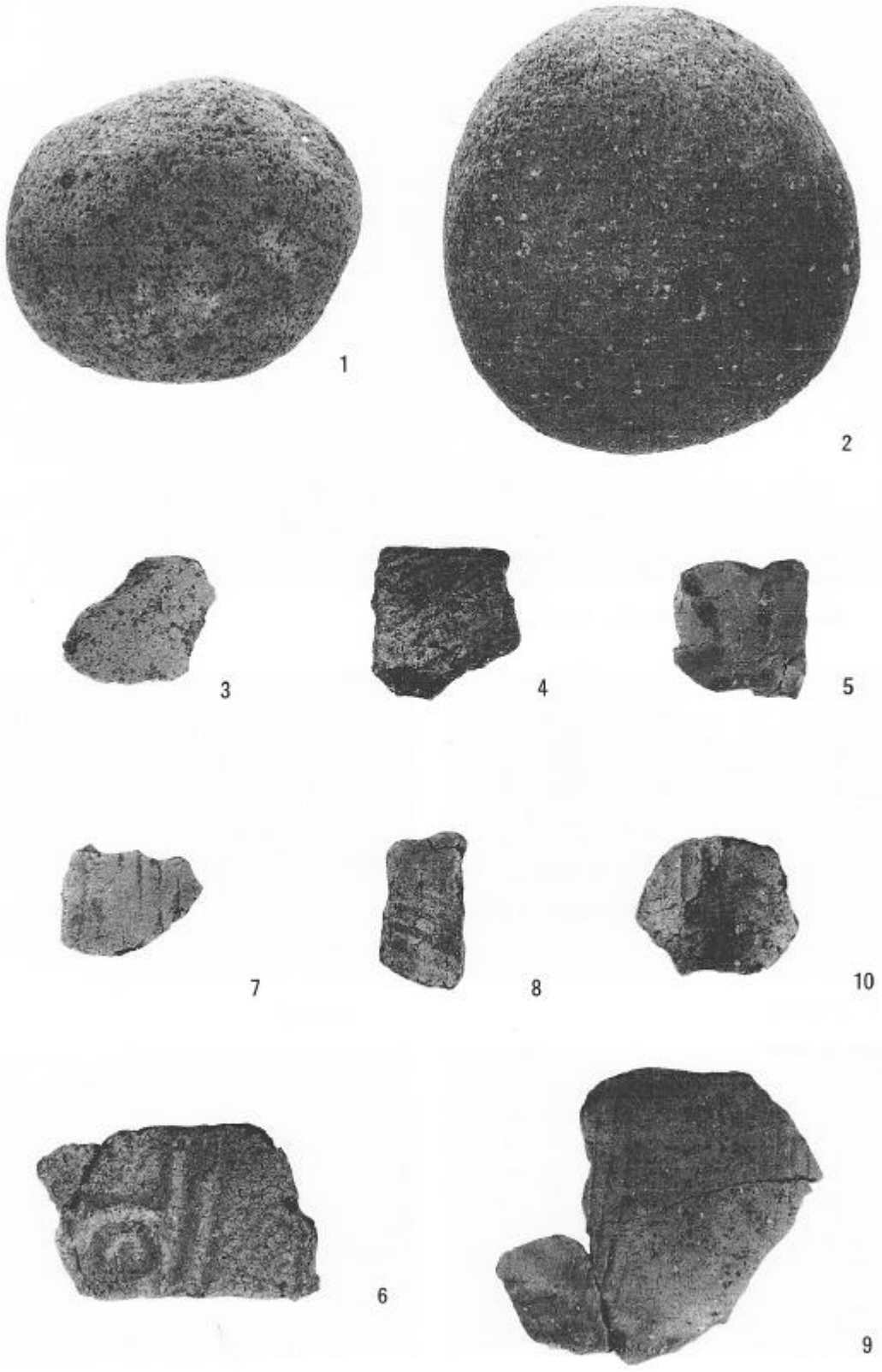
3．調査風景



4．調査風景

5．調査風景

図版26

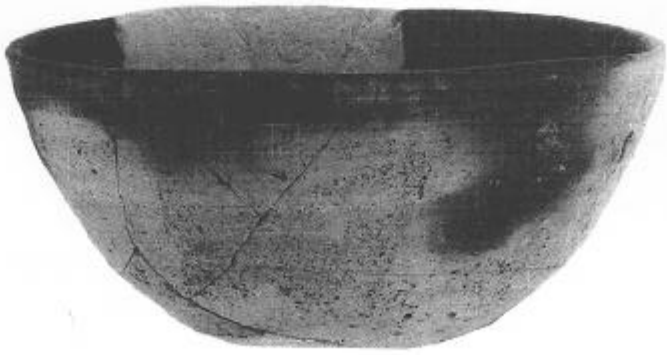


SI 38・57 竪穴住居跡、SN 25 焼土遺構出土遺物

26

41

62



80

SI 37・44・73 竪穴住居跡、SK 87 土坑出土遺物

図版28

15

16

38

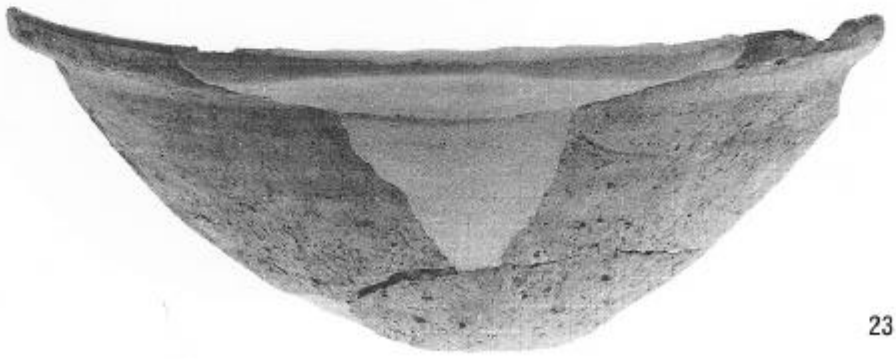
47

SI 34・42・44 竪穴住居跡出土遺物

61

45

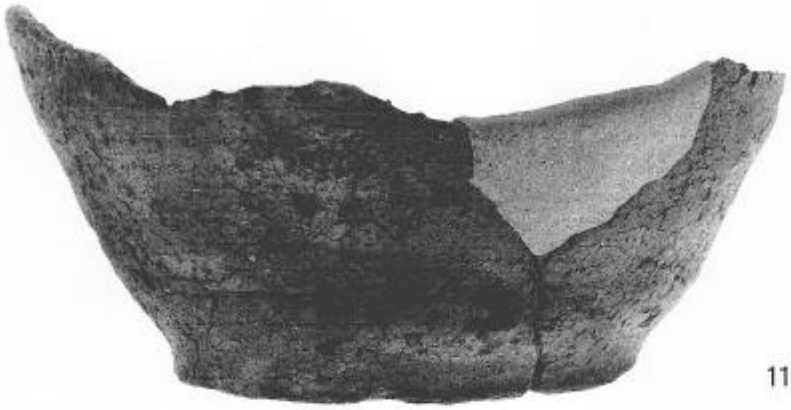
21



23

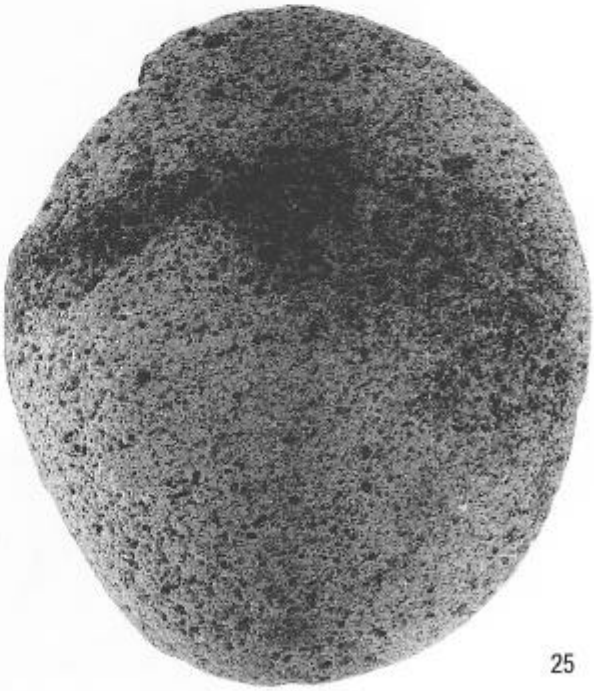
SI 34・44・71 竪穴住居跡出土遺物

図版30



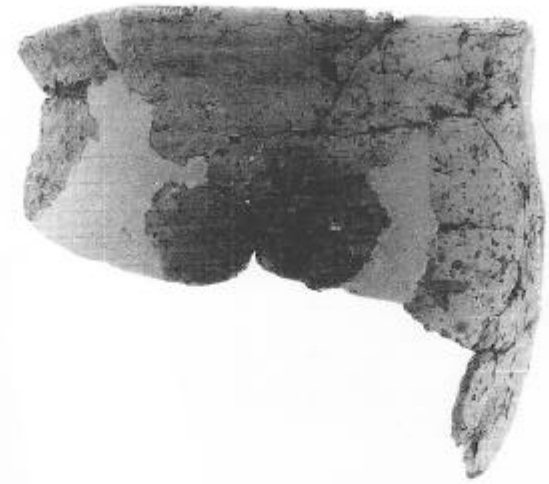
11

24

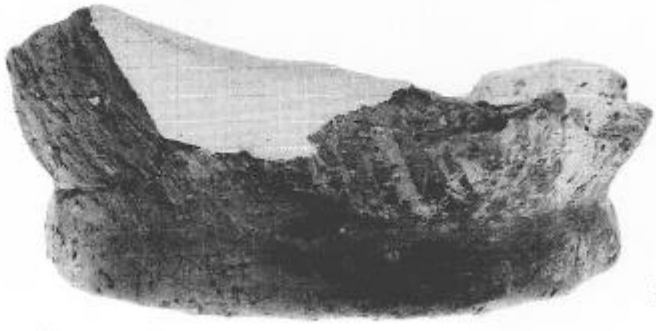


25

SI 34 竪穴住居跡出土遺物



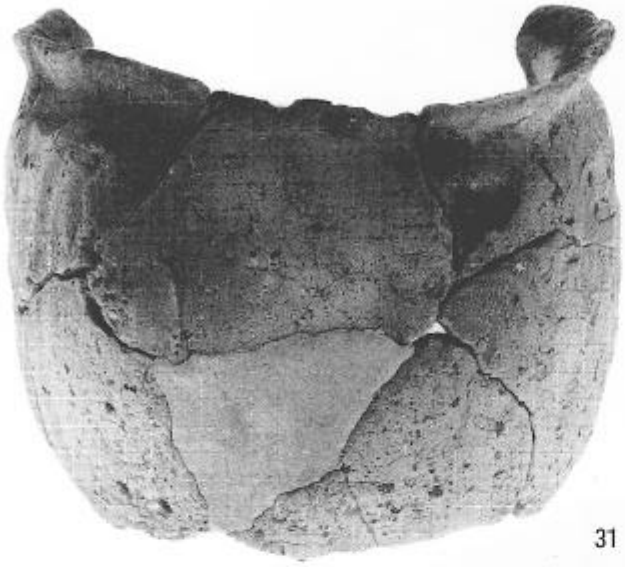
28



29

SI 37 竪穴住居跡出土遺物

図版32

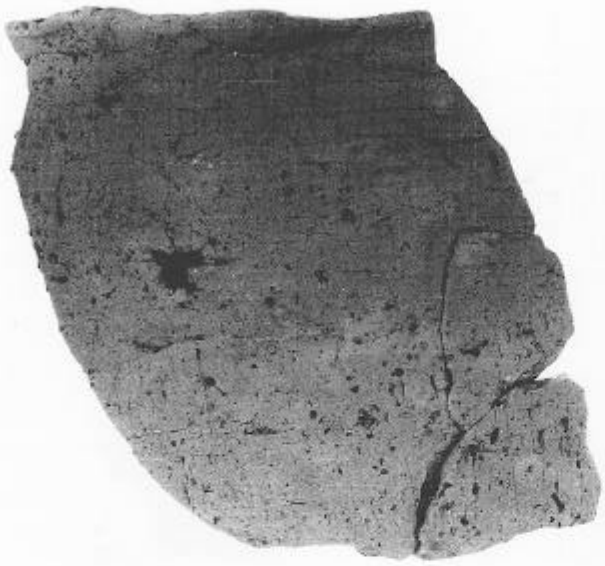


31

32

34

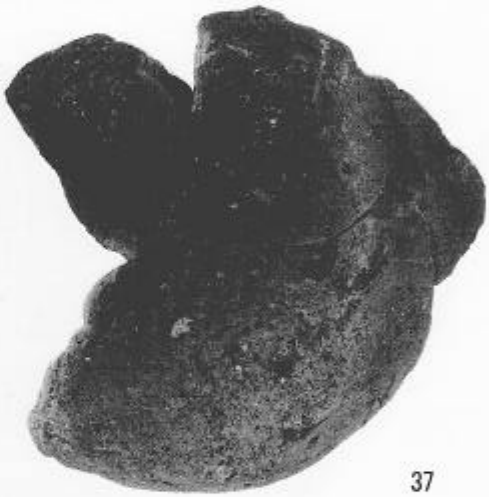
SI 37 竪穴住居跡出土遺物、SI 42 竪穴住居跡出土遺物(1)



33

35

36



37

39

SI 42 竪穴住居跡出土遺物(2)

43

42

44

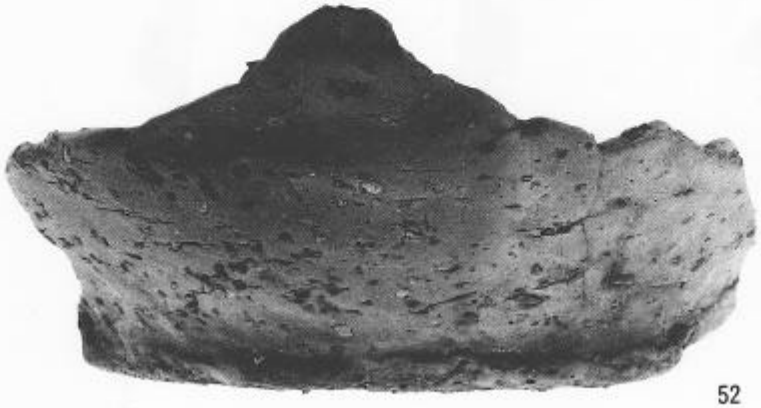
46

SI 44・91 竪穴住居跡出土遺物(1)

48

49

50

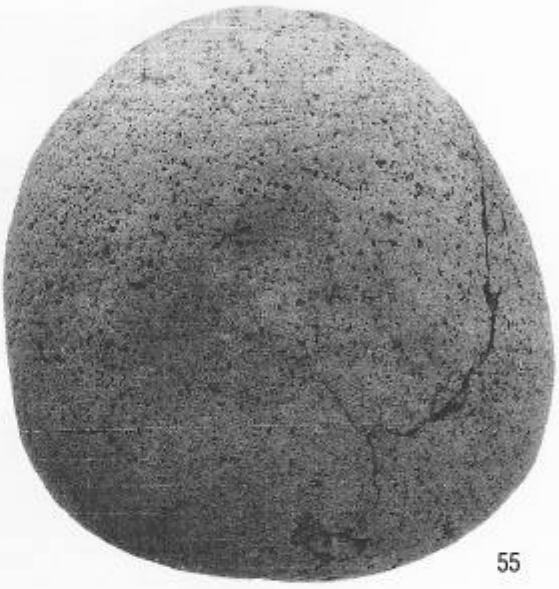


52

SI 44・91 竪穴住居跡出土遺物(2)

53

54



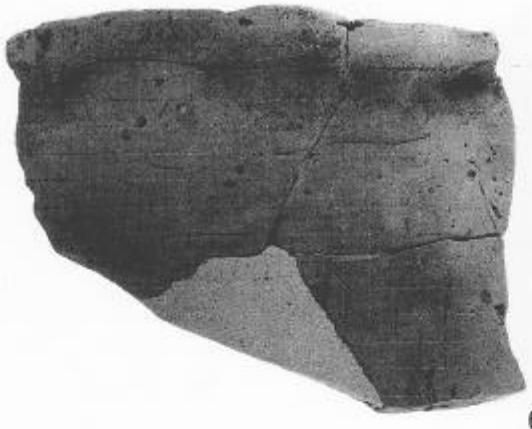
55

56

57

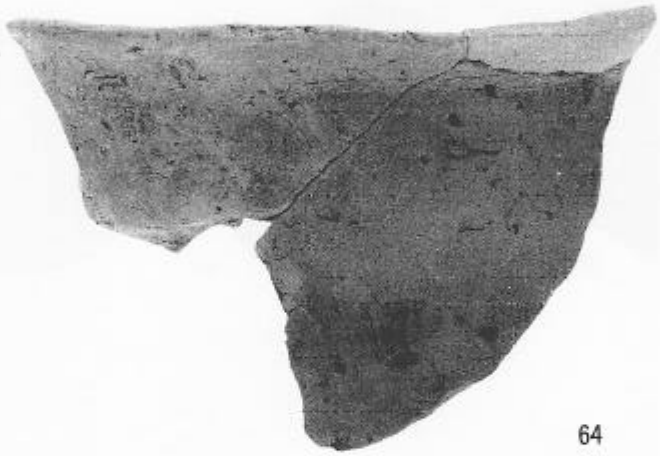
58

SI 44・91 竪穴住居跡出土遺物(3)

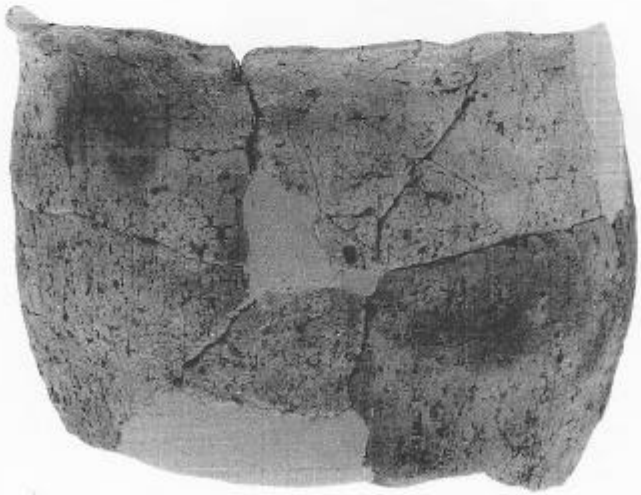


60

63



64



65

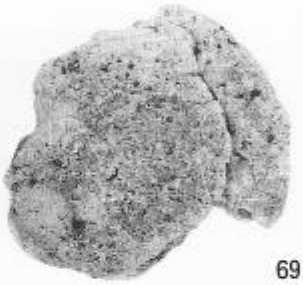
SI 71・73 竪穴住居跡出土遺物

図版38

66

67

68



69

70

SI 73 竪穴住居跡出土遺物

71

72

73

74

75

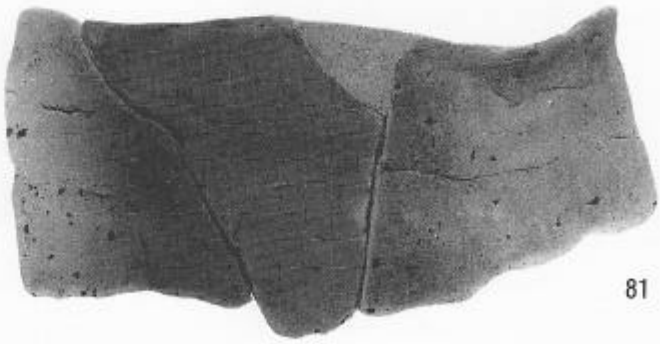
SI 73 竪穴住居跡、SK 23・79 土坑出土遺物

76

77

78

82

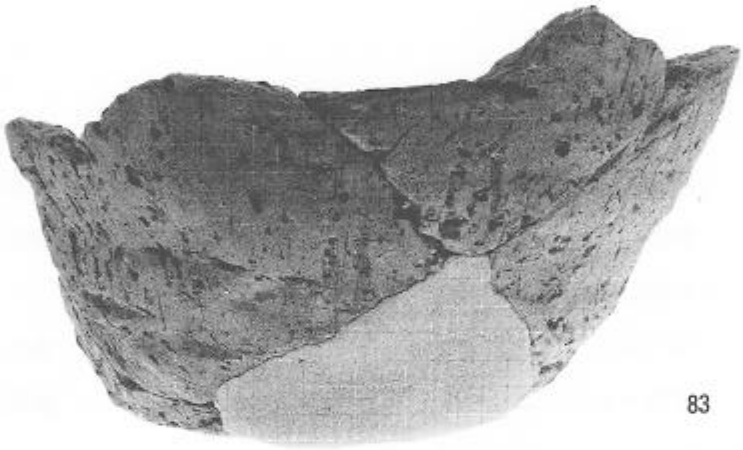


81

SK 79・83・85 土坑、SD 60 空堀、SKP 320 出土遺物

84

SX 02 積石塚出土陶器



83

85

86

87

88

SX 02 積石塚出土遺物、遺構外出土遺物

あ と が き

調査を振り返えると、遺跡に通じる細くて急な山道を、毎日ロー・ギアで登ったこと。調査区の傍らに忽然と姿を現した日本カモシカに、作業の手を止めて、見入ったことなどが思い出されます。平成２年の夏は、非常に暑い反面激しい雨の日が多かった。そんな中、作業に従事してくださった方々の御苦労に、深く敬意を表します。

また、整理作業においては、限られた期間の中で、遺構図面のトレース、土器の復元・実測等を終えなければなりませんでした。てきぱきと仕事をこなしてくれた整理作業員の方々に、感謝致しております。

［発掘作業従事者］

安藤一二	安彦梅春	泉　源太	太田　稔	亀井勝次	木田隆政
斎藤幸三	斉藤由松	佐藤長蔵	佐々木正年	下山良治	中村藤二郎
長岐由松	鳴海志恵蔵	畠沢義男	福士隆一	古川善次郎	細田昌史
松尾紀一	武藤恒夫	山本喜代一	渡部定之	渡辺貞一	
安藤ハル	今村光子	佐藤タネ	下山キヌ	相馬ウメ子	高松ミワ
中西レツ	成田ユキエ	畠山チエ	畠沢キミエ	畠沢ミサ	藤岡敏子
松岡てるえ	山口マツエ	山内和子	山内幸子		

［整理作業従事者］

伊藤昭彦	大西英子	佐藤せい子	高橋早百合	本間美智子	町田京子

（敬称略）

LT MA MB MC MD ME MF MG MH MI

50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68

0 (1：100) 5m

中世の掘立建物跡柱穴

付図　遺構配置図